〇八あふことは渚の波の立ち別れ行方も知らぬ沖の潮風
一八うつりゆく心の花の露なれや怨むる袖にあまる涙は
二八さゝがにの通ひし道も秋風にかき絶にける夕暮の空
三八眞砂ちる吹上の濱の月を見て戀しきとの數ぞ増れる
四八秋の野の丸寢の床の丸小菅いか計ちる露とかは知る
五八常ならず物思ふ頃の長き夜に獨おきゐて月を見る哉
六八いつはとは僞にだに頼めおけ逢て年ふる慰めにせむ
七八岩木山こえてこぬみの濱楸久しく成りぬ波に萎れて
八八あま衣かたの大島行迷ひあはでこのよや波に萎れむ
九八憂は猶孰くを忍ぶ身ぞとだに思ひ知する人傳もがな
〇九好さらば無名も立よ立てすとて偖も有べき此世ならば
一九譬あらば祇見むといふ露の身は何に懸べき言のはも無
二九袖の上に移ひすてゝ入る月の契もあだに頼みける哉
三九思ひかね頼むみなわの沸返り流れても猶よを頼む哉
四九魂きはる命に向ふ陽炎の影みるまにも君をしぞ思ふ
五九月草に葱の花を折りそへてかゝる心を怨みつるかな

祝部

元久元年新古今の竟宴に
六九君住めばよする玉藻も砕き出ぬ千代も傳へよわかの浦波
春のいはひといふことを
七九友づるの遊ぶ日影もさしながら千年は著き春の空哉
仙洞にて住吉の歌合に、寄二月祝
八九神代より月も幾代の廻逢て猶君が代の千代を待らむ
正治二年同じく仙洞の御歌合に、庭松
九九萬代と玉しく庭の松の影春のひかりも長閑にぞさす
建保二年八月内裏の歌合、秋祝
〇〇君が代の千年も秋ぞ顯はるゝ四方の時雨に殘る松風
自二承明門院一被レ召によりて熊野へ詠進する歌
一〇春はまだ頼む南の御山より思ひひらけて匂へ梅が香
二〇都まで神の惠みも紀の國の年たち返る春にあふまで
三〇かけまくも清き心を三熊野の浦の玉藻の光をぞまつ
四〇幾千代と君をしとへば小鹽山小松が原に春風ぞふく
同じ家の御會に、春日山祝
五〇春日山松の梢に出る日のいつとも分かぬ千代の影哉
洞院攝政の嘉祿二年の會に、庭上竹
六〇百千鳥さへづる竹の枝毎に榮ゆるふしもしげき宿哉
一條前太政大臣の家の會に、春祝
七〇年に逢て春加はれる宿の松かつ〳〵著し千代の餘は
前内大臣の家の會に、寄レ水祝
八〇君が代にたな井の清水澄返り契榮えむ時もきにけり
親成の宣禰の七十に千代をそへてや猶守るらむ
九〇千早振なゝの社の七十に千代をそへてや猶守るらむ
前但馬守家長の日吉の會に、社頭祝
一〇君が代は千年の春に立返りたえず日吉の神ぞ守らむ
古今の一句をこめて歌よみ侍りしに
一時雨つゝ幾秋くとも君がさす御笠の松の色は變らじ
日吉禰宜成茂がもとより二位に叙して侍りし朝
に贈り給ひける
二君が今齡もたかし位山みし世にもあへながき玉の緒
返事
三位山日吉の影をさし添て見し世にあへる長き玉の緒
建保二年二月の頃定家卿參議に被二拜任一之時道
しばべりし
四臥て思ひ起ても身にや餘る覽今夜の春の袖の狹さは
返事
五嬉してふ誰もなべての言語を今日の我身に如何答へむ
祝言とて
六三笠山さし紛へゆく榊葉にゆふとりしでは祈る神人
七君が代は例もあらじ天地を照す月日の極めなければ
八春日山嶺の松がえ汝をこそ君が千年の挿頭とは見め
九敷島や三輪の檜原も萬代の君が挿頭と折やそめけむ

〇二萬代は君こそ初め古のありきあらずば神や知るらむ
一二君が代は年のを長く引添て釣する海士も萬代やへむ
二二君が代の程より外に行巡る月日の外は知る人もなし

旅部

仙洞にて北野宮の歌の會のに、羇旅
三二故郷に聞きし嵐のこゑもにず忘れぬ人をさやの中山
建永元年同じ仙洞の御歌合に、羇中暮
四二人やすむと計り聞きて宿かれば入相の鐘に殘る山風
同じ當座の御歌合に、行路風
五二玉鉾の道の山風吹きかさねはらへばおもる袖の白露
遠き所にて御歌合侍りしに、羇旅
六二をりしかむ隙こそなけれ沖つ風夕立つ波の荒き濱荻
建保二年内裡の御歌合、秋旅
七二草も木もあだなる頃の野山分け契りし都程も遙けし
同じく内裏にて詩歌合侍りしに、羇中眺望
八二唯くれぬ關の戸さゝぬ頃なれば月にもこえむ足柄の山
九二高島やかち野の原に宿とへばとかやは行む遠の白雲
建保五年同じく内裏の歌合に、冬夕旅
〇三冴え暮すさやの中山中々に是より冬の奥はまさらじ
後京極攝政の家の詩歌合、羇中眺望
一三顧みる雲居の妻は籠る共燒かばや燒かむ武藏野の原
二三今日は又山のはもなく成に鳬知らぬ濱路の夕暮の空
同じ家の御會に、清見潟旅
三三清見潟過ぐる日數を數ふれば袖にも波の關はもり鳬
同じ家の歌合に、秋旅
四三故郷に分れし袖もいかならむ知らぬ旅寢の秋の夕露
入道前攝政の家の歌合に、羇中松風
五三分來つる山はうちちに變れども是も寂しき松の風哉
前内大臣の家の會に、松路暮
六三迷ふべき雲も山路はおくりけり行く方誘ふ松の嵐に
同じ家の會に人々各別題にて詠み侍りしに船を
七三渡りする浦の追風古里に待つ人さそふ舟やよすらむ
又同じ家の歌合に、秋旅
八三日數ゆく露はさながら衣手に正木の山の秋も怨めし
前參議信成卿の北野の會に、旅浦嵐
九三夕嵐うら分け衣吹きはらへもしほの煙袖にたなびく
前内大臣の家の會に、羇旅松
〇四越やらで宿かる程に暮れに鳬今朝は雲居の遠山の松
古今の一句をこめて歌よみ侍りけるに
一四獨ぬる床は草葉のかり枕いく夜になりぬ武藏野の原
二四東路や横ほりふせる山の名もさやかに見せて晴る白雲
三四わたの原沖つしほ風吹きよする波と共にや歸る舟人
四四別れては程を隔つる唐土のゆきゝ頼まぬ波の通ひぢ
眺望の歌とて
五四松浦舟けふは幾日の波の上にまだめに懸る山端も無
六四眺むれば老の涙も霞みつゝ行方も知らぬ海のはて哉
七四見渡せば夕日ぞかゝる住吉の浦に浮べるあはぢ島山
八四沖つ島それかと見ゆる夕なぎに松の葉凌ぎ出る月影
旅の歌とて
九四東路やまだ明けやらぬ足柄の山々雲を今ぞ分け入る
〇五角田川忘れもすべき久方の月に有てふ鳥の音もうし
一五傳へ聞くむかしの夢の通路もあふ人繁きうつの山道
二五東路や駒もなづまで足引の山の岩ねを幾日越ゆらむ
三五明石潟島がくれつゝ行く舟の霧より上に月ぞ殘れる
四五白雲のたなびく山のにしに猶心盡しの月や待つらむ
五五白雲のちゝの衣手立別れ今日や名草の山路こゆらむ
六五山本の入江の舟やくだすらむ月ぞ遙にさしばりぬる
七五渡守わたらぬさきに打隱せ隅田川原の鳥の名もうし

雜部　哀傷述懷等在二此中一

雜の歌よみける中に
八五難波潟雲ゐにみゆる鳴隱れ漕ぎゆく船のよるの浮雲
九五三輪の山杉の梢に吹く嵐秋にも知らぬ月ぞさえゆく

六〇龍田山まだ明けやらぬ横雲に木綿附鳥の埋れて鳴く
六一柴船のみねより落つる小笹原風にもまさる波の音哉
古今の一句をこめて歌よみ侍りけるに
六二暮ぬともいざ越行かむ筑波ねの此面彼面に懸る月影
六三あだなりと名に社立てれ白雲の絶ず懸れる葛城の山
仙洞にて三躰の會はべりしに
長高樣
四六櫻花ちりかひかすむ久方の雲居にかをる春の山かせ
夏
五六烏玉の夜は明けぬらし足びきの山郭公ひとこゑの空
有心樣
秋
六六虫の音も涙つゆけき夕暮をとふ物とては荻のうは風
冬
七六詠めつゝ幾度袖にくもるらむ時雨にふくる有明の月
幽玄樣
戀
八六見ずもあらぬ名殘計の夕暮をとあり顔に何詠むらむ
旅
九六旅寢する夢路は許せうつの山關とは聞ず守る人もなし
元久元年仙洞にて春日社の歌合に、曉月
〇七月も又曇る時なく照しけり春日の山のありあけの空
松風
一七春日山谷のうもれ木朽ぬらむ君に告げこせ峯の松風
建永元年仙洞にて當座の歌合、暮山雲
二七ながむれば幾重の山と隔てねど夕の雲の色ぞ寂しき
承元四年同じく仙洞の御歌合に、寄ㇾ海朝
三七沖つ波旭いざよふ霧の間に釣する蜑の袖ぞみえ行く
寄ㇾ山暮
四七色かはる今や木の葉の上に置くしもと夕の葛城の山
遠き所にて御歌合侍りしに、山家
五七寂しさはまだ見ぬ島の山里を思遣るにもすむ心地して
山家の心を
六七いつかわれ苔の袂に露置て知ぬ山路の月を見るべき
七七谷川の音も枕にさびしきに又吹きおろす嶺のまつ風
八七柴の戸も明行く山の峯なれば軒にわかるゝ横雲の空
九七又馴て人に折らする爪木こそ猶身を捨ぬ住ひ也ける
〇八麻衣まだ面なれぬ奥山のしきみの花の露にぬれつゝ
一八都人けふは訪やと待たれしも絶て過行く三輪の山本
二八幾夜しも嵐吹くよの山里にいや儚なにも散る木葉哉
三八有とても朽ちぬ例のかひぞなき人も渡らぬ谷の岩橋
四八遲く出る我月影を待程に山のあなたに身を惜みける
五八吉野山奥の岩屋を見ぬ人や雪古里を近しといふらむ
承久元年内裏にて日吉社の歌合侍りしに、社頭
松風　大宮
六八君が代は山ものどけき松風に神の心や空にゆくらむ
湖上眺望　十輝師
七八志賀の浦の白ゆふ花に祈りても數限なき御代の末哉
同じ内裏の歌合に、寄風雜
八八我齡ひ君が八千代を吹く風の契かぞへむわかの浦波
又内裏の歌合に、暮山松
九八高砂の尾上の松の夕時雨斯てふりゆく身をや盡さむ
同じく内裏にて又御歌合侍りしに、秋雜
〇九石上ふるの神杉つゆ落てそのよも知らぬ秋の夕ぐれ
同じく内裏にて六首の御歌合侍りしに、山晩風
一九今日さへや夕こえ兼て岩がねの峰の嵐に許多度寢む
野曉月
二九旅人は今ぞたつ覽うねの野の有明の月にたづぞ鳴なる
三九白雲の衣ほすてふ山賤の垣ほの谷は日かげやはさす
嶺松
四九知る知ず松をぞ頼む筑波ねの峰の紅葉はなべて散る頃

五九庭の面に苔の柵かけてけり堰入れし水の末弱るまで
窓燈
六九浮世にはそむけもやらぬ燈の何闇き夜の窓敎ふらむ
前内大臣の家の會に、海外山
七九朝なぎの浦の杣山みつ潮に寄する舟人宮木つむらし
同じ家の會に、海ㇾ海雜
八九淡路島難波をかけて見渡せば波のいろはの葦手也鳧
同じ頃又同じ家の會に、溪竹風
九九風ならで訪人もなき友なれや身を隱しすむ谷の呉竹
前參議信成卿の北野の宮の會に、深山夜
〇〇雲深き吉野の奥にすむ人の夢にもはゝよをや見る寵
夕述懷
一〇世の中の風に聞ゆる一ことにさのみ夕の空頼みする
曉懷舊
二〇有明の月に見しよの知べせよ人は心をおきつしま山
建永元年の仙洞の御歌合に、寄ㇾ風懷舊
三〇夢と見し春は昔の秋風に別るゝかりも戀つゝぞなく
雨中無常
四〇末の露淺茅がもとを思ふにも我が身一つの秋の村雨
五〇大方の秋の寢覺の長き夜も君をぞ祈る身を思ふとて
同じ年やがて仙洞に御歌合侍りしに、述懷
六〇和歌の浦や沖つ潮合に浮び出る哀我世の寄べ知せよ
七〇その山と契らぬ月も秋風もすゝむる袖に露こぼつれゝ
建暦二年又仙洞にて、述懷
八〇乘乳根の身に愁ても年はへぬ子を思末も君の千代迄
九〇さゆる夜の袖の涙の色ながら春の旦の空やながめむ
一〇何事を思知るとは無れ共あれば有世の身を任せつゝ
二〇いつ馴て宿はととへば答べき岩のはざまの谷の夕暮
三〇白眞弓磯べの山のいつとなく波にぬるれど引人も無し
仙洞にて住吉社の御歌合に侍りしに、寄ㇾ山雜
四〇徒らに年へぬる身を鏡山くもらぬ御代に哀とも見よ
建保二年内裏の歌合、秋懷
五〇過ぎて行く五十の夢の跡もなし心にしめし月の山本
六〇情ある此頃の世の數に入りて憂身の果も人や忍ばむ
三宮の十五首の歌合に、秋懷
七〇孰くにか身をば宿さむ雁のくる嶺にも晴ぬ思ある頃
後京極攝政の家の御會に、浮田杜述懷
八〇名を頼み浮田の杜に祈るとも身を埋木の朽や果なむ
月輪殿の會に、無常
九〇はかなくも今日の命を頼む哉昨日を過ぎし心習ひに
前但馬守家長の日吉の社の會に、曉述懷
一〇有明のみつの濱松すむ鶴の子を思ふ子の末ぞ久しき
八幡の宮の三首の會に、社頭述懷
二〇猶頼め民のかまどに絶えず立つ煙も神のこの思ふ末
述懷の歌あまたよみ詠み侍りし時
三〇何か殘る君が惠みの絶しより谷の古木の朽も果なで
四〇夕暮のなからましかば笹鮒のいとかく計物は思はじ
五〇幾年の老のなみだに滿つ潮の旦夕べに身を怨むらむ
六〇命かは泊りも知らぬ波の上に浮たる舟の我ぞ悲しき
七〇鐘の音も窓うつ雨にほのかにて枕に深き長き夜の闇
八〇儚なくも逢ふ哉野にも山にも道はある世に
九〇憂ながら心は我に非ともとめし月の色は變らず
一〇心から我こもり江の澪標世をは怨みず朽やはてなむ
二〇秋の夜の霜をばしもと翁さび我身ふけゆく宿の月影
三〇皆人の心はくもる末の世に月のみきよき秋の空かな
四〇秋の野と成行く庭に飛蝶も音を社たてね物や悲しき
五〇よそながら外よりゆかね我宿の月も浮世の道芝の露
六〇武士の新島もりも心あらば君に悲しき月や見るらむ
七〇月見ても思ひやられし海山も昔はかくや袖は萎れし
八〇露はなほ風の絶間もある物を涙やすめよ秋の夜の月
九〇世中に跡忍ぶべき方ぞなき枕よりこそ夢も見えけれ

三世中や思知るらむ足曳の山のまに〳〵月ぞ入りぬる
三迄りこしおどろの道も衰へて昔の跡の名をや移さむ
八世の中は草とる民の聲々に聞きもならはぬ曙ぞうき
九夏刈の鳥羽田の面は荒果てゝ民の煙の立つ空ぞなき
〇四跡忍ぶ宿は蓬に埋もれて聞きしにも似ぬ松風ぞ吹く
一四波間より都はたつみ詠めても猶うち山の方や戀らむ
二四我はまた人もかはらぬ姿こそ昔をしのぶ餘り也けれ
三四武士の八十宇治川に立つ波のたけき心は衰とぞ聞く
四四六月の神も受ずや成ぬ覽今日の御禊はする人もなし
五四荒き風防ぎし宿もあれはは丶月や眞にもり變るらむ
六四荒果て丶斯る浮世の宿ぞとも知らでや秋の今日は來ぬ覽
七四神無月木の葉も風に騷ぐ也淺ましかりし秋の名殘に
八四荒果て丶斯る浮世の宿ぞとも知らでや秋の今日は來ぬ覽
九四然りとて直き心もよに唯に混るよもぎの淺ましのよや
〇五狄の葉に驚きなれし秋風も唯今年のみ吹く心ちして
一五天の原空にさやけき月日のみ猶頼まる丶浮世也けり
二五かきつけば今行末の人やみむかゝる例も昔ありきと
三五今日迄もあるべしとやは思來し三年ぞ長き命也ける
四五我宿は其方を見てぞ慰むる誰かあたごの山と云けむ
五五さのみわれ涙をのみや啣つべき曇るは月の春の習を
六五大方の世さへ亂るゝ秋風にあふも悲しき宿のかる萱
七五思事心にのみぞ積りゆくいはゞまほなる人し無れば
八五中絶ゆる宇治の橋守此頃は徒らにてや夜を明すらむ
九五今年よりうしとも物を悲しとも云は始て誰古しけむ
〇六この宿にたれ待兼ねて松蟲も四年の秋の露に鳴らむ
一六月見てや數ならざりし我迄も都にすめば思出づらむ
二六思ひやる磯べの浪も返る也羨ましくや詠めわぶらむ
三六近づくと聞けむ鐘も水無瀬山思遣りてや秋は悲しき
四六胸にたくおもひの煙立ちわびて夕暮深き秋の霧かな
五六世中は憂き節繁き引く糸の思ひ亂れてよる方もなし
六六思ひやる心ぞとほき唯今の同じ夕やながめわぶらむ
七六嘆侘び十年に向ふ冬の日の夕暮ばかり悲しきはなし
八六煙たつ民の竈もいかゞ見む雲居に殘る高き屋もなし
九六いかにせむ賤の苧環穏しくも見えぬ此世の心細さを
〇七海山も皆をし鳥の世の中に數かくものは涙なりけり
一七深き谷嶺になる迄身をなけば頓て歎きと我や繁らむ
二七夕づく夜いづくに住まむ奥山に枝安からぬ嵐ふく頃
三七埋木も花さく春にあひぬなり身のみ涙の底に沈みて
四七雉子すむ狩場の眞柴あさりけむ報も著き宿のさま哉
五七昨日まで霧に迷ひし柏木の今日や朝日の影に逢らむ
六七立別れ今朝やこや野の花薄招く景色も悲しかるらむ
七七詠むらむ都の墻みゆばかり雲吹きはらへ西の山かせ
八七徒に流るゝ川も卯の花の涙せきあへぬ垣根なりけり
九七引かへてかゝる浮世に逢坂も曇りやすらむ望月の駒
〇八さとの海や吹來る風の方もうし詠むる袖に落る涙は
一八かへる山あるらむ道も待侘びぬ八年隔つる浮雲の空
二八頼みこしわが道もまた跡絶ぬ越の深山の雪を隔てゝ
三八自から待ちつる雁の言傳もそれとも聞かぬ過る秋哉
四八古の月や心をつけそめて君をも人はあふぎ來ぬらむ
五八ぬるが中に見るより外の夢ぞなき睡む程や現なる覽
六八行末のいかゞと思し程はきぬ是より後は頼なき身を
七八故郷の花の寢ざめになく鳥も同じ昔や戀しかるらむ
八八いかにせむ身は賤しくて年高き人を哀と思世もがな
九八谷狹み憂節繁き青つゞらいかに心をのばへてかみむ
〇九嬉しさの今も仰せの下れかし過にし御代の跡を尋て
一九憂からに世はあき果ぬ徒に山田のそほづ己のみかは
二九世の中にたゞ一言の哀知れ千々の情は思ひよらねば
三九敷島の大和にはあらぬ唐の吉野の山に籠るばかりに
四九今はわれの涙淵に世中のうき度毎に身をや投げてむ
五九昔こそ和歌の浦人なにをして身の徒に老果てぬらむ
六九わびしらに幾夜の月を詠めつゝ哀我身に年のへぬ覽

七九孰くにもうつぶし染の麻衣思立ちても年ぞへにける
八九消ぬ唯憂世の空に白雲の何ぞは有てあるかひもなし
九九自らさかゆく時も有なまし山路も近き山ちならずば

故入道三位の家の集をかりて侍り一廻られはべりにし後次の年の長月十日あまり羽林の許に返し遣るとて包み紙に葦手にて

〇〇なき人の形見の玉の聲毎に露おきそへて戀ふる秋哉

返し

一〇なき玉の形見の色の殘りだにすくなき秋の末の白露

貞永元年七月の頃源大納言經頼ひえどりを返し遣るとて

二〇菊の葉を秋と聞しはつらかりき此花の後花の無れば

返事

三〇立返り秋なき時の菊のはなもとの離に見るぞ悲しき

坊門院かくれさせ給ひたりける頃有家卿の許へ遣しける

四〇昨日みし跡なき山の跡とては入相の鐘に雲ぞ懸りし

建仁三年六年の頃嘆くこと侍りしに三位入道の許より

五〇藤衣きしは昨日と思ひしを又やは袖をなほ絞るらむ

返事

六〇限あらば又もやぬはむ藤衣とふに涙の果ぞ知られぬ

なほ添へて今一首を

七〇波に迷ふ藤江のあまの藤衣いかで玉藻の光さすらむ

返事

八〇玉ならぬ藻汐の草も爭でかは藤江の波にとはで過べき

三月七日攝政殿俄に失せ給ひて又の日此の御事猶夢のやうなるよし申し送りたる又の返りごとの奥に中將の

九〇昨日までかげと頼みし櫻ばな一夜の夢の春の山かせ

返事

〇一悲しさの昨日の夢に比ぶれば移ろふ花も今日の山風

五六日ありて又これより十首を遣すとて

一一櫻花こふとも知らじ陽炎のもゆる春日に泣々ぞふる
二一春の夜のおぼろ月夜も朧げの夢にも見えぬ花の面影
三一泣く涙木のめも枯し春の雨に濡るゝ袂は君も乾かじ
四一臥て戀ひ起ても迷ふ春の夢いつか思のさめむとす覽
五一思ひやる苦の下こそ悲しけれ霞のたにの春の夕ぐれ
六一仰ぎ見し雁の霞に消えしより空しく暮るゝ春の空哉
七一假初の宿に堰入れし池水に山も映りて影を戀ふらし
八一いつ迄か誰も生田の森の露消にし跡を戀つゝもへむ
九一魂きはる命は誰もなきものを忘れぬ心思ひかへして
〇二消えぬべし見れば涙の瀧つせに泡沫人の跡を戀つゝ

返し

一二戀ひわぶる花の姿は陽炎のもえし煙は胸にたきつゝ
二二せきも敢ぬ涙のとがか雲の月霞したしき空と頼まむ
三二紅の涙ふりいでゝ春雨に嵐身を知るそでのたぐひは
四二夢ならで逢夜も今は白露の起とは別れぬとは待れて
五二埋もれぬ玉の聲のみとまりぬて暮ひ兼たる苦の下哉
六二霞にしうき物からの春の空暮るれば悲し其も形見と
七二山の色は堰入れし水に映る共戀き影をいつか見るべき
八二春の夢かぎりに消えし夕より生田の杜の秋は怨めし
九二代々ふとも忘れし心玉きはるあだの命にみ社變らめ
〇三今はたゞ我が身一つの思川うたかた消えて瀧つ白波

承久三年七月以後遠き所へよみて奉りし時

一三頼し八雲の道も絶果てぬ君もいつもの恨しの世や
二三いかにして蜑の栲縄尋見む八十島出でゝ人や告しと
三三いかばかり都はたつみ詠むらむ月も浮世の沖つ島人
四三斯る世の波のはゝきに吹風のいかなる浦に月を見覽
五三思ふ方あなしの風に言とへは涙ばかりぞ袖に答ふる
六三憂き秋の山田の稲もほし侘ぬこき垂てなく袖の涙に
七三寢覺して聞かぬを聞きて悲しきはあら磯波の曉の聲

八三心うきあまの栖にすみ染の衣の袖もぬれぬ日やなき
九三おのづから袖の絶間も有ぬべし涙に物を思増さすは
〇四この春は越路の西へ歸れ雁戀しき方の言づてもせむ

神祇部

正治二年仙洞にて十題の歌合に、神祇

一四見ぬ世まで心ぞすめる神風やみもすそ川の曉のこゑ

前參議信成の北野の宮の會に、社頭松

二四老が世に祈る思の衰れ知れ一夜の松も年はへぬらむ

建保五年定家卿於金峰山會し侍し時の歌社述懷

三四この道も吉野の山の峰までに辿るを神の哀ともみよ

兵部卿成實の石清水の歌合に、社述懷

四四數ならで我身はふりぬ男山老いせぬ宮も哀かけなむ

家長朝臣の日吉の會に、寄二神祇一述懷

五四波はらへ御津の濱風待つとの年は社の數も知るらむ

神祇の歌とて

六四臥て思ひ起てや然も祈る覽春日の野邊の君がやちよを
七四明ぬ世の山は日吉の旭影さすがにかくる雪の白ゆふ

日吉社にて年來の願をはたして

八四年をへて思ふ思の叶ふにも祈るいのりの頼もしき哉

雜の歌の中に

九四幾代へて誰が立ておきし玉章の神がき山に茂る榊葉
〇五神地山仰げばとても五十鈴川心に人の渡るものかは

八幡別當幸清法印勸進し侍ける住吉の會に、花

一五八幡山春の櫻もかたそぎの行合ひの霜に色は見え覓

月

二五秋をへて幾代か宿る石清水照しかはせる住の江の月

釋教部

入道前攝政の家の舍利講の次でに分別功德品の

如虛空無邊といふことを

三五限なくさとれば空の浮雲を分けて分かるゝ有明の月

前大僧正の報恩講の次でに、佛前祝

四五神垣やもとの光をたづね來て嶺にも君を尙祈るかな

山家述懷

五五山深み誰も浮世に住侘びて軒端に懸る雲やけなまし

方便品

六五玉章やゆくてにまがふすさびにも拜めば佛導き給へ

私の家にて四十八願の歌人々に勸進せし時春庵

長壽の心を

七五樣々に變る姿をしたがへて賴む光に消ゆるよも無し

月

八五一夜月曇らで宿れ五とせの秋のころもは涙なりとも

無常

九五歎きとて無は數そふ浮世にも有別こそ見は增りけれ

月輪殿の會に舍利讃嘆を

〇六傳へきて殘る光ぞ哀なる春のけぶりに消えし夜の月

定家卿一品經勸進の時、授記品

一六十年餘り三とせの夢の面影や遙に消えし行く末の月

前但馬守家長の日吉の會に、藥王品

二六樣々にかをりし袖にもゆる火の光やつひに有明の月

天王寺繪堂前大僧正つくりたてゝ後の障子に九

品往生人かゝれ侍りける時中品下生の人の心を

三六袴やらで子を思ふ鹿の知べより狩場の山は厭出にき

春の歌よみ侍りし中に

四六幾世ふとまれの御法の花のえにまだ消え難き鶯の聲

釋教の心を四季雜によせて

五六匂ひけむ昔の法の庭ならばこぬ人あらじ宿の梅が枝

六六六月の日影をだにもいとふ世に燃む煽の後ぞ悲しき

七六露のをはり玉の衣に亂るなよ浮世を秋の信夫もぢ摺

八六勤めての法の勤の山水は結ぶとすれど凍る夜もなし

九六つらき世の人の心の色々に暫しかくるゝ山の端の月

譬喩品の心を

〇七浮世にて身は孤兒と成果てぬ我迷はすな法の直ちを

柿本集

柿本集上

石見の國より來ける時黒髮に

一七石見なる高間の山の木間より我振る袖を妹見けむかも

二七秋山に散紅葉の暫くも散りな亂れそ妹があたり見む

三七岩代の野中にたてるむすび松心もとけず昔おもへば

四七紫に匂へる妹がにくゝあらば人妻故に我戀ひめやも

五七三熊野の浦の濱ゆふ百へなる心は思へど唯に逢ぬかも

六七秋風のいせの濱荻折ふせて旅寢かすらむ荒き濱べに

七七夏野行く小鹿の角のつかの間も忘れず思ふ妹が心を

八七朝寢髮われはけづらじ美しき人の手枕ふれてし物を

九七夕されば君來まさむと待し夜の名殘ぞ今も寢難にする

〇八思つゝねにはなく共いち著く人の知べく歎きすな君

一八解衣の思亂れて戀れども人なしといふ人もなし

二八梓弓引み引ずみ來ずこずこそ猶ぞよそに社見め

三八玉鉾の道行きつかれ稻筵しきても人を見る由もがな

四八とにかくに物は思はず飛鞭匠うつ墨繩のたゝ一條に

五八足引の山田守をの置蚊火の下焦れつゝ我が戀らくは

六八杉板もて葺る板間の逢ざらばいかにせむとか逢見初劔

七八難波人蘆火たくやは煤たれど己が妻こそ常珍らなれ

八八妹が髮上小笹野の放れ駒荒びにけらし逢はぬ思へば

九八天雲のやへ雲がくれ鳴神の音にのみやは聞渡るべき

さみの郎女あひ別れ侍りける時の

〇九思ふなと人は云へ共逢事ないつと知てか我が戀ざらむ

近江よりのぼりて宇治川のほとりにて

一九武夫の八十氏河の網代木にいざよふ波の寄べ知すも

二九我せこをきませの山と人は云ど山の名ならし君も來ぬ

河を

三九大君が御垣の山を帶にするほそ谷川の音のさやけさ

四九月草に衣ぞ染むる君がため色とり衣すらむと思ひて

五九尙あらじ言無草に云とを聞てしあらば嬉しからまし

六九山高み夕日隱の淺茅原のち見む爲にしめゆはましを

七九三島江の玉江の蘆を古しより己がとぞ思ふ未刈ねど

八九月草に衣はすらむ朝霧にぬれての後は移ろひぬとも

九九我心ゆたのたゆたに浮蓴へにも沖にも成にけるかな

〇〇久方の雨にはきぬを怪しくも我衣手のひる時もなき

一〇木綿懸て祈る三室の神さびて否には有ず人め繁みぞ

二〇百つ度やすの島べに漕ぐ舟にのりにし心忘兼ねつも

三〇事繁き里に住ずばけさ鳴し雁に類ひていなましものを

四〇河の瀨に渦まく見れば玉藻かる散亂たるかはの舟哉

吉野山にみゆきする時の

五〇見れど飽ぬ吉野の山の常なめに絶る時なく又歸見む

伊勢の國にみゆきする時にきやうにとゞめられ

てよめる

六〇みを海に舟乘すらむ妻共に袂の裾に汐滿ぬ覽かも

七〇汐さゐにいつしの浦に漕舟に妹乘らむか荒き濱べに

八〇たちはきのたぶさの末に今もかも大宮人の玉藻刈覽

石見の國にめをおきてのぼりてよめる

九〇笹の葉は深山もよそに亂る覽我は妹思ふ置て來つれば

日並のみこのうせたる時

一〇久方の天見る如く仰見しみこの御門の荒まくをしも

一一茜さし日は照せ共烏玉の夜渡る月のかくらくをしも

ある本にいはく

二一島みやのまがりの池の放鳥人めに戀ひて池に潛かす

はせのわう女をしさかべの宮に奉る

三一敷妙の袖替し君玉たれのをちのにすきぬ又は逢むや

一つに曰くをちにすきぬと又ある本に曰くはつせ

の王女に奉れるなり

あすかのわう女をさむる時によめる

一飛鳥河柵渡しせかませば流るゝ水ものどけからまし
一つに曰く見むと思ふや又見むと思ふらむわが大君の御名を忘れぬ一つに曰くみな忘れすと
高市のみこをしきの上に假に納め奉る時の歌
一久方のあめしらしぬる君故に月日も知ず戀渡るらむ
一はに安の池の堤の隱れぬの行へも知ずとねり惑ひぬ
女の死にて後によめる
一秋山の紅葉おしなみ惑ひぬる妹を惜むと山路暮しつ
一知ずとも又ひく道を知ず其須磨路を行けばゆけに
しらずとも又いはくみちしらずとも
一紅葉の散ぬる秋を玉章の使を見ればつかひおもほゆ
一衾路のひくての山に妹を置て山路をゆけば生りともなし
又いはく
一去年見てし秋の月夜は宿れ共逢見し妹はいや遠かる
一家にいきて我屋をみれば玉床の外におきける妹がこ枕
ひきての采女身なくなる時よめる
一天の子がみつの日にあはむ日ぞおほのみしかば今も悔しき
一天の子がみつの日にあはむ日ぞおほのみしかば今も悔しき
一近江のあれたる宮を見て
一小波の志賀の辛崎行て見れど大宮人の舟待ちかねつ
一天離鄙の長路を漕行けば明石のとより家のあたり見ゆ
一みこの海はよく社有らし漁せる蜑の釣舟波の上に見ゆ
一須磨の浦に舟乘すらむ少女子が赤裳の裾に汐や滿覽
一大舟にまかぢしげぬきうな原を漕ぎでて渡る月人男
あふみの宮のあれたるを見て
一小波や近江のみやは名のみして霞霧き宮木もりなし
讃岐のみゐの小島にして岩の上にて死にたるくびを見て
一妻もあらば摘てたがましさみ山の床のおはしき過ぬ
石見の國にてなくなりぬべき折によめる
一沖つ波寄るあら磯の敷妙の枕となりてなれる君かも
一鴨山の岩根に置る我をかも知ずて妹が待つゝあらむ
一神山の岩根の玉にある我を知ぬか妹が待つゝませる
一山の峽そこも見えず白樫の枝にも葉にも雪のふれゝば

柿本集下

一人事は夏野の草と繁くとも妹と我とし携さはりなば
一山里は月日の遲くうつらなむ心のごかに紅葉も見む
一此頃の戀の繁けむ夏草の刈果れども思ひしくがごと
一片よりに糸をこそよれ我せこが花橘をぬかむと思て
一郭公通ふ垣根の卯花のうきことあれや君か來まさぬ
一我こそは憎くもあらめ我宿の花橘は見にもこじとや
一懸てのみ戀れば苦し撫子の花に咲なむ朝な〳〵見む
一よそにのみ見つゝや戀ひむ紅の末摘花の色に出ぬと
一夏草の露分衣きぬ物をなどか我が袖のかわく時なき
一水無月の土さへ裂て照日にも我袖ひめや妹に逢ずて
一戀る日はけ長き物を今夜さへともしかる覽逢べき物を
一天河こぞのわたりの移へば河瀨踏間に夜ぞ更にける
一年の戀今夜盡してあすよりは常の戀にや我が戀をせむ
一逢ずてはけ長き物を天河隔つるまでや我が戀をらむ
一彦星と七夕つめと今宵逢はむ天の河瀨に波たつな夢
一屢も逢ひ見ぬ妹を天の河舟出はやせよ夜の更けぬ時
一秋風のきよき夕に天の河舟こぎわたせ月ひとをとこ
一天の河霧立渡り彦星のかぢおと聞ゆ夜の更け行けば
一天河遠きわたりと無れども君が舟出は年にこそまて
一天河橋うち渡す妹いへにやまず通はむ時待たずとも
一天の河霧立ち渡る七夕はあまの羽衣とひわかるかも
一渡守舟はや渡せ一年にふたゝび來ます君ならなくに
一天河瀨を早みかもむば玉の夜は更行けど逢はぬ彦星
一天河夜は深につゝさぬる夜の年の稀らに唯一夜のみ
一七夕の今宵逢なば常のごと月日隔つる年なからなむ

一秋風の吹にし日より天河瀨に立いでゝ待つと告こせ
一天河こぞの渡りはあせに鳧君が來まさむ跡殘らなむ
一銀河淺瀨白波高ければたゞ渡りなむまてばすべなし
一彦星の妻待つ舟の引綱のたえむと君にわが思なくに
一妹に逢ふ時片待つと久方の天の河原に月ぞへにける
一白露の置かまく惜しき秋萩を折のみ折て置や枯さむ
一秋の田の假庵の宿の匂ふ迄咲る秋萩見れど飽ぬかも
一樫の朝露おきて咲といへど夕顔にこそ匂ひましけれ
一春されば霞隱れに見えざりし秋萩咲けり折て翫さむ
一人は皆萩を秋とは云なれど尾花の末を秋とはいはむ
一玉鉾の君が使の手折たる此秋萩は見れどあかぬかも
一我宿に咲ける秋萩常ならば我まつ人に見せまし物を
一我宿に植て置たる秋萩を誰かしめさす我に知らせず
一手にとれば袖さへ匂ふ女郎花木下露に散まくもをし
一我妹子に行合の早稻を刈時に成にける哉萩の花さく
一戀しくば形見にせむと我せこが植し秋萩花咲にけり
一秋萩は雁に逢はじと云へればか聲を立ては花散に鳧
一秋されば妹に見せむと植し萩露霜置て散にけらしも
一秋風に山飛越ゆる雁がねのいや遠ざかり雲隱れつゝ
一天雲のよその雁がね聞しより痛く霜ふり寒し今宵は
一垣根なる萩の花さく秋風の吹くなるなべに雁鳴渡る
一山近く家居をせればさを鹿の聲を聞つゝいも寢兼つも
一足引の山より聞ければさを鹿の妻呼聲を聞かまし物を
一夕陰になく蜩のこゝばくに日毎に聞けど飽かぬ君哉
一秋風の寒く吹くなる我が宿の淺茅がもとに蜩もなく
一影草のおひたる宿の夕陰になく蜩は聞けど飽ぬかも
一神なびの山下とよみ行河に蛙なくなり秋といはゞや
一庭ぐさに村雨ふりて蜩の鳴く聲きけば秋は來にけり
一草枕旅に物思ふわが聞けば夕片陰に鳴くひぐらしか
一瀨を早み落ちたぎつらし白波に蛙なくなり朝夕毎に
一秋萩における白露朝な〳〵玉とぞ見ゆる置ける白露
一白露と秋の花とをこき混せてあくと雖き我が心かな
一我宿の尾花推なみ置露に手ふれ我妹子散まくもをし
一此頃の秋風さむし萩が花ちらす白露おきにけらしな
一この比の曉露に我がやどの萩の下葉は色づきにけり
一雁音は今は來鳴きぬ我待し紅葉早つげまてば苦しも
一秋されば置白露に我宿の淺茅がうへ葉色づきにけり
一一年に二度行かぬ秋山を所にもあらで過しつるかな
一雁がねの鳴つるなべに唐衣立田の山は色づきにけり
一さを鹿の妻とふ山の岡べなるわさ田は刈じ霜はおく共
一我宿の守る田を見ればさほの内の秋萩薄思ほゆる哉
一此宵は小夜更ぬらし雁がねの聞ゆる空に月立ち渡る
一我せこが挿頭の枝に置露の清く見せむと月は照らし
一思はずに時雨の雨は降りたれど天雲晴て月は清きを
一白露を玉に作れる長月の有明の月は見れど飽ぬかも
一戀つゝも稻葉かき分家をれば乏しくも有ず秋の夕暮
一萩の花咲たる野べは蜩の鳴くなるなべに秋風ぞ吹く
一秋山の木葉も未だもみぢねば今朝吹風は霜消ぬべし
一秋田かるひたの庵に時雨ふり我袖濡ぬほす人もなし
一玉襷懸ぬ時なく我が戀る時雨し降らば濡つゝも來む
一紅葉を落す時雨の降なべに夜さへぞ寒き獨しぬれば
一誰彼と我をなとひそ長月の時雨にぬれて君待つ我を
一住吉の岸を田にほり菁し稻の刈まで妹に逢ぬ也けり
一秋の田の仄に置る白露のけぬべく我は思ほゆる哉
一秋萩の咲ける野べの夕暮に濡つゝ來ませ夜は更ぬ共
一秋萩の枝も撓わに置露の消もしなまし戀つゝあらば
一秋萩に落す時雨のふる時は人を起ゐて戀る夜ぞ多き
一さを鹿の朝臥小野の草若み隱兼てか人に知られぬる
一我宿に咲る秋萩散果てば秋にもあはぬ身とや成なむ
一秋されば雁飛越る立田山立つとゐるとに君を社思へ
一何すとか君をいとはむ秋萩のその初花の戀しき物を
一雁がねの初聲ならで咲て散る宿の秋萩見にこ我せこ

二二さを鹿の入野の薄初尾花いつしかいもが手枕にせむ
三三長月を君に戀つゝいけらすば咲て散にし花ならましを
四二秋の夜の月かも君は雲隱れ暫しも見ねば君ぞ戀しき
五二長月の有明の月の有つゝも君し來ませば我戀めやも
六二祝り子が祝ふ社の紅葉もしめをばこえて散來る物を
七二足引の山路も知す白樫の枝もたわゝに雪の降れゝば
八二夜を寒み朝戸を明て出ぬれば庭もはだらに雪降に鳬
九二泡雪は今朝はな降そ白妙の柚木を干む人も有なくに
○三誰が宿の梅の花そも久方の清き月夜に殘らざりけり
一三梅花先さく枝を折持て苞と名づけてよそへてむかも
二三來て見べき人も有なくに我宿の梅の初花散ぬれどよし
三三泡雪の降に消えぬべく思へ共逢由もなみ程ぞへにける
四三朝霧合降來る雪の消ぬ共君には逢むと我が歸來たる
五三我宿に咲たる梅を月影に夜な〳〵來つゝみむ人もがな
六三足引の山下風は吹かぬ共君が來ぬ夜はかねて寒しも
七三あすよりは若菜摘まむと片岡の朝の原は今日ぞ燒める
八三梅花其とも見えず久方の天きる雪のなべて降れゝば
九三我が宿の池の藤なみ咲きにけり山郭公今や來鳴かむ
○四田子の浦にて藤の花を見て思をのぶ
一四郭公なくやさ月の短夜も獨しぬれば明かしかねつも
二四年に在て一夜妹にあふ彦星の我に增りて思らむやそ
三四我妹子が赤裳ぬらして植し田を刈て納めむ倉無の濱
四四秋風の日毎に吹けば久方の岡の木葉も色づきにけり
五四我せこを我が戀をれば我宿の草さへ思ひうら枯に鳬
みかど龍田河のわたりにおはします御供にづか
うまつりて
六四龍田川紅葉ば流る神なびの三室の山に時雨ふるらし
七四逢ぬ夜の降白雪と積りなば我さへ共に消ぬべき物を
八四足引の山下とよみ行水の時ぞともなく戀ふる我身か
九四時雨の雨まなくしふれば槇の葉も爭兼て紅葉しに鳬
○五青柳の蔦城山にゐる雲の立てもゐても君をこそ思へ
一五水底に生ふる玉藻の打靡き心をよせて戀ふる此ころ
二五言に出て云はゃ床しみ山河のたぎつ心を堰ぞ兼つる
三五風吹けば波打岸の松なれやねに顯れてなきぬべら也
四五日の曇り雨降河のさゃら波まなくも人の戀らるゝ哉
五五垂乳根の親のかふこの繭籠いぶせくも有か君に逢すて
六五戀々て後に逢はむと慰むる心しなくば生てあらめや
七五戀するに死る物にしあらませば我身は千度死返らまし
八五戀々て戀て死ねとや我妹子が我家の門を過て行ぬる
九五荒磯の外行く波のほか心我は思はじこひはしぬとも
○六丈夫のうつし心も我はなし夜晝わかす戀しわたれば
一六侘つゝも今日は暮しつ霧立あすの春日を爭て暮さむ
二六戀つゝも今日はありなむ玉櫛笥明なむあすを爭て暮さむ
三六千早振神のい垣も越ぬべし今は我身の惜けくもなし
四六山端にさし入月のはっ〳〵に妹をぞ見つる戀しき迄に
五六竹の葉に置る露の轉合てぬるよはなしに立我名哉
六六無名のみ辰の市とは騷け共いざまた人を賣由もなし
七六無名のみ立田の山の麓にはよにも嵐の風も吹かなむ
八六皆人の笠にぬふてふ有馬菅有ての後も逢むとぞ思ふ
九六十寸鏡手に取持て朝な〳〵見れ共君に飽く時ぞなき
○七玉ゆらに昨日の暮に見し物を今日の朝に戀べき物か
一七斯計戀き物と知ませばよそに見るべく有らまし物を
二七戀死なば戀も死ねとか玉鉾の道行き人に言傳もなし
三七足曳の山より出る月まつと人には云て君をこそまて
四七逢見ては幾久さにもあらね共年月のごと思ほゆる哉
五七岩根ふみ重なる山は無れども逢ぬ日數を戀わたる哉
六七賴めつゝこぬ夜數多に成ぬれば待じと思ぞ待に增れる
七七鳴神の暫しは空にさし曇り雨もふらなむ君止るべく
八七むば玉の今宵な明そ明行けば朝行君を待もくるしも
九七小波や志賀の辛崎來たれども大宮人の舟待ちかねつ
○八足引の山鳥の尾の玄だりをの長々し夜を獨かもねむ

一八千早振神の保てる命をも誰が爲と思ふ我ならなくに
二八網代木の白波よりてせかませば流る水も長閑からまし
三八白波は立てど衣に重ならす明石もすまもおのが浦々
四八あらちをのかるやの崎に立鹿もいと我如に物は思じ
五八ほの〳〵と明石の浦の朝霧に島隱行く舟をしぞ思ふ
六八鳴神の音にのみ聞く卷向の檜原の山を今日見つる哉
七八古にありけむ人も我とや三輪の檜原にかざし折けむ
八八よそにして雲ゐに見ゆる妹が家に早く到らむ歩め黑駒
九八我妹子がねぐたれ髪を猿澤の池の玉もと見るぞ悲き
○九湊入の蘆分小舟さはり多み戀しき人にあはぬ比かな
一九朝霜の消み消すみ思へども爭でか今宵明しつるかも
二九新月のさやけくも有す雲隱見まくぞ欲しき轉て此比
三九正してふ八十の巷に夕けとふ占正にせよ妹に逢べく
四九空の海に雲の波たち月の舟星の林にこぎかへる見ゆ
五九ちゃにはも人は云ふとも織つがむ我機物に白き麻衣
せん頭歌
六九增鏡見しかと思ふ妹に逢はむかも玉の緒の聚後の絶えた
る思ひ繁き此頃
七九夕されば秋風寒し我妹子が解洗ひ衣行きてはやきむ
八九大己貴少なひ神の作れりし妹背の山を見るが嬉しさ
九九卷もくの山べ響きて行水の水泡の如に世をば我が見る
○○敗妙の袖替しきみ玉垂の遠野に過ぬ又もあはむやは
一○秋田かる假庵作りわがをれば衣手寒く露ぞおきける
二○やたの野に淺茅色附あらち山嶺の泡雪寒くぞ有らし
三○降雪の空に消ぬべく思へ共逢由もなく年ぞへにける
柿本の人丸あからさまに京近き所に下りける
をとく上らむと思ひけれど聊にさはることあ
りてえ上らぬに正月さへ二つありける年にて
いと春永き心ちして慰めがてらに此の世にあ
る國々の名をよみけるこれなむゐなかに罷り
下りつるとてあるやんごとなき所に奉りける
なむ
畿内五箇國
やましろ
○四打はへてあな風寒の冬の夜やま白に霜の置ける朝道
やまと
○五ふる道に我やまどはむ古の野中の草と茂合ひにけり
かうち
○六朝まだき我がうち越る龍田山深くも見ゆる松の綠か
いづみ
○七蜃ならで海の心を知らぬ哉いつみて汐にみるめ刈らむ
津のくに
○八蘆鴨の騷ぐ入江の水ならでよに住み難き我身也けり
東海道十五箇國
いが
○九散らぬとも爭でか知らむ山櫻春の霞の立ちし隱せば
伊勢
○一二葉より引こそ植め見る人の老せぬ物と松を聞にも
志摩
一山川の石間を分けて行水は深き心も有らじとぞ思ふ
をはり
二春たてば梅の花笠鶯のなにをはりにて縫ひ留むらむ
三河
三あだ人のとに附べき我身かは知ばやよそに戀してふ覽
とほたあふみ
四ひねもすに遠た淡江に種蒔て歸る田長は苦しかる覽
するが
五ふじのねの絶ぬ思をするからに常磐に燃る身とぞ成ぬる
伊豆
六逢ふとをいつしかとのみ松島の變らす人を戀渡る哉
かひ

七須磨の浦に鶴の飼兒のある時は是か千代へむ物と（やはらぐ）
さがみ
八足柄のさか見に行かむ玉櫛笥箱根の山の明けむ朝に
むさし
九栞せむさして尋ねよ足曳の山の遠にて跡はとゞめつ
あは
〇二春の田の苗代所作るとてあは今日よりぞ堰は始むる
かんつふさ
一とめ行かむ具に跡は見えず共鹿のはかりは知と云也
しもつふき
二梢しも開けざりけり櫻花下つふさこそ先は咲きけれ
ひたち
三いつしかと思ひ立にし春霞君が山路に懸らざらめや

東山道八箇國

あふみ
四流れ逢ふ湊の水のうまければ片へも汐は甘き也けり
みの
五わたつ海の沖にこち風早からし鹿子斑に浪高く見ゆ
飛騨
六さして行三笠の山し遠ければ今日は日たけぬあすぞ到らむ
信濃
七あだなりと云初られし濡衣は干しなのみ社立增けれ
かんつけ
八音に聞く吉野の櫻見に行かむ告げよ山守花の盛りを
しもつけ
九春きぬと人しも告げず逢坂のゆふ附鳥の聲に社知れ
むつの國
〇三いつか生ひむ角ぐむ蘆を見程は難波の浦も名のみとぞ思
いでは
一四夕闇はあな覺束な月影の出でばや花の色もまさらむ

北陸道

わかさ
二五春たてばわが澤水に摘む芹の根深く人を思ひぬる哉
ゑちぜん
二六しか山を越行く人をつゝら杖千年またすと聞は誠か
加賀
二七己がかく明けゝる物を花と云へば一つ匂に思ける哉
能登
二八咲けばかつ散りぬる山の櫻花心のどかに思ひける哉
ゑちう
二九花の末ちうに勝りて匂せば其をぞ人は折て採らまし
ゑちご
三〇人に似すがなき親の心故ちごゝへにくゝ思ほゆる哉
さど

東路の唐土里におりて立つきぬをや唐の衣といはむ

山陰道　丹後國丈長如何

三一東路の唐土里におりて立つきぬをや唐の衣といはむ
たには
三二春雨にたには水社增るらしたはたゝき聲音高くなる
たじま
三三霞たちまふ山と見えつるは此面彼面の櫻なりけり
いなば
三四鶯の聲を仄かに打なきていなばいづれの山を尋ねむ
はゝき
三五山際はきよく見ゆれど天つ空漂ふ雲の月やかくさむ
いはみ
三六世と共に波なき磯の岩見れば傍へぞ乾く時は有ける
おき
三七草の葉に置ゐる露の消ぬ間は玉かと見ゆるとの儚さ
いづも
三八程もなく今朝降雪の朝まだきいつもと云は虛言か君
山陽道
はりま

六立代り益田の池の浮尊來れども絶ぬ物にぞ有りける
みまさか
七君がみまさがなく常に離れつゝ我花園に踏しだくめり
びぜ
八常磐山二葉の松の年をへてくひぜにならむ年を見てしか
びちう
九袂ひぢうきて身さへぞ流れつる割なき戀の逢ぬ涙に
びご
〇五日比へて見れ共飽かぬ櫻花風の誘はむとのねたさよ
あき
一六鶯のあきて立ぬる花の香を風のたよりに我は待つ哉
すはう
二五水鳥の立ゐて騷ぐ磯の巢は浮べる舟ぞよそに過ける
ながと
三五海の中常磐に入て潜く蜑も人に飽はともしかりけり

南海道

紀の國

四五淺緣野べの青柳出て見む糸を吹きくる風はありやと
あはぢ
五五我が誓ふことを眞と思はずばあは千早振神にとへ君
あは
六五梢のみあはと見えつゝ帝木の本を本より見人ぞなき
さぬき
七五我はけさぬぎて歸りぬ唐衣よのまと云しとを忘れず
伊豫
八五儚しや風に浮べるくものいよ心細くぞ空にわたれる
土佐
九五湊さる舟社今朝は怪しけれ日たけて風の吹て歸るに

西海道（ちくこと見）

ちくぜ
〇六片道くせにつくれと云遣らむましき若菜も生ひば摘べく
ひぜん
一六人を戀ひせめて涙のこぼるれば是誰方の袖ぞ濡ける
ひご
二六誰しかも我を戀らむ下紐の結びもあはず解る日比は
ぶぜ
三六春の野に昨日失にし我駒を孰れの方にさして求めむ
ぶご
四六花に蝶爰にて常に睦れなむ長閑からねば見人もなし
ひうが
五六逢ぬ戀うかりけりとぞ思ぬる身をば焦せど驗無れば
大すみ
六六我宿に大隅山のいかなれば秋を知ずて常磐なるらむ
さつま
七六春の野の花を種々つまむとてさも形見をも作つる哉
いき
八六いき通ふ雲ゐは道もなき物を爭でか雁の惑ざるらむ
つしま
九六山川に水し增らば水上に積る木の葉は落し果つらむ

書寫本色紙手跡古體也
建長五年六月日
此本以二三箇之本一校正了
同六年三月日　藤原朝臣（在判）

躬恒集

躬恒集上

延喜のおほんときに御厨子どころにさぶらひしに京官のころともにおくれたりしかば御らんぜさせよとおもひて或るをんなくらうどのもとにやりし

〇七ゑとも春の光は分なくにまだ三吉野の山は雪ふる

一七皆人は花の衣をきるなかに獨ぞ老いし沈み果てぬる

二七今迄に出立たぬ身は百敷の宮の櫻を見でや止みなむ

三七侘人の思ふ心をちる花にそへて雲ゐに吹きつけよ風

中秋

四七人知れぬ音をや鳴らむ秋萩の花咲までに鹿の聲せぬ

初の冬

五七神無月紅葉の色は吹く風と瀧の水とぞ落し果てつる

逢はぬ戀

六七逢むとは思渡れど藤河の途にすまずば影も見えじを

七七思ひつゝまだ云初めぬ我戀を同じ心に人は知らなむ

八七見ぬ人の戀しきやなぞ覺束な誰とか知らむ夢に見る共

逢ひての戀

九七別ては後ぞ侘しき濁江のそこども知らぬありか問身は

〇八只管に忘もぞする忘草見すやあらまし戀は死ぬとも

一八久方の雲ゐ計りに逢ひしより空に心はなりにしものを

二八久にこぬ人を待にや敢ぬらむ常磐の戀と我は成ぬる

えぎ十三年十月十一日内裏の菊合に仰によりて奉る三首

三八菊の花こきも薄きも今迄に霜の置ずば色を見ましや

四八初時雨降初めしより菊の花こかりし色ぞ又增りける

五八本よりの色にはあれど菊の花片へは移す所からかも

えぎ十四年二月十八日仰によりて奉るいづみの大將の四十の賀の屏風四帖うちより調じて遣す

にかく例の歌

六八山高み雲ゐに見ゆる櫻花心の行きて折らぬ日ぞなき

七八大あらきの森の下草茂合ひて深くも夏の成にける哉

八八住の江の松を秋風吹くからに聲うちそふる沖つ白波

同じ十三年内侍の督のかの屏風の歌

九八可惜しく我のみや見む菊花移らぬ先に來む人もがな

同じ十五年齋院の御屏風の歌、春

〇九香をとめて誰折ざらむ梅の花あやなし霞立な隱しそ

一九降雪に色は紛ひぬ梅花かにこそ似たる物なかりけれ

女ども梅の花見つゝ若菜つむ

二九春のきる衣片しき誰が爲か習はぬ草に若菜つむらむ

人木のもとに在り

三九梓弓春の山べをさりがたみこの本ごとに心をぞやる

えぎ十七年御屏風の歌、秋

四九水の面の深く淺くも見ゆる哉紅葉の色ぞ淵瀬也ける

松にかゝれる苔を見る

五九千代をふる松に懸れる苔見れば年のを長く成にける哉

野に小鷹狩す

六九人の子もかるゝと聞くまで女郎花本毎に鳴く鈴蟲の聲

田刈る

七九小山田の奥手の稻を刈摘て守る假庵に幾夜經ぬらむ

紅葉ちる

八九惜めども遂に散りぬる紅葉故風吹く毎に物思ふかな

えぎ十二年女二宮の御屏風のわかな初へ

九九行先はまだ遠けれど夏山のこの下蔭は立うかりけり

しはす

〇〇木間より風に紛ひて降雪も春くさいへば花かとぞ見る雪

内の御屏風の歌、子日

一〇妬く我れ子日の松にならましをあな羨し人に曳るゝ

花つみ

二〇鶯はいたくな鳴そ移香にめでゝ我つむ花ならなくに

草合する所

三〇櫻花我宿にのみ在りと見ばなき物草は思はざらまし

三月つくる日

四〇今日暮てあすに成なば藤の花懸てのみ社春を忍ばめ

六月はらへ

五〇空見えて流るゝ水の早けきも祓ふるとを神も聞らむ

七月七日

六〇なぬか日の早暮れなゝむ久方の天の河霧立渡るべく

七日夕

七〇逢星の妻まつ宵の秋風にわれさへあやな人ぞ戀しき

八月十五日

八〇孰こにか今宵の月の見えざらむ飽ぬは人の心也けり

稻ほしたり

九〇刈てほす山田の稻をかずへつゝ多くの年を積てける哉

師走

一〇梓弓春立しより年月のいるが如くもおもほゆるかな

一嘆子鳥春の空しく過行けば心細かる音をも鳴くかな

二大あらきの杜の下なる蔭草は早晩どのみ光をぞまつ

三夢にだに嬉しと思はゝ現にて侘しきよりは尙優りなむ

四かく侘る人は昔も有やせし世を知初めの神に問ばや

五過ぐしこし年を幾らと算れば指いとなくも老にける哉

六都にて春をばたゞに過しきて何ちと雁の鳴て行らむ

秋になりてよろこびやしたりけむ

七今日よりは嬉き身をも菊の上に天つ空より置る白露

八よには音を侘て鳴だに有物を嬉しきにさへ落る涙か

おほみゆきの後たてまつる歌

九船岡の行幸の後は寄べなみ沈むと侘びし物思もなし

〇一千代をへて行幸有べき船岡の松ならぬ身も老ぞ悲き

亭子のみかどの大井に行幸せさせ給へるときの

歌、秋の水にうかぶ

二此川に紅葉と浮てさし返り身は今日よりぞ水馴初ぬる

三秋の波いたくな立そ思ほえず浮木にのりて行人の爲

秋の山にのぞむ

四今日なれば小倉の山の紅葉もそこさへ照て見え渡る覽

五秋霧の晴るまに〳〵見渡せば山の錦は織果てゝけり

紅葉おつ

六水の面の唐紅になるまゝに秋にもあへず落る紅葉ば

七風にちる岸の紅葉ば後遂に瀧の水こそ落しはてつれ

殘りの菊

八菊の花今日を待とて昨日置し露さへ消ず今盛りなり

九君が爲心もしるく初霜の置きて殘せる菊にぞ有ける

〇一たづのゐる潟にぞ有ける白妙の天の濡衣ほすと見つるは

〇二浦わきて風や吹くらむ沖つ波同じ所に立ち歸りつゝ

旅の雁行く

一三年毎に友ひき列ね來る雁を幾度きぬと問ふ人ぞなき

二三故郷を思ひやりつゝ來る雁の旅の心は空にぞ有らし

三三秋毎にくる雁がねは白雲の旅の空にやよを過すらむ

山のかひにさる鳴く

四三侘しらに猿な鳴そ足引の山の峽ある今日にやは有ぬ

五三心あらば三度てふ度鳴聲をいとゞ物思ふ我に聞すな

かもめなれたり

六三馴てこし沖の鷗はつげなくに後の心をいかで知けむ

七三洲にをれば砂の色に紛ふ鳥手にとる計り成にける哉

入江の松老いたり

八三深緑入江の松も年ふれば影さへ共に老いにけらしな

九三老にける松ぞ知らむ鮎河の行幸も斯は有ずや有けむ

同じ院の歌合の左かたにてよめる

〇四咲ざらむ物とはなしに櫻花俤にのみまだき見ゆらむ

一四來つゝのみ鳴鶯の故郷はちりにし梅の花にざりける

二我心春の山べにあくがれて長々し日を今日も暮しつ
三花櫻いかでか人の折りて見ぬ後こそ増る色も出こめ
四いも安く寢られざり鳬春夜は花の散のみ夢に見えつゝ
五故郷に霞とびわけ行く雁は旅の空にや春をすぐらむ
六現には更にも云じ櫻花夢にも散ると見えばうからむ
七目に見えて風は吹け共青柳の靡く方にぞ花は散ける
八春深き色こそなけれ山吹の花に心をまづぞ染めつる
九かけてのみ見つゝぞ忍ぶ紫に幾しほ染し藤の花ぞも
〇今日のみと春を思はぬ時だにも立と易き花の蔭かは
一深山出てまづ初聲は郭公夜深く待たむ我が宿になけ
二紫にあふ水なれや杜若底のいろさへかはらざるらむ
三我が聞て人には告む時鳥思ふも玄るく先こゝになけ

戀

四涙河いかなる水か流るらむなど我戀を消つ人のなき
五誰により思亂るゝ心とも知らぬぞ人のつらき也ける
六人の上と思ひし物を我戀に櫻作做てや君が難面かる覽
七現にも夢にも人によるしあへば暮行計嬉しきはなし

平中將の家の歌合に、初の春

八春立て猶降雪は梅の花さく程もなく散るかとぞ思ふ

中春

九はかなくて春一月は過にけり花の盛は過がてにせよ

はての春

〇六止るべき物ならなくに儚くも散る花毎にたぐふ心か

初の夏

一六山がつの垣根に咲ける卯花はたが白妙に衣かけしぞ

中の夏

二六郭公をち歸りなけわぎも子が打たれ髪の五月雨の空

初の秋

三六年毎に逢とはすれど七夕のぬる夜の數ぞ少かりける
四六立止り見てを渡らむ紅葉は雨と降るとも水は增らじ
五六風にちる秋の紅葉は後遂に瀧の水こそ落しはてつれ
六そよみなく見君なれど彦星のけふ待出たる心ちのみして
七秋の夜の臈に見ゆる月よりは紅葉の色ぞてり優りける
八かりてくる山邊の鳥を秋霧の立度毎に空にこそ見れ
九影をだに見せず紅葉は散に鳬水底にさへ波風や吹く
〇七行遣らぬ心や何ぞ秋の野の道は千年も有じと思ふを

十五夜月

一七淡路にてあはと雪居にみし月の近き今夜は所からかも
二七網代木の長居なやせむ儚くて紅葉の影に日を暮しつゝ
三七秋の野を分行露に移りつゝ我が衣手は花の香ぞする

清涼殿の南のつまに御河水巡り出でたりまづ延喜十九年九月十三夜その宴せさせ給へりその心の題あり人々歌奉る

四七百敷の大宮ながら八十島を見る心ちする秋の夜の月
五七明ぬれば難面く成ぬ女郎花人知れずこそ折むと思に
六七河上に時雨のみ降る網代木は紅葉さへ社落增りけれ

內の御屏風に

七流行く紅葉の色の深ければ立田の河は淵瀬ともなし
八笹の葉に置初霜の夜を寒みしみはつく共色に出めや
九神無月時雨に濡るゝもみぢ葉は唯佗人の袂なりけり
〇八冬の池に住鴛鳥のつれもなく下に通はむ人に知すな
一八夜を寒み置初霜を拂ひつゝ草の枕にあまたゝび寢ぬ
二八黑髮の白く成ゆく身にしあれば先初雪を哀とぞ見る
三八音にのみ聞て已にし菊の花夢にも色は見えず成にき
四八あだ也と我をば菊の花しもぞ移ふ色はこさ增りける

頭べを旋らす歌

五八ます鏡そらなる影にむかひゐて見る時にこそ知らぬ
六八おきなに逢ふ心ちすれ
七八あこそかのなりて遠方人に物まうす我その三宇山右今植そこに白く咲けるは何の花ぞも
八七君かざす三笠の山のもみぢ葉の色かみなつき時雨のあめに染めるなりけり

八八草木すら春にはなべて逢坂の關に色々あるをば人もしいはむことの難さよ
九八初瀨川ふる河のべに年をへて二本ある杉又もあひ見むおも變りせで

長歌

〇九吾妹子が　きる夏ごろも　白たへに　咲ける垣ねの
卯の花の　時になるらし　足びきの　山ほとゝぎす
里に出て　なく五月雨の　玉のをの　夜は短かくて
玉くしげ　明け易けれや　夢にだに　我が思ふ人を
あくまでも見ぬ

內に奉る

一九千早ぶる　かみな月とや　初しぐれ　曇りもあへず
けふよりは　もみぢと共に　ふる里の　よしの丶山の
やま颪も　寒く日ごとに　成ゆけば　玉の緒とけて
こき散し　あられ亂れて　霜こほり　彌かたきしく
庭の面に　村むら見ゆる　ふゆ草の　上にふりしく
白ゆきの　つもり〳〵て　あら玉の　年をおほくも
すぐしつるかな

躬恒集下

延喜十三年十月九日仰せによりて奉る女一宮の御裳着に奉らせ給ふ御さうぞくの裳のかたにをみつへて御覽くにくする料の歌

二九流出づる山をし思へば吉野河深き心のたえむ物かは

又

三九渡つみの神ぞ知らむ同くば蜃の刈藻を我にかさなむ

すざく院の女郎花合の歌

四九妻戀る鹿ぞなくなる女郎花己が住野の花には非ずや
をみなへしといふ五文字を句のかしらに据ゑて
九緒を貫て見由もがな長らへて經ぬやと秋の白露の玉
五九折つればみて秋の日は慰めつへて此花を知せずもがな

（始めて）（角田本他）

六九逢ぬ夜も逢夜もいをしまだ寢ねば夢の直路は馴やぬ
越へまかる人に送る
七九君が行道も旅路の都にはまだき歸るの山ぞありてふ
八九もみぢ葉や袂なるらむ神無月時雨る毎に色の增れる
比良の山
〇九斯てのみ我思ひ等の已まざらば身も徒に成ぬべら也
宇治山
一〇渡つ海の波うちやまば濱に出て拾ひもおかむ戀忘貝
比叡の山
二〇夏ならぬ草取返し植し田に稗のやまずも生ける哉
水無瀨河
三〇遠方に渡兼てぞ返りぬるみな瀨變りて淵になれゝば
佐比河
四〇昔より有の隨まに有らせぬは我すさびかは人の心を
五〇目に見えで心にしむは梅の花吹過て行風にざりける
六〇青柳のいと目も見えず春毎に花の錦を誰か織るらむ
七〇春霞立ながら夜を明しては雁と共にぞ鳴きて歸りし
八〇梅の花色は目なれて吹風に匂ひくる香ぞ常珍らなる
九〇春のたつけふ鶯の初聲を鳴きて誰にかまづ聞すらむ
一〇春立て日はへぬれども鶯の鳴く初聲は今日ぞ聞つる
一一老ぬれば頭は白く卯花を折てかざゝむ身も紛ふがに
二一夏草は繁く日毎に成ゆけばかれにし人は見えぬ我宿
三一年の經るぞ積れる雪に跡絕えて人通路もみえぬ我宿
四一年毎にとゞめ兼ては散花の先にも立たぬ悔をする哉
五一くる年の雪と降ずば櫻花ちるも最かく思はましやは
六一足柄の山ちは見ねど別れゆく心のみこそ行て通はめ
あづまへ行く人にやる

一櫻花散りなむ後は見も果てずさめぬる夢の心ち社すれ
八菅の根の長き日なれど櫻花ちる木の本は短かりけり
九春の日は暮やしぬらむ花を置て歸事こそ物憂りけれ
うまのけ つるぶち
〇二紫のいろの深きは水底に見えつる藤の花にざりける
いかるがにげ
一一とぞとも聞だに分す割無も人の怒るか逃やしなまし
ゆふかみ
一二戀すればやせ社すらめ物のをのゆふか短く思ほゆる哉
葦ぶち
一三遲き馬はあしぶちならであふれ共心のみ社先に立けれ
鹿毛ぶち
一四我なだに相やは待ぬさもつらき花か今日散るあすも日は有
青
一五木芽はる時になる迄苗代のあをだに未だ作らざり鳬
かす毛
一六七夕に我かすけふのから衣袂のみこそひぢて返らめ
月を見て
一七明る迄今宵の月をみてもあらでねで明すらむ人の心よ
一八歸る雁雲ゐ遙に聞くときは旅の空なる人をしぞ思ふ
一九女郎花色にもある哉夏蟲をもとに宿して誰を待らむ
女郎花の多かる野邊を見る時ぞ我老らくは悔しかりける
〇二〇女郎花多かる所にて
一二一秋の野に夜もや寢なむ女郎花花の名をのみ思懸つゝ
我を知り顔に人にいふなと云ひ侍りける女に
二二足引の山に生ひたる白樠のしらすや人を朽木也とも
月のおもしろきに
二三畫なれやみぞ紛ひぬる月影をけふや云はむ昨日とや云む
淡路のぞうの任はてゝ京に上りてその頃兼輔の
中納言の家にて
二四引て植し人は宜こそ老にけれ松の木高く成にける哉
もとよりのとくいに侍りければ兼輔の卿に奉る
なつきを貫之して傳へさすとて遣す
二五人につぐ便だになし大荒木の森の下なる草のみなれば
拾遺の（恋五）
閏三月あるつごもりの日
二六常よりも長閑かりつる春なれどけふのくるゝは飽すぞ有ける
これひらの朝臣のとひこたふ歌
二七さを鹿の柵ふする秋萩は下葉やうへになり返るらむ
題しらず
二八久方の天つ空なる月なれどいづれの水に影流るらむ
二九人のこゝろを（雜六）
しらに
三〇山深み人にも見えぬ鈴蟲は秋侘しらに今ぞなくなる
日ぐらし
三一松の音は秋の調べに聞ゆ也高くせめ上て風ぞ引らし
ゑをに
三二宵の間に我思つる秋の夜は明しを西に月のみゆらむ
ちゝこぐさ
三三花の色はちゝこ草にて見ゆめれど一も枝に有べきはなし
かりやす草
三四鶯の心にはあらで春をだに雁やすぐさず飛歸り行く
わかれの歌
三五片かけの船にやのれる白波も立は侘しく思ほゆる哉
雨ふる日人に贈る
三六衣手ぞ今朝は濡たる思寢の夢ぢにさへや雨は降らむ
雜歌
三七君見ては有ぬべしやと心見にたゝまくもうき唐錦哉
三八大空を眺ぞ暮す吹風の音はすれども目にし見えねば
三九孰らなる山にかあらむ雁音の音の仄に聞き果つる哉
〇四〇かみな月紅葉の時はやまとまで唐紅に見ゆるさほ山
四一思ふとも相も思はす思ふ時思ふ人をば思はざらなも

四二下紐の解けし計を頼みにて誰とも知らぬ戀もする哉
四三おふれ共駒もすさめぬ菖蒲草假にも人のこぬが侘しさ
四四荒玉の年の四年を怒に身を捨て難みわびつゝぞすむ
四五徒に老いぬべら也大荒木の杜の下なる草葉ならねど
四六嘆きのみ大江の山は近けれど今一坂を越ぞかねつる
四七故らに死なむとこそ難からめ生てかひなき物思ふ身は
四八今日暮て飛鳥の河の川千鳥今幾年か鳴きわたるらむ
世を恨みて山寺にまかる人に遣す
四九世を憂しと山に入る人山乍ら又うき時は孰ち行らむ
（秋）（恋歌四 伊本）
〇五〇秋立て早晩とのみ待しかど逢てぬるよは唯一夜のみ
五一露けくて我衣手は濡れぬとも折てを行かむ秋萩の花
五二久方の月をさやけみ紅葉の濃さも薄さもわきつべら也
五三打はへて安きいも寢す蕃秋のよな〳〵鳴つゝぞふる
九月九日
五四老は身の辛き物也けふはしも濡にもぬれむ菊の白露
山越
五五共にわれ歸る山路の紅葉の己がちり〴〵別るべら也
五六秋霧もはれぬ朝の大空を見るが如くも見えぬ君かな
五七秋の野に日暮しつるを女郎花夜やとまらむ花の名立に
五八荻葉のそよと告すば秋風を今日から吹と誰か知まし
五九秋萩の中に立出て混りなむ我をば人は花とやはみぬ
〇六〇元の色は孰れなるらむ白露の下に移ろふ我が宿の菊
六一神無月ちゝに移ろふ菊の花孰か元の色にはあるらむ
六二藤花散なむ後も影しあらば移ふ頃の有かひはあらむ
六三故らにみにこそきつれ櫻花道行ぶりと思はざらなむ
六四玉鉾の道行ぶりに山ざくら折るとや我を花の思はむ
六五月見つゝ折るすべもなき我宿に最ども來なく郭公哉
四月に山の雪を見て
六六白雪もまだ消はてぬ山里はいつ計りかは夏を知らむ
（夏）
六七月見つゝ待つと知すや郭公今宵外に鳴かば恨みむ
（雜歌）
六八年をへて思ひ〳〵て逢ぬれば月日のみ社嬉かりけれ
六九世と共に人を忘れぬ報にや今日は嬉しく逢見初らむ
〇七〇見つゝ我が慰めかねつ更科の姨捨山に照りし月かも
七一天の河船さし渡すさを鹿のしがらみふする秋萩の花
七二較べみむ我衣手と秋萩の花の色とはいづれまされり
七三新玉の年ふり積る山里にゆき離れぬる我身なりけり
七四常磐なる松をば澄て味氣なくあだなる山の櫻をや見む
七五惜め共留まらなくに山櫻雪とのみこそ降てやみぬれ
七六散ぬとも影をやとめむ藤花池の心のあるかひもなく
七七我が宿の池の藤波さきしより山郭公またぬ日ぞなき
七八時鳥なく五月雨の短夜は月影さへぞともしかりける
七九五月雨の黄昏どきの月影の朧げにやは我が人を待つ
〇八〇三吉野の山の心はけふや知いつかは雪の降ぬ日は有し
八一我宿の秋萩の花さく時ぞをのへの鹿も聲立てゝ鳴く
七月七日人に贈る
八二打はへて住むめる人は七夕の逢夜計は貸もせよかし
八三秋の野の花の色々とりそへて我衣手に移してしがな
八四立かへり又も見にこむ紅葉を落しなはてそ山川の澁
八五菊の花見つゝあやなく猶も有で人の心に移ふなゆめ
八六山高み珍らしげなく降雪の白くやならむ年積りなば
八七山の端はまだ遠けれど月影を惜む心ぞまづ先に立つ
八八久方の月人男ひとり住む宿にさしいれ人の名だてに
八九見程にいかにせよとか月影のまだ宵のまに高く成覽
〇九〇梅雨の月の仄に見ゆる夜は時鳥だにさやかにを鳴け
九一入ぬまにこむと云しかば今宵社わきぶて惜けれ夏のよの月
九二あたらしく照月影に郭公ふる聲しるく鳴き渡るかな
〇九三花とのみ雪の見ゆるは冬なれど心の中の春にや有覽
〇九四年深く降積む雪を見る時ぞ越の白嶺はすむ心ちする
〇九五降る雪と且知乍ら匂はねど半ば過ては花とこそみれ

六枝の上に雪を置き乍ら較ぶ共誰かは梅に非ずとは云む
七雪の上に思心はいち著く難面き人のめにもみえなむ
八よそにのみ見てや已なむ山櫻花の心のよの交らひに
九青柳の縹の糸をより合せてたえずもなくか鶯のこゑ
　え喜の御時に壬生忠岑が公の御使にてものへ罷
　るに大井河のもとに罷りあひて物など云ひかく
　るに忠岑が急ぎ罷りければ詠み侍る
一留むれど留め兼ねつも大井河井堰を越て行水のごと
　忍びて御琴ひかせ給ふと聞きて
一秋風の吹くも知ずば白雲の天つ調べを爭で聞かまし
　七月八日の夜人にあひて別るとて
二七夕の飽ぬ別のけさよりも夜さへ明さぬ我は優れり
三行廻り今こむ秋を戀添へて今宵計りは逢やしなまし
　火桶に向ふ
四夢にだに見ば社あらめ埋火の起ゐてのみぞ明し果つる
　火箸を
五冬過ば投置れなむ物故に君が手にはた馴るべら也
　朱雀院なりける鶴の死にたるを見て
六蘆鶴のよさへ儚く成にけり今日や千年の限なるらむ
　別を惜む
七君を思ふ心は人に小搖ぎの磯の玉藻も今やからまし
　さほかけ
八眺とも思ほえなくに覺束ないさ外げにて一目みしかは
　くれのおも
九いつしかと待夕暮の俤に見えつゝみえぬとの侘しさ
一〇下立て植ずはあり共小山田の秋の假にはあはむとぞ思ふ
　人の家のほとりの山の井
一一過がてに人は止れど山の井の便と思へば淺くぞ有ける
　十月紅葉瀧に落つ
一二紅葉の落來る瀧は懸てのみたゝぬ錦をほすかとぞ見る
一三風に散るもみぢの色〻神無月唐紅のしぐれこそ降れ
一四梅雨の夜は暗くとも時鳥さやかにだにも鳴てこぬ哉
一五時鳥一聲鳴きていぬる夜は爭でか人のいを安く寢む
一六思ひをば松の緑に染めしかど花のがりのみ行く心哉
一七秋風の吹ぬと聞けば出てこし家路のみ社戀しかりけれ
　延喜十七年二十一日（醍醐寺御本紙）仰せによりて奉る御屏
　風の歌、雪の内の杉の樹
一八雪の内にみゆる常磐は三輪の山山の印の杉にぞ有ける
　同じ年伊勢の齋宮の御料に國々の名ある所々を
　書かせ給へる御屏風の歌召しありしかば鈴鹿山
　奉りし
一九音にきく伊勢の鈴鹿の山河の早くより我が戀渡る哉
　まとかた
二〇梓弓いるまとかたに滿つ潮の晝逢難み夜をこそまて
　網代の濱
二一潮みてば入江の水もふかやめの網代の濱による沖つ波
　うはせ河
二二うはせ河下の心も知らなくに深くも人の思ほゆる哉
　はり河
二三唐衣ぬふはり河の青柳の糸よりかくる春はみにこむ
　竹河
二四もみぢ葉の流るゝ時は竹河の淵の緑も色かはりけり
　わたらひ
二五玉櫛笥二見の浦にすむ蜃の渡らひ草はみるめ也けり
　みつ
二六殊更に我は見つらむこ笹原さして問べき人はなく共
　うきしま
二七いざや將身の浮島に泊りなむ沈つゝのみよをふればうし
　ながはま
二八ながら濱にゐて潮垂るゝ時鳥五月計りは螢にざりける
　野にのぞみて
二九女郎花いかに思はむ秋の野に一夜ぞねにし花の名立に

　同じ年九月二十日近江の守のおこせたる文に云
　へるやう（醍醐寺本紙三字）あしたに法皇石山に詣でさせ給ふ
　べし今日のうちに來れ屏風さうじに所々にたが
　ひたるを夜のうちに書くべしその題も身づから
　書くべきなりとあり俄なることなれど驚きて罷
　れるみかど一夜はとまらせ給ひて其の日御舟に
　て歸らせ給ふとまらせ給へる所に御さうけのこ
　とどもあり即ち歌を奉る
三〇和泉にて沈果てぬと思しを今日ぞ近江に浮ぶべらなる
　その御屏風の歌所々の題の趣に隨へり
三一足引の山邊の道はいかなれやゆくと見れ共過がてにする
三二我よりも先に生ぬる松なれば千年の後に逢ざらめやは
三三蜑の乘る棚無小舟跡もなく思ひし人に逢ちりみつる哉
三四藻鹽やく蜑のたく火の烟こそ思はぬ方に立昇るらし
三五山里に年はふれ共瀧つ瀬の早く我見し人だにもこず
三六下にのみもえ渡れ共打はへて我思をば消つ人もなし
三七紅葉散秋ならね共さを鹿は山のね高く今もなかなむ
三八紫の色しこければ藤の花松のみどりも移ろひにけり
三九歸る雁くもぢの旅にふる時は何をか草の枕とはせむ
　雜の歌これも題の趣による
四〇更科の山より外にてる月も慰めかねつこのごろの空
四一霧の内の深山隠れの紅葉は日の光にぞ色は見えける
　雪の内に懐を述ぶといふ題左近の中將に代りて
四二外にもや雪は降らむ今迄に春こぬ宿は花とだにみむ
　延喜十八年八月十三日左大臣の家に八講するに
　佛法僧といふ鳥の鳴きければ詠みて奉る長歌
四三足びきの　み山にすらも　此の鳥は　谷にやはなく
　いなければ　繁きはやしも　多かるを　高きこずゑも
　許名有ど　羽うちはぶき　飛過きて　春なつふゆの
　時も有を　君があきしも　紅葉ばの　唐くれなゐに
　振出でゝ　鳴く音を里に　聞かせそめつる
四四山に住み稀に聞ゆる鳥なれど里にも君が秋より來なく
四五其日とも君は告しもせじ物を爭でか鳥の兼て知けむ
　殿の御返し左衛門ぞう源のなかたゝを御使にて
四六法を思ふ心し深く入ぬれば里にも鳥の見ゆるなる覽
　師走のつごもりのよる（原）の鬼を
四七鬼すらも都の内ど裝束をぬぎてや今宵人に見ゆらむ
　同じ年九月二十四日殿上人紅葉見にいきけるに
　左近の少將二人に代りて
四八いつしかと待つ驗なし紅葉の己が散々成やしなまし
四九宮人の數は知りにき女郎花孰こと問はゞ如何答へむ
　山を尋ぬる道にそうの家ありもみぢ葉ちりしき
　たりせざいに尾花風に靡きて人の招くに似たり
　少將馬よりおりてよむ
五〇人知れぬ宿にな植そ花薄招けば止る我にやはあらぬ
　そうに代りて返し
五一今よりは植こそ增さめ花薄穗に出る秋と人とまり鳧
　菊の花さきたる所によるとまりて人々見る
五二菊の花秋の野乍ら移ろはゞ夜深き色を今宵見ましや
　同じ年の十月に菊の花の宴御息所たちの志給ふ
　に女郎花のもとに菊の花あり水のほとりに影映
　りたり
五三菊の花惜む心は水底の影さへいろの深くもあるかな
　同じ月の十九日乳母の命婦紅葉見に出でたりけ
　るを歸るとて紅葉一枝折りて奉るこの歌をそへ
　たり
五四今日の色のさし出て照す船岡の紅葉は最ど赤くぞ有ける
五五　野にいでたりける人のいりに遲く歸れば
五六語るをも聞ま欲きに秋の野の花見にいにし人のこゑ覽
　人のむすめの裳きたる時に
五七此の春ぞ枝さしそむる行末は千年をかねて思ふ姫松
　七日あしたに人に贈る

七六君に逢で一日二日に成ぬればけさ彦星の心ち社すれ
返し　貫之
八六逢見すて一日も君に習はねば織女よりも我ぞ優れる
同じ年の二月遠江守のせんに左近の少將に代りて
九六別るとも君を知らねば朝迄は散花をのみ惜みける哉
桂、櫻、藤の花尚亂れあひたり
七○桂より香を移しつゝ櫻花なほ後ろにも藤ぞ咲きける
暮の春ひんがし國へ行く人に別惜みて贈る
七一春雨に君をやりては逢坂の關の名だてに戀や渡らむ
七二春暮れてさびしき宿は徒然と庭白妙に花ぞ散りける
七三人目をも今は包まじ春霞野にも山にも名は立たじたて
七四千草にも霜にも映る菊の花一つ色にぞ月はそめける
七五色毎にみつ菊の花よると云て覺束なくも照す月かな
七六一本の菊にはあれ共露霜ぞ分てこと〳〵色は染らし
七七今までに逢坂山の紅葉の散ぬは關やさへてとめける
七八菊の花折て夜更ぬ白露もわかで乍らも置やしつらむ
七九白妙の妹が袖しも秋の野にほに出でゝ招く花薄かな
八○さやかにも照れる月哉菊の花晝みる如ぞ夜もみ久ける
八一秋の野に花見にくれば白露にしとゞにもわが濡にける哉
八二いかにして今日を留めむ惜と思ふ花のみ散て日は暮に見
八三春霞立出て野べにこしか共老て若菜は摘み心ち無し
八四櫻花長閑にを見む吹風を先に立てゝも春は行かなむ
八五春くれば吹く風にさへ櫻花庭もはだらに雪は降つゝ
八六梅枝に雪の降れゝば孰をか花とはわきて折て翫さむ
宮のうちにて郭公を聞きて
八七久方の空近ければ郭公くもゐの聲のとほからぬかな
八八鶯の鳴く聞しかば梅花さけりと見るは雪にぞ有ける
八九年毎になけど驗もなきものを暮れゆく春を何呼子鳥
九○濁江におふる玉藻の水隱れて我戀らくを知人ぞなき
九一大井河せきて柵かけてのみおもふ心は留めかねつも
九二ども斯も今日こそ聞かめ後はいかに明日共しらぬ命の
懷を述ぶ
九三身をわぶる涙は今も和泉なる高師の浦に滿つる潮也
九四梅花唯にやは見る春雨にぬれ〳〵ぞ尚折やしてまし
九五波立たば沖の玉藻もより〳〵べく思方より風も吹かなむ
九六蘆鶴はけふ霜ふれる色なれば鳴く聲さへは寒き也鳧
因幡の守の下るに
九七一日だに見ねば戀き君がいなば年の四年を爭で過さむ
九八時鳥夜深き聲は月まつと起ていをねぬ人ぞ聞きける
左馬頭の家にて三河守の馬のはなぶけせしに詠
める
九九名にし負へば遠からぬ共宮ぢ山越む手向の幣にせよ君
くすり贈るとて
（欠缺）

素性法師集

木に雪の降りかゝるを見て
○○春たてば花とやみらむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく
梅の花を折りて人のがりやるとて
一○よそにのみ哀とぞ見し梅花あかぬ色かは折て也けり
二○散とみて有べき物を梅の花うたて匂の袖にとまれる
三○梅の花折ればこぼれぬ我袖に匂は移れ家づとにせむ
山の櫻を見て
四○見てのみや人に語らむ櫻花手毎に折て家づとにせむ
五○見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春の錦なりける
六○待てと云に散らでし止る物ならば何を櫻に思增まし
寛平の御時后宮の歌合に

七○花散らす風の宿りは誰かしる我に教へよ行て恨みむ
八○櫻花ちぐさながらにあだなれど誰かは春を恨果たる
九○花の木も今はほり植じ春立てば移ふ色に人習ひけり
朱雀院の御時北山にまかりて
一○いざけふは春の山べに交りなむ暮なばなげの花の蔭かは
春の歌よみてと人のいふに
一一いつ迄か野べに心のあくがれむ花し散すば千代もへぬべし
二一音にのみ菊の白露よるは起て晝は思に堪すけぬべし
三一秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ頼む暮る夜とに
四一儚くて夢にも人を見つるよは朝の床ぞおきうかりける
五一今こむといひし計に長月の有明の月を待ち出つる哉
六一秋風に山の木葉も色づけば人の心もうたがはれけり
七一底ひなき淵やは騷ぐ山河の淺き瀬にこそ上波はたて
八一便なく無名は沖に漕出なむ寄べ袂に見るかひもなし
九一思ふ共枯なむ人を如何せむ徒す散ぬる花とこそ見め
寛平の御時に屏風の歌かゝせ給ひしによみて奉
りし
○二忘れ草何をかたねと思ひしにつれなき人の心也けり
三月に田うつを
一二山田すき春の種をば蒔しかど秋立身には成じとぞ思ふ
二二逢事のかたの涙に袖朽ぬ蜑のたく火は胸に燃ゆれど
三二植て見る松と竹とに君が代の千年行かふ色も變らず
四二別なば後忍べとぞ空蟬のよを逢難みせめていはまし
五二敷妙の枕にだにもふさばこそ夢の魂しひ下に通はめ
山吹のきぬ多くきて又きたりし人に
六二山吹の花色衣ぬしやたれ問へど答へず口なしにして
朱雀院の御ともに仕うまつりて手向の山にて
七二手向にはつゞりの袖も着べきを紅葉にあける神や返さむ
八二紅くにか世をば盡さむ心社野にも山にも惑べらなれ
九二吹風に誘へ附くる物ならば此一枝はよきよと云まし
泉右大將の四十賀の屏風に
○三春日野に若菜摘つゝ萬代をいのる心は神ぞ知るらむ
延喜の御時月なみの屏風に
一三荒玉の年立ち歸るあしたより待たるゝものは鶯の聲
二三我のみやあはれと思はむ蜚鳴く夕かげのやまと撫子
七月七日ひぐらしを
三三今宵こむ人には逢じ七夕の久しき事に肖えも社すれ
鶯の鳴きし日
四三木傳へば己が羽風に散花を誰におほせてこゝら鳴らむ
仁和寺の中將の御息所の家に歌合せむとせし時
に花のさかりに
五三惜しと思ふ心は絲によられなむ散花毎に貫て留めむ
六三思ふどち春の山べに打群てそこも知ぬ旅ねしてしが
杜鵑初めて鳴くをきゝて
七三子規鳴聲聞けば味氣なくぬし定まらぬ戀せらるはた
ならの石上のかたにて子規鳴きしを聞きて
八三石上ふるき都のほとゝぎす聲ばかりこそ昔なりけれ
九三主知ぬ香こそ匂へれ秋の野に誰がぬきかけし闌ぞも
○四鏡山山掻曇りしぐるれど紅葉あかくぞ秋は見えける
延喜の御時に御馬遣はして只今石山に參るべき
よし仰せごとあるに參りて
一四望月の駒よりおそく出つれば迚る〳〵ぞ山は越つる
二四逢事の形見をだにもえてしがな人は絶ゆ共見つゝ忍ばむ
三四いざ櫻我も散なむ一盛りありなば人に憂目見えなむ
もとやすの親王五十賀し侍りける後ろの屏風に
四四古にありきあらずば知らねども千年の例君に初めむ
法皇寺めぐりし給ふ御伴にて
五四臥て思ひ起きて數ふる萬代を神ぞしるらむ我君の爲
かへでの枝を折りて
六四此御幸千歳かへてもあらせなむ斯る山臥時に逢べく
前齋院の后御ぐしおろして行はせ給ひける時か
の院の中島の松をけづりて書きつけ侍りける

七四音にきく松が浦にけふぞみるうべ心ある蜑は住けり
相坂にて庵しちにて住み侍りける時に道行く人をみて
八四是や此行くも歸るも別れつゝ知も知らぬも逢坂の關
二條の后の御息所と聞えさせ給ひける時の御屏風の繪に立田河の紅葉ながれたるかた書きたるに
九四紅葉ばの流れてとまる湊には紅ふかき波や立つらむ
泉大將四十賀し給ひしに屏風の歌人々よみしに
〇五夕暮は匂ふ草木の無ればや散と見えにし紅葉止れる
花山にて人々酒たうべるに
一五山守はいはゝいはなむ高砂の尾上の櫻折てかざゝむ
二五打頼む人の心のつらければ野にも山にもいざ隱なむ
三五つらしとてもろはの山に隱なば我れ山彦に泣て恨みむ
四五尋れば杉の野越て三輪山の末々まつぞ生添はりける
五五松山の水は數とも思はえず戀しき君にしき波ぞ立つ
六五音にのみならしの岡のさね蔓人知ず社くらまほしけれ
七五君が爲我やはつらき唐衣かけてないひそいひ難きと
八五浦に燒藻に住つゝぞ燃渡る蜑のすさびに刈れるみるめは
九五錨おろす舟の綱手は遲くとも命の限たえじとぞ思ふ
〇六獨ねはいかなる人か戀はする見附てけるも煙もぞたつ
一六何しかも袖のぬれけむ白波の名殘有ても見えぬ心を
二六徒らに立歸りにし白波のなごりの袖のひる時ぞなき
三六いづ方によるとか知らむ青柳のいと定なき人の心を
四六山吹の花の盛りは過にしをかへすゞ〳〵も鳴く蛙かな
五六思ふどち折て暮さむ岩躑躅いはぬ事をし云盡すとも
六六春だにも有し心を夏衣いかにうすさのけふ增るらむ
七六惜めどもとまらぬ春も有物をいはぬにきたる夏衣哉
八六昨日より變れる事もなけれ共けふよりや待秋の夕暮
九六いかほのやいかほの沼のいかにして戀き人を今一めみむ
〇七覺束なたれ島山と思ふにも鴛のひじきも變らざり鳧
一七見ぬ人を心一つに尋ればまだ知ずこそ戀しかりけれ
二七思ひやり心に叶ふ物ならば一日に千度君を見てまし
三七岩の上に苔の衣は後ろめた戀の涙はもらすもあらなむ
四七逢みてば死せぬ身とぞ成ぬべき賴むるにだに延る命を
五七君により我身ぞつらき玉垂のみすはつらしと思ましやは
六七梅枝の移る計に非ず共よそにもをりてよを明さばや
七七戀しきを思ひ亂るゝ世中にふかき夢路を現ともがな
八七稀なればゆゝしと思し七夕にけふは劣れる身を如何せむ
九七戀しさの慰む宵の明ざらば暫しも物は思はざらまし
〇八近江のや深まの稻を刈つめて君が千年の有數にせむ
一八波間より大倉山に積む稻の積むとも盡じ君が千年は
法皇宮の瀧御覽じにおはしましゝに御ともにさぶらひて瀧を題にて仰言にて
二八秋山に惑ふ心を山河の瀧のしら泡にけちやはてゝむ
良岑のつねより四十賀し侍りけるに遣しける
三八萬代を松にぞ君を祝つる千年の影に住まむと思へば
北山に松だけとりにまかりたりけるに
四八紅葉は袖にこき入てもて出なむ秋は限と見む人の爲
仙人の栖に菊わけて入りたる所繪に書きたるに
五八濡てほす山路の菊の露のまに爭でか我はちよを經ぬ覽
立田山こえ侍りしに時雨ふりしに
六八雨ふらば紅葉の影に隱れつゝ立田の山に隱れ果なむ
ふぢ井のためもと物より歸るに
七八雲と見て日を惑はすは流出て瀧の門より消る水かも
八八山をのみ哀れ〳〵と見てくれば鳴く蜩の聲ぞ悲しき
島の鴨八咫烏を題にて歌奉れと仰せらるればやたがらすを句のかみに据ゑしまのかもを句のしもにすゑて題の心を
九八山闇し旅の雲の間雁音のらうたにもあるか栖變るも
天暦の御狩せさせ給ひて河內の國に行すゑ
せ給ふにまかり歸りなむと申しゝを惜ませ給ひて素性があざなをよしよりとつけさせ給ふに
〇九旅に出てをし言の葉に云しかどよしより思へ心碎けぬ
五月人々あれどとまらず
一九雨よりも袂なき身と成ぬべし堪ぬ涙に朽ぬべければ
御屏風にゆきくだる所
二九白雪と身はふりぬ共新しき春に逢こそ嬉しかりけれ
三九春とのみ風はこしかど儚くて老ぞしにける岸の姫松
四九秋風の吹上の濱の白菊は波のよするか花の咲けるか
水尾の御門のかくれ給へるを白河にかへさの被へし侍りしに
五九人すまず荒たる宿をきてみれば今ぞ木葉は錦也ける
又こき紅葉を見るに折しも時雨のすれば
六九神無月時雨にそひて古郷は紅葉の色もこさ增りけり
人々物語して世のはかなきことをいひて
七九皆人の昔語りに成行くに布留の社の身をいかにせむ
山寺に籠りて哀なることを云ひてよるとまりて
うち泣きなどし侍る程に雨降りければ
八九孰をか雨ともわかむ山伏の落つる涙も夜はに社ふれ

以二院御本行幸御記一書寫之

建長三年七月　日

猿丸大夫集

相知りて侍る人の物よりきてすげに文をさして
これはいかゝ見ると云ひたるに詠みてやる
九白菅の眞野の萩原往さ來さ君社みらめ眞野の萩原
〇〇唐人の衣そむてふ紫のこゝろにしみて思ほゆるかな
あだなる人のさすがに賴めばつれなくのみあれば恨みて詠める
一〇皆人はことのみぞよき月草のうつし心は相も思はず
物思ひける折に郭公の鳴くを聞きて
二〇郭公鳴らむ里は行てしかしか鳴く聲を聞かば苦しも
相知りたる女の家の前を渡るとて草を結びて入る丶
三〇妹がりと行過がてに草結ぶ風吹解くな逢はむ日迄に
名立ちける女に
四〇乏長鳥猪名山ゆすり行水の名のみ流れて戀渡るかも
五〇乏長鳥猪名のふし原青山にならむ時にを色は變らむ
春の夜の月をまつに山に隱れて心もとなきを詠める
六〇椋橋の山をたかみかよごもりに出つる月の光乏しき
家に女郎花植ゑて詠める
七〇女郎花秋萩手折れ玉鉾の道行きづと丶乞はむ子が爲
女の許に
八〇玉櫛笥明まく惜しき可惜夜を妹にも逢ず明しつる哉
思ひかけたる人の許に
九〇梓弓末のたづきも知らねども心は君によりにける哉
〇一旭影匂へる山に照る月のいとみぬ君ををやよしにして知
語らひける人の遠く行きたりけるがもとに
一一郭公戀ひわびにけりまず鏡面影さらに今は見えこず
二一梓弓ひきつのべなる莫告藻の花咲迄に妹に逢ぬかも
三一相見ねば戀こそ勝れ水無瀨川何に深めて思初めけむ
相知れる人のさすがにわざとならで年頃になりにけるに詠める
四一一昨年も去年も今年もはふ葛の下ゆたびつゝ有渡る頃
五一玉襷掛ねば苦しかけたればすぎて見まくの欲き君哉
六一出て行む人を留めむ方もなし隣の方に花もひぬかも
七一夕月夜さすや岡邊の松の葉のいつ共分ぬ戀もする哉

一八風を痛み寄せ來る波に漁する蜑少女子が裳裾濡しつ
　山里にまかりけるに櫻の咲きたるを見て詠める
一九山高み人もすさめぬ櫻花痛くなわびそ我見はやさむ
二〇石走る瀧なくもがな櫻花手折りてもこむ見ぬ人の爲
二一折取らば惜げにも有を櫻花いざ宿借て散る迄は見む
　雨の降りけるに山吹を折りて人のがり遣りける
二二春雨に匂へる色もあかなくに香さへ懐し山吹のはな
二三時鳥ながなく里の許多あれば猶疎まれぬ思ふ物から
　秋の初めつかた物思ひ居りて詠める
二四大方の秋くるからに我身こそ侘しき物と思知りぬれ
二五秋萩のいろづきぬれば蕃我が身のごとや物は悲しき
　女の許に
二六萩の花散る寛小野の露霜に濡てを行かむさよは更く共
二七秋はきぬ紅葉は宿に降敷きぬ道踏わけて訪人もなし
　山吹の花を見て
二八色も香も咲きにほふらむ橘の小島がさきの山吹の花
　四月つごもりに郭公まつ
二九五月待つ山郭公うちはぶき今も鳴かなむこぞの古聲
　忍びたる女に秋の頃ほひ
三〇ほにも出ぬ山田をもると唐衣稻葉の露に濡ぬ日は無し
三一夕月夜あかつき山の朝影に我身はなりぬ戀の繁さに
三二迚のおほ山守は誰爲に今もしめゆふ君も有らなくに
三三誰か御禊ゆふつけ鳥か唐衣立田の山に打羽ぶきなく
　文やりける女のつれなかりけるにやる
三四荒小田をあら鋤返し返しても見て社やまめ人の心を
三五遠近のたづきも知ぬ山中におぼつかなくも喚子鳥哉

家持集

　早春
三六月よめば未だ冬なりしかすがに霞霧く春はきぬとか
三七古の人の植ゑけむ杉の葉に霞たなびく春ぞきぬらし
三八春霞立つ春日野の行き歸り我は遊ばむいや年のはに
三九うち靡き春はきぬらし我が宿は柳のうれに鶯鳴きつ
四〇寒さすぎ春はきぬらし年月は改まれども人は舊行く
四一梅の花咲たる宿にふくめるは戀や籠れる雪を待かも
四二我脊子に見せむと思し梅の花其とも見えず雪のふれゝば
四三殘りたる雪に交れる梅の花早くな散そ雪はけぬとも
四四我岡に盛に咲ける梅の花殘れる雪に亂れつゝ殘るかも
四五泡雪の日をへて消ず斯降れば梅の初花散りか過なむ
四六雪の色をうばひて咲ける梅の花今盛也見む人もがな
四七春の野に鳴くや鶯なつけむと我家の園に梅の花さく
四八春くればまづ咲く宿の梅の花獨見つゝや春を暮さむ
四九妹が爲ほつえの梅を手折とて下枝の露に濡にけるかも
五〇我宿に咲たる梅を月きよみ夜々見せむ君をこそまて
五一久方の月夜をきよみ梅の花心ひらけてむかし思ふ君
五二きて見べき人も有なくに我宿の梅の初花散りぬ共よし
五三我がかざす柳の絲を吹亂る風にや妹が梅の散るらむ
五四打なびく春かと我は今日ぞ知る我黑髮に梅の花ちる
五五春がすみ立ちし時より鶯の初聲するは春べにやなる
五六淺綠染めかけたりと見る迄に春の柳は萠えにける哉
五七朝な〳〵我見る梅に鶯のきゐて鳴べく繁くはやなれ
五八百敷の大宮人の鬘するしだり柳は見れど飽かぬかも
五九青柳の絲より懸て春風の亂れぬ先に見む人もがな
六〇けふ更に君はな行そ春雨の心を人の知らざらなくに
六一春雨にあらそひかねて我宿の櫻の花は咲初めにけり
六二見わたせば春日の野べに霞立ち咲みだれたる櫻花哉

六三春雨のしきり〳〵降るに高圓の山の櫻はいかゞ有らむ
六四足引の山のまてらす櫻花この春雨に咲きにけらしも
六五春の家の紅にほふ桃の花はなの名立に出で居たる妹
　ある本に
六六春のその紅にほふ桃の花したたる道に出で立てる妹
六七山もせに咲る躑躅の惜からぬ君をいつしか行てはやみむ
六八我せこに我戀ふらくは奥山の躑躅の今日は盛也けり
六九春山は散過れども三輪山は未だつぼめる君待がてに
七〇つばな抜く淺茅が原のつぼ菫今盛にもしげき我が戀
七一山吹の花取持ちてつれもなく枯にし妹を思出るかも
七二山吹を宿に植つゝ見る時に思はやまず戀こそまされ
七三藤波の花の盛にかくこそは打めくりつゝ年に忍ばめ
七四藤波の花咲く見れば郭公鳴くべき折は近づきにけり
七五藤波の花の盛になりにけり奈良の都を思ひ出づや君
七六梅花春より先に咲しかど見る日は稀に雪の降れゝば
七七來て見べき人もあらじを我宿の梅の初花折盡してむ
七八梅の花散りにし日より敷妙の枕も我は定めかねつも
七九しろ髮にさし惑はせる花の色を其なむ梅と人はわかなむ
八〇春風の吹くに先だつ梅の花君が爲にぞこき留めつる
八一風まぜに雪は降さもみに做す我いへの梅を花に散すな
八二雪寒み咲も開けぬ梅の花よし此頃はしかもあるがに
八三我宿の前の青柳風ふけば纖る人なしにぬきみだる糸
八四青柳の絲にあやしき散花を貫て留むる物とは無しに
八五折てしももて行き顏に櫻花咲ける山邊をわたる白雲
八六手もやまず手折置てむ櫻花散なむ後にあかぬ悔せじ
八七行かむ人こむ人しのべ春がすみ立田の山の初櫻ばな
八八故郷に花は散つゝ三吉野の山の櫻はまだ咲かずけり
八九櫻花木高き枝の空にのみ見つゝや戀む折る術もなみ
九〇春の雨に匂へる色も飽なくに香さへ懐かし山吹の花
九一君が爲山田の澤にゑぐつむと雪げの水に裳裾濡しつ

　夏歌
九二春雨はふりやみぬなり郭公立田の山に今や鳴くらむ
九三郭公待てども鳴ず菖蒲草玉にぬく日のまだ遠みかも
九四五月雨は空もとゞろに郭公夜深く鳴ついや寝兼つる
九五誰をかは戀の山べの郭公くさの枕にたび〳〵は鳴く
九六時鳥都へ行かば立ち歸り今きぬべしと妹につげよよ
九七時鳥山路に高く鳴く聲を我が獨寝に聞くがかひなさ
九八東雲の東になれば郭公我待つかひはなかりけりやは
九九賀茂川の水底見えて照る月を行て見むとや夏祓する
一〇〇卯の花の匂ふさ月の月清みいねず聞けとや鳴く郭公
一〇一卯花もまだ咲なくに郭公佐保の山べを來鳴き聽める
一〇二わぎも子がきる夏衣白妙に咲ける垣根の卯花やとき
一〇三郭公待つに夜更ぬこの暮の雫をおほみ道やよくらむ
一〇四夏山の梢をたかみ郭公鳴きてとよむる聲のはるけさ
一〇五郭公一聲鳴ていぬる夜はいかでかは人い安くぬる
一〇六夏衣うたしめやまの郭公今はきとよめ立ち歸りなけ
一〇七美くしと見るたびごとに撫子の花の盛は懐かしな君
一〇八郭公思はずありき此暮のかくなる迄になどかき鳴ぬ
一〇九神南備の磐瀨の森の郭公ならしの岡にいつか來鳴む
一一〇春日野の藤散はて丶何をかも御狩の人の折て驕さむ
一一一卯花の散らまく惜み郭公野にも山にも鳴とよむかも
一一二郭公鳴きとよむなる橘のはな散る里をみむ人もがな
一一三此暮は夕闇なるを郭公いづくをいつと鳴き渡るらむ
一一四獨ゐて物思ふときに郭公こゝを鳴き行く心あるらし
一一五信濃なる須賀のあら野に郭公鳴聲聞けば時過にけり
一一六君戀ふといも寝られぬに郭公青山べより鳴渡るなり
一一七我宿の花たちばなに時鳥夜深く鳴けば戀まさるなり

　秋歌
一一八神なびの三室の山の葛かづら裏吹返す秋はきにけり
一一九君故に我戀ひをれば我宿のすだれ動かし秋風ぞ吹く
一二〇我妹子は衣にあらなむ秋風の寒き此頃下に着ましを
一二一秋風の寒き朝に笹のをか戀ふらむ君に衣着せよかし

二一秋萩の咲出る野邊の夕露に濡つゝきませ夜は更ぬ共
二二秋萩の下葉たわゝに置露の今朝は明ぬと急ぎ出めや
二三玉に貫け消すば消ず秋萩のうれも撓わに置ける白露
二四妹が家の門田を見むと打出て衣白くて照れる月かも
二五秋風の吹にし日より天の河瀬に出立て待つと告こせ
二六秋風の清きゆふべに天のがは舟こぎ渡せつきひと男
二七天の川波は立つとも我舟は急ぎ出なむ夜のふけぬ時
二八しる〳〵も逢見ぬ君は天川舟出はやせよ夜の更ぬ時
二九彦星の妻むかへ舟漕ぎくらし天の川瀬に霧立ち渡る
三〇此夕降くる雨は天の川とく漕ぐ舟のかひのしづくか
三一天の川白波高く我戀ふる君が舟出は今日ぞすらしも
三二天のかは霧たちわたり七夕の雲の衣のなびく袖かも
三三銀河渡る瀬深み舟うけて漕ぎくる君がかむ音聞けば
三四君が舟今こそ渡れ銀河きり立ちわたるこの河の瀬に
三五秋風に山飛び越る雁がねの聲遠ざかり雲がくれつゝ
三六此頃は朝げに聞けば足引の山を轟ましさを鹿ぞ鳴く
三七手に折ば袖さへ匂ふ女郎花其白露も散らまくをしも
三八殊更に衣はすらじ女郎花さが野の花に匂ひてを見む
三九秋萩の咲たる野べのさを鹿は散らまく惜み鳴と云物を
四〇我宿の萩の花咲り見にきませ今二日三日有ば散なむ
四一眞葛原靡く秋風吹くからにあだの大野の萩の花散る
四二秋の野の尾花が末の打なびき心は妹によりにし物を
四三秋さればおく白露に我宿の淺茅がうれは色附にけり
四四物思ふと隙のみゐてきて見れば春日の山は色附に鬼
四五雁音の鳴にしよりぞ春日なる三笠の山は色附にけり
四六雁音を聞つるなべに高圓の野べの草葉ぞ色附にける
四七秋萩の移ろふをしと鳴鹿の聲きく山は紅葉しにけり
四八むば玉の夜の夢には見ゆ寛や袖干間なく我し戀れば
四九晞く鹿の聲打ふれば時は今は秋の半になりぬべら也
五〇此夕秋風吹きぬ白露にあまぬく花はあすも咲かなむ
五一春くれば霞に罩てみせざりし萩咲に鬼折て挿頭さむ
五二我宿に咲ける秋萩つねならば我待人に見せまし物を
五三鶉鳴くふりにし里の秋萩を思ふ人どち逢見つるかな
五四妹がひもとくと結ぶと龍田山今ぞ紅葉の錦おりける
五五飛鳥河紅葉ば流る葛城の山の木の葉は今か散るらむ
五六秋山に霜ふりおほひ木葉散る共に行とも我忘れめや
五七紅葉を散す時雨の降なべに夜さへぞ寒き獨しぬれば
五八雲隱れ鳴なる雁の行て見む秋の田のほも繁くし思ほゆ
五九秋の田の假いほ作り我をれば衣手寒く露ぞおきける
六〇長月の時雨の雨にそぼちつゝ春日の山は色附にけり
六一白露を玉にぬきもて長月の有明の月は見れと飽ぬかも
六二一年に二度行かぬ秋山に心にはあらず暮しつるかな
六三時は今秋ぞと思へば衣手に吹くる風のしるくも有哉
六四秋始めしるかはいつと知ぬを月影の窓に入ても思ほゆる哉

冬歌

六五神無月時雨に逢へる紅葉の吹かば散りなむ風の隨に
六六紅葉は過まく惜しみ思へ共爭ふ今宵明ずもあらなむ
六七夕されば衣手寒し三吉野の高間の山にみ雪降るらし
六八まきもくの檜原も未だ曇ねば小松が原に淡雪ぞ降る
六九冬されば衣手寒し高圓の山の木ごとに雪ぞ降るらし
七〇いたくしも降らぬ雪故久方の天より空は曇合ひつゝ
七一泡雪の日毎〳〵に降敷けば奈良の都のおもほゆる哉
七二我せこを今や〳〵と出見れば泡雪降れり庭もほどろに
七三妹家路我惑はしつ久方の天ぎる雪のなべてふれゝば
七四妹が家路我忘れめや足引の山かき曇り雪は降るとも
七五筑波嶺のよそにのみして有兼て雪げの水に泥みつる哉
七六足引の山に白きは我が宿に昨日の暮に降りし雪かも
七七松蔭の淺茅が上の白露を消さず玉にぬく物にもが
七八高間山岩根におふるすがの根も心々に降りおく白雪
七九白雪の降置山を越るにも君を社せないきのをに思へ
八〇奥山の槇の木葉に降雪の降りは増す共土に落ちめや
八一打羽ぶき鳥は鳴けども斯許り降白雪に君いまさめや

八二大宮の内にもとにも珍しく降れる白雪踏まく惜しも
八三さ夜更て見つゝや行む松浦なるさよ姫の子がひれふりの山
八四橘は實さへ花さへ其葉さへ枝に霜降れど彌常葉の樹
八五今日降れる雪にいそひて我宿の古木の梅は花咲に鬼
八六我が宿の古木の上に降る雪を梅の花かと打見つる哉
八七打靡く春を近みかむば玉の今宵の月よかすみたる哉
八八深雪降る冬は今日迄鶯の鳴かむ春日はあすに有らし
八九飛鳥川河音高しむば玉の夜風をさむみ雪ぞ降るらし
九〇今更に待人こめや天の原ふりさけ見れば夜も更に鬼
九一逢はで有物ならなくに解衣の更なる戀も我はする哉
九二草かけの新井の崎のふざ島を見つゝや君が山路越らむ
九三住の江の二道を行道無しと人に知れぬる事いたき哉
九四三河なる二道ぢより別るれば我身もあなれも獨かもぬる
九五照月を雲な隱しそ島陰に我が舟とめむ泊り知らずも
九六三吉野の御船の山にゐる雲の常ならむ共我思はなくに
九七足引の山すがのねを引見つゝ我兼言と勤人にいふな
九八足引の山した風は吹かねども君がこぬ夜は袂寒しも

雜歌

九九戀しくばきまさぬ君が長月の紅葉の色の過果つる迄
一〇奥山の巖の苔の年久に見れども飽かぬ君にもある哉
一一新らしき年の始にいや年に雪踏散らし常ならぬかも
一二梅の花咲たる園の青柳をかづらにしつゝ遊び暮さむ
一三春柳かづらに折りし梅の花たれか浮かべし盃の上に
一四天地にあへ榮えむと大宮を仕へまつれば尊くも有か
一五世中の常なきことは知るらむを心盡すな丈夫にして
一六世中の常ならぬことかつ見ればいかに心は忍兼つゝ
一七今よりは秋風寒く成なむをいかでか獨長き夜を寢む
一八高圓の野邊の秋萩散さでは君が形見と見つゝ忍ばむ
一九去年見てし秋の月夜は照せ共逢見し妹は彌遠ざかる

この歌人丸集にいでたり

二〇天地と共に久しくますらをと思ひて有し家の庭かも
二一戀つゝも有むと思へどゆふは山隱れし君を忍兼つも
二二佐保山に霧く霞見る毎に妹を戀つゝなかぬ日ぞなき
二三御立せし島の荒磯を今見れば生ざりし草生にけるかも
二四けふ〳〵と我待君は池水の影に交りぬ有といはめや
二五妹が名は千代に流さむ姫島の小松がうれに苔生る迄
二六死ぬ寐と兼て知せば此海のありその濱は見せまし物を
二七昨日こそ君はこましか思はずに濱松が枝の雲の霧く
二八いつしかと待らむ妹に玉梓の言だに告ず行し君かも
二九唐衣戀しくあらばます鏡見ぬが時なくあらまし物を
三〇君はいさ忘れやすらむ玉蔓影に見えつゝ忘れぬ物を
三一七夕のふなのりすらし天の河清き月夜に雲立ち渡る
三二彦星の別れてのちは天の河をしむ涙に水まさるらむ
三三天の河歸らむ空も思ほえず絶えぬ別と思ふものから
三四年によそふ我舟漕がむ天川風は吹くとも波立なゆめ
三五戀渡る年のわたりを七夕の片時もあかず別れぬる哉
三六君がくる今宵はまれに天河年月のみぞ渡るべらなる
三七銀河淺く踏みつゝ渡るせにかへる涙の淵となりつゝ
三八天の河霧立曇り玉櫛笥あけなば飽かず別れまくをし
三九一とせに一度渡る天の河幾らばかりの廣さなるらむ
四〇今日よりは天河原はあせなむ淵瀬ともなく唯渡りなむ
四一逢夜しも渡ると思へば天河おり立よりぞ嬉かりける
四二鵲の橋つくるより天の河水もひなゝむ河わたりせむ
四三天漢川瀬の波の打はへて我が立待し今日ぞきにける
四四秋風に夜の更け行けば天河川瀬に波の立ゐこそまて
四五一年に七日の夜のみ逢事の戀も盡ねば夜ぞ更にける
四六天河せゃの白波さわぐなり我待つ君ぞ舟出すらしも
四七妹に逢はむ夜をかた待と久方の天河原に月出でに鬼
四八天河岩こす波の立ゐつゝ秋の七日のけふをしぞ思ふ
四九鵲の翼にかけてわたす橋またもこぼれぬ心あるらし
五〇久方の天の河原に舟うけて今宵や君が我が宿にこむ
五一天の河夜深く君が渡るとも人知ずとは思はざらなむ

七夕の逢夜のみこそ天の河渡る瀬有て君もはる〻てへ
宵々に天の河原はならせ共よならふ年も有じとぞ思
明ぬやと問物ならば天河霧立ち未だ晴すといはなむ
秋夜の庭の白露けさ見れば玉やしけると驚かれつゝ
我宿の尾花が末に白露の落ちし日よりぞ秋風の吹く
白露はけなばけなゝむ消すとて玉に貫べき人も有じを
白露と名にはおへども紅に山の木の葉の色は見え鳧
秋風は日毎に吹ぬ高砂の尾上の萩の散らまく惜しみ
我せこが衣の裾を吹きかへしうら珍らしき秋の初風
秋風の吹に附てぞ思ほゆるさほの山邊は今やもみづる
我妹子が機より織し狩衣着せし日よりぞ秋風は吹く
我宿のわさ刈あげてにへす共君が使は只にはやらじ
秋風はことゝ吹來ぬ白妙の我がとき衣縫ふ人はなし
打はへてかげとぞ頼む嶺の松色ごる秋の風に移るな
佐保山の柞の紅葉散りぬべみ夜さへ見よと照す月影
我門の早田も未だ刈あへぬに兼て移ろふ神南備の杜
足引の山田の稻も出にけり植しにあらぬ我刈にこむ
いと早みまだきも刈か石上布留のわさ田も未出ぬを
秋の田のかりほの庵に雨降て衣手濡ぬほす人なしに
足曳の山田の稻は出す共網だにはへよもると知らなむ
秋きてに見べき紅葉を霧籠り佐保の山べの晴る時なき
霧分て雁はきに鳬ひまもなく時雨や今は野べに濺がむ
秋霧の紛れに家路忘れてや思ぬ方によきりしにけむ
網代へと指てきつれど河霧のたつと紛れに道もゆかれす
雁がねの鳴なるなべに唐衣立田の山は紅葉しぬらむ
秋霧に妻まどはせる初鴈の雲がくれ行く聲の聞ゆる
天雲のよそに鴈が音鳴く時ぞ下葉色づく我が宿の萩
雲の上に鴈ぞ啼なる我宿の淺茅も未紅葉敢へなくに
大空に鴈ぞ啼くなる畝傍山み垣が原に紅葉しぬとか
天雲のよそに鴈がね聞しより霰しもふる寒き今宵か
山田守る田守のひたの心にて戀する鹿の聲ぞとめつる
秋山に心のいれば御狩する鹿を奥までとむる也けり
きり〳〵す我宿近く夜は啼け晝はさわがし物語せむ
唐衣たつたの山にあやしくもつゞりさせてふ蜚かな
蜚つゞりさせとぞ鳴なれど村衣持たる我は聞入れず
蜚我がきぬつゞれわびことの宿も秋風よきす吹けり
秋の野に人まつ虫の聲す也我かと行ていざ訪らはむ
秋の山影やかたぶく蜩のこの暮ごとに啼き渡るらむ
萩の花色づく秋を徒らにあまた數へて年ぞへにける
いなび野の秋の尾花は招け共女郎花にぞ心つきぬる
藤袴着る人のみやたちながら時雨の雨に濡し染つゝ
なごうたて吹秋風ぞ藤袴ぬぎて貸べき妹しまさぬに
紅葉の時雨と降ればさす傘のうつき紅しみぬべら也
吹風に散だに惜き佐保山の紅葉搔たれ時雨さへ降る
唐衣立田の山のもみぢ葉ははた物もなき錦とぞ見る
我妹子が鏡の山のもみぢ葉の移る時にぞ物は悲しき
千鳥鳴く佐保の河霧立ぬらし山の紅葉ば色變り行く
鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜は更にけり
佐保山に錦織かく神無月時雨の雨をたてぬきにして
春を待つ梅の古枝に降雪は人の爲なる花にざりける
別行く冬の形見は黒髪に降り置ける雪の消ぬなり鳧
此時雨痛くな降そ我妹子がつとに見せむと紅葉折てむ
秋田皆刈はてつれど初霜のおくての稻は久しかり鳧
霜もおけば戰げど竹の葉のいつも移ふ色ならなくに
落ちしける紅葉の色に白玉を貫てぞ亂る今朝の霰は
霰降り玉と見れども拾置て心の如くぬかばけぬべし
夜を寒み朝戸を明て見渡せば庭もはだらに泡雪ぞ降
月夜には花とぞ見ゆる竹の上に降白雪を誰か拂はむ
雪も降らば立も隱れむ春日なる三笠の山の末の松原
新玉の年を渡りてあるが上に降積む雪の消えぬ白山
梅枝に降積雪を包みもて君に見せむと取ればけぬべし
白雪の色わき難き梅が枝に友まつ雪ぞ消え殘りたる

白山の嶺なれば社白雪の鹿子まだらに降て見ゆらめ
冬の夜の寒きまに〳〵我妹子が衣を雁の聲は聞つや
最上山すがけせしより心有て守り返せる矢形尾の鷹
橘を守部の家の門田わせ刈り時過きぬこじとやす覽
長月の時雨の雨の山霧のけぶき我胸誰を見ばやまむ
我宿の榎木つきの木つき毎に使はやらむ心またくな
我妹子を戀ては久しうましたのあへ立花の苦生る迄
妹がぬる床のあたりに岩潜る水にもがもや入てねまくも
久方の天のは山に此ゆふべ霞たなびく春たちにけり
郭公鵑山べに啼くなれば我が打つけにこひまさる也
植て置し秋田刈迄見えねば今朝初雁の音にぞ鳴ぬる
吉野川岩切通し行く水の音にはたてじ戀は死ぬとも
下にのみ戀れば苦し撫子の花に咲出でよ朝な〳〵みむ
玉鉾の遠道もこそ人はゆけなどか今のまゝ戀しかる覽
彦星の妻よぶ舟の引綱の空にたえむと我思はなくに
折て見ば落ぞしぬべき秋萩の枝も撓わに置ける白露
萩の花散る覽小野の露霜に濡てを行むさ夜は更ぬ共
今もかも咲き匂ふらむ立花のこ島がさきの山吹の花
石ばしる瀧なくもがな櫻花手折てもこむ見ぬ人の爲
白波のこすゝふ方に着ぬれば急ぐ嬉しきみつの濱松
後れ居てあればや戀の春霞たなびく山を君が越ぬる
くしげなる鏡の山を越え行けば我ら戀しき妹が姿か
その原の山をいくかと歎くまに君も我身も盛過行く
足引の山のかげ草結び置て戀や渡らむ逢ふ由もなみ
秋萩の花咲に鳬手折ても見れども飽ぬ君にし非ねば
家路には石ふむ山も無物を我待君はうまのつまづき
白眞弓いつもの山の常磐なる命かあやな戀つゝ有む
けひが家にあれ惑はめや足引の山掻曇り雪は降とも
小夜更て見つゝや行かむ松浦なる小夜姫の子がひれ振の山

業平集

世中に絶て櫻のなかりせば春の心はのどけからまし
今日こそ明日は雪と降なまし消すは有り共花と見まし
移植ば秋なき時や咲ざらむ花こそ散め根さへ枯めや

三月のつごもり、雨中に折二藤花一

濡つゝぞ強て折つる藤の花春は今日をし限と思へば
秋萩を色ごる風は早くとも心は吹かじ草葉ならねど
千早ぶる神代もきかず龍田がはから紅に水括るとは
見ずも非ずみもせぬ人の戀しくは文なく今日や詠暮さむ
起もせず寝もせで夜を明しては春の物とて詠暮しつ
淺み社袖はひづらめ涙川身さへ流ると聞かば頼まむ
寝ぬる夜の夢をはかなみ睡めば彌はかなにも成增哉
大幣と名にこそ立てれ流ても遂に寄瀬は有りてふ物を
月や非ぬ春や昔の春ならぬ我身一つは元の身にして
宵の間にはや慰めよ石上ふりにし床も打ち拂ふべく
伊勢の海に浮ぶ蜑とも成にしが波搔分てみるめ潜かむ
春日野のわか紫のすり衣信夫の亂れかぎり知られず
秋の野に笹分し朝の袖よりも逢でこし夜ぞひち增ける
今迄に忘れぬ人は世にも有じ己が樣々年の經ぬれば
數々に思ひ思はずとひ難み身を知る雨は降ぞ增れる
かきくらす心の闇に惑ひにき夢現とはよひと定めよ
人知れぬ我が通路の關守は宵々毎にうちも寝なゝむ
出てくる跡だに未變らぬに誰が通路と今はなるらむ
厭てば何か別の惜からむ有りしに勝る今日は悲しも
飽なくにまだきも月の隱るか山端逃て入れずもあらなむ
大方は月をもめでしこれぞ此積れば人の老となる物
大原や小鹽の山も今日こそは神代の事も思出づらめ
今ぞ知る苦しき物と人待む里をば枯す訪ふべかり鳧
住わびぬ今は限と山里に身を隱すべき宿もとめてむ

一六晴るゝ夜の星か河べの螢かも我住む方の蜑の焚火か
二六大井河浮ぶ鵜舟の篝火に小倉の山も名のみなりけり
三六忘れては夢かとぞ思ふ思きや雪踏分て君を見むとは
四六世中にさらぬ別の無もがな千代もと祈る人の子の爲
五六年だにも十とて四はへにけるを幾度人を頼みきぬ覽
六六背くとて雲には乗ぬ物なれど世の憂事ぞよそに成てふ
七六紫の色濃き時はめも遙に野なる草木ぞ分れざりける
八六拔亂る人こそ有るらし白玉のまなくし散か袖の狹きに
九六年をへて住こし里を出ていなば最ど深草のとや成なむ
〇七時知ぬ山は富士のねいつとてか鹿子斑に雪の降らむ
一七暮ぬとて寢て行べくも非なくに泣々も猶歸る勝れり
二七鴈なきて菊の花咲く秋はあれど春は海べに住吉の濱
三七難波江を今日社々つの浦に住む是や此よを憂み渡る舟
四七唐衣きつゝ馴れにし妻し有れば遙々きぬる旅をしぞ思
五七名にしおはゞいざ言問む都鳥我思ふ人は有や無やと
六七狩暮し七夕つめに宿からむ天の河原に我はきにけり
七七行歸り空にのみしてふるとは我居る山の風早みなり
八七終に行道とは兼て聞しかど昨日今日とは思ざりしを
九七頼めつゝあはで年ふる僞にこりぬ心を人は知らなむ

（本云 業平朝臣集歌四十七首内不レ入二千物一歌五首有レ之歟又古今以下至二于樓古今一令レ入レ集之歌三十四首編二此歌集一其外伊勢物語歌多不レ載經二拔題一之次故註レ之）

兼輔集

正月一日しれりける人のひと集れりける所にて

〇八新しき年の始のうれしきは舊き人とぢあへる也けり
春雨のふる日濁れる水に花のちりかゝりたるに
一八にはたづみこの本近く流すば泡沫花を有りとみましや
亭子院の帝の大内山におはしますにうちの御使
に參りて
二八白雲の九重にしも立つるは大内山といへばなりけり
幽仙法師のとし久しく御導師つかうまつりて律
師になりたるあしたに
三八足引の山のかけはし踏登りけふこそ嶺の花は折らめ
この律師に代りてそうせる
四八日の光あたる旦はいたゞきの雪こそ解て袖濡しけれ
女
五八忘れなむ我を恨むな郭公人の秋には逢はむともせず
返し
六八忘なば誰かは人を怨べきうきに後れてしるは我かは
男
七八三熊野の浦の濱ゆふ夕されば我も偏に怨みやはせし
又返し
八八東雲の明暮君は忘れけりいつとも分かぬ我ぞ悲しき
ふるき式部卿宮いまの式部卿宮にて物語し給ひ
けるに衰れなることも見けむかし
九八君がなも我も昔の宮ながら變れる物は年にぞ有ける
いまのとあるは入道のなり
親の思ひにて山寺に籠れぬる幾つにてと人尋ね
たりける返事
〇九藤衣人の袂と見しものをおのが涙にながしつるかな
女をなくなして家に歸りてすみし所を見て
一九立寄らむ方も知れず三瀨河空しきことになみ騷げば
思にて人の家に宿るに其家に忘草の有ければ
二九なき人を忘れ兼ては忘草多かる宿にやどりをぞする
返しあるじなる人
三九片時も見て慰めき昔よりうれへ忘るゝ草といふめり
思ひなりけるをしば〳〵訪ひける程にかくとい

ふに慰むといひたりければ此のとぶらふ人
四九訪毎に名草の濱の慰まば波のよる間も非じとぞ思ふ
その返しに
五九白波のよる〳〵毎に慰まば袖の干る間は我も知りなむ
八月ばかり親の服にてえ逢ふまじかりける人
六九墨染の衣夜な〳〵隔てつゝ覺つかなしや秋を暮さむ
服にて人のとぶらひにおこせたりければ
七九今はとて惜き乍も藤衣ぬぎ捨てつらむことの儚なさ
返し
八九藤衣うきを限にはつれつゝ涙の玉をぬきてかしつる
藤原のさねきが藏人にてかうぶり給はりて明日
おりなむとしける夜
九九むば玉の今宵計ぞあけ衣明なば人をよそにこそ見め
あだなりける男の扇をやりける代りて
〇〇數ならぬ身は我からの過になしてだに社君を忘れめ
神南備のすけもちつかさうし近きいもとにさう
ずくぬぎける所に女するたりければ女に代りて
一〇神南備の岩瀨の杜の岩摺は戀し積れる我かとや思ふ
かどさして入れざりける所にて
二〇秋夜に非ぬ鎖しの侘しきは嘆けど明けぬ物にざりける
親の思ひにて山寺に籠れるにいづくにてと人の
尋ねたりける返事に
三〇足引の山べにいまは墨染の衣の袖のひるよしもなし
め親なきちごのたまのくさにて舞ひけるを見て
四〇人の子のまふ〳〵親の求むれど魂なき骸は見え難き哉
女にさうぞく贈りけるものこしにつけゝる
五〇一節をのどけく見れば烏玉の夜の衣も返すまと知れ
女の人の許に文やらむとて書きてはやり〳〵し
けるを聞きて
六〇思ふこと云ふと難み徒にかきてやるをぞ慰めにする
女恨みてなきけるに
七〇岩衝綾なかるねは何故ぞなかすの濱の鳴す待ちなむ
返し
八〇物思ふを名草の濱の濱千鳥慰むるにぞなき增りける
月隔たりにけりと女の云ひおこせたりければ
九〇浮雲に身をしなさねば久方の月隔つ共思はざりけり
おほやけの御使に齋宮にまで返りなむとてふる
く知れりける女といふはさいぐの内侍なり
〇一人はかる心の内はきたなくて清き渚を爭で行きけむ
方遠へける所に枕いだしたりけるを返すとて書
きつけ
一一敷妙の枕に塵のゐましかば立返りにぞ人の訪はまし
返しほどものへいにける人になりにける
二一君がためうち拂ひつる敷妙の枕の塵にけがれぬる哉
女に
三一冬の日は眺むるまにも呉竹の臥ぞわびしき繁き歎は
女の許よりつとめて出て程なく雪の降りければ
四一白雪とけさは積れる思哉逢でふる夜の程もへなくに
これを見て女あはれにめでたしと思ひけり
五一古郷の三笠の山は遠けれど聲は昔のうとからぬかな
近衛司はなれての頃なり
六一宿近く匂はざりせば梅の花風の便りに君を見ましや
そのまらうどは右のおとゝなり
玄上の宰相の右近中將にて紅梅を折りておこせ
たりける
七一君が爲我が折る宿の梅の花いろにぞいづる深き心は
八一色も香も殊に匂へる梅の花散る疑ひのあるや何なる
いと忍びたる移香の人しるばかりありければそ
の女に
九一梅の花立寄る計ありしより人の尤むる香にぞ泌ぬる

これも女に

〇元の香のあるだにあるを梅の花最ど匂の遙かなる哉

屏風に

一青柳の眉に籠れる糸なれば春のくるにぞ色増りける

三條の大臣の交野に狩し給ふにおひてきて

二君が行方の遙に聞しかど慕へばきぬる物にぞ有ける

急ぐことありてさきだちて歸るにかの水無瀬と

いふ所に花おもしろかりけるに付けて

三櫻花匂ふを見つゝ歸るには靜心なきものにざりける

道に歸りておとゝの返し

四立返り花をぞ我はうらみこし人の心の長閑ならねば

櫻の花の散りけるがみかは水にいりければ

枇杷大臣

五散花をあだなる物と云なれば斯てのみ社見べかりけれ

そのついでに

六拾ひ置て見る人し有れば櫻花取ての後の悔げもなし

櫻の花散るを見て

七雪のごと散りくる春の櫻花春は殘れる心ちこそすれ

返し

八櫻花しらがにまがふ老人の宿には春の雪やたえせじ

式部卿宮うせ給ひての頃山里より櫻の花をさし

て　三條のおとゝ

九咲匂ふかげまつ程の山櫻人の世よりは久しかりけり

あだなりける女に花折りてやりける

〇明日知らぬ物と知る〳〵櫻花散ぬ限は見まく欲さに

庭に佇みけるに八重山吹の花のもとにて

一我がきたる一重衣は山吹の八重の色にも劣らざり鳧

二梔子の色好といふなは立たで井手の山吹盛すぐすな

これは井手と云ふみかはやうとに山吹の花持た

せて色めきたる人にやるべし

三逢ふ事を今宵〳〵と賴めずば中々春の夢も見てまし

蓑蟲きたる枝に文をつけておこせたる返事に

四春雨の降るに脱たる蓑蟲のつけたる枝を誰か折つる

五諸共に我がをる宿の梅の花あかぬ匂を誰に見せまし

京極家の藤の賀彌生晦にし給ふに三條おとゝ

六限なき名におふ藤の花なれば底ひも知ぬ色の深さよ

返しあるじ

七色深く匂ひしことを藤波の立も返らず君とまれとか

また返し

八飽ぬまに君返らずば藤の花かけて更にや戀渡るべき

おとゝ又

九昨日みし花の顏とて今朝見れば寢てこそ更に色増けれ

返し

〇徒にあけばあやなし時鳥鳴くを待とて君をとゝめむ

枇杷殿にまでたりければ昔物語し給ふとて北面

によび合せてふるごともありける中に

一古へのこと語らへば時鳥いかにしてかは古聲のする

物思へる程に郭公を聞きて

二郭公なきのみわたる夏山に繁くも物を思ふ頃かな

桂の御息所おほやけに參らせ給ふことおそしと

て恨みさせ給へば

三恨むべき程ならなくに郭公五月待間の年にぞ有らし

おほやけ所に忍びて人の許にきける男のえ隱れ

敢へで人に見付けられてそれは空ごゝのゝし

るを聞きて

四人知れぬ宿に住せば郭公うき五月雨は知れざらまし

平のながきが播磨より上り沙汰することありて

なむ今までこぬと云へる返事に

五郭公なきふる里の繁ければ山べに聲のせぬもとわり

山里にすむ頃なむ男の許より女の許に扇えたる

人に代りて

六嬉しくていとゝ行末侘しきは秋よりさきの扇也けり

七日うへのさぶらひに人々歌よみけるに

七七夕を渡して後は天の川波たかきまで風も吹かなむ

あり〳〵て七日きたりける人に云ひいたす

八戀渡る織女にあらばこそ今日しも人に逢むと思はめ

常に逢ひ染めたりける人にほかにて

九七夕に我がかす物は又もなし今宵計のあはぬのみ也

まらうどの急き立つをとゝむとて

〇七夕に人の物かす今宵さへ出ては痛く急がざらなむ

女に

一人知れず思ふ心は秋萩の下葉の色に出でつべらなり

女に扇やるとて

二吹風を疎まざらなむ秋の夜のこそ睦じき知べ也けれ

殿上の人々集りて野べに出でむと定めたる日

三女郎花思なわびそ諸共に月もすぐさず群てとふべし

御かどの故内侍の督の四十賀せさせ給ふ御屏風

に雁の歸る所を

四白雲の中に紛ひて行く雁も聲は紛はぬ物にざりける

女のもとに

五いで人の思ふと云し言の葉は時雨と共に散やしぬ覽

返し

六初時雨降しそむれば紅葉ばの色のみ増る頃と社見れ

七冬の夜の涙に凍る我袖の心解けても見えしころ哉

又女に五節の日なり

八いつとても春くるとの無身には百ぞ増らむ解む物かは

四日ばかり外にありて常に相そひたりける人に

九斧の柄も朽やしぬ覽逢との稍ふるとも久しと思へば

〇試に獨見るよの夢にだに見ねば侘しき物にざりける

いと忍びたりける女くちなし色のきぬかりたり

ける返すとて

一語へどいふ口なしの色もなくたてる衣はかひ無り鳧

童名むきと云ひける人のうまどいふ女すみける

にかたきになりにけるにかく云ひやれとて

二駒草の爲と覺ゆる草蓋のむさとやいはゝ人の刈らむ

覽しふく山のもとにて

三嵐吹く山下とよみ鳴く鹿の妻戀ふるねに我ぞ泣ぬる

四春霞立ちつる方を詠めつゝ空なる戀も我はするかな

五逢見つゝ別るゝ方にあるものを何言の葉を慰にせむ

これはよばふ女の人の國へいきけるに在原のと

しきが藏人よりかうぶり給はりてやりける

六郭公なく東雲のあけごろもふるき心を忘れざらなむ

藤原のはるかたかうぶり給はりて近江守になり

て下るにめむとてまつにこずなりにければ

七こぬ人を待秋風の寢覺には我さへあやな旅心ちする

八逢坂の家かりてそれよりはるかたかいて立つに

大江の千古が白山にて出でけるに別を惜みて

九思遣る越の白山知らねども雪のまに〳〵跡は尋ねむ

美濃へいきけるにきぬやるとて

〇諸共に惜む別の唐衣かたみばかりぞまづそぼちける

一思遣る心し先に立ぬればとまる我身は有かひもなし

あふきぬさにやるとて

二風にしも告つる幣は道のべの手向に飽ぬ神なかれぞ

先帝かくれさせ給ひて三條のおとゝにまたずこ

ればおとゝ

三傷くてよにふるよりは山科の宮の草木とならまし物を

四人の世の思ふに叶ふ物ならば我身は君に後れましやは

これは兼輔

五山科の宮の草木と君ならば我も雪にぬるばかりなり

年かへりて正月一日　おとゝ

六徒に今日や暮れなむあたらしき年の始は昔ながらに

返し

七なく涙ふりにし年の衣手は改まれども返さざりけり

また　　おとゝ
八七み山には見るべき君が無物を常に思てや春もきぬ覽
　三月つごもりに　　おとゝ
六九櫻ちる春の末には成けりあやめも知ぬ詠せしまに
七九春深く散りかふ花を數にても取敢へぬ物は涙也けり
　帝の御服に親のを重ねて貫之が來たりけるに詠
　みてやりける
一八一重だにきるは侘しき藤衣重ぬる秋を思ひやらなむ
　山里にて
二八足引の山べにをれば白雲の立ゐる度に物をこそ思へ
三八朝夕の身には添へ共あら玉の年積りゆく我ぞ悲しき
四八命あらばあらじ〳〵と思ふ世に身の行末は誰か知覽
　子の悲しきとを集りて云ひければ、中納言
五八人の親の心は闇に非ね共子を思ふ道に惑ひぬる哉
六九子の爲に殘す命もへてしがな老て先立つ否びざるべく
　嵯峨の行幸のついでに
七九年たけて逢つる事を數ふれば我も翁に成ぞしにける
　こ內侍のかみの
八八時雨する音はすれ共呉竹のなど世と共に色は變らぬ
　神無月二つある年御前の菊の賀に
九八神無月二つある年の時雨には獨と聞ぞ色こかりける
　秋長谷にまうでたりけるに紅葉の流るゝを見て
〇九唐錦洗ふと見ゆる立田川やまとの國の幣にぞ有ける
　返し
一九紅葉ばの己が取々別るれど同じ方にぞ風は吹きける
二九數ならぬ身はわれか眺過に做てだにこそ君は忘れめ
　もんさして明けざりける所にて
三九秋夜に有ぬ鎖しの侘しきは歎けど明ぬ物にぞ有ける
　男の許より櫛えたりける女の詠ませける
四九忘れける人の形見はむば玉の我黑髮にさして社知れ
　女にさうぞくして贈りけるにもの腰につけゝる
五九結ぶをの解けてみたれば烏玉の夜の衣を返すまと知れ
　人の許に文おこすとてよきてはやらすとて
六九思ふ事いふと難み徒にかきてやるをぞ形見にはする
　女の恨みて泣きければ
七九岩衛綾なかるねは行末のなかすの濱の鳴すもあらなむ
　おほやけつかひにて伊勢の齋宮に下り深く知り
　たりける女にもいはさ宮のうちなるべし
八九人はかる心の內はきたなくて清き渚を爭ですみけむ
　返事
九九誰が爲に我は命をながしまの浦に宿りをしつゝかはこし
〇〇千早振神の社のいふばかり水のとあえて祈るめる哉
　ひんがし
一〇我はひむかしらの白くなる迄に年月ふ共逢す成なば
　たつみ
二〇霞立つ峯や眺くも尋ねみむ花の遠目をまきらはす哉
　みなみ
三〇並々の人並ならば住江の松とも云に出ていなましを
　ひつじさる
四〇陸奥の白川越て相逢ひつしさる〳〵もゆけど遙けき
　にし
五〇忘れにしさきを憂しとは思へども心は雲の打忍ぶ哉
　いぬゐ
六〇今はいぬ井邊の松の生ぬ覽年月ふ共まちとけなゝむ
　きた
七〇敷妙の枕に涙せかれつゝ夢とだに見ぬ頃にも有かな
　うしとら
八〇憎かりし人のあたりは懶し元とらばとらなむ玉のをにして
　きのと
九〇二人寢し床にて深く契りてき長閑に我を打頼めとて
　ひのえ
〇〇箏鷹のと歸る山の椎の葉は常磐に枯れぬ中を頼まむ

　ひのと
一夕されば逢見べきを春の日の疾暮ぬ社侘しかりけれ
　つちのえ
二風寒み衣につくる槌の柄のをれぬ計に音のするかな
　つちのと
三門田刈りせきのふかりぞ思しをひづちの疾も生にける哉
　かのえ
四梅の花孰れは眺憎からずかの枝折りて家づとにせむ
　かのと
五さをしかの友迷はせる聲す也妻や戀しき秋の山べに
　みづのえ
六淀川や過てあなたにある水のえ社まだ見ぬ駒の立ども
　みづのと
七別れても猶忘られずうち忍びとく廻りこよ空の浮雲
　一夜めぐりこそおほかれ
八出立ば後めたなくある人よ廻りに据てみる由もがな
　五月ばかりに女の人におくれて郭公を
九世の常に聞くだにあるを郭公なき人戀ふる折々の聲
　他本歌
　近衛の司離れて後まへに紅梅を植ゑて花の遲く
　咲きければ
〇二宿近く移して植ゑしかひもなく待遠にのみ匂ふ花哉
　返し
一二一夜のみ寢てし歸らば藤衣心とけての色みせむやは
　七月六日
二二早晩と待たく心を壓に揚げて天の河原を今日や渡らむ
　七月七日歌よみける所にいきて
三二天の河淺瀨白波辿りつゝ渡り果ねばあけぞしにける
　返し、女
四二今宵かす七夕つめに身を替ば明ば返さむ事を社思へ
　とのかへし
五二川霧のたちし返せば水底に影見る人も非じとぞ思ふ
　かへし人に代りて
六二初時雨ふるに濡つる我袖のひるま計をみぬぞ侘しき
　こ內侍のみかの住み給ひし時藤壺にて菊の賀御
　門のせさせ給ひけるに
七二紫の一もと菊に萬代をむさしのにこそ頼むべらなれ
　早うなくなりにける人と眺作諸共に遊遙せし所を
　しくなりて見て久
八二轉寢の現に物の悲しきは昔の野べを見ればなりけり
　をとこ
九二三熊野の浦の濱ゆふもゝかさね心はあれど逢ぬ君哉
　雨ふるとてこぬ男を恨みければ
〇三思ふ事ならず乍に世中にふればや雨とわが障りけむ
　女に
一三逢もみで君が消なば今日計千尋の濱の名を流さなむ
　女
二三憂身とて雪降儘に消にしを人に問れむ玉とし見む
　返し
三三ふりもせぬ君が雪解の雫ゆゑ袂にとけぬ氷しにけり
四三逢事をいつしかとのみ思ひつゝ暮す心は怪しかり鳧
　常にあひ知りたりける女のいかゞありけむふす
　べければ
五三東路の有か無かを知らぬ間は厭に似たる物にぞ有ける
　但馬の國に下るとて二見の浦に宿りて
六三夕月夜覺束なきを玉櫛笥二見の浦はあけてこそみめ
七三人のはらからの許へいきけるに代りて
八三一つすにかへりはゐれど濱衛暫しも立は侘しかり鳧
　式部卿宮うせさせ給へる頃
九三今はとて風まつ程の櫻花人の世よりは久しかりけり
　先帝のおりゐさせ給ひけるに　三條の大臣
〇三變りなむ世には爭でか住ふべき思遣れ共ゆかぬ心を

敦忠集

忍びたる人に

○四逢事をいざほに出なむ花薄忍果つべき物ならなくに

絶えたる人の許に花をつみて

一四心にも非で有ふる年月の今日迄はなどつみてける哉

あだ名立つ人いとむくつけし物をだにいはじと

あれば

二四忍ても爭でか問ぬ濡衣を名にのみたちてやまむとやする

返し

三四なだに立つ蜃の濡衣悔きをほさではやまむ物ならなくに

又

四四玄をりたる蜃の濡衣同じ名を思返さできる由もがな

また

五四五月雨の夜毎なきつゝ郭公袖のひるまもなきぞ悲き

やんごとなき人に

六四雲居にてくもゐに見ゆる鵲の橋を渡ると夢に見し哉

ちかもりからものゝ使にくだるにいはにかねの

火打をほくそにちんをしてしのぶをすりたる布

の袋に

七四打付に思ひ出づとや古郷の忍草にてすれるなりけり

醍醐の帝におくれ奉りて

八四君なくて立朝霧は藤衣いけさへきるぞ悲しかりける

物へ行く人に扇に

九四旅遠く別るゝ人を思ふには心の色ぞあらはれにける

○五我一つたゝふる風を八十島の松の嵐にあふぎ比べよ

御くしげ殿に又の日

一五今日そへに暮ざらめやはと思へ共堪ぬは人の心也鳧

近江のかういに

二五三輪の山かひ無り鳧我宿の入江の松は切やしてまし

一條の君のつとめて上よりおるゝにさしむかひ

給ひければ、女

三五白露の急ぎおきつる朝貌をみつとも人に夢に語るな

返し

四五朝顔を朝毎に見物ならば君より外に誰にかはいはむ

御くしげ殿に

五五朝々置積む霜の淺からで心解けたるいはねてしがな

いかでと思ふ人のこと人に定まりたるをみなへ

しにさして

六五二葉より頼みし物を女郎花人の垣ほに生ひにける哉

年月をへて契りながらさもあらぬ人に

七五人知れず思ふ心は年をへて何のかひなく成ぬべき哉

人にいひうとめられてかへり言せぬ人に

八五うきとの繁さ増れる夏山の下行く水もあとは通はず

はじめの北の方恨み給ひて

九五世中にまた白雲の山のはにかゝるやつらき心なる覽

すけまさの母君産みおきて失せたるををばのも

とに養ふが二つばかりなるを見におはしたるに

物語など聞えけるにいみじう泣き給ひてちごの

名はあづまとなむいひける

○六睦言もまだ云出でゃ別にし人の形見はあづま也ける

齋宮とよをへて聞えかはし給ひける始にや

一六下にのみ流れまされば冬河の凍れる水と我と也けり

返し

二六心から人遣ならぬ水なれば流れわぶらむともとわり

また

三六陰にのみ殘れる雪の消果ぬ先にも人の逢見てしがな

返し

四六光見ぬ陰に習へる雪なれば逢見むからに消ぞ増らむ

又

五六露ながら野べの花をば折ねどもたえず袂を絞る頃哉

返し

六六露にだにおほせぞせまし斯く計照日に濡る袖も有よを

七六さりともと思心に謀られて世にも今日迄生ける命か

返し

八六頼むにも命の懸る物ならば千年も斯てあらむとを思へ

又

九六いつしかと思心のなき人や止らぬ春を怪しとは思ふ

○七野分して白波立む時だにもすぐさず君に逢見てしがな

一七松山も越ゆと云なる白波の立む月とは懸ずもあらなむ

又

二七強てのみ我身をふれば一つみも劣らぬ物は涙也けり

返し

三七せき敢ぬ涙なれども我を君今日は心のふるは増れり

服にやおはしけむ

四七一重だにきるは侘しき藤衣此事をさへ重ねてぞ思ふ

五七きて憂しと思ふかときぞ藤衣重てみつは重さ増れる

又

六七世と共に晴ぬ涙に障なばよそにのみふる身とや成なむ

七七世中を侘る涙は一つにていかでこゝらの物思ふらむ

返し

八七誰かわが身を二にて物を思ふ幾ら計をこゝらと云らむ

古き人になむかへりてとゝき給へるけしきなる

に

九七今はとて春の別に鶯のふるすみけるを悔しとぞ思ふ

長雨の頃

○八我のみは夏の詠はせざりけり大空さへや物を思らむ

一八物思なくて詠むる大空のうち忘の頃ときくかひのなき

又

二八いつとなく靜心なき我戀の梅雨にしも亂れそむらむ

程へて音もし給はざりければ宮より

三八古のことかたらひし郭公いづれの里に長居しぬらむ

返し

四八長らへてへにける里は時鳥道の程だに覺えざりけり

又

五八五月雨は過ぬと思ふ郭公おほ世中を鳴きつゝやへむ

返し

公忠集

〔春〕

延喜の御時五位藏人なりけるを御讓位にあひて

離れけれど朱雀院御上承平八年十一月にかへり

なりてのあくる年の正月の御遊びのついでに梅

の花を折りて

六八百敷にかはらぬ物は梅の花折りてかざせる匂也けり

枇杷のおとゝ左大臣になり給へる御よろこびに

おほき大臣わたらせ給へる日御あるじありてか

はらけたび〳〵になりてあるじもまらうども歌

よみ給ふに

七八色も香も今年の春は梅の花二たび匂ふ心ちこそすれ

八八紅にゆきゝの程は遠けれど梅のうへには通ふべら也

朱雀院の御かざのわらはにおはしましける時藤

の上に御手づから梅の花をかうぶりに挿させ給

ひてかしらもたげざらむさきに歌よめと仰せら

れければおきあがるまゝに

九八百敷の梅の花笠さす時は天の下こそうしろやすけれ

南殿の御前の櫻の花の散るをみて

○九殿守のともの御奴心あらばこの春ばかり朝清めすな

延長八年三月二十三日藤壺の藤の賀に

一九色深く匂へる藤の花故に殘りすくなき春をこそ思へ

夏

延喜の御時四月一日鶯の鳴かぬ年の歌仕うまつれと仰せらるゝに

二九春は唯昨日ばかりを鶯の限れるとも鳴かぬ今日かな

北の宮のみぐしあげの屏風に山を越ゆる人の郭公を聞きたる所に

三九行きやらで山路暮しつ時鳥今一聲の聞かまほしさに

秋

醍醐の御時御前の薄の結ばれたるを御覽じてあれば誰が結びたるにかと仰せられければ

四九綻びて招く袂と見えしかばしどけなしとて我ぞ結し

左近本少將とのにて秋の花を翫ぶといふ題を詠める

五九池水のも中に出て遊ぶ魚の數さへ見ゆる秋の夜の月

朱雀院の御時八月十五夜に

六九秋夜の月とはよそに聞つれど時にあへるは今宵也鳧

殿上の人々嵯峨野に出でたる日

七九いざさらば今日あすへなむ秋の空今幾日かは野べに殘らむ

近江の守にてたちにありける頃殿上の人々たながみの網代にきたりけるにいきて酒など勸むとてかはらけとりて

八九月影の田上川に清ければ網代にひをのよるも見え鳧

九九流來る紅葉の色の紅ければ網代にひをの寄も見え鳧

冬

延喜十七年十月五月藤壺の尙侍の御屏風の歌

〇〇神無月時雨に增る菊の花秋はてにきと見えずも有哉

延喜の御時菊の宴に霜の中の菊を惜むといふ心をよめる歌二つ、一つは人の爲に

一〇厭しき霜にも有哉菊の花移ろふとやは色を見すべき

二〇置霜に色染め返し匂ひつゝ花の盛は今日ながら見む

寛平の御時の歌合に

三〇梅が枝に降積む雪は一年に二度咲ける花かとぞ見る

八條の大將めの爲にかしけるに

四〇萬代をなほこそあかぬ君がため思ふ心の限なければ

きさいの宮のみぐしあげの屏風に

五〇行返り舟路は痛く馴にけり年を積てぞ運ぶべらなる

北の宮の御もきに

六〇皆人のいかでと思ふ萬代の例に君をいのる今日かな

女の許に

七〇逢ふことをよゝに傳へる呉竹の節の數なき戀もする哉

八〇思やる心は常に通へども逢坂の關越えずもあるかな

承平五年十二月五日から物の使藏人左衛門尉藤原親成が餞

九〇別るゝか侘しき物はいつしかと逢見むとを思ふ也鳧

あがたへ行く女にさうぞくやるとて

一〇いとせめて戀しき旅の唐衣程へて返す人もあらなむ

田舍へくだる人のもとに白き袋を青きものしてすりて火打を入れてやるとて

一打見ては思出でよと我宿の葱草して摺れるなりけり

日本紀竟宴得二月讀尊一

二月讀の天に昇て闇もなく明らけき夜を見るが樂しき

小野好古純友がうての使に下りての翌る年少將勞にて四位なるべかりけるいかなるにか漏されたりける由いひやりける文の中に書き付けゝる

三一玉匣二年あはぬ君が身を明け乍らやはあはむと思し

延喜の御時月の雨白かりける夜殿局など廻りて御覽じける御伴にたゝ一人候ひけるに誰とも知らぬ女の一人いでゐていみじう泣くがありけるを上も怪しがらせ給ひて寄りてとへと仰せられければ寄りて問へど物も云はざりしかば

四一思ふらむ心の內は知らね共泣くを見るこそ哀也けれ

同じ御時五位の藏人なりしを位去らせ給ひしかば平絹のさうぞくになりて參りたりしを見て

女房

五一ほどもなくぬぎかへてける藤衣

といふを聞きて

あやなき物は世にこそありけれ

近江の守になりて下るに貫之が許よりおこせたる歌二つ返し

六一關の戸ぞ驚かれける君が爲心とゞめぬ時はなけれど

七一湖に潮たるばかりをさなくて都に年の老いにける哉

天慶八年內の屏風に

八一ながるれど世をへて盡ぬ汀こそ千年の鶴也けれ

延喜の御時殿上の人々おのが名をはへて歌よみけるに

九一唐衣脫捨てがたを我やきむ唯眼の前にかけて社見め

同じ五年八月十五夜

〇〇古もあらじとぞ思ふ秋の夜の月の例は今宵なりけり

一一おり昇り見かひもなし白雲の山と頼し君も見えねば

此の歌延喜の帝かくれさせ給ひて殿上もせざりける程に山に雪の降りかゝれるを見て詠める

九月つごもりの程に紅葉見むとてと山の方にあるきて

かもんのすけ

二一さして行く方も知れず秋の野に

民部丞千古

とありければ

もみぢを見つゝとまる身なれば

中宮の御屏風に海のうへゆく舟書けるところに

三一春の日の長閑き浦に漕舟は水底さへぞ靜けかりける

八月十五夜

四一暮るゝ共思はえぬ哉雲の上に影わき難き秋の夜の月

五一月毎にある月なれどよをへつゝ今宵に勝る影なかり鳧

七夕

六一稀にのみ逢ふとはすれど天河流れて絕む物にし有ねば

小鷹狩

七一秋の野に色々咲ける花見れば歸らむ程ぞいつと知られぬ

八一移ろはむ色を見よとて菊の花露の心もおける也けり

九一草田にて秋よりとほに見ねしかど程へにければ刈積て鳧

〇二暮ぬ日を網代によする物ならば紅葉の色は赤くみてまし

一二まづ散て後に咲ぬる梅の花思ひ惑ふは雪にざりける

二二我宿に松と竹との徵りせば千年てふと外にぞ有まし

三二色を見て且惑はせる梅の花香をふり隱す雪無りけり

四二春にのみ年はあらなむ荒小田を返すゝも花を見べく

五二古郷はふりやしぬらむ時鳥夜ふかき聲の珍しきかな

齋宮集

近きほどに渡らせ給ひて音づれ聞え給はねば女三宮より

六二隔てける景色を見れば山吹の花心とも云ひつべき哉

おほん返し

女御殿四宮

七二いはぬまを包みし程に口無の色にや見えし山吹の花

八二雨ふらば三笠の山も有物をまたすに騷ぐ雲の上かな

みかど村雨に驚かせ給ひて急き渡らせ給ひしに

女御殿うせ給ひて齋院の御弔ひの御歸り

齋宮

九二影見えぬ涙の淵は衣手に渦まく泡の消えぞしぬべき

まうのぼらせ給へるに上の御とのごもりたる程なればたゝにおり給ひてつとめて

〇四隱沼に生ふる菖蒲のうきねして果は難面くなる心哉

後にうち寄りまどほにあれやと聞えさせ給へる御返りに

一四 馴行くは浮世なればや須磨の蜑の鹽燒衣間遠なる覽
　をり知らす　　女御
三四 藻汐やく煙に馴るゝ海士衣幾そ度かは袖の濡れける
　又御返りに
三四 歎く覽心を空に見てしがな立朝霧に身をやなさまし
　上の久しく渡らせ給はぬ頃秋の夕暮にきんをい
　とめでたく引き給ふにうへ白き御ぞのなよゝか
　なるを奉りて急ぎ渡らせ給ひて御かたはらにゐ
　させ給へど人のおはするにも見入れ給はぬけし
　きにてひき給ふをきこしめせば
四四 秋の日のあやしき程の黄昏に荻ふく風の音ぞ聞ゆる
　と聞きつけさせ給へる御心ちなむいとせちなりし
　とぞ
　御にきにはありける後にまうのぼらせ給へると
　聞えさせ給へどさもあらぬにこと人をなど聞か
　せ給ひて夙めて
四四 鶯のなく一聲にきけりせばよゝ山人や悔しからまし
　いかなる折にかありけむ御硯に入れ給ひたりけ
　る
六四 河と見て影離行く水の音にかく數ならぬ身をいかにせむ
　同じ頃
七四 爭で猶春ひ霞に成にしか思はぬ山にかゝるわざせし
　上より御文のありける御返りに
八四 薄氷に閉ぢたる冬の鶯はおとなふ春の風をこそまて
　服におはしましけるに御とにて内より問遠なる
　御文に日頃同じあつめたることを手習のやうに
　て奉らせ給へりける
九四 立曇るさはの河霧晴すのみ日たけぬ空に程のふる哉
　露も久しき
〇四 吹く風になびく淺茅は何なれや人の心の秋を知する
　誰にいへとか

一五 知なくに忘るゝ物は覺束な藻に住蟲の名に社有けれ
二五 白露の消にし人の秋まつと常世の雁も鳴きて飛けり
　いはむかたなのよや目のみさめつゝ
三五 里わかず飛渡るなる雁音を雲居に聞くは我身也けり
　たぐひあらじかし
四五 うらみつの濱に生ふてふ蕁茂み隙なく物を思ふ頃哉
　あらじ我が身を
五五 長雨する空にも非で時雨るは袖の浦にも波は立らむ
　あはれのさまや
六五 仄かにも風はつてなむ花薄結ぼゝれつゝ露に濡る共
　かきりなりけり
七五 秋の野の萩の下根に鳴蟲の忍兼てはほに出でぬべし
　見苦しのさまやれいの山ふところ
八五 谷河の瀬々の玉藻を搔つめてたが水屑にかならむとす覽
　いかなる事かありけむ
九五 逆さまにいふ共何かつらからむ返々も身をば恨むる
　すけなりがむすめ春まゐらむと聞えてある男に
　つきにけりと聞き給ひて
〇六 むすぶ人ありける物を冬川の春くる風と思ひける哉
　冷泉院の池に浮草のあるをおぼし亂るゝ頃にや
　ありけむ
一六 身の憂に最ど浮たる萍の根なくは人にみせじとぞ思ふ
　同じみにてむかひたる西のたいに堀河殿の北の
　方すみ給ふより
二六 花薄ほどだに遠き物ならば音せぬ風も恨みざらまし
　御かへり
三六 何方の風にか秋は通ふらむ人知れずのみ靡く尾花を
　又野分したるつとめて　北の方
四六 近き野の野分は音もせざりきや荻吹風を誰か聞らむ
　御かへり
五六 蔓れる葛の下吹風の音も誰かは今は聞くべかりける

　又北の方返して歸り給へる又の日
六六 爭でかは人は聞けむ我袖は露おく野べに劣らぬ物を
　雨のふるに三條の宮にて
七六 雨ならでもる人もなき我宿は淺茅が原と見るぞ悲き
　東三條院にて
八六 我ならで又打拂ふ人もなき蓬が原をながめてぞふる
　内にて御まへのふぢをなむ忍びてこく人ありと
　聞かせ給ひて
九六 朝毎にうすとは聞ど藤の花こくこそ最ど色增りけれ
　父宮のおはしける時に母上の御かたちなどを今
　の北の方の語りきこえ給ひて御ぐしのめでたか
　りしはまたあらむととり奉らせ給ひければ
〇七 方もなく成にし君が玉鬘懸もやすると置つゝを見む
　とて奉らせたまふ父宮うせ給ひて又の年の正月
　一日
一七 いむなれど今日しも物の悲きは年を隔つと思ふ也晁
　雪のふる日心細きに
二七 儚くて年ふる雪も今見れば有し人には劣らざりけり
　繼母の北の方
三七 見し人の雪と成にし空なれば降る雪さへも珍しき哉
　うまのかみのはらから少將の宮仕へすべしとき
　かせ給ひてすぎくれのと宣へば　少將
四七 數ならで梓の柚に立ぬとも杉の本をばいかゞ忘れむ
　御返し
五七 忘れじと云にもよらじ三輪の山杉の本には雨も濡晁
　前だいの御そふに御手づから物かゝせ給へる物
　どもを馬の内侍に見せに遣したりければ上の見
　せむと宣はせしをかくれさせ給ひしかばくちを
　しかりしに嬉しくとて　馬内侍
六七 尋ねても跡はかくても水莖の行方も知らぬ昔也けり
　とて中に入れて御文にはしたにたゝのかみのあ
　るに書きつく
七七 君にのみ留めておきし古の絶にし跡を見るぞ悲しき
八七 濱千鳥跡あるをだに留めねば唯白波に返すばかりぞ
　御かへし
九七 古のなきにながるゝ水莖の跡こそ袖の浦によりけれ
〇八 水莖のはかなきだにも消なくに行末知らぬ昔也けり
一八 濱千鳥み馴し跡を沖つ波かくすや淺き磯まなるらむ
　せえう殿の女御の御許に
二八 逆さまに訪ひありやと春日野の野守は如何告やしつ覽
　御かへし
三八 春日野の雪の下草人知れずとふひ有やと我ぞ待つる
　野の宮におはしける頃三條殿よりまゆみの紅葉
　のひとはあるにさして
四八 木枯の風の便りは近けれど人は忘るゝ物にぞ有ける
　伊勢にくだり給ひて同じ宮の御てぐらづかひに
　下りたるに御文のなかにありければ
五八 ふりかへむ人はとふべき雪消の解くる便も滯りけり
　うちにおはせし時ひゝな遊びに神の御もとに詣
　づる女に男まであひて物いひかはす
六八 其かみはさしも思はでこしかどと思ふと社異に成ぬれ
　女のかへし
七八 神代より思ふとだに有物をあたら思に如何なるらむ
　同じひな社の前の河に紅葉ちる所にて
八八 風さへや神のあたりを拂ふ覽早き瀬々にも散紅葉ばを
　馬の内侍山吹にさして
九八 八重乍あだに見ゆれば山吹の下に社鳴け井出の蛙は
　御かへし
〇九 八重乍らあだに見えける山吹の一重心を思ひ社やれ
　久しく里におはしける頃同じ内侍のもとに
一九 夢のとおぼめかれ行世中にいつ問むとか音信もせぬ
　伊勢の後の御くだりのたび昔おぼしいでゝ

二九世にふれば又も越え鳥鈴鹿山昔の今に成にや有らむ
宮御かへし
三九鈴鹿山賤の苧環もろ共にふるには增るとなかりけり
たいわうの宮に
四九大空に風まつ程のくものいの心細さを思ひやらなむ
御返し
五九思遣る我が衣手はさゝ蟹の曇らぬ空に雨のみぞ降る
一品の宮より紙をつがせてこれに物書かせ給ひて
と聞え給へりければことかみをつぎて書かせ
給ひて、宮
六九蜘のいの斯かくべくも有ね共露の形見にけたぬなるべし
御返し
七九かくよりも割なく見ゆる蜘のいを露の形見に見ぞ悲き
伊勢の御くだりに齋院より
八九秋霧の立ちて行くらむ露けさは心をそへて思遣る哉
御かへし
九九よそ乍ら立つ朝霧は何なれや野べに袂は分れぬ物を
桃園の宮に御ことかり聞えさせ給ひて返し奉ら
せ給ふに
〇〇聞馴す程はへにけるとなれど逢ぬ戀路ぞかひ無りける
御返し　あい宮
一〇岩の上に松の譬ひを引懸てよに逢事はたがひしもせじ
伊勢より
二〇人を猶恨みつべしや都鳥有やとだにもとふを聞ねば
御かへし
三〇訪ね共深き心はいせの海の底なる蜃に劣りやはする
みねの君失せ給ひての頃
四〇世中も嚴のなかもはかなくて峯の煙と爭でなりけむ
御かへし同じ
五〇はかもなき世を捨果し人ぞまづ煙と成て先に立ける
一品宮より伊勢の御くだりに
六〇別行く程は雲居を隔つとも思ふ心はよりもさはらじ
御返し同じ折に女御殿より
七〇秋霧と立出る旅の空よりも今はと菊の露ぞこぼるゝ
御かへし
八〇菊にだに置きける露を宜し社後るゝ袖の苦しかりけれ
忍びて下り給へれば尼になり給ひぬと聞きて土
御門といふ
九〇海士小舟なるとに早く漕出る櫂の音に君もいかにぞ
御かへし、宮
一〇淺ましく船流したる蜃よりも我袖の浦のしも、乾かず
兵部卿宮入道し給へりしに伊勢より
一一懸らでも雲居の程は歎きしに見えぬ山路を思遣る哉
女三宮御草子かゝせ奉り給ひけるに葦手長歌な
ど書かせ給ひて奥に同じ所
二一皆人の背き果にし世中にふるの社の身をいかにせむ
伊勢に大淀の浦といふ所に松いと多かりける御
祓へに
三一大淀の浦立つ波の返らすば變らぬ松の色を見ましや
七月七日に
四一わくらばに天の河波よる乍明る空にも任せずもがな
同じ日かたわきて前栽合せさせ給ひけるを雨い
たう降りてその人とまりぬかた人心もとなかり
ければ　女御殿
五一天川昨日の空の名殘にも身にはいかなる物とかは知る
ためちかゃはらからためくに齋宮のかみなり五
月五日參りて宮の御前の遣り水をみかはの池と
なむいふなるを臺盤所に
六一今年生のみかはの池の菖蒲草長き例に人もひかなむ
忍びて下り給ひて女御殿より
七一鈴鹿山ふるの長道君よりも聞ならすにぞ後れ難けれ
くだり給ひはつかなるべし御返り伊勢より

八一鈴鹿山音に聞きけむ君よりも心の闇にまどひにし哉
又御かへし
九一儚くて雲となるとも山彦の答へ計は空にいかにせむ
女三宮御服ぬぎ給へる所一品宮に伊勢より
〇二秋はて、野べの草葉も色變り有ぬ色なる衣いかにぞ
伊勢より麗景殿の齋宮のみやこに
一二浦遠みはるか也とも濱千鳥都の方をとはぬ日ぞなき
御かへし
二二訪來るをまつ程過ば濱千鳥波間に猶ぞ恨みらるべき
内にて何の折にかありけむ
三二こち風に靡きもいでぬ朝舟は身を恨みつゝ焦れてぞふる
父みこうせ給ひて後御返りごとに
四二歎きつゝ雨も涙もふる里の葎の門の出でがたきかな
久しく參り給はざりければ
五二緯を荒み間遠なれども麻衣幾そ度かは袖の濡れけむ
御かへし　女御
六二藻汐やく煙になるゝ麻衣憂めを包む袖にやあるらむ
上の御夢に見えさせ給ひければ
七二ぬる夢に現のうさも忘られて思ひ慰む程のはかなさ
又ことをりに
八二侘ぬれば身を浮雲に做つゝも思ぬ山に懸らずもがな
九二常磐なる松に附てもとふやとて幾度春を過しきぬ覽
御返し　女御殿
〇三忘行く春の氣色に霞むとてつらき吉野の山もとわり
女御かへし
一三常磐山色變らめや春霞たなびく方はことになるとも
池に藤のかゝりたるを　女御殿
二三紫にやしは染たる藤の花池にはひさす物にぞ有ける
女御御方に花のありけるを御覽せむとありけれ
ば梅一枝折りて上る
三三見つゝのみ慰む花の枝ならばつけて心を思遣らまし
御かへし
四三梅の花しづえの露に懸てける人の心は知べ見えけり
春まかで給ひて秋や聞え給ひけむ
五三奉行て秋迄とやは契りけむかりには非ず契りし物を
なやませ給ひける頃上る
六三斯るをも知ずや有らむ白露のけぬべき程も忘ぬ物を
いかなる折にかありけむ
七三いかにぞや名乘其かと問ほむにも忘れる里や蜃は告まし

敏行集

正月一日二條中宮にして白きおほんうちきを給はりて
八三降る雪の簑代衣うちきつゝ春きにけりと驚かれぬる
寛平の御時殿上におほみき給はりて遊びけるに
つかまつれる
九三老ぬとて我身などてか閲きけむ老すば今日に逢まし物か
同じきおほんむ時のきさいの宮藏人のもとにか
め給はせておほみきおろしまうしたりけるに藏
人ども笑ひてかめを御前にとり出でゝともかく
もいはざりければ
〇四玉垂のこ龜や鼓ら小搖ぎの磯の波分け沖に出にけり
同じ御時の中宮の歌合に
一四明ぬとて歸る道にはこき垂て雨も涙も降そぼちつゝ
題しらず
二四幾何の田を作ればか郭公しでの田長を朝な〳〵とふ
賀茂の臨時のまつり
三四千早ぶる賀茂の社の姫小松萬代ふとも色はかはらじ

業平の朝臣の家の女に遣しゝ
徒然の詠めにまさる涙かは袖のみひぢて逢由もなし
返し
淺み社袖はひづらめ涙川身さへ流るゝと聞かば頼まむ
我が如く物や悲しき郭公時ぞともなく夜唯なくらむ
中宮の歌合に
戀わびてうちぬる中に行通ふ夢の直路は現ならなむ
これさだのみこの家の歌合に
我さつる方も知られず倉部山木々の紅葉の散と紛ふに
菊の花を詠ませ給へるに
久方の雲のうへにて見る菊は天つ星とぞ過たれける
同じ御時にきさいの宮の歌合に
何人かきてぬぎかけし藤袴くる秋毎に野べを匂はす
同じおほん時の歌合に
秋の野に宿りはすべし女郎花猶睦まじみ旅ならなくに
秋立つ日
秋きぬと目には清かに見えねど風の音にぞ驚れぬる
これさだのみこの家の歌合に
秋の夜の明るも知ず鳴蟲は我ごと物や悲しかるらむ
同じみこの家の歌合に
秋萩の花さきにけり高砂の尾上の鹿も今や鳴くらむ
女の許に遣しける
我戀の數を數へば天の原曇りふたがりふる雨のごと
近江の關寺にわづらひて籠り侍りけるにまへより閑院のこないし石山にまうで侍りけるを見ておいて遣しける
逢坂の木綿つけに鳴鳥の音を聞谷めずぞ行過にける
心からはなの雪にそぼちつゝ鶯とのみ鳥の鳴くらむ

宗于集

からうじて逢ひたる人のさはる事ありとてえ逢はぬに
東路のさやの中山中々に逢見て後ぞわびしかりける
中宮の歌合の時
つれもなく成行く人の言の葉や秋より先の紅葉成覽
忘草枯もやすると云れもなき人の心に霜は置かなむ
物思ふ頃ひとりごとに
いつはとは時は分かねど秋の夜ぞ物思ふとの限也ける
我戀の數にしとらば白妙の濱の眞砂もつきぬべら也
恨むれど戀れど君が世と共に知ず顔にて難面かる覽かへし
思ふ其戀とも如何雲居より遙けき人の空に知るらむ
逢すして今宵明なば春の日の長くや人をつらしと思はむ
中宮の歌合に
常磐なる松の緑も春くれば今一しほの色まさりけり
雪降て年の暮ぬる時に社遂にもみぢぬ松も見えけれ
旅にまかる人に遣すとて
袖濡て別はすとも唐衣ゆくとな云そきたりとを見む
返し
別路は心もゆかずから衣きたれば涙さきに立ちつゝ
旅にまかる人に扇にかける
添てやる扇の風も心あらば我思ふ人の手をな離れそ
七月七日曉に詠める
今はとて別るゝ時は天の河渡らぬ先に袖ぞひぢぬる
歌合に
山里は冬ぞ寂しさ増りける人めも草も枯ぬと思へば
今日人を戀る心は飛鳥河流るゝみをに劣らざりけり
むすめのみちのくにまかるに宮より給はせたる

爭で猶笠取山に身を做て露けき旅に添はむとぞ思ふ
笠取の山と頼みし君を置て涙の雨に濡れつゝぞ行く
男伊勢へまかりけるに
君が行く方にありてふ涙河先は袖にぞ流るべらなる
人を思ふ心の我に在ねばや身の惑ふだに知れざる覽
我宿の庭の秋萩散りにけり後みむ人や悔しと思はむ
梓弓いるさの山の秋霧のあたることにや色増るらむ
白露のおかまく惜み秋萩の折ては更におきや増らむ
よそにして戀れば苦し入れ紐の同心にいざ結びてむ
はらからなる人の恨めしきことある折に
君と我が妹背の山も秋くれば色變りぬる物にぞ有ける
我妹子に相坂山のしの湖ほには出ですも戀渡るかな
年月は昔にあらず成ゆけど戀しきとは變らざりける
朝まだき露わけゆける唐衣ひるま計の戀しきやなそ

清正集

ある所にてみちの國の守のせせられけるに
假初の別とおもへど武隈の松に程へむとぞわびしき
まらうどゝもの家にきて月出でなば歸りなむと
云ひければ
月影をまつ程計り立止る君が爲にはいでがてにせよ
正月山寺にこもりたりけるに京よりいかに鶯の
聲聞きたりやといへりける返事に
鶯の鳴く音だにせぬ我が宿は霞ぞ立て春と告げつる
天暦の御時の屏風に
春霞けふぞ立ける春日野に若菜摘まむと急ぐべらなる
紀の國にて子の日しけるに
僊くや今日の子日を過ぐさまし名草の濱の松徹せば
子日しに古つる野べの姫小松引でや千代の影を待たまし
ある屏風の歌
石上ふりにし里ゝきて見れば昔かざしゝ花咲にけり
おなじ屏風に、歸る雁
里遠み雲路過行く雁がねは同じ旅とぞかへる聲する
三月人の散る花見る時は菅の根の永き春日も少なかり鳧
散ぬべき花見る時は菅の根の永き春日も少なかり鳧
同じ頃藤壺の藤の賀の宴せられけるに
こむらさき昔の色もあせずして立歸りつゝ匂ふ藤波
影見えて春は行かなむ水底に匂ふ藤波折もとむべき
款冬
春風を八重立波の色にさへ色ときよする井手の山吹
家にさくらの木植ゑたりけるに花の咲かざりければ
いつしかと植て見たれば若櫻咲ずて春の過ぬべき哉
同じ頃御屏風の歌
卯花の盛りに聞けば郭公夜深かるねにあく人ぞなき
人の家に前なる小柴垣にいと白う卯の花さきかかりたり、月夜に
孰れをか分きて折まし卯花の咲ける垣ねに照す月影
郭公の聲きく頃こき殿の女御御かたなりける人よみけるに
郭公兼てし契る物ならば鳴ぬ夜さへは待れざらまし
うちの人兵衛
里めぐりなどか來鳴かぬ郭公人の心を空になしつゝ
女房のしりたるに物いひける程に親めきたりける人の聞きつけてゐて入りにける朝に
郭公かりし波の心はつらけれど少しも寄せし聲ぞ戀き
月まちて歸らむといひけるほどに郭公の聲しば

しば聞ゆ
四〇夏の夜の月待つ程は郭公我が宿計り過ぎがてに鳴け
　昔知れりける人の家へ行く道にいみじう荒れたる所にて鷹を放ちてありければ
三〇夏草の茂りのみます我宿を分けては人の狩に社こめ
　かへし
九〇箭鷹のすゝろありきにあらば社狩とも人の思儆されめ
　右の大臣の御賀の頭中將のし給ひける屏風に
七〇夏の夜も涼しかりける山川ぞ波の底にや秋は宿れる
　五月鞍馬といふ所に詣でたりけるに女どもまうでゐたるに郭公の聲す
八〇五月闇鞍馬の山のほとゝぎす覺束なしやよはの一聲
九〇鞍馬山暗く越ゆれど郭公語らふ聲をそれと知らずや
　國へ下りけるに人々まうできて別惜みけるに郭公まつ心を
〇一さよ更けて今はなかなむ時鳥別を惜む聲と聞くべく
　七月七日たなばたの心
一一とせに一夜のみあゝ七夕を立ちな隠しそ天の河波
　同じ心の屏風に
一二天の川霧立ち渡り渡りては誰が衣手かひぢ増るらむ
　雨うちふる夕つ方まらうどゞもきて酒のみなどしける折に月の雲隠るゝに人々かへる
一三天雲の立ちのみ騒ぐ秋の夜は月影さへぞしづ心なき
　天暦の御時にかたわきてせざい合せさせ給ひけるに中宮の御方に花の枝にてふのかた作りてつけさせ給ひけるに
一四九重に露を澄けばや花の色の外の秋には匂ひ増れる
一五百敷に花の色々匂ひつゝ千とせの秋は君がまに〳〵
　内の御屏風に
一六秋の田の只管にこそ思つれ假にと人に見えにける哉
　九月ばかりに人々あまた集まりなどして志賀の
　山ごえしけるに紅葉の色うみに映りたる
一七もみぢ葉の紅深き色みれば水底までや霜はおくらむ
　十三のみこ
一八よも山の紅葉は多く見つれども水底の霜深き色かな
　又人
一九上は霜したは水うみの波數に折返しつゝ染める錦か
二〇玄ぐるれば色増り鳧奥山の紅葉の錦ぬれば濡れなむ
　同じ頃山へ詣でける道に風うち吹きて紅葉散る
二一紅葉ばの絶ず山路に散かふは錦をたちて行ば成べし
　九月九日
二二延ぶときく齡に添て露けきは年と共にぞ戀増りける
　うちの紅葉あはせ九月二つある年
二三紅のやしほの色はもみぢ葉の秋加れる年にぞ有ける
　紅葉惜みに山里へいできて
二四風吹けば瞥と散かふ紅葉こそ過行く秋の手向也けれ
　ある所のかんしに、雁、秋風
二五とこよ出て雁の羽衣寒き上に心して吹け秋の夜の風
　松と竹と植ゑたる所に女房みる繪に
二六常盤なる松と竹とを宿に植て秋はくれ共物思もなし
　閏九月内にて別惜む頃
二七秋日の日數餘れる年なれど今日の暮るは惜くぞ有ける
　に
二八むら乍ら見ゆる紅葉は神無月まだ山風のたゝぬ也鳧
　殿上の人の殘の菊を惜みけるに
二九菊の花いかにとゝへば九重に移ろふ色の限なりけり
　繪に神樂の所
三〇榊葉の香をとめくれば千早振神の忌垣にさしてきに鳧
　師走ばかりに前の梅に雪ふりかゝりたるを見せしに
三一梅枝に分きてふらなむ白雪は春より先の花と見べく
　内に十月十四日に壺せさいの菊のゑに

三二九重に移ろふからに菊の花いづれの色に心染むらむ
　物へまかりける秋
三三旅にして物思ふ程に秋の夜の有明の月も出にける哉
　内に宇佐の使のさゝれけるに
三四限あれば行てはきぬゝ道なれど孰の旅か惜まざるべき
　田舍へ行く人に物などやるとて小うちきの袂に
三五君が爲いのりてたてる唐衣別の袖やたむけなるらむ
三六東路のかりの旅とは思へども今こむ空を詠むべき哉
　又こと人に
三七唐衣馴れにし人の別には袖こそ濡るれ形見とも見よ
　返事
三八形見には慰むやとて唐衣きるにしもこそ濡増りけれ
　こと人のくらのうはしきに
三九葦たづの千年の水に影みえてとく立ち歸れ岸の白波
　知りたる女房田舍へくだる
四〇有ながら逢見ぬ程もたへぬ身は別の程を何に譬へむ
　五月ばかりにこと語らはむと一聲もせずといへ
　りける女
四一人知れぬねやは絶する郭公唯明ぬ夜の心ちのみして
　服なりける頃とはずと恨みて山吹をおこせたる
　人に
四二云かひもなき世中に生しより梔子に咲花さへぞ憂き
四三須磨の浦に蜃のこりつむ藻汐木の辛くも下に戀渡哉
　人に
四四五月のころ人に
四五鳴初めし宿をこふてふ時鳥夜深き聲を誰に聞かせむ
　かへし
四六郭公とはぬ折だに忘れずこと語らひし夜はの一聲
四七服なる頃久しういはで女に
四八墨染の衣手そぼつ物思ひ覺つかなくはなりにける哉
　ひろはたの御息所の御曹子にあこきといふわら
　はに文遣すとてすまといふ殿守遣して
四九須磨の蜃を知べと思へば渡つ海の底のみるめは疑もなし
　又人にいかゞありけむ
五〇命をばあだなる物と聞しかど憂身の爲は長くぞ有ける
　また人の返しにこそあめれ
五一逢見ても逢でも遂に別れぬる習し計の世をな恨みそ
　いと忍びに語らひける女に親こと人にあはすべ
　しと急ぎけるを聞きて
五二我ならぬ人にとくなと結び置し君が下紐許すなる哉
　返し
五三結ぶ共とく共知らで下紐のよに亂れつゝ物を社思へ
　人をいひけるに否いとあだなりと親せいしけ
　るを聞きて
五四つれもなき人に負じとせし程に我もあだ名は立ぞしにける
　人のむすめ今裳きむ程を念じ給へと云ひけるも
　なごきてける後さへつれなかりければ
五五蜃ならで底の玉藻も潜く也今はみるめの方を尋ねよ
　返し
五六汐馴の蜃に有ねば今や又みるめ刈らむ方も知られず
　四月まつりの日
五七千早振神の心を知らねども猶ねぎごとは賴まるゝ哉
　齋院の女ずのその院のゐ司を男にてありと聞く
　に
五八千早振神も知りにきゆふ禊しめの程かく影な離れそ
　秋立つ日人に
五九獨ぬる床は草葉にあらぬ共秋くる宵は露けかりけり
　濱の眞砂のかず知らむと賴めたる女のもとに
六〇忘れじの長き例に譬へこし濱の眞砂や數つきぬらむ
六一淺茅生の床の夜床の荒しより我も齊の無きとかは見む
　人のもとにいきて夏頃忍びたりけりと聞く人靜
　まる程にいたう更けてやう〳〵夜中ばかりにい

であひたり

〇六短夜の殘りすくなく更け行けばかねて物うき曉の道

年かへりて物いはむと頼めたる女に師走に

一六花さかぬ松の立枝も我が如や年の此方に春を待らむ

二六葛城やくめの繼橋つぎ〳〵も渡しも果てじ葛城の神

（かへし）（仙野本歌）

三六葛城やくめの繼橋ならなくに渡しはやまじくめの驛路に

近江へくだりけるに心見のわたりを過ぎけるに

夜いと深し

四六明ぬとや心み迄は來にけれどまだ深き夜の渡り也鳧

五六又山井といふ所にみちに人にあへり

六六皆人の結びて過る山の井に我打解けて影を見えぬる

ゑに

六六行人も歸るも見ゆる淀河は波の心もいとなかるらむ

ある女に

七六住の江の岸折返し返しても立寄らまくのほしき君哉

返し

八六打しきり立寄りてとも岸遠みよそにぞ返る沖つ白波

いかでと思ひける人にはつかにあひたりけれど

いらへなどもことにせざりけるに月もおぼろな

り

九六覺束な曇れる空の月なれば心やましきよはにも有哉

卯月のみあれの又の日ついでありてなるべし

〇七千早振神に祈し逢事は草葉につけて今日ぞ見ゆめる

返し

一七皆人のなべてかざせば蓑草孰れをそれの印とかみむ

ある所にて琴などひきて遊ぶに夜ふけて月も入

りぬうちの人々も入りぬるおとしけるに琴を調

べていだしたるに

二七山の端に入と入ぬる月なれば調べて出すともかひなし

三七逢坂の關路に年はへぬれ共今日の清水やなほ流さむ

紀のかみになりてまだ殿上もかへりせで

四七天つ風吹飯の浦に住たづのなどか雲居に歸らざるべき

天曆の御時の中宮の歌合にかちかたに富士

の山ぢんして作りていたゞきよりいだせる煙の

下にうちの御方に

五七世に人の及びがたきは富士の山麓に高き思なりけり

月夜に白ききぬどもの限りきたる女のあまた出

でゐたりける一人がもとにつとめて

六七誰となく朧に見えし月影にわくる心を思ひ知らなむ

興風集

寛平の御時の中宮の和歌合に

七七咲花は千種乍らにあだなれど誰かは春を恨果てたる

八七春霞色の千種に見えつるはたなびく山の花の影かも

九七聲たて〻鳴けや鶯一年に二度とだにくべき春かは

〇八契りけむ心ぞつらき七夕の年に一度逢ふはあふかは

一八白波に秋の木葉の浮べるは墨の流せる舟かとぞ見る

二八君戀ふる涙の床にみちぬれば澪標とぞ我はなりぬる

三八浦近くふりくる雪は白波の末の松山こすかとぞ見る

四八死る命いきもやすると試に玉のを計逢むと云はなむ

同じ御時にふる歌奉れと仰せごとありければ立

田川もみぢ葉流るといふ歌に書きて同じ心に

五八深山より落ちくる水の色見てぞ秋は限と思知りぬる

六八折からに我名は立ちぬ女郎花いざ同くは花々に見む

七八秋野の露におかるゝ女郎花拂ふ人なみ侘つゝぞふる

八八女郎花花の心のあだなれば秋にのみこそ逢渡りけれ

貞保の親王の后の五十賀奉り給ひけるに御屏風

の繪に櫻の花見たる所

九八徒に過る月日はおほかれど花みて暮す春ぞすくなき

親のまもりけるむすめをいと忍びてあひて物い

ひける程に親のあふといひければ急ぎていりに

けるそのも返すとて

〇九逢ふ迄の形見とてこそ留めけめ涙に浮ぶ藻屑也けり

一九恨ても泣ても云む方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして

二九何か其名に立つとの惜からむ知りて惑ふは我獨かは

三九木葉ちる浦に波立秋なれば紅葉と花も咲紛ひけり

四九山風の花のかさそふ麓には春の霞ぞほだしなりける

五九湖くこき色は紛へど花といへば一つ顔にも見え渡る哉

六九きつゝのみ鳴く鶯の古里は散にし梅の花にざりける

七九山里は春のほだしに閉られて住かまどへる鶯ぞ鳴く

八九飽ずして過行く春を直ちあらば今年計の秋をよかなむ

九九嵐吹く山の麓にちる雪はとく散る梅の花かとぞ見る

〇〇夏夜の月は程なくあけ乍ら朝のまをぞ呻ちよせける

一〇夏の日の光惜まず照る月は流るゝ水に影ぞうつらふ

二〇睦まじく閑ひ隔てぬ杜若誰が方にかは移ろひつらむ

三〇山の井は水なきとも見えぬ共秋の紅葉の散て隱せば

四〇白波に折はへ蜑の濱舟は命にかはるみるめ刈りにぞ

五〇夢にだに人の思に任せなむ見ては心の慰む物から

六〇身をも且思ふ物から戀といへば燃る中にもいる心哉

七〇山川の菊の下水いかなれば流て人の老はせざらむ

八〇大ぞらの月の光を足柄の山のこなたは秋にざりける

九〇涙川底はかゞみに清けれど戀しき人の影も見えぬを

一一小倉山嶺の紅葉は散にしを照てぞ見ゆるしきにしければ

二一浦近く立つ朝霧は蒸鹽やく煙とのみぞ過まされける

三一筑波ねの陰に生にし宿なれば光のおふる物とだに見ず

四一霜の上に跡踏とむる濱千鳥行方もなしと音をのみぞ鳴

五一戀しとも今は思はず魂の相見ぬさきになく成ぬれば

六一衰とも心も行ぬ夢路をばはかなき物とむべも云けり

七一歎きみる斧の響の聞えぬは山の山產いづちいにしぞ

八一逢見てもかひ無りけり鳥玉のはかなき夢に劣る現は

九一葦鶴のいづれの朝か鳴かざらむ思ふ心のゆかぬ限は

〇二夢にだに逢見ず乍ら消ねとや戀きとの唯にさむらむ

一二泣侘て世を空蟬となりぬれば恨むるとも今は聞えず

二二侘ぬれば强て忘れむと思へ共夢てふ物ぞ人頼めなる

三二うきてぬる鴨の上毛に置霜の消て物思ふ頃にも有哉

四二こぼれてもあれば譬て慰めし長柄の橋も今は聞えず

五二戀しさに身を投つべし慰むることに從ふ心ならねば

六二身は捨つ心をだにもはぶらさじ逐には如何なると見べく

七二誰むかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに

八二鶯は欺かるらむ白雪の花と見るまでえだにふれゝば

他本歌

女の許より心ざしの程をなむえ知らぬと申した

りければ

九二我戀を知むと思はゞ田子の浦に立くる波の數を數へよ

是則集

春　柳、櫻、桃、松、鶯、

亭子の院の歌合、柳

一三淺緑そめてみだれる青柳の糸をば春の風やとくらむ

山里の花を見て

二三折取らば惜げにも有か櫻花いざ宿借て散る迄に見む

前栽の中に櫻の咲きたるを見て

三三櫻花けふよく見てむ呉竹の夜のまの程に散も社すれ

花借む所にて

二三且見つゝ千年の春を暮す共いつかは花の色に飽べき
　亭子の院の歌合に
三三花の色移し留めよ鏡山春の過なむ後も見るべく　六番のかげ
　おなじ歌合に、桃
四三三千歳になるてふ桃の今年より花咲春に逢にける哉
　鶯、亭子の院の歌合に
五三きつゝのみ鳴鶯の故郷は散りにし梅の花にざりける
　松、まつのもとにこれかれ侍りて
六三深緑常磐の松の蔭にゐて移ろふ花をよそにこそ見れ
　夏　ほとゝぎす
七三山かつと人はいへども郭公まづ初聲は我のみぞ聞く
　秋　時雨、霧、山、河、紅葉、菊、鴈、
　亭子の院の歌合に、しぐれ
八三初時雨ふる程もなく佐保山の梢數多に色づきにけり
　露、秋の野に露多く置きたる所
九三秋の野に置白露の消ざらば玉に拔ても懸てみてまし
〇四大方に置白露も今よりは心してこそ見るべかりけれ
　山、秋山のぞむ、大井河の行幸に
一四秋の色は千種乍らにさやけきを誰か小倉の山と云覽
二四秋の水に浮ぶ大井河の行幸に
三四鵈方かとまり成らむ山風の拂ふ紅葉にふな惑ひして
　紅葉
四四峯高み行て見るべき紅葉を我がゐ乍らも翳しつる哉
　秋の歌とて詠める
五四佐保山の柞の色は薄けれど秋は深くもなりにける哉
　紅葉大井河に散る、行幸あり
六四紅葉の散りて流るゝ大井河せゞの白波影とゞめなむ
七四紅葉の流れざりせば立田河水の秋をば誰か知らまし
　菊、きくの花殘りたる、大井河の行幸に
八四影さへに今はた菊の移ろふは渡の底にも霜や置らむ
　鴈、旅の鴈、大井河の行幸に
九四幾千里ある道なれや秋ごとに雲居の旅を雁の鳴らむ
十四刈てほす山田の稻のこき垂て鳴こそ渡れ秋のうければ
　冬　雪、氷
　大和の國に罷りける時雪の降りければ
〇五朝ぼらけ有明の月と見る迄に吉野の山に降れる白雪
　奈良の京にまかりて宿る所に
一五三吉野の山の白雪積るらし故郷寒くなりまさるなり
　氷
二五冬の池の上は氷に閉たるを寄でか月の底に見ゆらむ
　祝　苔、巖
三五君が代は天の羽衣稀にきてなづとも盡ぬ巖ならなむ
　戀、知られず、知られたり、あふ、あひての後
四五わたの原潜きて知らむ人知れず思ふ心の深さ比べに
五五我戀をくらぶの山の櫻花まなく散とも數はまさらじ
六五を鹿臥夏野の草の道みえず繁き戀にも惑ふ頃哉
七五秋山に朝立霧の峯こめて晴れずも物を思ふべらなる
八五霜枯の淺茅がもとの刈萱のみだれて物を思ふ頃かな
九五枕のみくつと思ひし涙河今はわが身の沈むなりけり
〇六紅の色に移りてこひねとも涙のしるく見する也けり
一六かつ消えぬ涙か磯の飽故海てふ海はかづきつくしつ
二六片糸を此方彼方により懸て逢ずば何を玉のをにせむ
三六谷川の岩間を狹み山川の音にのみやは聞き渡るべき
四六戀しさの限だにある世也せば年へて物は思ざらまし
五六逢事を長柄の橋の長らへて戀渡るまに年ぞへにける
　あふ
六六逢見ては慰むやとぞ思しを名殘しも社戀しかりけれ
　逢ひての後あひ難き女に
七六霧深き秋の野中の忘水たえまがちなる頃にもある哉
八六秋夜を睡ろまでのみ明す身は夢路とのみも頼まざり鳧
　雜　かぜ、わかな
九六忘るなよ別路に生る葛のはの秋風ふかば今歸りこむ

松、つる、かめ、さる
　えの松おいたる、大井河の行幸に
〇七此川の入江の松は老にけり古き行幸のとや問はまし
　つる巣に立てり
一七山近みおりゐる雲と眺鶴の立てる河べも人や見らむ
　鴎人に馴れたり、同じ行幸に
二七行く舟になるゝ鴎はさす棹に返す水こそ過たれけれ
　さるかひになく、おなじ行幸に
三七秋山のかひに見返り鳴聲を夜深く聞て袖ぞ濡れぬる
　雖レ在レ集不レ載二家集一歌
四七花流す瀬をも見べき三日月のわれて入ぬる山の遠方
五七うら枯るゝ淺茅が原の刈萱の亂れて物を思ふ頃かな
六七その原や伏屋に生ふる帚木の有とは見えて逢ぬ君哉
七七枕のみ浮くと思ひし涙川今は我が身の沈むなりけり
八七水底に沈める花の影見れば春は深くもなりにける哉
九七ねて待ちし廿日の月の僅にも逢見しともいつか忘む
　心もえず
一八年つまば誰かは雪を拂ひ敢む菊の上とも習し社みめ
　昨日つかひし木賊のおちて露のかゝりたりける
　をあしたに人の取り上げたりければ
二八信濃野の木賊の上に置露の磨ける玉と見えにける哉
　雨のふりけるよの宵に月の入るを見て詠める
三八大空に散にし花や匂ふらむ雲の春とも見ゆる宵かな
　竹のある所にて風の吹くにいみじうさゝめきけ
　れば
四八風吹けば波やはさわぐ河竹の流るゝ水に聲の通へる
　十月に女院御はかうありて菊合せ騒ぎければ
五八神無月ほとけの限顯はるゝ庭のまもなく花ぞ降ける
六八いつのまに法に移ふ菊なれや過し物ども見えぬ今日哉
七八覺束なにしきつらむ紅葉見に霧の隱せる山の麓に
八八君しあれば並木の花も頼まれず痛くな吹そ木枯の風
　いと許多あれどかゝればとゞめつ源宰相右兵衛
　督俄にをみに召されてそのあをすりを朝のまに
　せめられて病をかさぬるに氷のつきたれば
九八限なくとくとはすれど足引の山井の水は猶ぞ凍れる
　といふかの御上のかくなむとあれば
〇九足曳の山井に凍る水と云ばとく共袖の程ぞ知らるゝ
　人の許にきける人の三年ばかり更に見えざりけ
　るを見むとてあすは明けはてゝくるまはゐてこ
　といひたりければあやしう久しき事と思へど人
　をやりてそひてことといはせたりけるをつとこら
　へて内にもえ入らでみしていとねたかりければ
　男藤大納言とか
一九岩橋のよるの契も絶えぬべしあくる俤しき葛城の神
　返し　を　と　こ
二九秋立てば見しとや思ふ葛城の神の夜にて已ぬべき哉
三九此の同じ人なほし妻にてきて今宵は内のとのゐ

なりこれをきたれとて蒔繪の鞘に沈の束さしたるかたなをおきていぬるが三日ばかり音もせざりけるに刀とりてみけるに錆びたりければ、女

三九 とき置し鞘の刀も錆に見さして久しく程やへぬらむ

とてやりたりければ

四〇 かぬ弱み返る刀に身を做て束のまもなく戀や渡らむ

をとこ心ちそこなひて四五日ばかり内へも參らでありけることといひてありける書に

五〇 斯てもや消えむと思ふ白露の起居て結ぶ水莖をみよ

なん な

六〇 露により暮るゝ影まつ草の葉に斯る折しも消ぬと云べき

これを見て三日なむなきしといひけるこそそらごとなれ

七〇 沼ごとに袖ぞ濡ぬる菖蒲草心に似たるねを求むとて

返し、女

八〇 苦しきに何求むらむ菖蒲草安積の沼に生ふと社きけ

美濃の守よりみつめなくなしての頃霜のいみじきあしたに、人

九〇 此頃のよはの寢覺は思遣るいかなる鴛か霜拂ふらむ

返し

一〇 冬の夜の霜打拂ひなくとは番はぬ鴛の業にぞ有ける

これなかの朝臣病に煩ひて三河のしほぢをよびに宮權大進むまさをやりていはせけるに更に聞き入れざりけるを强ひていひければすこし宜しきを賴にて曉にといひてねぬるに夜なかばかりに起き出でゝあらひがねうちて佛に物申す音しければさや〳〵と思ふに音もせずなりにけり弟子をおこしていづちかおはしぬるぞとてはもとむれどなくなりにけり淺ましうて書きおき逃げにけり

一一 長き夜の道に惑へる我おきて行隱れぬるよはの月哉

入道の返しあしたにぞありける

二〇 重なれるみ山隱れにすむ人は月を敎へむ扇だになし

二條の右の大臣八月ばかりに參り給うて歌一つ詠ませて給はらむと上にせめ聞え給へばせむ方なくて草の葉の上にとありし御返りはこれなり

三〇 露深き草葉の上もいひ難み何につけてか秋を問らむ

四〇 秋の夜の草葉の上の露の身を其に付ても語置かなむ

かくいひこめられぬとていひ給ひぬ宣耀殿の御局より御禊の日蠶に葵をかけて上に進らせ給へるおろしを給はせたるに

五〇 瑞垣のあたりに馴ぬきねよりも神にいち著し今は翳さじ

返し忘れにけり

又五月五日さうぶの根を釜につくりて梅の枝にすゑ給へる

六〇 梅枝にとり違へたる郭公聲のあやめも誰か分くべき

返し

七〇 名告せで梢にこずば郭公春かけてこし鳥とかや見む

すみやう經よませむとかやぞありし宮にすりの藏人とてさぶらひし人の大ばん所にひとりありけるをそれとらへよとゆきよりに仰せられければとらへて更にゆるさでふしぬるを夜一夜いとほしと思ひふしておきていく程にいひける

八〇 長かれよ朝ねの髪の千代結ぶ契と見れば悲しかり鳥

返し　ゆきより

九〇 長かれと云すば長く非じとや文なく君がめには見ゆ覽

上とのゐとておまへに近く候ふ人々あやしきくれの枕を落して出でたるにつけたるを人々彼の上にやりたり

一〇 道芝やおどろの髪に馴らされて積れるか社草枕なれさぶらはざりし人々はいみじう笑ふにあるたいふのうへにおきたりければとのゐせしはからかりて返しは枕定めずとぞ見えしや

殿上にすみもてくる男を遲く參りたりとてその時に候ひし藏人今は上に參りしよりその人のとらへてかみに繩をゆひつけて許さゞりしかばものより除かせ給うてこはたかゝらせ給ふかともこり侍るべくとて許さゞりしかば女房方より

一一 大原やすみのかしらの繩許せこのめに涙浮ぶと云也

といはせたりしかば許してけり我には思ひましたりと仰せられしこそ

人の許に罷りたりける男の見侍りけるを知らでほかげに小侍從といふ人のさし出でゝ人に物いひける、男

二一 みつの江の蜃に問はゞや白波の夜光るてふ玉も斯やと

いかでいはむなどいひけるにねたりける寢言に

三一 今告む蜃のみるめの耻かしく袖に止らぬ玉も散けむ

宮きくのことなり

多武の峯にある大とこのさり會の香爐にいれむとて梅花方さぶらふなるしばし給はらむと申したりければ

四一 春風に散りはてにけむ梅の花たゞか計ぞ枝に殘れる

中將の命婦に馬の內侍の八月ばかりにいひやる

見染めることも秋とか

五一 枝繁み下にもえつる萩の花秋知りそむる人や戀しき

返し

六一 色待で來にし消る雪ならば遂に錦は見てややまゝし

えあはぬ人にいはむとて男のいふ

七一 今日は我が消果てなまし中々に後を賴まむ命知ぬに

殿上人桂より舟にて渡るに星の影のみえければ

ゑもの督公任の君

八一 水底にうつれる星の影見れば

あまの戸わたる心ちこそすれ

をぐらの森のおぼつかなさに返したれそや

九一 姤き我が小倉の里に宿りして紅葉の色をよそに聞哉

初雪のあしたに昔を思ひでゝ

一〇 珍らしと云べけれ共初雪の昔ふりにし今日ぞ悲しき

さねかた

一一 ふりぬ共消せぬ物にあらませば袖は濡じな今日の初雪

みちのぶの君人の許におはしてあしたに

二一 露よりも儚なかりける心哉けさ我何し起てきつらむ

かゝる人々もおはせぬを思ふにいと悲しくてかきもやられず同じ人服ぬぎ給ひし

三一 限あれば今日脫捨てつ藤衣涙の果ぞ知られざりける

又みちのぶの君實方の君に三月中のほど

四一 散殘る花はありやと打群れてみ山隱れに尋てしがな

かへし

五一 まだ散ぬ花もや有と尋見むあなかま暫し風に知すな

ためなかみちの國のかみにてくだる四條の大きおほい殿のせんし給ふに

六一 武隈の松を見つゝや慰めむ君が千年の影にならひて

正平五年の程はいみじう人しぬその頃木工のくら人里より

七一 起も敢す儚き空の露を爭で貫きとめむ玉のをもがな

さた門宮

八一 草の葉に非ぬよなれどもすれば露は我身の上かとぞみる

返し

九一 己がまだ消ぬに消る頃なれば露社人を露と見るらめ

これは皆人の扇にあなり此のかへり、宮の御

一〇 今はさは止るべきよの玉ならず白き蓮の露を見らむ

かんげゆのぞうにてありし　むらよ

一一 常よりも常なき頃の露のみたいかに云てか日をば暮さむ

かくいひし人のなくなりにしが
二見る程も無て消ぬる露よりも誰か此世に遂に止らむ
宮の御元結よりて參り給ふことはたいふどのなむ仕うまつり給ひしを北の方うせ給うて忌はてゝの程にめしたるに仕うまつりおくとなむみ侍りおきし今もとめて參らむと聞えおき給ひて三四日ありて物の中より侍りけるを見給ふるにも哀なること多くなど聞え給へるに
三干侘る袖の中にや有つらむ是をぞ玉の緒にはよらまし
御返し
四玉の緒を君が爲にとより置て衣の裏を見すぞ成にし
宮に宮の御いかの事爲たふの君仕うまつり給ふに松の實入りたるをそのかたに作りてありし時
五時いきて長閑き物は天の下ちよまつ枝の蔭にざりける
その返しを仰せごとにて
六誰にかはこゝらの年を數へこむ松の一葉を千世と置つゝ
東三條の院に渡らせ給ひて池の浮草どものむつかしげなる拂はせ給ひていとをかしければ
七君住めば濁れる池も無りけり汀のたづも心してゐよ
女の許に物をだにいはむとて來たりける人旦に
八消え返りあるかなきかの我身哉恨みて歸る道芝の露
かへし
九衰ども草葉の露や問れまし道の空にて消なましかば
おなじ人
〇ひたぶるに死なば中々遮莫生きてかひなき物思身は
かへし
一なくなればなげの哀も云るゝをさは心みにあくがれ魂
かへし
二身の憂に這伏す菫の假にても賴む計の言の葉ぞなき
男松をむすびて
三染め返し幾しほへてか石上おふる松葉を結びおく哉

返し
四磯のべは結びもしてむ高砂の松には及ぶ人や無らむ
同じ人女のもとにきてかゞをたゝきけるに明けざりければ歸りてあしたに恨みたりければ
五尋ぬべき人も覺えぬ我門の夜は葬の根こそさすらめ
返し
六草葉だに心有らし八重葬いる人わきて聞の戸させば
といひてきけるになほ語りければ
七此世にはつきしも果じ思ふと命の後はいつか絶べき
返しなるべし
八我死なば孰こをはかと尋れてか此世に盡ぬとも語らむ
同じ人常にいへば今などいふがことさまになり
ぬべしと聞きて
九我や明し浦島の子が玉櫛笥結びし袖の空に見えねば
〇玉櫛笥袖から雲の立しより空の長めを刈ぬ日ぞなき
かへし
一空にこそつらき數かけ河鳴の百羽掻には過やしぬ寛
扇の縫ひ物したるを持たせ給ひてこれ見よと仰せられて給はせたるに郭公の卯の花くひていく
かたありたゞにやはとて
二垣ね出る便に移る卯花を惜むと聲は立てぬなるべし
これを實方に給はせたれば
三時鳥なくにし散らば卯花の垣ね乍らぞ聞べかりける
住吉に故大將殿のまうで給ひけるに夕日の入る
程に空いと心細うて松の下に浪の寄するを
みちのくのかみためなか
四松見れば焦れぬ物を住の江のいかなる波か靜心なき
三條の中納言殿にありし大夫君蜘蛛の巢に花を
ふきかけたるを見て
五小蟹の蜘のをはたは薄けれど散來る花は洩さゝり鳧

實方の中將人のがりやらむとてためたふの君に
かくいはむはいかゞといひける歌
六爭でかは思ありとは知すべき室の八島の煙ならでは
をかしなどいひて爲たふの君わが懸想する人の
がりやりてけり女も聞きてわらふ程にわたりけ
ればこの頃は室の八島も盜まれて
女
七と云ひければ
えこそはいはね思ひながらに
かねもりが大井にてよめりし
八大井河そま山風の寒けくに岩打つ波を雪かとぞ見る
おなじ人大監物なりし時內侍所にみがきまうし
に大舍人のひきいでに來たるにある人內侍のすけの知るやうありてそこにありける折なりければまへにありけるたちふといふうりを黃なる色紙につゝみて大舍人なりける翁にとらせたりければ藏司につきてそこよりいふ
九山城のとはに通ひてみてしがな瓜作ける人の垣ねを
かへし
〇常とはにゆけば也鳧瓜作り其となきに立てりしや君
又の日つかさめしに駿河守になりて喜び申しに
參りて袖より落しおきたりしはいとこそ
一瓜つくる園生も知ず人しれず落る涙やそぼつなるらむ
いとからくとぞありし七夕のあしたに春宮にて
ひんがしにたちはきのをさのありしかたにひきたる糸にくもの巢をかきければゆきよりにしかけ〳〵となむおとりたてると仰せられしがば
二さゝ蟹のもろてに急ぐ七夕の雲の衣は風やとくらむ
とありしを實方の君に語り給ふめりしかば立ち
ながら
三彦星のくべき宵とや小蟹の雲のい掻も懸て見えけむ

藤大納言少將にておはせし程に女御の御方七夕
祭したる所にきて物いはむとありしかばすの本
にて何かといひておはしにけるをそれより給へ
りけりと人々聞き給へりけりとて朝によろづの
ちかごと文に書きて見せよとおぼしくてあり
四七夕にかしつと思ふ逢事を其夜なき名の立にける哉
あるやんごとなき人の許に忍びて十年ばかり通
ふ程に今宵かくてといひたりけるをまらうど多
くて遊びしなどしてえさらざりければ又の日そ
のことをいひて今宵は命だにあらばかならずと
女
あるに
五惜からぬ命は我も讓りてむ賴むるとを誰に見せまし
同じ人そのよ物だにいひあへでとぞいひし
六紛夜ひぢ明しつる衣手の今朝も變らぬ程を知らなむ
かへし
七よそ也し袖もやひちしむべ社は爰に涙の留らざり鳧
親の思ひにてれいくる所にえこざりける人この
程にありきしたらばと誓ひけるをうけひかざり
ければつとめて人わりなくと云ひて
八割なしや空言により誓せば今日迄有む物とやは思ふ
とあれば
九誓ても有と賴めばたまさかに神の外なる程にも有けむ
世の中はかなき頃前栽の露を見て
〇七植てみる草葉のよなば知せける置ては消る今朝の朝露
田舍へやる文のあけどころに
一七天川浮木にのれる我ならば君があたりに今はきなまし
志深からぬ男の花染の狩衣せさするやるとて
二七人心うす花染のかり衣さてだにあらで色やかはらむ
とみや殿にて枕のありくさきに書きつく
三七敷島やおどろの髪にならされて積れるか社草枕なれ
ちひさき瓜の黃なるを同じ色の紙につゝみてあ

さみつの少將のがりやるをき丶たがへてよりひらにとらせたれば

[四七]雲のたつ瓜生の里の女郎花くちなし色はくひぞ煩ふ
心ときめきしていひたりしかひなければかへし
もせでとり返してはじめの人のがりやるとて我
がとないひそと云ひければ

[五七]在所細かに驕らしら瓜のつるを尋て我ならさなむ
左近の君にとのたまへりしかば我と知られにけ
りとねたくて

[六七]うり所爰には有じ山城のこまかに知らぬ人な尋ねそ
五月五日

[七七]諸共に逢見ぬ沼のねを引ば忘やしにし長からぬなか
雨降るとてこぬ人のふらぬにも見えねば

[八七]ふらぬ夜の心を知で大空の雨をつらしと思ひける哉
同じ人いみじうわづらひて今日は死ぬべしなた
のみそとのたまへりしかば

[九七]君により暮まつ草に置露のかゝらむ程を如何頼まぬ
文おこする人返りごとをせぬいみじう恨みてこ
たみばかりと云ひければこと手にて

○八踏な見そ渡しもはてぬ岩橋ぞ中々道の空にわびなむ
常陸守なりよりかゝれ侍りし頃

一八のだ人の假に訪くる我宿に今は葎のねこそはふらめ
同じ人のきたりけるにと人のありしかばけはひ
をえていみじう恨み侍りしかば夙めてこれより

二八恨む覽心はまたや解けざらむ置つる霜のけさの寒さに
また人に

三八殊更に恨むともなし此頃の寢覺計りは知せてしがな
宮にて弓いさせ給ふにくらうなるに人召すにお
そければ

四八待つ程に久しかりけり行末のまだ遠ければ武限の松
實方の君親に後れて歎くと聞く頃

五八底はふち淵は瀬ならぬ涙川袖の渡りは有じとぞ思ふ
瓜の青きなるをしのかへりみむきたる由をこ
れはいかゞいふべきと葦手に書きて進らせたり
つれば宮より

六八瓜生野の澤に住ぬるをし鳥の雲居に通ふ心あるらし
かへし

七八心をし雲居としめば葦たづの齡とのみは思ざらまし
おほんいしなどりのいしをつゝませ給ひけるに
三十一ありつれば一つに一文字を書きてまゐら
せける

八八苦むさば拾ひも替む細れ石の數に皆とるちよは幾つぞ
七月七日大入道殿の御いみなる程にすゝきにひ
きたる糸を

九八世中に包まぬ年の秋ならばをかしからまし今日の七日も
文などおこせける人のものにいきて程もなく歸
りきたれば

○九唯今ぞきつると思ふ袖の上の裏上もなく成にける哉
かへし

一九大空の旅の空なる濡衣をたがもとゝてかかたへきつ覽
九月ばかりに同じ男に

二九花薄穂に出に鳧わが爭で人に知られて結ぶわざせむ
返し

三九結ぶともとく共急ぐ花薄まだき穂に出て人に知すな
又かへし

四九穂に出て唯にも非じ花薄風のよするを厭はざらなむ
知らぬとあるかへりごとに

五九頼めとや頼まれじとや定なき命にかゝる心と云らむ
又この頃ものへ行くとて

六九別行くかたしの道に置霜の消えむ雫に袖や濡れなむ
かへし

七九狩捨て行きなむ後の衣手は君一人しも濡じとぞ思ふ

又

八九結ぶ手はとになる共花薄とくる迄だに忘れざらなむ
かへし

九九花薄蜘手に人に結ばれていつかとくると待つぞ儚き
くにより

○〇霜枯におきてこしより獨寢の袖の寒さの增りゆく哉
返し

一〇霜枯の侘しきとは思へ共おきては露の草葉ならぬに

二〇空言と云べけれども神無月思出でつゝ且は知らるゝ

三〇常よりも戀しくなりて神無月絶ずも袖の潤ふなる哉
久しうなりて來りいり道にちりありと女いへば

四〇我ならぬ人も起臥す所には塵のみゐると云ぞ怪しき
かへし

五〇塵ならで又ゐる人もなき物をとに無名も立ぞ侘しき
十月におまへの菊いみじう移ろひたるを見て

六〇誰かかく錦はかけし神無月機おる蟲の聲も絶えにき
子の日をとこ女の許にいひたりける歌は覺えず
女かへし

七〇野べ乍ら契りしとを待ならばつらき心も猶や頼まむ
つゝみの大宮に物聞えけるに四月に時鳥の聲を
ふたりながら聞きたりける程におろかになり給
ひにければ聞えけり

八〇初聲をふしてや聞し時鳥きくにたがはぬ心ち社すれ
泰宮にてなすびのゆゝしげなるにはがたのつき
たるを見て

九〇くひ所みればうねなる老茄植たる人のくへるなるべし
ためよりがいひける

○一人知れぬ心の儘に拾けるかひなからむと思けむやは
かへし

一君はかく忘れ貝こそ拾ひけれうらなき物は我が心哉

二霜亙る二見の浦のをしの上を君より外に誰か拂はむ
せえう殿の人々櫻のうたのもとにするつけたる

三散らで千とせをすぐさましかば
とぞありける殿上の人々のつけゝる

四惜むあまりめや馴れなまし櫻花
をし鳥をこに入れておこせたるに

五人寄れど今は立げもなき鳥のこに籠れるや何の疑ひ
期麥を人のがりやるとて五月五日くすだまにつ
けゝる

六朔麥の今日引植うる菖蒲草澤の物とは思はざらなむ
雪の深きかをたさふやとばかり云て歸りたるに

七行摺に跡尋ぬれば消けるいつから越の方にか有けむ
内に參るに實方の中將月こそいとあかけれとの
たまひしかば

八〇雲の上に誘はざりせば久方の身に添影も送らざらまし
葦たづの雲居の中にまじりなばなど云ひて失せ
たる人あはれにおもほゆる頃長歌

九〇久かたの　空にたなびく　うき雲の　たま消て　思ふことのみ
つゆ草の　露さぞまさる　あら玉の　行く年つきの
春の日は　花のにほひも　夏の日も　木の下かげも
秋の夜の　月のひかりも　冬の夜の　時雨のおとも
世の中に　こひも分れず　憂きとは　つらきも知ぬ
我身こそ　心にしみて　袖の浦の　干る時もなく
哀れなれ　かくのみ當に　思ひつゝ　いきの松ばら
生たるよ　ながらの橋の　長らへて　瀬に居るたづの
鳴き渡り　いづる浮世の　水草みの　我身にかけて
かけ離れ　いつか戀しき　雲の上の　人と逢ひ見て
此世には　思ふことなき　身とはなるべき

○二宵々の夢の魂足たかくありかで待たむ訪らひにこよ

一みるめ刈る蜑の往來の淒ぢに勿來の關も我は据ぬに
醍醐の御時に日でりのしければ雨乞の歌よむべき宣旨ありて
二千早振神もみまさば立騒ぎ天のと河の樋口あけたべ
三遣水に櫻の花の流るゝを見て
四瀧の水木のもと近く流れすば泡沫花を有と見ましや
五入撰集歌
六殊更に恨むともなし此頃の寿覺計りを知せてしがな
七散るをこそ哀と見しか梅の花花や今年は人を忍ばむ

能宣集

小野宮太政大臣の七十の賀し給ひしに左大臣し給ひてよませ給ひける御屏風の歌

春

九たづのすむ澤べの蘆の下根とけ汀蒲出る春はきにけり
十花ちらぬ常磐の山の鶯は霞を見てぞはるを知るらむ

夏

十一夏山の木高き蔭に立寄て見れば千年の影にぞ有ける
十二鶴山の巖の上の紅葉ばは散で秋をぞかぞふべらなる

冬

十三春日野の常磐の松は霜雪のふる年毎に色まさりつゝ
十四同じるゐの竹の杖そへ侍る
十五君が爲今日切竹の杖なればまだつきもせず千代ぞ籠れる
十六屏風の歌よめと侍るに正月子日松ひき若菜摘所
十七引松の千年の春は春日野の若菜も摘まむ物にやは非ぬ
十八二月田つくり侍る所
十九雁がねぞ今歸るなる小山田の苗代水の引もとめなむ
二十三月つごもりばかりに花の下にて惜み侍るとて
二十一散果る花を惜めば大方の春さへくるゝとをしぞ思ふ
二十二四月山里の花咲きたる所を旅人とまる
二十三山近み櫻の花を時ならでふる雪とのみ過まれつゝ
二十四五月五日人の家にさうぶふきて侍り女ども郭公聞き侍るに
二十五菖蒲草引かけたれば子規ねをくらべにや我宿に鳴く
二十六六月はらへし侍る所
二十七御禊する川の淵瀬に引く網を大幣なりと人や見らむ
二十八七月七日たなばたに物かせる所侍るに
二十九棚機にかせる衣の打返し別れてこひむ程のはるけさ
三十八月駒迎し侍る所
三十一九月田舍の家の稻をとるにかりする人のまうできたる女ども侍り
三十二假にとて我宿のべにくる人は稻負鳥に逢むとや思ふ
三十三十月網代に紅葉流れよりたる留まりて見侍る
三十四紅葉のよれる網代は飽ずして過にし秋のせに社有けれ
三十五十一月神祭る家
三十六榊葉の霜打拂ひかれずのみすめとぞ祈る神のみ前に
三十七十二月雪ふる所
三十八新らしき春さへ近く成ゆけばふりのみ增る年の雪哉
三十九又屏風の歌よめと侍るに春稻荷詣でしてかへるもの侍り花の蔭にて休むものある所
四十指てくる稻荷の山の道遠み花のあたりに宿や借まし
四十一春日野に若菜つみ侍る所
四十二新しき春くるとも古里の春日の野邊に若菜をぞ摘む
四十三同じ所に祭の使の歸り侍るに
四十四やゝ少女も霞も共に今日し社春日の野邊に立渡るらし
四十五須磨の浦しほやき侍る所

四十六須磨の浦の藻汐の煙春なれば空に霞の猶や立つらむ
四十七暮の春富士の山近き所に人の家侍り
四十八草深みまだきつけたる蚊遣火とみゆるは富士の煙也鳧
四十九住吉のかたかきて侍る所
五十住の江の年ふる松の齡をば返る〳〵も浪やかぞふる
五十一天の橋立わたりにあまの侍る
五十二誰爲に渡し初けむよさの海の浦に世をふる天の橋立
五十三海のほとりなる人の家見出して侍り
五十四一漁火の暮れば浮ぶ影をこそ天つ星とは云べかりけれ
五十五末の松山に馬乘どもおりて休み侍る
五十六音にきく末の松山今日こそは打くる浪の越々すみめ
五十七浮島の橋わたして侍る所に
五十八浮島と名に聞くれど浪の上に所も去すよなぞ經にける
五十九夏の季の小倉の山
六十紅葉せば紅く成なむ小倉山秋まつ程の名に社有らし
六十一大井川くれくだす人の家侍り男女見侍り
六十二筏おろし明暮下す大井川見なれぞしつる四方の人さへ
六十三嵯峨野に藏人所の人々まかりてお前の前栽ほりに出でゝ
六十四秋毎に大宮人のくる野べはさがのとゝや花も見らむ
六十五人の家に前栽のつらに侍りて
六十六女郎花匂ふあたりに睦るればあやなく露や心置らむ
六十七小野にし侍る山里に人の家の紅葉而白きに女どもの出でゐて侍るに狩する人の鷹するゐてまかりたる
六十八山城の小野の山べの里遠み假の宿をも鳥ぞ鳴くなる
六十九くりこ山なる人の家にをうなども紅葉見侍り
七十紅葉みる栗駒山の夕影をいざ我宿にうつしもたらむ
七十一宇治の網代に紅葉ちり流れて侍る
七十二紅葉のひを經てよれる網代木は錦を橋に渡すとぞみる神樂し侍る
七十三山人のたける庭火のおき明し聲々遊ぶ神のきぬかもしかすがのわたり雪ふり侍るふねに乘りてまかる
七十四雪により返りやせましかすがに故郷戀しいざ渡りなむ
七十五女の許に春の頃ほひいかで物いひ侍らむといひ遣して侍るに秋になりて露ばかりいはむといひ侍れば
七十六天の川隔つる中の戀よりも久しき秋をこひや渡らむ
七十七彌生のつごもりがたに雨のふる夜春のくるゝを惜みて侍る心をよむに
七十八暮ぬべき春の形見と思ひつゝ花の雫にぬれむ今宵は
七十九人の歌合し侍るに詠みてと侍れば霞
八十霞だに立後れせば新しき春のくるとも知ずぞ有まし
八十一梅
八十二梅の花匂ふあたりの夕暮はあやなく人に過たれつゝ
八十三春風
八十四春風の吹とけがたの氷海み底の玉藻も今やみだるゝ
八十五岩躑躅
八十六咲ぬれば散事難き岩躑躅名には違はぬ色にぞ有ける
八十七卯花
八十八卯花の咲るあたりは時ならぬ雪降里の垣ねとぞみる
八十九子規
九十時鳥寢覺に聲を聞しよりあやめも知ぬ物をこそ思へ
九十一夏蟲
九十二燃る火の中の契を夏蟲のいかにせしかば身にもかふ覺
九十三蚊遣火
九十四終夜片燃え渡る蚊遣火に戀する人をよそへてぞみる
九十五刈萱
九十六東路を別るゝ萱の亂れつゝたが爲とかは吹て靡かむ
九十七秋霧

四七秋霧の峯にもをにも立田山紅葉の錦たまらざるらし
五七女郎花あだにや身をば思ふらむ露の心に過たれつゝ
女郎花
六七我だにも結置きてか花薄なべて人をば招きしもせじ
薄
七七柚山に立つ煙こそ神無月時雨をくだす雲となるらし
時雨
八七夜を寒み離の草を見渡せば今朝ぞ初霜置にけらしな
初霜
九七山川を落来る瀧の音もせず今は氷に閉ぢぞしぬらし
氷
〇八隠沼の氷のまより下根さし蘆の二葉も今やとくらむ
同じやうなる事人のし侍るに、初春
一八霞だにたえず有せば春きぬと何を徴に人のとはまし
霞
二八山高み雪ふるすより鶯の出る初音は今日ぞなくなる
鶯
三八旬をば風に添とて梅花色さへあやなあだにをらすな
梅
四八白雪のまだ古里の春日野にいざ打拂ひ若菜つみてむ
若菜
五八櫻花まだきな散そ何により春をば人の惜むなるにか
櫻
六八ともすれば風のよるにぞ青柳の糸は中々亂初めける
柳
七八早晩も引人ともや春の野に生ふる子日の松は待らむ
子日松
八八今朝きけば澤の蛙も鳴に鳥春の暮にもなりぬべら也
蛙
九八こぐれつゝ春の半に成にけり今や咲くらむ山吹の花
款冬
〇九天の原わきて鳴なる雁がねは故郷尋ね歸るなるべし
歸雁
一九花散ば起つゝも見む常よりもさやけく照せ春夜の月
春夜月
二九我が宿の垣ほの草の淺緑ふる春雨ぞいろは染めける
春雨
三九埋木の上はつれなく有ながら下には深き戀もする哉
四九戀々て逢ども夢にみつる夜は最ど寝覺の恨めしき哉
五九さりともと頼む心に謀られて死なれぬ物は命也けり
六九人知れぬ戀の道なる關守は忍びに問しとにぞ有ける
七九草枕我のみならず雁がねも旅の空にぞなき渡るなる
おほいまうちぎみの桂にて水のほとりの秋の花
といふ題よめと侍るに
八九水の色に花の匂を今日そへて千年の秋の例とぞみる
九九濃紫匂へる藤の花ずりはみづなき空に浪ぞたちける
藤花
人の屏風に小鳥をするこにかひて侍るかたを書
きて侍る
〇〇樣々に山の古巣は戀らめど此とぐらには鳴聲もせず
人の產して侍る所にて
一〇時しもあれ春の始に生出たる松は八千世の色を添けむ
小野宮のおほいまうちぎみの月輪寺の櫻の花見
侍りしに
二〇山櫻千代のはる〳〵今年より色咲增れ君が見にこば
しはすのつごもりの夜山寺にまかり籠りて侍る
つとめて僧のもとより今日は何事か侍るといひ
て侍りしに
三〇人知ず入りきと思しかひもなく年も越くる山路也鳥
同じ山寺にて法師の松引きにさそひ侍るにまう

でたりし室の前に大いなる松の木のもとにて昔
住みける人のひきける松なりこゝにゐて侍らむ
と申し侍りしに
四〇引初て世々もへにける松なれど緑の色のあせずも有哉
歳人所のをのこども花見にまかり出でゝ侍るに
歳人になりて侍るがもとへ遣しける
五〇花の色をよそに見つゝは諸共に折し昔の人ぞ戀しき

兼盛集

我が君むかし頭民を惠み國を治めおはしますこ
とかずおほうて山にのぼり嶺にたはぶれ給ふお
ほみあそびも見えざりき西はをぐら山秋のもみ
ぢをいたづらに其の色を失ひ東はむらさい野の
春の梅むなしう其の香を失ひ岸のくろ水色きよ
うすみ山の聲たかうよばふ風は枝をならさず雨
はつちぐれをやぶらず世の中も樂しければけふ
の行幸もありまする本歌なりかぎりなき我が君の
御とくを老いたるは老いたるをよろこび若きは
若きをよろこぶ世の中の樂しきことけふの行幸
をためしとすべしとつげしめて其の日の和歌
六〇子日してよの榮ゆべき例にはけふの行幸をよには殘さむ
春
かはらの院にてはるかに山の櫻をみる
七〇道遠みゆきてはみねど山櫻心をやりてけふは歸りぬ
春の花の盛には必らずこむといひたりけるを盛
りになりにければ
八〇花盛頼めし人もある物を斯咲りとも告ずやあらまし
小野の宮のおとゞの櫻の花御覽じにおはしまし
たりしに長保は月輪寺侍御日隆之云々
九〇山櫻俺までけふはみつる哉花ちるべくも風吹ぬよに
春頃夢に人のみえたりしに思ひつゝにやありけ
む
一〇思つゝねつればみえつ春夜の正しき夢に空しからすな
夏
大盥物なる時御こき侍りしに内侍所に參りたり
しにいとをかしげなるこうりをつゝみていだし
たりしかば
一一山城の駒のわたりをみてしがな瓜作けむ人の垣ねを
五月ごろものいひたりしに何かはといひたりし
にたのみてさもあらずなりければ恨みて雨降り
ぬべかりける日
二一天の原曇れば悲し人しれず頼む木の本雨ふりしより
秋
秋の夕ぐれにむしのいとあはれになくに
三一淺茅生に秋の夕暮なく蟲は我ごとしたに物や悲しき
秋の月いと面白きに紅葉散る夜家にてよみし
四一荒果てゝ月も隱れぬ我宿に秋の木のはを風ぞ吹ける
冬
冬山寺に心ちわづらひてありけるにとぶらひに
こむといひたりける人待つ程に雪の松にかゝり
たりけるを
五一山隱れ消せぬ雪の悲しきは君まつの葉に懸る也けり
白河の關にて
六一便あらばいかで都へ告遣らむけふ白川の關は越ぬと
駿河へくだるに粟津といふ所に惠慶がきたるに
あはねばかく
七一恨しき里の名なれや君に我粟津の原のあはで歸れば
返し

八うと濱の疎きには非ず君に我が見ざらむ程を兼て習ぞ
九粟津野の逢で歸ればせたの橋戀て歸れと思なるべし
世の中恨みける比ゑきやうが許にいひやる
〇二世中を今は限と思ふには君戀しくやならむとすらむ
春頃
一二春霞たなびく空は人しれず我身よりたつ煙なりけり
二石まより出る泉ぞ咽ぶなる昔を戀る聲にやあるらむ
はじめて女の許に
三同くば告てを戀ひむ難波めの忍びにのみは燃て渡らじ
まだみぬ人のとひたりければいとうきたりやと
女のいひたりける
四みぬ人の戀しき時は自ら我のみならず誰もしるらむ
いかでと思ふ人の近くあるあたりにきて
五濱衙かひ無りけりつれもなき人のあたりは鳴渡れ共
又
六何せむに人をおかじと思けむ戀する袖の安からなくに
松に露のかゝれるを落さず折りて
七逢ふことを今やと松に懸りてぞ露の命の年もへにける
いといたうしのぶる中に
八はかもなく落る涙を包てぞ人めもるとは云べかりけ
九我戀はつゝ井の濱と成ななむ心を没て人はしるべく
いみじう恨むれば時々はきこゆるをりもあるは
と女のいふに
〇三言の葉は色やは見ゆるこ紫深き心はねそめてぞしる
又
一四小れ石の上も隠れぬ澤水の淺ましくのみ見ゆる戀哉
二四谷河の岩まをわけて行水の音にのみやは聞渡るべき
人をこひて
三我戀に比べてしがな山河の岩まの波に數をそへつゝ
おなじ人に
四君を思ふ數にしとらば小休なく降添雨の脚は物かは
いひそめていと久しうなりにける人に
五二葉より今は太田の松の葉の幾よか君を戀てへぬ覽
又
六つらくのみ見ゆる君哉山のはに風待雲の定なきよに
又
七君戀ふと消こそ渡れ山河に渦まく水の水泡ならねど
返事もさらにせねば
八我戀にたぐへてやりし魂の返りごと待つ程の久しさ
みやづかへ人のざうしのかべちかき所にたちよ
りておぼつかなきことなどいひければさりとも
夢には見つめりといへば以上三行墨一七二九二朱書本無所収女のつれなく
のみいへれば
九戀初し心をのみぞ恨つる人のつらさを我になしつゝ
〇我戀は長柄の橋の下よりも盡る世なくも成にける哉
ものなどいへどいとつれなき女に
一我戀はいをなき淵の釣なれやうけも引れでやみぬべら也
女の許に罷りて物などいふにつれなきを思ひ歎
くほどに難さへなければ
二天のとの明くるやをしき鶏の鳴ぬ朝もなくぞ成ぬる
をんなのもとにまかりていたづらにねてかへる
に
三逢ことのなきつゝ歸るよな〳〵は徒寢にも成にける哉
四すみよしといふ所にて人をこひつゝ
四名に舊て世に住江の神もなし戀き人の影もみえねば
をんなよにこひしともおもはじといひたりけれ
ば
五戀しとは何をかいはむ岩波に類ふ水泡の消ぬ計りを
七月七日に今宵の星會みむとてはしにゐたりけ
るに忍びてみてのあしたに
六天河かはべの霧の中分てほのかにみえし月の戀しさ
かへし

七戀しくば河せの霧の夜を込て立歸らずぞ明し果まし
又
八あな戀し雲間の月に人をみて面影にのみそへる頃哉
冬のはじめの頃霜のいと白きをみて我より高き
人に
九獨ねに數多の冬をへぬる哉身をひと霜と思置かれて
こほりしたるあした人に
〇冬夜の袖の氷のこりずまに戀しき時はねをのみぞ鳴
雪のいみじうふるに
一物思ひてよにふる雪の侘しきは積々りて消ぬ計りぞ
雪のふりたるあしたに
二白山の雪の下草我なれや下にきえつゝ年をのみふる
をんなのもとより忘れ渡るかなといひおこせた
るに
三忘るとは恨ざらなむはし廬のと返る山の椎は紅葉ず
をんなふかき心にはあらざりけると恨みたりし
に
四淺しとは恨ざらなむ渡つみの戀れば最ど沖になるみを
女返しもせざりければなげなる物などいふこと
もあるものをとて
五言葉をなげなる物と思せば何かは人のつらくしも有む
なほいとつらかりける女に
六難波がた汀の蘆のおひ風にうらみてぞふる人の心を
いといたう恨みて
七つらけれど猶ぞ戀つる水無瀬河うけも引れぬ身とは知々
文かよはしていと久しくなりぬれどつれなき人
に
八足引の山の懸橋久しくもなげきこりつゝ渡りぬる哉
いとつれなかりける女に
九神なびの山の澤水君なれや淺ましくのみ見えし渡れば
思ひかけて久しくなりぬる人のことざまになり
ぬと聞きて
〇六植しより枝のみまさる歎とて頼めば本に雨ぞ降ける
大入道殿の御賀の御屏風の歌
〔吉野山〕
一六見渡せば松の葉白き吉野山幾よを積める雪にか有覽
しらゝの濱
二六君が代の數とも取む紀國の白良の濱に積めるいまこそ
難波
三六難波江に茂れる蘆のめもはるに多くのよなば君にとぞ思ふ
須磨
四六須磨の浦に求食する蜑の大方は貝有よとぞ思べらなる
ながらのはし
五六朽もせぬ長柄の橋の橋柱久しきことのみえもする哉
六六眞菰刈みつの御牧の駒の足の早く樂しき世をも見哉
みつのみまき
七六我妹子が家路踏分けしかすがの渡り難くも思ほゆる哉
むさし野
八六武藏野を霧の晴間に見渡せば行先遠き心ちこそすれ
ふたむらやま
九六玉くしげ二村山の月影は萬代をこそてらすべらなれ
まがきの島
〇七寄波の數をぞしらずなりにける籬の島のま近けれ共
あさかのぬま
一七沼水も氷にけらしこし方の山路も今は絶やしぬらむ
末のまつ山
二七蘆たづの群ゐる末の松山は幾十重ねの千年なるらむ
なつ[illegible]の御ざうすく入れたるはこのふたにあし
でにて
三七白波の長閑き浦の姫松は千年の數ぞ添ひて見えける
又

此夏の薄き衣は行末のかねてぞかゝるをりを頼まむ
　又御杖のふくろに
弱竹のよ長き杖をつきてこそ八百萬代の秋は數へめ
　又
萬代の山にねざしゝ初より君が杖にと見えにけらしも
　御かざしのおほひにぬへる
萬代のよゝの緑も清き哉これや千年のすめる水の色
千代をへて岩の上なる鶴さへぞ君が千年に傳ふべらなる
白たづの天原より飛びつるは遠き心を知れるなるべし
　おほん扇にあしでにて
昔より仰ぎ傳ふる釉なれば君がてにてぞ萬代はへむ
　御はしのだいあるをしきのおもてに
君がへむ萬代の數算ふれば唯かたはしの千年也けり
　三條のおとゞのおまへのぜんざいあはせにさう
　わきて歌よむ人めしてよませ給ひけるに
　水の上の秋の月
濁なく千世を數へてすむ水に光をそふる秋の夜の月
　水のほとりの花
紫の雲とぞ見ゆる月影に水のおもてらす岸の秋はぎ
　草むらの蟲
千年とぞ叢毎に聞ゆなるこや松蟲の聲にはあるらむ
　鶯宮のみやにてかんし給ひしに（いまのきさいのみやのかんやにてかんしたてまつるとい）（ひしに松のこえよるの部に入るべし）
萬代と天の空まで聞ゆるはよふかき松の調なりけり
　駿河の守にて神はいして歸るにいそのほとりを
　行くとて
鶏ゐる荒磯に立つ波なれば平らけくこそ我國はあれ
　申文にかきて奉る
澤水に老の影みゆ蘆たづの鳴音雲ゐに聞えざらめや
　（一本是より以下二十三首無之）
女のいと思ひのほかになどいひけるに
谷深くやく炭がまの煙だに峯の雲とはならぬ物かは
　ひら松のありけるを見て
年をへて丈も變らぬ平松の怪しや爭でねもみてしかな
　女にいきて物いはむといひければ來ても何ごと
　をかといひたるに
蘆の屋のこやともいはゞ津國の難波のとか云ず有べき
　宮仕へ人のざうしの壁近き所に立ちよりておぼ
　つかなきことなどいひければさりとも夢にはみ
　ゆめりといへば
君が又影にも懸てみえば社夢にも人をみつと思はめ
　思はぬことゝいひければいはでのもりなどいひ
　ければさらばとて
思ふてふとは云でも思鳧つらきを云でつらしともみし
　女を思ひやみねといひければ
ひたぶるに云もな果そ世にふれば人憎からぬ物と社きけ
　すみけるをとこよがれたりときゝしころをんな
　に
君が宿隙有けりと聞しより影に成ても入むとぞ思ふ
　せんていのおほん時のうたあはせ、三月三十日
　右霞
故郷は春めきにけり吉野山みかきの原を霞こめたり
　鶯
我宿に鶯いたく鳴なるは庭もはだらに花やちるらむ
　梅
白妙の雪ふりやまぬ梅がえにけふぞ鶯春となくなる
　青柳
さほ姫の糸染めかくる青柳を吹なみだしそ春の初風
　櫻
よと共に散ずもあらなむ櫻花飽ぬ心はいつか絶べき
　山吹
一重づゝ八重山吹は開けなむ程へて匂ふ花と頼まむ

　藤
わがゆきて花みる計り住吉の岸の藤波折なつくしそ
　卯花
嵐のみ寒き山べの卯花は消ぬ雪かとあやまたれつゝ
　時鳥
深山出でゝ夜はにや來つる時鳥曉かけて聲の聞ゆる
　夏艸
夏深く成ぞしにける大荒木の杜の下草なべて人かる
　戀
君こふる心の空は天川かひなくて行く月日なりけり
人しれず逢を待間に戀死なば何に代たる命とか云む
忍れど色に出にけり我戀は物や思ふと人のとふまで
あふとの片膝行する緑兒の立む月にも逢じとやする
雨やまぬ軒の下水かすしらず戀しきとのまさる頃哉
　大嘗會の歌
　せたのはし
貢物たえずそなふる東路のせたの長橋音もとゞろに
萬代をもちぞ榮えむ近江なるお物の濱の天の日嗣は
岩の上の河堰あげて植し田の稻は萬代絶て絶にしかじ
小波の長柄の山の長らへば久しかるべき君が御代哉
君が代を待しも著く大荒木の里の榮をみるが樂しき
やす河の水底すみて鶴鵜の萬代かねて遊ぶをぞみる
いにしへもみずやありけむ鏡山行く末遠き豐の明は
鏡山山產高くよばふなり世の榮ゆべき影ぞみゆらし
世の富は岩倉山にをさめ置て萬代までに君ぞ傳へむ
とみゆかの數まさり行君が代にあへる國人賴しき哉
朝霧のみゐのこの蔭茂り合て榮え行世を見が樂しき
　是はゐにかもの社に人々詣づる、車にてもかち
　にても
同じくや人の心も祈るらむ我思ふとをあやまつな神
淺ましく有明の月と出つれど日高く人に見えずもする哉
　あをうま
降雪に色も變らでひく物を誰があを馬と名け初けむ
　みこ達の出でゝ子の日し給へる所に
春立ば子日をぞする年をへて久しきとは松を引とて
　大臣の家の大饗する所
引連れて大宮人のきませれば春嬉しくも思ほゆる哉
　たいしやうのいへにすまひのかへりあるじする
　に
躓きも無て今年は數さしつ醉さまたれて今日は歸ぬ
　大將の家にむすめの裳きたるに
千早振神の社を尋ねつゝけふのためてふ祈をぞする
　祭の使のたつ所つかひ鄰ひ人べいじうなどに中
　將かはらけとりて物かづく
醉にける我らは知ず綾もなし誰が被けたる罪にか有覽
　駒むかへの使對ひあひて遊びて舍人に中將きぬ
　脫ぎてかづく
花薄は末の露にそぼちたる我衣手をぬぎとるやたれ
足引の山路遠くや出でつらむ日高くみゆる望月の駒
　市にものみ云ふぞ儚き萬代をかひにぞ我は急ぎ出つる
　びはのほふし
市にものか云ふ車あり
四の緒に思ふ心を調べつゝひきありけ共知人もなし
　すはうのめのくだる所河づらに馬わたしてもの
　くふところ
白雲の山べ遙に聞ゆるをなどか日高く出たちをする
　京の人の家に市女來たり酒うる
なよ竹の末のよ遲き渡らひは市女も我も變らざり鳧
先々にこりにし君がしひこひを何業しにか又はきませる
招かねど數多の人の集く哉富と云物ぞ樂しかりける
　糸ひきぬおる所
年をへて織蓋すべき糸なれや棚機つめを儲てしがな

旅人いくあひだに盗人あひたり
八三 旅人はすりもはだにも空しきを早くいましれ山のとれたち
九三 つかさたまはらで内わたりの人に
澤水に老ぬる影を見たづの鳴音雲ゐに聞ゆらむやは
女を懸想しけるに逢はざりけるがいづみの守なりける人に逢ひたるにそれも住まざりけるに正月ばかりに
四四 ○春雨に雪げの水もそふ物をなどて絶ぬる泉なるらむ
駿河にふじといふ所の池には色々なるたまなむわくといふそれにりんじの祭しける日よみてうたはする
四四 一 仕へき數にをとらむ淺間なる御手洗河の底にわく玉
駿河になりて久しく音づれざりければ
よしの〻
四四 二 怪きは駿河守といひしよりなどうど濱の疎く成らむかへし
四四 三 うど濱の疎きには非ず田子浦の戀しからむを豫て習ふぞ
駿河なりけるもの〻男のいづといふ所にかよふがさきに人まうけてもとの人の許には罷らざりければ神にうれへ侍りけるうれへぶみにはし侍りける
兼盛
四四 四 横はしり清見が關の通路にいつと云とは長く留めつとありければしげゆきかへし
四四 五 關据ぬ空に心の通ひなば身を留めてもかひや無らむ
屏風の繪に
正月野にいで〻侍有子の日する所、四帖がうた
四四 六 鶯の初音にけふは驚きて春の山べにをりくらしてむ
をんなの家にをとこきたりまへにうめのはなあり
四四 七 梅の香を便の風や告つらむ春珍らしき君かきませる
二月ゐなかのいへに田かへすところにかはづなく
四四 八 澤水に蛙の聲はおいにけり遲くやうたむ春の小山田
三月櫻のはなを見る人
四四 九 一年に再もこぬ春なればいとなくけふは花を社みれ
釣舟つりをたれて海のうへにひかへたり
五五 ○浦なぎに釣のをたれてくる我ぞ痛くな立そ沖つ白波
濱に男女見わたせり
五五 一 荒波のかけくる岸の遠ければ風間にけふぞ舟渡する
六月はらへする所
五五 二 河風の吹くる影に吹くづし祓ふる事ぞ涼しかりける
七月七日をんなども庭に出で〻尾花にいとかけたり
五五 三 棚機のあふ夕暮の衣糸を秋の尾花にいくよへぬらむ
八月小鷹がりする所
五五 四 秋の野に招く尾花に謀れて假にきつれどけふは暮しつ
九月九日
五五 五 朝露に我そぼちくる菊の花摘しも著き心ちこそすれ
十月山のほとりなる家に男女ゐて紅葉をみてあそぶ
五五 六 唐錦色みえまがふ紅葉のちる木の本は立うかりけり
十一月谷河のうへにもみぢおほうながる網代ある所男女ゐたり
五五 七 深山路は嵐や痛く吹ぬらむ網代もたわに紅葉積れり
十二月大雪のふれるに家にをのこかしらに雪かかりてゆづる葉もちてきたり
五五 八 奥山の讓葉爭で折つらむ文目も知らず雪のふれるに
内の御屏風四帖の和歌
春
正月ゐする所
五五 九 新らしき年の初に逢くれど此春ばかり樂しきはなし

鶯をきゝて女の家に男きたり
六六 ○人しれず待ちしも著く鶯の聲珍らしき春にも有かな
正月山わかなつむ所
六六 一 足引の山片つける家ゐには先人さきに若菜をぞつむ
三月花のもとに旅人たちとまれる
六六 二 花みると家むにおそく歸る哉待時すぐと妹や歎かむ
櫻の花をしむ所
六六 三 色にあける年し無れば櫻花けふ日暮しに折て社みれ
藤のはな松にかゝれる所
六六 四 常磐なる花とぞみゆる我宿の松に木高くさける藤浪
夏
四月ほとゝぎすきく家
六六 五 太山出るまつ初聲は時鳥我宿ちかくうちもなかなむ
五月長あめ
六六 六 我宿の庭の若草茂り合てながめに日をも暮す比かな
六月すゞみする家
六六 七 水寒く風も涼しき我宿は夏と云とはよそにこそきけ
河づらにはらへする所
六六 八 河風の涼しからずばみな月の祓計りに物うからまし
（秋）
七月七日
六六 九 大空のとゝはみれど棚機は衣ぬぎかし幾よへぬらむ
八月十五夜
六七 ○ 終夜みてを明さむ天の原こよひの月を雲なかくしそ
九月田かる所
六七 一 時鳥聲珍らしく植し田を稻葉もそよと今日はかる哉
野に出で〻花みる
六七 二 女郎花花みにきつる秋の〻をあやなく招く尾花也鳬
（冬）
十月神のもとかぐらに詣で〻歸る人道なかにて時雨にあへり

六七 三 隱るべき木葉無れば神な月時雨に袖を濡してぞ行く
十一月こほり池にあり
六七 四 鶯のねの痛く鳴つる朝ぼらけ池は氷に閉てけらしも
十二月雪おほうつもる家
六七 五 人しれず春をこそまて我宿に降つむ雪を拂ふ人なみ
これもおなじ御屏風の歌
となりに花の木ある家に人きたり
六七 六 籬より梢をみつ〻梅のはな春の隣にけふはきにけり
子日
六七 七 群立てめも春の野に引松の千年の數はたが爲にぞは
鷹がりしたる所
六七 八 妻戀る雉子の聲もたえなくに傳くけふは家路暮しつ
花みる所
六七 九 傳くもけふは山路に暮す哉歸らむ程に花はちるとも
三月三日桃の花ある家に
六八 ○三千年に開くる桃の花盛あまたの春は君のみぞみむ
松に藤かゝれる家
六八 一 紫の雲うちなびく藤の花千年の松にかけてこそみれ
うちのおほんひやうぶのれう
梅のはな人來て見る
六八 二 けふくればあすも來てみむ梅花花ちる計り吹な春風
花の木ある家に人きたり
六八 三 花の木を植しも著く春來れば我宿すぎて行人ぞなき
櫻のはな見てとまれり
六八 四 世中にたのしき物は思ふどち花みて暮す心なりけり
山吹生ひたる所
六八 五 枝たわにやへ山吹は咲にけり井手の河べを思遣る哉
よき女藤のはなをもてあそぶ
六八 六 一年は春ながらにも暮なゝむ花の盛を飽までもみむ
藤の花を人をる
六八 七 引寄て先社たをれ藤の花まだみぬ人にみせに遣とて

八八住よしの岸の藤波我がやどの松の梢に色もまさらじ
七月七日女庭に出でゝ七夕祭すまらうどきて饗
のもとにやすらふ
九八年毎に棚機つめを祈りつゝ多くの秋を過ぐしつる哉
〇九棚機の飽ぬ別れの悲きにけふしもなどか君がきませる
すゝきある家に男きたり
一九來ぬ人を呼びには遣す我宿は招く尾花に任てぞみる
秋の夜女きんひくまらうどきてすのこにゐてけ
さうす
二九秋夜の月見とのみ明しつゝ今宵もねでや我は歸らむ
秋の夜の月あかきに萩のもとに鹿なくこゑきこ
ゆ
三九月影に鹿の音きこゆ高砂の尾上の萩の花やちるらむ
九月田かる所におきなあり
四九辛くして急きかりつる山田哉稻負せ鳥の後めたさに
五九足引の山田の小菅あす迄と稻負鳥の負ふも手たゆし
山里に女ありかりする人にものいふいらへに
六九かりにくる人は宿さず昔より都の事は床しけれども
十一月たび人
七九何にかは急きも行む夕暮にあすも越なむ山にやは非ぬ
十二月佛名する家
八九數ふれば我身に積る年月を送り迎ふと何いそぐらむ
内の御屏風
正月梅の花を
九九日頃へて待しもしるく我宿の梅の梢に春は來にけり
柳ある家
〇〇青柳の眉に籠れる糸なればはるばるのみぞ色增りける
四月山里にて(後人有)時鳥きく
一〇山里に家ゐせしより時鳥夜はの初音は我のみぞきく
五月五日に男馬引き出でゝ見る
二〇若駒を菖蒲の草に引添て五月もくれば見ぬ時ぞなき
六月河づらにて祓へする所
三〇夏の日は涼しかりけり河風は祓ふるとも斯やなる覽
七月七日
四〇幾なく衣は貸つ織女に今日もせなこは我いもにせむ
五〇天の川河瀨の風に織女も夜の更け行くを待や渡らむ
八月野に出でゝ花見る
六〇遙にぞ花見にきつる女郎花あだなる露に移ふなゆめ
鵜かひの家の前に河あり鵜かふ
七〇鵜飼する河べに年を送つゝ憂世の中を知らで社ふれ
いのち長き人の前に松竹ある家のほとりに菊あ
り
八〇春秋も知らで年ふる我身かな松と竹との千代を算て
九〇年をへて菊の下水みてしより花と云ふと知で社ふれ
〇一戀しとは云へば更也水の上に降積雪と人は知らなむ
長柄といふ所に行きて人のもとにやる
一一忘るやと長へ行けど身に涯へて戀しきとは後れざり鳧
女風に煩ふときゝて
二一待つ人を梢にたかき渚こそ風に煩ふ身ともなるらめ
いと思はしかりける女に
三一思ふてふとの世にだに舊ざらば我云へる如君に云はまし
宮仕する女をしもにおりよと云はせたるに得お
りまじと云ひたれば
四一大空に雛く雲の日に近くおり居ると見ば我は賴まむ
云ひ渡りつれどつれなき女に
五一陸奥の安達が原のしらま弓心つよくもみゆる君かな

貫之集

貫之集第一

延喜五年二月いづみの大將の四十賀の屏風の歌
おほせごとにて之を奉る
六一夏山の影をしげみや玉鉾の道ゆく人も立とまるらむ
(雪の降りたる所)(本題下同)
七一白雪のふりしく時は三吉野の山下風に花ぞ散りける
延喜六年月次の御屏風八帖が料の歌四十五首せ
じにて之を奉る廿首、子日遊ぶ家
八一行て見ぬ人も忍べと春の野の筐に摘める若菜也けり
二月初午稻荷まうでしたる所
九一獨のみ我がこえなくに稻荷山春の霞の立ち隱すらむ
弓のたち
〇二梓弓春の山べにいる時は揮頭にのみぞ花は散りける
三月田かへす所
一二山田さへ今は作るを散花の詫言は風におほせざらなむ
わすれ草
二二打忍びいざ住の江の忘草忘れて人のまたやつまぬと
三月つごもり
三二花も皆ちりぬる時は行春の故里とこそ成ぬべらなれ
五月照射
四二五月山木の下暗に燈す火は鹿の立どゝしるべかり鳧
六月鵜河
五二篝火の影若ければうば玉の夜河の底に水も燃えけり
水無月祓
六二御禊する河の瀨みれば唐衣ひも夕暮に波ぞ立ちける
七月七日
七二棚機にぬぎてかしつる唐衣いとゞ泪に袖やくちなむ
たなばた
八二秋風に夜の更行けば天の川河瀨に波の立ぬこそまて
八月駒迎
九二逢坂の關の清水にかげ見えて今やひくらむ望月の駒
小鷹狩
一三秋の野にかりぞ暮ぬる女郎花今宵計の宿はかさなむ
一三秋の田の穗に出ぬれば打群て里遠くよりかりぞきにける
志賀山越
二三人知れずこゆと思ひし足引の山下水に影は見えつゝ
衣擣つ
三三風寒み我が唐衣うつときぞ萩の下葉も色まさりける
十一月神樂
四三おく霜に色も變らぬ榊葉の薰るや人のとめてきつ覽
大鷹狩
五三霜枯の草葉を惜と思へばや冬野のゝべは人のかる覽
臨時祭
六三みや人のすれる衣のゆふ襷かけて心を誰によすらむ
十二月佛名
七三年の内に積れる罪は搔暮らしふる白雪と共に消なむ
延喜十三年十月十四日内侍督の四十賀の屏風の
歌内の仰せにて奉る野に人あまたある所、秋
八三招くとてきつるかひなく花薄穗に出て風の謀る也鳧
雁の鳴くをきける所
九三秋霧は立渡れどもとぶ雁の聲は空にも隱れざりけり
月夜に衣うつ所
〇四唐衣うつ聲きけば月きよみまだねぬ人や空に知る哉
河のほとりに紅葉ある所
一四水底に影し映ればもみぢ葉の色も深くや成增るらむ
山の紅葉しぐれたる所
二四足引の山搔暮ししぐるれど紅葉は猶ぞ照り增りける
道ゆく人の馬よりおりて岸のほとりなる松のも

とに休みて波の寄るを見たる所

三四我のみや影とはたのむ白波もたえず立寄る岸の姫松

延喜十四年十二月女四宮の御屏風の料の歌亭子院の仰せによりて奉る、十五首

四四新き年とは云どしかすがに我身古ぬる今日にぞ有ける

四五山見れば雪ぞまだふる春霞いつと定めて立渡るらむ

六四山風に香を尋ねてや梅の花匂へる里に家居そめけむ

七四山のかひたなびき渡る白雲は遠き櫻の見ゆる也けり

八四いかにして數を知まし落たぎつ瀧のみをよりぬくる白玉

九四こゝにして今日を暮さむ春の日の長き心を思ふ限は

夏

〇五月をだに飽ずと思ひてねぬものを時鳥さへ鳴渡る哉

一五澤べなる眞菰刈そけ菖蒲草袖さへひぢて今日や引らむ

二五住の江の朝みつ潮に御禊して戀忘草うみてかへらむ

秋

三五風の音は秋にも有か久方の天つ空こそ變るべらなれ

四五狩にとて我はきつれど女郎花見るに心の思つきぬる

五五常よりもてり增る哉秋山の紅葉を分けて出づる月影

六五聲をのみよそに聞つゝ我宿の萩には鹿の疎くも有哉

七五さく限ちらで果ぬる菊の花うべしも千世の齡のぶ覽

八五吹風に散ぬと思ふを紅葉ばの流るゝ瀧の共におつ覽

延喜十五年の春齋院の御屏風の和歌內の仰せによりて奉る女ども瀧のほとりに到りてあるは流れおつる花を見あるは手をひたして水に遊べる

春

九五春くれば瀧の白糸いかなれば結べ共狩泡にとくらむ

女なども山寺に詣でしたる

〇六思ふとありてこそ行け春霞道さまたげに立ち渡る哉

人の木のもとに休みて川ごしに櫻の花を見たる

一六遠方の花も見るべく白波の共にやわれは立渡らまし

道行く人の歸る雁の渡るを見たる所

二六妬き事歸るさならば雁音をかつ聞つゝぞ我は行まし

女柳の枝をひかへて立てり

三六花見にも行べき物を青柳の糸手に懸て今日は暮しつ

人の家に櫻の花を見たる

四六我宿の物なり乍ら櫻花散るをばえこそ留めざりけれ

池のほとりに藤の花松にかゝれる

五六緑なる松に懸れる藤なれど己が頃とぞ花は咲きける

延喜十五年十二月保忠の左大辨の左大臣の北の方被ㇾ奉ニ五十賀一時の屏風の和歌

六六我宿の松の梢にすむ鶴は千代のゆかりと思ふべら也

七六水とのみ思し物を流れつゝ瀧は多くの糸にぞ有ける

秋

八六なべてしも色替らねど常磐なる山には秋も知れざり鳧

九六移ろはぬ常磐の山に降時は時雨の雨もかひなかり鳧

〇七紅葉のまなく散ぬる木の下は秋の影社殘らざりけれ

延喜十五年九月廿二日右大將の御六十賀清和の七宮の御息所の仕うまつり給ひける時の屏風の料の歌四首、春

一七數ふれど疊束なきを我宿の梅こそ春の數は知るらめ

二七百千鳥木傳ひ散す櫻花いづれの春かきつゝみざらむ

三七菊の花雫おちそひゆく水のふかき心を誰か知るらむ

四七三吉野の山より雪の降くればいつ共分かぬ我宿の竹

延喜十六年齋院の御屏風の料の歌內裏より仰せ承りし六首人の家に女どの庭に出でゝ梅の花を見又山に殘れる雪を見たる

五七梅の花さくと知すや三吉野の山に友まつ雪のみゆ覽

人の木のもとに立ちて遙に櫻の花を見たる

六七山櫻よそに見るとてすがの根の長き春日を立暮しつる

池の邊りに咲ける藤のもとに女どもの遊びて花のかげを見たる

七七藤の花色深けれやかげみれば池のみづさへ濃紫なる

瀧のほとりに人きて見る

八七流れくる瀧の糸こそ弱からしぬけど亂れて落る白玉

海のほとりに生ひたる松のほとりに道行く人の休みたる所

九七幾世經し磯べの松ぞ昔よりたちよる波や數は知る覽

雪の庭にみてりける

〇八夜ならば月とぞ見まし我宿の庭白妙に降りしける雪

延喜十七年八月宣旨によりて

一八人はうべ遲く知けむ梅の花咲る後にぞ春はきにける

二八梅が枝に降懸りてぞ白雪も花の便に折らるべらなる

三八若菜つむわれを人みば淺緑野べの霞をたち隱さなむ

四八鶯の絶ずなきよる青柳の糸憂き節のなくもあらなむ

五八松をのみ頼て咲る藤の花千年の後をいかゞとぞ見る

六八人もなき宿に匂へる藤の花風にのみ紕亂るべらなれ

七八見てのみや立暮してむ櫻花散を惜むにかひなかり鳧

八八惜みにと來つるかひなく櫻花見れば且紕散增りけれ

九八千代迄の雪かと見れば松風に類ひてたづの聲ぞ聞ゆる

〇九色のみぞ增るべらなる磯の松影みる水も緑なりけり

一九歸る雁わが言つてよ草枕たびは妹こそ戀しかりけれ

二九流れ行く蛙鳴くなり足引の山吹の花にはふべらなり

三九なつ衣暫しなたちそ時鳥なくとも末だ聞えざりけり

四九時鳥まつ所には音もせでいづれの里の月に鳴くらむ

五九こぬ人を下に待ちつゝ久方の月を哀と云ぬ夜ぞなき

六九朝霧の疊束なきに秋の田のほに出て雁ぞ鳴渡るなる

七九女郎花移ろひ方になる時は狩にのみ紕人は見えけれ

八九花薄ほには置ども初霜の色はみえずぞ消ぬべるなる

九九八重萩生にし宿にから衣たが爲にかはうつ聲のする

〇〇おく物は久しきものを秋萩の下葉の露の程もなき哉

一〇もみち葉の散敷く時は行通ふ跡だに見えぬ山路也鳧

二〇白波の古里なれやもみち葉の錦をきつゝ立返るらむ

三〇物毎に降のみ隱す雪なれど水には色も殘らざりけり

四〇ふる雪を空に幣とぞたむけゝる春の境に年の越れば

五〇唐衣新しくたつ年なれや人はかく紕ふりぬべらなれ

子日

六〇素霞鏈く松の年あらばいづれの春か野べにこざらむ

道ゆく人櫻の下にとまれる

七〇玉鉾の道は猶こそ遠けれど櫻を見れば長居しぬべし

八〇あだなりと思ふ物から櫻花ある所には安くやはゆく

瀧ある所

九〇松の音を琴に調ぶる秋風は瀧の糸をやすげて彈らむ

池のほとりに藤の花ある所

一〇池水に咲たる藤を風ふけば波の上に立波かとぞ見る

九月つごもり

一もみち葉は別を惜み秋風は今日や三室の山を越らむ

延喜十七年の冬中務の宮の御屏風の歌、元日

貫之集第二

延喜十八年二月女四宮のみこの御かみあげの屏風の歌內の召しにて奉る

正月　八首

二山端を見ざらましかば春霞立るも知でへぬべかり鳧

二月

三よる人もなき青柳の糸なれば吹來る風に且亂れつゝ

三月

四移はぬ松の名立にあやなくも宿れる藤の咲て散る哉

七月

五萩の葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らるゝ始也けれ

八月

六天雲のよその物とは知りながら珍しきかな雁の一聲

九月

七いづれをか花とはわかむ長月の有明の月に紛ふ白菊

十月

一八流れくる紅葉ば見れば唐錦淵の糸しておれる也けり

十二月

一九木間より風に任せて降雪を春くる迄は花かとぞ見る

延喜十八年四月東宮の御屏風櫻の花のもとに人々の疑たる所　八首

二〇且見つゝあかずと思ふに櫻花散なむ後ぞ兼て戀しき

池のほとりに勝の花咲きたる所

二一水にさへ春やくるゝと立返り池の藤波をりつゝぞみる

祓したる所

二二此川に祓へて流す言の葉は波の花にぞ類ふべらなる

七月彦星見る所

二三天の河夜深く君は渡るとも人知れずとは思ざらなむ

男の萩の花見たる所

二四同じえに花は咲けれど秋萩の下にわきて心をぞやる

小鷹狩したる所

二五花の色を久しき物と思はねば我は山路を狩に社みれ

大鷹狩したる所

二六花にのみ見えし山のを冬くればまりけだになく霜枯に鳥

雪ふれる所

二七春近く成ぬる冬の大空は花をかねてぞ雪はふりける

延喜八年承香殿の御屏風の歌仰せによりて奉る

十四首、梅の花咲ける所

二八梅花まだ散らねども行水の底に映れる影ぞ見えける

旅を歸る雁どもあり

二九とも〳〵に思ふつれど雁音は同じ里へも歸らざり鳥

松にかゝれる藤

三〇移ろはぬ色に似るとも無物を松が枝にのみ懸る藤波

人の春の野に遊ぶ所

三一春深くなりぬる時の野べ見れば草の緑も色まさり鳥

散る櫻

三二同じ色に散し紛へば櫻花ふりにし雪の形見とぞ見る

河のほとりの松

三三松をのみ常磐と思へば世と共に流るゝ水も緑也けり

やな

三四やな見れば川風痛くふく時は波の花さへ落増りけり

人の家の池のほとりの松の下にゐて風の音きける

三五雨ふると吹く松風は開ゆれど池の汀はまさらざり鳥

女どもむれ居て萩の花の散るを見たり

三六花の色は許多みゆれど人知れず萩の下葉ぞ詠られける

女の家に男いたりて離の尾花のもとに立てり

三七吹く風に靡く尾花を打つけに招く袖かと頼みける哉

長月のつごもりに女車紅葉の散る中を過ぎたり

三八紅葉ばの幣とも散か秋果つる龍田姫社歸るべらなれ

月のもとの白菊

三九色そむる物ならなくに月影のうつれる枝の白菊の花

道ゆく人の松の雪見る

四〇白妙に雪のふれゝば小松原いろの緑も隠ろへにけり

佛名のあしたに導師の歸るついでに法師男ども

庭におりて梅をもちて遊ぶあひだに雪の降りか

かれる梅折れる

四一梅の花をりしまどへば足引の山路の雪と思ほゆる哉

延喜十九年東宮の御屏風の歌内よりめし、十六

首子日の松のもとに人々いたり遊ぶ

四二春の色はまだ淺けれど兼てより緑深くも染てける哉

三月花ちる

四三風吹けば方も定めず散花を何方へゆく春とかは見む

山べに藤の花松にかゝれる

四四藤の花もとより見ずは紫に咲ける松かと驚かれまし

車に乗れる人賀茂に詣づ

四五人も皆霞かざして千早振神のみあれにあふひ也けり

五月五日

四六菖蒲草ね長き命つげば社今日としなれば人の引らめ

六月祓

四七大幣の川の瀬ごとに流れても千年の夏は夏祓へせむ

空になく鶴を聞ける

四八千年ふと我が聞なべに葦鶴の鳴渡るなゝ聲の遙けさ

尾花を見る

四九いつとても人やは隠す花薄などか秋しも穂には出覽

九月菊見たる

五〇秋毎に露はおけども菊の花人の齢はくれずぞ有ける

道ゆく人の時雨にあへる

五一道すがら時雨に遭ぬ最としくほし敢ぬ袖の濡にける哉

臨時祭

五二山ゐもて摺れる衣の赤紐の長くぞ我は神につかへむ

雪の降れる

五三春こねど草木に花の咲く程はふりくる雪の心也けり

延喜二年五月中宮の御屏風の和歌、廿六首、あつ

まりて元日酒のむ所

五四昨日よりをちをば知ず百年の春の始は今日にぞ有ける

子の日

五五元よりの松をば置て今日は猶起臥し春の色を社見れ

二月梅の花みる所

五六山里に住かひあるは梅の花見つゝ鶯きくにぞ有ける

田かへす所

五七忘らるゝ時し無れば春の田を返す〳〵ぞ人は戀しき

三月山寺にまゐる

五八足引の山をゆきかひ人しれず思ふ心のともなからむ

三月つごもりの日花落つる所

五九散花の本にきて社暮果つる春の惜さは増るべらなれ

四月大みわの祭の使

六〇孰をか印と思む三輪の山みえと見ゆるは杉にぞ有ける

馬にのりたる人多くゆく

六一行くが上に早くゆけ駒神がきの三室の山の山葛せむ

人の家の垣ねのもとの卯花

六二今日も又後も忘れじ白妙の卯花咲ける宿とみつれば

五月旅人山のほとりに宿りて時鳥を聞く

六三山里に旅ねよにせじ郭公聲聞きそめて長ゐしぬべし

雨のうちに田植うる所

六四時過ば早苗も痛く生ぬべし雨にも田子は隙らざり鳥

六月すゞみする所

六五夏衣薄きかひなし秋までば木下風もやまず吹かなむ

鵜河

六六大空にあらぬ物から川上に星かとみゆる篝火のかげ

七月七日女ども空を見る

六七人知れず空を詠めて天の川波打つけに物をこそ思へ

田守るいほある所

六八假庵にて久にへに鳥秋風にわき田雁音早も鳴かなむ

八月人々あまた野の花をほる

六九見人も無き野べなれば色毎に外へ移ふ花にぞ有ける

〔鹿啼ル花〕

七〇さを鹿やいかゞ云けむ秋萩の匂ふ時しも妻を戀らむ

九月霧山をこめたり

七一散ぬべき山の紅葉を秋霧のやすくも見せず立隠す覽

河のわたりに舟ある所

七二山路には人や惑はむ河霧の立こぬ先にいざ渡りなむ

十月菊の花

七三薄くこく色ぞ見えける菊の花露や心をわきて置らむ

十一月芦かりつみたる所

七四難波女の衣ほすとて刈てたく芦火の煙立ぬ日ぞなき

十二月人ゆきて梅を見る

七五降雪に色し紛へば打附に梅を見るさへ塞くざりける

延喜二年左の大臣の北の方の御屏風の歌十首

六七甲斐がねの山里みれば草鶴の命をもたる人ぞ住ける
田子浦
七七吹く風も飽ず思ひて浦波の數にぞ君が年をよせける
逢坂の關
八七君と猶千年の春に逢坂の清水は我も汲まむとぞ思ふ
龜山
九七龜山の影を寫して行く水に漕來る舟は幾世へぬらむ
白濱
〇八君が代の年の數をば白妙の濱の眞砂と誰か云ひけむ
むろふ
一八よと共に行かふ舟を見毎にほに出て君を千年とぞ思ふ
松が崎
二八雖かぬ時こそなけれ蟹もなき松が崎よりみゆる白雲
秋嵯峨野
三八手ごとにぞ人は折ける君がため行末遠き秋の野の萩
宇治の網代
四八落積るもみぢ葉見れば百年の秋の止りは網代也けり
かへの社
五八影とのみ頼むかひ有て露霜に色變りせぬかへの社か
梅の原
六八梅の花おほかる里に鶯の冬ごもりして春をまつらむ
吉野山
七八三吉野の吉野の山は百年の雪のみつもる所なりけり
延長四年八月廿四日清貫の民部卿の六十賀恒佐の中納言の北の方せられける〔時屏風の歌、若菜つる所〕
八八春日野の若菜も君を祈らなむ誰爲に摘春ならなくに
人の櫻と松の木のもとになる所
九八櫻花散らぬ松にも傚なむ色とゞ〳〵に見つゝ世をへむ
人の家に櫻のおほく咲ける所
〇九我宿に春こそ多くきにけらし咲ける櫻を限なければ
桃の花女のもとの折る所
一九君が爲我が折花は春遠く千年みたるを折つゝぞゆく
人舟にのりて藤の花見たる所
二九折つみてはや漕歸れ藤の花春は深くぞ色は見えける
女どもの瀧見たる所
三九糸とさへみえて流るゝ瀧なれば絶べくも非ずぬける白玉
松のもとより泉の流れたる所
四九松の根に出る泉の水なれば同じき物を絶じとぞ思ふ
秋の花ども植ゑたる所
五九祝ひつゝ植たる宿の花なれば思ふが如く色こかり鳧
馬車に乘りて人秋の花みたる所
六九限なくわが思ふ人の行野べの色は千種に花ぞ咲ける
鹿の萩の中にたてる所
七九さを鹿の尾上にさける秋萩を柵へぬる年ぞ知られぬ
菊の花さける所
八九菊の花植たる宿の怪しきは老てふことを知らぬ也鳧
池の邊に鶴のあそぶ所
九九さゞら波よする汀に住鶴は君が經む世の知べなる鷺
女どもの紅葉ひろふ所
〇〇散る上に散し積れば紅葉ばを拾ふ數社しられざりけれ
人の家に紅葉の川の上に散りかゝる所
一〇紅葉ちる木下水を見る時は色くさ〳〵に波ぞ立ける
神樂せる所
二〇足引の山の榊の常磐なる影にさかゆく神のきねかも
延長四年九月廿四日法皇御六十賀京極御息所の仕うまつり給ふ時の御屏風の歌十一首若菜つむ
三〇春立むすなはち毎に君が爲千年經ぬべき若菜也けり
四〇若菜生る野べと云野べを君が爲萬代占て摘まむとぞ思ふ
子日
五〇花に似ず長閑き物は春霞雖く野べの松にぞ有りける

松にかゝれる藤
六〇松風の吹かむ限は打はへて絶べくも非ず咲ける藤波
瀧の水
七〇思ふ事瀧にあらなむ流れても盡せぬ物と安く頼まむ
いはほ
八〇松風は吹けど吹ねど白波のよする巖ぞ久しかりける
九〇苔長く生る巖の久しきを君にくらべむ心やあるらむ
鶴の群れゐたる所
〇〇かの見ゆるたづの村鳥君に社己が齡を任すべらなる
菊
一〇爭で猶君が千年を菊の花折つゝ霧にぬれむとぞ思ふ
二〇菊の花下ゆく水に影見れば更に波なく老いせざり鳧
竹
三〇年毎に生添ふ竹のよゝを經て變らぬ色を誰とかは見む
三條右大臣殿の御屏風の歌
四〇徒に老いにけるかな高砂の松や我身のはてを語らむ
五〇鳥玉の我が黑髮も年ふれば瀧の糸とぞ成ぬべらなる
六〇春霞たちよらねばや三吉野の山に今さへ雪のふる嶺
七〇いつしかも越てむと思ふ足引の山に鳴なる喚子鳥哉
八〇足引の山下たぎつ岩なみの心くだけて人ぞこひしき
九〇鶯の花ふみしだく木の下はいたく雪ふる春べ也けり
一〇浦毎に咲出る波の花見れば海には春も暮れぬ也けり
二〇梅の香の限無れば折人の手にも袖にもしみにける哉
三〇訪人もなき宿なれどくる春は八重葎にも障らざり鳧
四〇ゆき宿る白雲だにも通はずば此山里は住うからまし
五〇玉藻かる蜑の行かひさす棹の長くや人を恨み渡らむ
六〇此宿の人にもあはで朝顏の花をのみ見て我や歸らむ
七〇移ふを厭ふと思て常磐なる山には秋も越ずぞ有ける
八〇年月の變るも知らず我宿の常磐の松の色をこそ見れ
九〇久方の月影見れば難波潟しほも高くぞ成ぬべらなる
一〇綱手とき今はと舟を漕出でば我は波路を越や渡らむ
二〇山高み梢を分けて流れ出る瀧に類ひて落るもみぢ葉
三〇笹の葉の面つるなべに足引の山には雪ぞ降增りける
四〇君まさば寒さも知じ三吉野の吉野の山に雪は降る共

貫之集第三

延喜の御時內裏の御屏風の歌廿六首、元日鶯なく所

三〇新らしくあくる今年を百年の春のはじめと鶯ぞ鳴く
人の梅の花見る所
四〇我宿にありとみ乍ら梅の花衰と思ふにあく時もなし
山邊に近くすむ女どもの野べに遠く遊び離れて
家の方を見やりたる
五〇野べなるを人も無とて我宿に嶺の白雲をりやゐる覽
六〇立ねとや云にやらまし白雲の訪ともなく宿にゐる覽
故郷の花を見る
七〇故郷を今日きてみればあだなれど花の色のみ昔也ける
春のくれ
八〇いつとなく櫻咲けとか惜め共止らで春の空に行らむ
松に咲ける藤の花
九〇藤の花あだに散なば常磐なる松に類へるかひやなからむ
〇一散ぬとてあだにしも見じ藤の花行先遠き松にさければ
大神の祭に詣でたる
一一古の異らずして三輪の山こゆる印は杉にぞありける
二一菖蒲草根ながきとれば澤水の深き心は知りぬべら也
三一時鳥聲きゝしより菖蒲草かざす五月と知りにし物を
女どもの時鳥まつ所
四一慰めて一夜だにねむ月かげに山郭公鳴きてゆきなむ
七月七日

よをうみて我かす糸は七夕の涙の玉の緒とや成らむ
よるの歌
誠かと見れ共見えず織女は空に無名を立てるなるべし
八月十五夜海のほとりなる家に男女出でゐて月のいづるを見たる
難波潟汐みちくれば山のはに出る月さへ満にける哉
山田の中に小鷹狩したる所
秋の田と世中をさへ我如く假にぞ人は思ふべらなる
河のほとりに鶴のむれゐたる所
群居たる川べのたづも君が爲我思ふとを思ふべら也
萩見たる所
とめきつゝ鳴すも有哉我宿の萩は鹿にも知れざり鳧
女の菊の花見たる所
おく霜の置紛はせる菊の花孰れを元の色とかは見む
紅葉のいたく散りたる山をこえたる所
ひねもすに越も遣れず足引の山の紅葉を思つゝ惑へば
河に紅葉流るゝを見たる所
もみぢ葉の流るゝ時は立田川湊よりこそ秋は行らめ
人の家の竹多く生ひたる
竹をしも多く植たる宿なれば千歳を外の物とやはみる
大鷹狩したる所
覺束な今としなれば大荒木の森の下草人もかりけり
霜枯に成にし宿と知らねばや儚く人の狩にきつらむ
山里に神祭る
神まつる時にしなれば榊葉の常磐の蔭は變らざり鳧
山里にすむ人の雪のふれるを見る
雪のみや降りゐとは思ふ山里に我も多くの年ぞ經にける
延長六年中宮の御屏風の歌四首右近衛中將うけ給はりて
あれびきに引連てこそ千早振加茂の河波立渡りけれ
時鳥なくなる聲を早苗とる手間打置て哀れとぞ聞く
瀧つ瀬の物にぞ有ける白玉は來る度毎に見ぬ時ぞなき
よに隱れきつるかひなく紅葉も月に赤くぞ照增りける
京極の權中納言の屏風の料の歌二十首
〔春〕
春霞立ちぬる年のけふ見れば宿の梅さへ珍しきかな
我宿に咲る梅なれど年毎に今年あきぬと思ほえぬ哉
野べなるを人や見るとて若菜つむ我を霞の立隱す覽
雨とのみ風吹松は聞ゆれど聲には人も濡すぞ有ける
山深き宿にしあれば年毎に花の心は淺くぞありける
至るまに散もぞ果るいかにして花の心に行と知れむ
ゆかりとも聞えぬ物を山吹の蛙の聲に匂ひぬるかな
行く月日思ほえぬ共藤の花見れば暮ぬる春ぞ知るゝ
夏
五月くも道もしらぬど時鳥なく聲のみぞ知べ也ける
秋
一年を待つる事も有物を今日のくるゝぞ久かりける
七夕は今や別るゝ天の河かは霧たちて千鳥鳴くなり
降しける雪かと見ゆる月なれど濡て冴たる衣手ぞなき
照る月を晝かと見れば曉に羽かく鳴も有じとぞ思ふ
替し袖まだもひなくに秋の田を雁音さへぞ鳴渡なる
雁なきて吹風寒み唐衣君待ちがてに打たぬ夜ぞなき
山遠き宿ならなくに秋萩のしがらむ鹿の鳴もこぬ哉
冬
紅葉は照りて見ゆれど足引の山は曇りて時雨社ふれ
紅葉ばの流るゝ時は白波の立にし名こそ變るべらなれ
白雲に降隱されて梅の花人知れずこそ匂ふべらなれ
一とせに二たび匂ふ梅の花春の心にあかぬなるべし
延喜十年十月十四日女八宮陽成院の一のみこの四十の賀仕うまつる時の屏風のうた（屏風のうた）てうせさせ給ふ仰せにて仕うまつる
久くも匂はむとてや梅の花春を兼ても咲初めにけむ

糸をのみ絶ずよりつる青柳を年の緒長き徴とぞ思ふ
櫻よる優る花なき春なればあだし草木を物とやはみる
藤の花咲ぬるを見て時鳥まだ鳴かぬから待るべら也
足引の山下しげき夏草のふかくも君を思ふこころかな
常夏の花をし見れば打はへて過す月日の數も知れず
戀る物なくて見べく我宿の萩の本には鹿は鳴かなむ
假にのみ人の見ゆれば女郎花花の袂ぞ露けかりける
心とて散むだに社惜からめなどか紅葉に風の吹らむ
紅葉する草木にも似ぬ竹のみぞ變らぬ物の例也ける
松が枝に降敷雪を葦鶴の千代の緣りに降かとぞ見る
延喜の末よりこなた延長七年よりあなた内々の仰にて獻れる御屏風の歌二十七首
春
春立て風や吹解く今日見れば瀧のみなより玉ぞ散ける
若菜つむ春の便に年ふれば老つむ身社侘しかりけれ
久しきを願ふ良なれば春霞鶯鳴く松を爭でとぞみる
春毎に絶えせぬ物は青柳の風に亂るゝ糸にぞ有ける
みし人もこぬ宿なれど櫻花色も變らず花ぞ散りける
人も皆我もまちこし櫻花人々たちて見れど飽なくに
今までに殘れる岸の藤波は春の湊のとまりなりけり
あひだなくよする藤波立返り祈ても猶飽ずも有ける
秋
大空を我もながめて彦星の妻まつ夜さへ獨かも寢む
女郎花匂を袖に移してばあやなく我を人やとがめむ
行水の心は清きものなれど眞と思はぬ月ぞ見えける
一枝の菊折るからに荒玉の千年を唯にへぬべかり鳧
足引の山の川霧何とてかゆく人をのみ立ち隱すらむ
散るとも色さへ共に紅葉は百年ふれどかひ無りけり
大空しあだに見えねば月影の變る時なく照すべら也
春近み花と思ふを我が宿の梢に雪の降りかゝりつゝ
鶯は鳴きそめぬるを梅の花色紛へとや雪の降るらむ
照月を見ざらましかば烏玉の夜は物へも行ずぞ有まし
七日ゆふべ男あまたかて天河原見たる
大空はひもなけれども七夕を思遣りても詠めつる哉
駒ひき
都迄懷けて引くは小笠原へみの御牧の駒にぞ有ける
馬車に乘りて人多く野に出でたりさまゝ〳〵の花咲きまじりたり
立ちぬとは春はきけ共山里は待遠にこそ花は咲けれ
二つこぬ春と思へど影見れば水底にさへ花ぞ散ける
鶯のきゐつゝ鳴けば春雨に木芽さへ社濡て見えけれ
川べなる花をし折れば水底の影も乏しく成ぬべら也
櫻花千とせ見るとも鶯も我もあく時有らじとぞ思ふ
散り方の花みる時は冬ならぬ我衣手に雪ぞ降りける
春の爲あだし心の誰なれは松が枝にしもかゝる藤波
戀
月影を道惑はして我宿の久しく見えぬ人もみえなむ
こぬ人を月に倣ばや烏玉の夜毎に我は影をだに見む
雨ふらむ夜ぞ思ほゆる久方の月にだにこぬ人の心を
山里に作れる宿は近けれど雲居とのみぞ成ぬべらなる
冬
置く霜の心やわける菊の花移ろふ色の己がじゝなる
瀧つ瀬もうき事あれや我が袖の涙に似つゝ落る白玉
よと共に鳥の網はる宿なればみはかゝらんと來人もなし
空にのみ見るだにあかぬ月影の水底にさへ又も有哉
浮て行紅葉の色の濃きからに河さへ深く見え渡る哉
雪降れば疎き物なく草も木も一つ緣りに成ぬべら也
爭で人なつけ初けむ降雪は花とのみこそ散紛ひけれ
見えぬ共忘れし物を梅の花けさは雪のみ降懸りつゝ
紅の時雨なればや石上ふる度ごとに野べを染むらむ
白雲のたなびき渡る足引の山のたな橋我もわたらむ
承平五年九月東三條のみこの清和の七のみこの

御息所の八十賀せらるゝ時屏風の歌、若菜つめる所

千早振神たちませよ君が爲摘む春日野の若菜也けり

道ゆく人櫻の花を見て馬をとゞむ

行末も靜に見べき花なれどえしも見過ぎぬ櫻也けり

旅人の林のほとりに休みて時鳥きく

時鳥きつゝこ高くなく聲は千代の五月の知べ也けり

九月九日老いたる女の菊しておもてのごひたる

今日迄に我を思へば菊の上の齋は千年の玉にざりける

竹に雪の降りかゝれる

白雪は降隱せども千世まで竹の綠は變らざりけり

承平五年十二月內裏の御屏風の歌仰せによりて

奉る女すの本に居たるに男物いふ櫻の花さけり

よそにては花の便と見えながら心の內に心ある物を

子日して車のわかるゝ所に馬にのれる人松を車

におくる

此松の名をまねばれば玉鉾の道わかる共我は賴まむ

馬に乘りたる男ども故郷ゝ疊しき所にうちより

て櫻を折る

古里に咲ける物から櫻花色は少しもあれずぞ有ける

男あまた池のほとりの藤を見る

松が枝に咲て懸れる藤波を今は松山こすかとぞみる

女ども神の社に詣づ

打群れて心ざしつゝゆく道のおもふ思を神も知らむ

馬に騎れる女旅よりくる所

家路にはいつか行むと思しを日頃しふれば近づきに鳬

月夜に女の家に男いたりてすの子に居て物いは

せたり　原作をとこよりてあたり

山端に入なむと思ふ月見つゝ我はと乍ら有むとやする

女かへし

久方の月の便りにくる人はいたらぬ所有じとぞ思ふ

網代に紅葉のちり入りて流るゝ所に人多かり

此度や紅葉はちる今日見れば網代に社は落果にけれ

承平六年春左大臣殿の御親子同じ所にすみ給ひ

けるへだてのさうじに松と竹とをかゝせ給ひて

上り給ふ

同じ色の松と竹とは垂乳根の親子久しき例なりけり

鶴群れたる所

つるの多く世を經て見ゆる濱べ社千年積れる所也けれ

同じ二年左大臣殿の五郎の侍從の屏風のる、稻

荷詣

春霞たちまじりつゝ稻荷山こゆる思の人しれぬかな

いやしき人の神祭れる

榊葉の色變りせぬ百年の今日ごとにこそ祭まつらめ

十一月臨時祭

ゆふ禊懸ても人を思はねど卯月も今日もまだ飽ぬ哉

年のはての雪

我宿にふる白雪を春に又年越えぬまの花かとぞ見る

同じ六年春左衞門督殿の屏風の歌、冬

思ひかね妹かりゆけば冬の夜の川風寒み千鳥なく也

同じ八年八條の右大將本院の北の方の七十賀せ

らるゝ時の屏風、春の人の家

變らずも見ゆる松哉うべしこそ久しき事の例也けれ

藤の花

名殘をばまつにつけつゝ百年の春の湊にさける藤波

山里

草も木も繁き山べはくる人の立よる蔭の便り也けり

人の家に花橘ある所

年ごとにきつゝ聲する時鳥はな橘やつまとなるらむ

瀧

白雲の流るゝとのみ見えつるは落來瀧の常にぞ有ける

野の花

秋の野の千種の花は女郎花まじりておれる錦也けり

山の月

草木皆紅葉すれども照月の山の端はよに變らざり鳬

水邊菊

菊の花ひぢて流るゝ水にさへ波の皺なき宿にざりける

河のほとりに鶴むれたる

河の瀨に靡く蘆たづ己が世を波と共にや君によす覽

人の家の竹

千代もたる竹の生たる宿なれば千種の花は物ならなくに

同じ年正月內裏の仰せにて

年立てば花戀べくもあらなくに春今更に雪の降らむ

暮ぬとて鳴かゞ成ぬる雲の聲の內にや春のへぬらむ

秋萩に亂るゝ玉はなく鹿の聲よりおつる淚なりけり

同じ七年右大臣殿の屏風の歌、梅の花若菜ある

所女すの前に出でゝ見る

野べみれば若菜摘けり宜し社垣ねの草も春めきにけれ

子日

春立て子日になれば打群て孰の人か野べにこざらむ

紅梅のもとに女どもおりて見る

雪とのみあやまたれつゝ梅の花紅にさへ通ひける哉

人の家に櫻の花おほかり

こと里も皆春なれど我宿の櫻にまさる花やなからむ

女ども河のほとりにあそぶ

我身又有じと思へど水底に覺束なきは影にやは非ぬ

秋くれば機おる蟲の有なべに唐錦とも見ゆる野べ哉

山里の家侍りけるに水の上に木の葉落ちて流る

山近き所ならずは行く水も紅葉せりとぞ驚かれまし

人の家の籬垂のもとに女出でゐたるに垣のもと

に男立ちて物いひ入る垣づらに薄生ひたり

出でとふ人のなき哉花薄われば かりかと招く也けり

人の家に男女庭の菊見る

植てみる菊といふ菊は千代迄に人の過べき印也けり

臨時の祭

足引の山あゐに摺れる衣をば神に仕ふる印とぞ見る

人の家に女簾だれのもとに立ち出でゝ雪の木に

降りかゝれるを見る

草木にも花咲にけり降雪や春立つ先に花となるらむ

松が枝に鶴かと見ゆる白雪は積れる年の徵なりけり

貫之集第四

天慶三年四月右大將殿の御屏風の歌二十首、人

の家に紅梅あり　後撰　躬恒

紅に色をばかへて梅の花かぞことゝ〳〵に匂ざりける

女柳を見る

青柳の眉に籠れる糸なれど春のくるにや色增るらむ

故里にいたれり　後撰　藤原雅正

花の色はちらぬまばかり故郷に常にも松ぞ綠也ける

山里の櫻を見る

まだ知らぬ所迄かく來て見れば櫻計りの花無りけり

海のほとりに風吹き波立つ

吹風に咲ては散れど鶯のこえぬは波の花にぞ有ける

道ゆき人

あはと見る道だに有るを春霞かすめる方の遙なる哉

藤の花

郭公なくべき時は藤の花咲けるを見れば近づきに鳬

暮ぬとは思ふ物から藤の花さける宿には春ぞ久しき

人の家に常夏あり

變る時なき宿なれば花と云へど常夏なのみ植て社みれ

男山ざとに行くついでに木のもとに郭公を聞く

行先はありも有ずも郭公なくこゝにてを聞て暮さむ

男女舟に乗りて遊ぶ
一九 待つけて諸共にこそ歸るさの波より先に人の立らむ
秋の風荻の葉をふく
二九 いつも聞く風をば聞けど荻葉の戰ぐ音にぞ秋はきにける
家に女月をみる
三九 思事ありとはなしに久方の月よとなればいこそ寢られね
道ゆく人の初雁を聞く
四九 言傳も訪ふべき物を初雁の聞ゆる聲は遙かなりけり
小鷹狩
五九 百草の花は見ゆれど女郎花さけるが中に折暮してむ
男旅のやどりに鹿のなくを聞く
六九 鳴く鹿は妻ぞこふらし草枕ゆふ旅びとに聲な聞せそ
女ある家のきく
七九 緒をよりてぬく由もがな朝毎に菊の上なる露の白玉
九月
八九 時雨ふる神無月こそ近からし山のおしなべ色附に鬼
九九 雨なれど時雨と云へば紅に木葉のしみて散ぬ日はなし
〇〇 降る時は猶雨なれど神無月時雨ぞ山の色は染めける
水のほとりにつる集まる
一〇 群てをる蘆べのたづを忘つゝ水にも消ぬ雪かとぞみる
十二月つごもり雪人の家にあり
二〇 花とみる雪の今しも降つらむ春近くなる年の常かも
同じ年閏七月右衞門督殿の屏風のれう十五首
正月元日人々遊びしたる所の庭に梅の花さけり
三〇 老らくも我は歎かじ千代迄の年こむ毎に斯て賴まむ
二月初午稻荷まうで
四〇 忌垣にも到らぬ鳥の稻荷山越ゆる思は神ぞ知るらむ
五〇 打群て越行く人の思をば神にしまさば知りもしぬ覽
三月池の中島に松つる藤の花あり
六〇 松も皆鶴も千年の世をふれば春てふ春の花を社みめ
七〇 ゆふ襷かけたる今日の便には人に心を懸つゝぞ思ふ
五月菖蒲草
八〇 さ月てふ五月に逢へる菖蒲草むべもね乍ら生初に鬼
六月はらへ
九〇 御禊つゝ思ふ心は此の川の底の深さに通ふべらなり
七月七日
一一 一年に一夜と思へど七夕の逢ひ見む秋の限なきかな
八月十五夜
二一 百年のちゃの秋ごとに足引の山のはかへす出る月影
九月きく
三一 祈りつゝなほ長月の菊の花孰れの秋か植て見ざらむ
十月あじろ
四一 山川をとめきて見れば落積る紅葉の爲の網代也けり
十一月臨時の祭
五一 足引の山ゐの色はゆふ襷懸たるきぬのつまにざりける
六一 ゆふ襷千年をかけて足引の山ゐの色は變らざりけり
十二月佛名のあした別るゝ空に
七一 君更に山に歸りて冬毎に雪踏分けておりよとぞ思ふ
同じ御時の內の仰せごとにて、元日
八一 今日明て昨日に似ぬは皆人の心に春ぞ立ちぬべらなる
櫻の花の散るを見たる
九一 散り紛ふ色を見つゝぞ慰むる雪の形見の櫻なりけり
三月つくる日
一〇 こむ年もくべき春とは知乍今日の暮るゝは惜くぞ有ける
四月池のほとりの藤の花
二〇 水底に影さへ深き藤の花はなの色にぬ棹はさすらむ
夏はらへ
三〇 河社篠に折はへほす衣いかにほせばか七日ひざらむ
七日
四一 一年に一夜と思へど七夕は二人ともなき妻にざりける
はぎ

五一 妻こふる鹿の涙や秋萩の下葉もみづる露となるらむ
きく
六一 千年をし留むべければ白玉をぬけるとぞ見る菊の白露
七一 咲殘る菊には水も流れねど秋深くこそ匂ふべらなれ
八月鹿の鳴くを聞く
八一 心しも通はじ物を山近み鹿の音きけばまさる戀かな
みづに紅葉うかべる
九一 紅葉ばの影を映して行水は波の花さへ移ろひにけり
人の家に松たけあり
一二 常磐のみ宿にある哉すむ人の齡も松と竹となりけり
暮るゝ年
二二 今年はや明日に明なむ足引の山に霞は立りとや見む
三二 山端に夕日さしつゝ暮行くは春に入ぬる年にざりける
おなじとしさいさうの中將の屏風の歌二十三首
元日ふるき男の女のもとに來て物などいふ
四二 新らしき年の便に玉鉾の道まどひする君かとぞ思ふ
山里にすむ女子の日する
五二 足引の山べの松をかつ見れば心を野べに思ひやる哉
六二 朝なげに見つゝ住め共けふなれば山べのみ社思遣られ
野山に花の木ほれり
七二 山野には咲るかひなし色みつゝ花と知べき宿に植なむ
旅いでたちする所にある女ども別れをしめる
八二 惜みつゝ別るゝ人を見る時は我涙さへ止らざりけり
出で立つ人の返し
九二 思ふ人留めて遠く別るれば心ゆく共我が思はなくに
一〇 兼てより別を惜しと知れりせば出立たむとは思はざらまし
男女の家に到りてとぶらひたる
一一 草も木も有とは見れど吹風に君が年月如何とぞ思ふ
返し女
二一 櫻花かつ散り乍ら年月は我身にのみぞ積るべらなる
故里の花を見る
三一 あだなれど櫻のみこそ故郷の昔乍らの物には有けれ
四一 見し如く非ずも有哉故郷は花の色のみ非ずは有ける
三月つごもり
五一 行春のたそがれ時に成ぬれば鶯のねも暮ぬべらなり
六一 春の今日暮るゝしるしは鶯の鳴すは成ぬる心也けり
神まつる
七一 卯花の色みえ紛ふゆふしでゝ今日社神を祈べらなれ
八一 春過て卯月になれば榊葉の常磐のみこそ色增りけれ
山里に時鳥なきたり
九一 此里にいかなる人か家ゐして山郭公絶えず聞くらむ
七夕
一〇 夕月夜久しからぬを天の川はやく七夕こぎ渡らなむ
二〇 積りぬる年はおほかれど天の河君が渡れる數ぞ少き
とまり
三〇 泊りてふ此所にはくる人の頓て過べき旅ならなくに
月に琴ひきたるを聞きて女
四〇 彈く琴の音の打つけに月影を秋の雪かと驚かれつゝ
五〇 月影も雪かと見つゝ彈く琴の消て積めば共知ずや有覽
をとこ
六〇 ひく琴の音毎に思ふ心あるを心の如く聞もなさなむ
田の中に小鷹狩したる
七〇 人も皆我ならぬ共秋の田のかりにぞ物を思べらなる
神の社に詣でたる
八〇 忌垣にもまだ入ぬ程は人しれず我思とを神やしらなむ
やもめなる人の家
九〇 徒然と年ふる宿は烏玉の夜もひも永く成ぬべらなり
一一 八重葎繁くのみ社成まされ人めぞ宿の草木ならまし
旅人のきぬうつ聲を聞きたる
二一 草枕夕風さむくなりぬるを衣うつなる宿やからまし
をとこ女の家にきて夜深くなるまで立ちわづら
ひて人にえ逢はであるに

八五最ど訪ふ人もなき哉今宵もや鳥さへ鳴て我は歸らむ

網代

九四紅葉の流て落る網代には白波もまだよらぬ日ぞ無き

野やどりせる旅人

一〇霜がれの草枕には君こふ心涙の露ぞおきまさりける

一六いつとても思ざらめど君懸て寄戀しきは旅にざりける

雪の降るいへ

二六いち著き印也けり新玉の年のくるゝは雪にざりける

同じ四年正月右大將殿の御屏の歌十二首

元日人の家にまれうどあまた來りあるはやのう

ちに入りあるは庭におり立ちて梅の花を折る

三六春立たば咲かばと思し梅の花珍しびにや人の折らむ

人の家にまれうどあまた來て柳櫻のもとに群れ

ゐて遊びするに花ちりがまふ

四六青柳の色に變らで櫻花ちるもとにこそ雪は降りけれ

藤の花まつにかゝれる

五六昔いかに頼めたればか藤波の松にしも猶懸り初けむ

をとこ神の社に詣でたる

六六祈りくる神ぞ思へば玉鉾の道の遠さも知られざり鳧

をとこ女の木のもとに群れゐたる所に舟にのり

て渡る人あるがをよびをさして物いへるやうな

りそのさま郭公を聞けるに似たり

七六かの方にはや漕寄せよ時鳥道になきつと人に語らむ

海のほとりなる人の家に女すだれをあげて海を

見いだせりその中にいたく老いたる女あり

八六濱邊には年ふる人は白波の共に白くぞ見え渡りける

人々秋の野に遊ぶ

九六秋の野の萩の錦は女郎花立ち交りつゝ織れる也けり

女はなの池のほとりなるたいにむいて水の底を

見る

〇七月影の見ゆるにつけて水底を天つ空とや思ひ惑はむ

菊おほくおひたる河のほとりなる人の家に女ど

も多く河づらに出でゝ遊ぶ

一七水上にひぢて咲けれど菊の花移ろふ影は流れざり鳧

人々舟にのりて網代にいけり

二七棹さしてきつる所は白波のよれど止らぬ網代也けり

道行人河のほとりに鶴むれゐたるを見る

三七よそなれば汀に立る葦鶴を波か雪かと分きぞ兼つる

おなじ年三月うちの御屏風の料の歌二十八首

元日雪降れり

四七今日しまれ雪の降れゝば草も木も春てふなべに花ぞ咲ける

子

五七歸るさは暗くなる共春の野の見ゆる限は行むとぞ思

梅の花のちれる

六七梅の花匂ひ〳〵て散る時は隱すに似たる雪ぞ降ける

柳おほかる所

七七青柳を便と思ひて春のうちの緑つもれる所なりけり

櫻の花

八七櫻花ぞる時にしも鳴なれば鶯の音もくれやしぬらむ

田つくれる所

九七荒小田を返す今より人知ず思ほに出むとをこそ思へ

山ぶき

〇八うつる影ありと思へば水底の物とぞ見まし款冬の花

春のくるゝ日

一八明日もくる時はあれ共花みつゝ馴ぬる今日は惜くぞ有ける

池のほとりに咲ける藤舟にのりて遊びみる

二八漕ぎ歸り見れども飽ず別れにし春の名殘の藤波の花

郭公

三八明暮るゝ月日あれ共時鳥なく聲にこそ夏はきにけれ

なでしこ

四八なかけくに色を染つゝ春も秋も知でのみ咲常夏の花

五月五日

五八鳥の音は許多あれども時鳥なくなる聲は五月也けり

池の鷸

六八我宿の池にのみ住鶴なれば千年の夏の數は知るらむ

人の木のもとにやすめる

七八影深き木の下風の涼吹來れば夏の内午秋ぞ來にける

夏かぐら

八八行く水の上にいはへる河社かは波たかく遊ぶなる哉

七夕

九八七夕の憂ふしならでよをふるは年に一度逢へば也鳧

初雁を聞ける

〇九初雁の聲につけてや久方の空の秋をも人に知るらむ

鹿の鳴ける

一九鳴く鹿の聲をとめつゝ秋萩の咲る尾上に我は來に鳧

八月十五夜

二九月毎に逢夜なれ共よをへつゝ今宵に增る影無りけり

九月九日

三九皆人の老を留むといふ菊は百年をやる花にざりける

野の花見たる

四九置露や花の色毎に染分きて秋の暮とは人にみすらむ

九月くるゝ日

五九草も木も紅葉散ぬと見迄に秋の暮ぬる今日は來に鳧

殘りの菊

六九秋咲ける菊にはあれや神無月時雨ぞ花の色は染ける

稻かりほせる

七九刈てほす山田の稻の袖ひぢて植し早苗と見えもする哉

あじろ

八九山風の痛く吹嵐す網代には白波さへぞより增りける

初雪

九九雪ふれば草木になべてをる人の衣手寒き花ぞ咲ける

松と竹とあり

〇〇松も皆竹も怪しく吹く風はふりぬる雨の聲ぞ聞ゆる

年のつごもり

一〇行く月日河の水にも有なくに流るゝともいぬる年哉

同じ五年亭子院の御屏風の料に歌二十一首

二〇水なかに有り社しげれ春立て氷とくれば落つる白玉

三〇三吉野の吉野の山に春霞たつを見る〳〵雪ぞ又ふる

四〇昔より思初てし野べなれば若菜摘にぞ我は來にける

五〇同じ色に散紛ふ共梅の花かをふり隱す雪なかりけり

六〇水の文の亂るゝ池に青柳の糸の影さへ底に見えつゝ

七〇春霞とびわけいぬる聲聞て雁きぬ也とほかは云らむ

八〇千早振神の便りにゆふ襷かけてや人も我を戀ふらむ

九〇櫻花ふりにふる共見る人の衣ぬるべき雪ならなくに

一〇藤波の影し移れば我が宿の池の底にも花ぞ咲きける

一一花鳥も皆行かひて鳥玉の夜のまに今日の夏は來に鳧

二一遙かにも聲のするかな時鳥この暮高く鳴けば也けり

三一五月雨にあひくるとは菖蒲草根長き命あれば也けり

四一足曳の山田を植ゑて稻妻の共に秋には逢むとぞ思ふ

五一吹風の著くも有哉萩の葉の戰ぐ中にぞ秋は來にける

六一綱はへてもり渡りつる我宿のわさ田雁音今ぞ鳴なる

七一人知れずきつる所に時しもあれ月の明くも照渡る哉

八一假にのみ人の見ゆれば女郎花花の袂ぞ露けかりける

九一つとめてぞ見べかりける花薄招く方にや秋はいぬ覽

〇二神無月時雨にそめて紅葉ばを錦におれる神南備の杜

一二三吉野の吉野の河の網代には瀧の水泡ぞ落積りける

おなじ年九月内裏の御屏風のうた五首

元日雪ふれる所

二二白妙に雪の降れゝば草も木も年と共にも新らしき哉

梅の花のもとに男女むれゐつゝ酒のみなどして

花を折りて内なる人のやれる

三二稀に來て折れば飽かぬ梅花常に見人如何とぞ思ふ

返し

四二宿近く植たる梅の花なれど香に我があける春の無哉

九月九日

百年を人に留むる花なれどあだにやは見る菊の上の露
稲かりほせる

朝露のおくての稲は稲妻をこふと濡てや乾かざる覽
同じ年四月の内侍の屏風の歌十二首

千年といふ松を引つゝ春の野の遠きも知ぬ我は來に鳧
足引の山の櫻の色見てぞをちかた人は種もまきける
惜め共止らぬ今日は世中にほかに春待心や有るらむ
夏衣たちして日より郭公くきかむとぞ待渡りける
年毎に今日にし逢へば菖蒲草宜もね長く生初めに鳧
玉とのみみなれ亂れて落たぎつ心清見や夏祓へする
くるゝ日は多かり乍ら七夕は年に一夜や夜を知らむ
久方の天つそらより影みればよく所なき秋の夜の月
移ろへど變らざりけり菊の花同じ昔の色や咲くらむ
聲高く遊ぶなるかな足引の山人いまぞ歸るべらなる
奥山の見えみ見えぬは年暮て雲の降つゝ隠す也けり
おなじ八年二月内の御屏風の料二十首
家にて子の日したる所
我が行かで唯にしあれば春の野の若菜も何も歸來に鳧
神まつる家
百年のうつきを祈る心をば神ながら皆知りませる覽
五日
郭公鳴けども知らず菖蒲草こぞくすりひの印也けるはらへ
憂き人のつらき心を此川の波に類へて祓へてぞやる
七夕
一年を待ちはしつれど七夕の夕暮まつは久しかけ鳧
小鷹狩
假にくる我とは知らで秋の野に鳴く松蟲の聲を聞哉
水のほとりに菊おほかり
水にさへ流れて深き我宿は菊の淵とぞ成ぬべらなる
男なき家
かけて思ふ人は無れど夕されば面影たえぬ玉葛かな
神樂
榊葉の常磐にあればながけくに命保てる神のきぬ哉
大鷹狩
冬草の枯も果なでしかすかに今としなれば狩にのみくる

以二和傳之本一書寫校合了溜字等如レ本也
建長元年八月日　藤原朝臣　在判

貫之集第五

戀

〔大和に侍りける人のもとにつかはしける〕
こえぬまは吉野の山の櫻花人傳にのみ聞きや渡らむ
山櫻霞の間より仄にも見しばかりにや戀しかるらむ
世中は斯こそ有けれ吹風のめに見ぬ人も戀しかり鳧
吉野河岩波たかく行く水の早くも人を思ひそめてし
逢ふ事は雲居遙になる神のおとに聞つゝ戀や渡らむ
人知ず物思時は難波なる蘆の白根の知られやはする
浪にのみぬれつる物を吹風の便り嬉しき海士の釣舟
津の國の難波の葦のめもはるに繁き我戀人知らめや
人しれぬ思のみ社侘しけれ我歎をば我のみぞきく
燃も敢ぬ此方彼方の思かな涙の河のなかにゆけばか
紅のふりでつゝなく涙には袂のみこそ色まさりけれ
風吹けば絶ず波こす磯なれやわが衣手の乾く時なき
戀しきや色にはあるらむ涙河泣るゝ音の水ぞ流るゝ
風ふけば嶺に別るゝ白雲の絶えてつれなき人の心か
涙川おつる水上早ければ堰きぞ兼つる袖のしがらみ
行末は逢にすぎつゝ逢事の年月なきぞ侘しかりける

白玉と見えし涙も年ふればから紅になりぬべらなり
歎きこる山路は人もしらなくに我心のみ常に行らむ
山陰に作る山田の木隠てほに出ぬ戀ぞ侘しかりける
燃れ共驗だになき富士のねに思中をば譬へざらなむ
〔宮仕へする女の逢ひ難かりけるに〕
手向せぬ別する身の侘しきは人めを旅と思ふ也けり
長き夜を思明して朝露の起てしくれば袖ぞひぢぬる
織女と思ふ物から逢事のいつとも知らぬ我ぞ侘しき
百羽がき羽ねかく鳴も我如く晨侘しき數はまさらじ
翳す共立ちと立にし無名には事無草もかひやなからむ
逢事の山彦にしてよそならば人めも我はよきずぞ有まし
棚機の年に一たび逢ふ事は人めぞ後の空には有ける
なこも刈る淀の澤水雨ふれば常より殊に增る我が戀
よそに見て歸る夢だにある物を現に人に別れぬる哉
我戀は知ぬ山路に非ねどもまどふ心ぞ侘しかりける
君戀る涙しなくば唐衣むねのあたりは色もえなまし
逢事を月日に添て待時は今日行末になりねとぞ思ふ
朝な〳〵梳れば落る我髪の思亂れてはてぬべらなり
秋風の稲葉戰ぎて吹なべにほに出て人ぞ戀しかりける
手も觸で月日へにける白眞弓起臥夜はい社寢られぬ
我爲にあたにざりける年月は思もなさで行返りつゝ
敷島の大和にはあらぬ唐衣頃もへずして逢由もがな
涙にぞぬれつゝしぼる世の人のつらき心は袖の雫か
逢見むと思ふ心を命にて生ける我身の頼もしげなき
逢事のなくて月日はへにけれど心計りは明暮もせず
伊勢の海の蜃とならばや君戀る心の深さ潜き比べむ
石上ふる野の道の草分けて清水くみには又も歸らむ
いにしへに猶立歸る心かな戀しきことに物忘れせで
年月は昔にあらぬ今日なれど戀しきとは變らざり鳧
戀にのみ年をすぐせど時鳥鳴かひもなく成ぬべら也
五月山梢をたかみ時鳥なくねそらなる戀もするかな
哀とも戀しとも思ふ色なれや落る涙に袖のそむらむ
哀てふことに印はなれ共いはではえ社あらぬ物なれ
哀れてふ事に飽かねば世中を涙にかふる我身也けり
さを鹿の鳴てしがらむ秋萩に置る白露我もけぬべし
秋萩を見つゝ今日社暮つれ下葉は戀の妻にざりける
みを狹み袖よりもふる涙川物思もなき人もぬれけり
野べ見れば生る薄の草若みまだもほに出ぬ戀もする哉
君こふる涙は秋に通へばや空も袂もともにしぐるゝ
人の身に秋や立覽言の葉の薄くこくなり移ろひに鳧
秋はわが心の妻に非ねども物思はしき頃にもある哉
惜からで悲しき物は身也けり憂世背かむ方し無れば
秋の野の移ふ見ればつれもなく枯にし人は草葉とぞみる
百千鳥鳴時あれど君をのみ戀ふる心はいつと定めず
秋の野に亂れて咲ける花の色の千種に物を思ふ頃哉
明たてば先さす紐の糸弱み絶て逢ずばなどいけかひ
雨やまぬ山の天雲立居つゝ安き時なく君をしぞ思ふ
大空は曇らざりけり神無月時雨心地は我のみぞする
年をへて戀渡れども我爲は天の河原のなきぞ侘しき
天の河瀬だえもせなむ鵲の橋をし知らず唯渡りなむ
紅に袖ぞうつろふ戀しきや涙の川の色にはあるらむ
人を思ふ心の空にある時はわが衣手ぞ露けかりける
秋風に萩の下葉の色づけば獨ぬる身ぞ戀まさりける
秋の野の草葉も分ぬ我袖の物思ふなべに露けかる覽
消易き雪は暫しもとまらなむ憂き事歎く我に代りて
よと共に流れてぞふる涙川冬も氷らぬみなわ也けり
雨ふれば色さりやすき花櫻薄き心を我が思はなくに
〔女なほざりにいふとなむ申しければ〕
色ならば移る計も染てまし思ふ心を知るひとぞなき
君により濡れてぞ渡る唐衣袖は涙のつまにざりける
初雁の鳴きこそわたれ世中の人の心の秋し憂ければ
住の江の波には非ねどよと共に心を君に寄せ渡る哉

夢路にも露や置くらし終夜通へる袖のひぢて乾かぬ
人めてふ物はいかなる道なれば使もゆかで遙けかる覽
賤機に亂てぞ思ふ戀しさを經緯にして織れる我身か
さけばちるものと思ひし紅は涙の川の色にざりける
哀てふことを緒にしてぬく玉は逢はで年ふる涙也けり
妻戀る鹿のしがらむ秋萩における白露我もけぬべし
思餘り戀しき時は宿枯てあくがれぬべき心ち社すれ
降雪を雪と見なくに人知れず物思ふ時の數增りけり
色もなき心を人に染しより移ろはむとは思ざりしを
近隣なる人の時々とかういふを外に移ろふと聞きて
近くてもあはぬ現に今宵より遠き夢みむ我ぞ侘しき
萩の葉の色づく秋を徒にあまた數へて過しつるかな
春霞やま郭公もみぢ葉も雪もおほくの年ぞ經にける
侘人は年に知られぬ秋なれば我袖にしも時雨降らむ
忍ぶれど戀しき時は足引の山より月の出てこそくれ
現には逢ふ事難し玉の緒の夜は絶ずも夢にみえなむ
侘渡る我身は露を同じくば君が垣根の草に消えなむ
忘られず戀しき物は春の夜の夢の名殘の覺る也けり
寢ぬる夜の夢は波にも非なくに立返つゝ君を見つるか
時鳥人まつ山になくときは我打ちつけに戀增りけり
歎こる山と我身は成ぬれば心のみ社いとなかりけれ
夕されば人松虫の鳴なべに獨ある身ぞ戀まさりける
山彦の聲の隨まに尋行かば孰こともなく我や惑はむ
降雨に出てもぬれぬ我袖の蔭にねながらひぢ增る哉
人知れずいはぬ思の侘しきは唯に涙の濡すなりけり
人知ずあだし心の有といへば波路とのみやゝまで泣覽
夢を見てかひなき事の侘しきは醒る現の戀にぞ有ける
逢見ずばいけらじとのみ思ふ身の道に惜く人に知れぬる
かきくもり雨ふる毎に道知らぬ笠取山に惑はるゝ哉
み山には時も定めず百千鳥めづらしげなく鳴渡る哉
ちる時はうしとみれども忘れつゝ花に心の猶止る哉
寢られぬを强て寢て見る春の夜の夢の限は今宵也鳧
現にも夢にもあはで戀しきは現も夢もあかぬ也けり
から衣袂をあらふ涙こそ今は年ふるかひなかりけれ
驗なき煙を雲に紛へつゝ世をへて富士の山は燃けり
わび人の袖をやかれる山川は涙のごとく落る瀧かな
此の頃は五月雨近み時鳥思ひ亂れてなかぬ日ぞなき
鳥のねも聞えぬ山の埋木はわが人しれぬ歎き也けり
花薄ほにはいでじと思ひしをとくも吹ぬる秋の風哉
獨して世をし盡せば高砂の松の常磐もかひなかり鳧
世中は春きぬべしと云なれば戀には年も暮すぞ有ける
しら波の打返すとも濱千鳥猶ふみつけて跡は留めむ
人に文やりける、女のいかゞありけむ許多たび返事もせざりければやりつる文をだに返せと云ひやりたりければ文やきたりける灰をそれとておこせたりければ詠みてやれる
君が爲我こそ灰と成果めしら玉章はやけてかひなし
ぬき亂る涙も暫しとまるやと玉の緒計り逢由もがな
照る月も影水底に映りけり似たる事なき戀もする哉
稀に逢ときく織女も天の川渡らぬ年は有じとぞ思ふ
今朝の床の露おき乍ら悲きは飽ぬ夢路を越る也けり
打寄する浦波見れば我戀の盡ぬ數こゝまづ知られけれ
いつとてか我が戀ざらむ千早振淺間の山は烟たゆ共
人知れず我し泣つゝ年ふれば鶯のねも物とやはきく
彦星も待日はあるを今更に我をいつとも人の賴めぬ
逢見ずて戀しきよを譬ふれば苦き旅は物ならなくに
逢見ずて我戀死なむ命をば道に人やつらしと思はむ
獨寢は侘しき物とこりよとや旅なるよしも雪の降覽
いつしかと今日も暮しつ飛鳥川渡て袖に玉藻潜かむ
詠むれば侘き物を山のはに入日とくさし早も暮なむ
みる人も無て我をばとはず共黃昏時に早もならなむ

身に添へる影ともなしに何しかもほかに侘き人と成けむ
立寄れば袖にそめく風の音の近くはきけど逢もみぬ哉
目にも見す聲も絶せぬ程なれど忍ぶに社遙けかりけれ
秋萩の下葉はよそにみしか共獨ねむとは思ざりしを
秋萩の下葉を見つゝ夕されば いつしかのねに鳴渡哉
人めゆゑ涙をせけば唐衣袂は濡れぬねこそ泣かるれ
沈むとも浮ぶとも猶水底に名を鴛鳥の共にとぞ思ふ
いかで猶人にもとはむ曉のあかぬ別や何に似たりと
〔人のもとよりまかり歸りて遣はしける〕
曉のなからましかば白露のおきて侘しき別せましや
〔源公忠の辨の對面しけるにいかなるにかありけむ對面せざりける時よみて遣しける〕
玉鉾の遠道も社人はゆけなどか今のまゝ見ねは戀しき
あひ知りたる人の許に暫し通はぬほどになりて中絶えて又思ひかへして云ひやる
石上ふるの中道中々に見すば戀しとおもはましやは
又は猶よりつかめ共玉の緒の絶と絶ては侘しかり鳧
年をのみ思ひつめつゝ今迄に心にあけるとのなき哉
年の内に春立事を春日野の若菜さへにも知にける哉
住の江の松の煙はよと共に波の數にぞ數ふべらなる
延喜十年春宮の御息所の右のおほいとのゝ御賀奉り給ふとて御かざしの料保忠の右大辨の詠ませ給ふ
心有て植たる宿の花なれば千年移らぬ色にぞ有ける
年毎に花し匂へば數へつゝ君が千代迄折むとぞ思ふ
藤原兼輔の中將宰相になれる喜びにいたりたるに初めて咲いたる紅梅を折りて今年なむ咲きはじめたるといひたるに
春毎に咲優るべき花なれば今年かもまた飽ずとぞ見る
延長五年九月右大臣殿前栽合のまけわざ內舍人たちばなのすけなほ仕うまつる洲濱にかける
〔日〕
草も木も思しあれば出る日の明暮社は賴むべらなれ
出てくる山も變らぬ長月の有明の月の影をこそ見れ
〔柏〕
松
願ふ事心にあればうえて見る松を千年の例とぞみる
色替へぬ松の葉のみぞ秋くれど紅葉する事習はざりける
鶴
打まがふ蘆べに立てる葦鶴の齡を君に波も寄せなむ
龜
波間より出くる龜は萬世と我思ふとのしるし也けり
千鳥
誰が年の數とかは見る行かひて衞鳴なる濱の眞砂を
延長八年土佐の國にくだりて承平五年に京にのぼりて左大臣殿しらかは殿におはします御ともにまうでたるに歌つかうまつれとあればよめる

貫之集第六

〔賀〕
延喜十二年定方の左衞門督の賀の時の歌
水底に影を映して藤の花千代待つと社匂ふべらなれ
百年と祝ふを我は聞き乍思ふが爲は飽ずぞ有ける
八條院にて琴ひくを聞きてよめる
長夜の秋の調べを聞人はをごとに君を千年とぞ思ふ
延喜十二年十二月春たつあしたに定方の左衞門督の、內侍督の賀奉れる時の歌
今年おひの新桑繭の唐衣千代をかけてぞ祝ひ初ける
岩の上に塵もなければ蟬の羽の袖のみ社は類べらなれ

〇百草の花の影までうつしつゝ音もかはらぬ白川の水
　恒佐の中納言の扇合の歌扇を洲濱に入れたり
一住江の松の風をもとめたれば扇ぐ扇のいつか絶せむ
　宰相中將師輔の四條の宮勤子内親王に住みはじめ
　給ふにまうでゝ事のついでありて詠める
二物毎に影水底にうつれども千年の松ぞ先は見えける
　承平五年十二月左衛門の督の殿實賴の男女君た
　ち元服し裳着給ふ夜よめる
三大原や小鹽の山の小松原はや木高かれ千代の影見む
　源公忠朝臣の子にもぎせさせ給ふ所にてよめる
四君をのみ祝ひがてらに百年を待ぬ人なく待むとぞ思ふ
　天慶六年正月藤大納言殿師輔の御消息にて魚袋
　をつくろはせむとて給はせりけるおそくいでく
　るにそのひに近くなりにしかば大殿に此の由を
　きこしめして我が昔よりようすると仰せられて
　あえ物に今日ばかりつけよとてつかひして給は
　せたりしかば喜び畏まりてようして又の日松の
　枝につけて奉る其の喜びのよし内侍のかんの殿
　の御方にいさゝか聞えむと思ふを忍びて其の心
　書き出でゝとあるに奉る
五吹風に氷とけたる池の魚は千代まで松の蔭に隱れむ

貫之集第七

別

　人の馬のはなむけによめる
六惜むから戀しきものを白雲の立別れなば何心地せむ
　みちのくへ下る人にやれる
七白雲の八重かさなれる遠にても思はむ人に心隔つな
　人に別れけるによめる

八別てふとは色にもあらなくに心に泌て侘しかるらむ
　音羽の山のほとりにて人に別るとて
九音羽山こだかくなきて時鳥きみが別を惜むべらなり
　肥後守藤原のときすけといふぬしのくだるにや
　れる
〇一日だに見ねば戀しき心あるに遠道さして君が行哉
　藤原のこれをかが武藏介になりて下るに逢坂の
　關こゆとて
一且越て別れも行か逢坂は人賴めなる名にこそ有けれ
　兼茂朝臣の物へゆくに兼輔朝臣の餞する所にて
　よめる、雨の降ければ
二久方の雨も心に叶はなむふるとて人の立とまるべく
　みちのくへ下る人を惜める
三狩衣する名におへる信夫山越む人こそかねて惜けれ
　遠くゆく人に別をしみて
四又もこそ物へ行く人別をしめ涙殘さず君になきつる
五遠くゆく人の爲には我袖の涙の玉も惜しからなくに
　兼輔の兵衛のすけ賀茂川のほとりにて左衛門尉
　みはるのありすけの甲斐へ行くうまのはなむけ
　によめる
六君を惜む涙おち添ふこの川の汀まさりて流るべら也
　あひしれる人の物へ行くに幣やるとて詠める
七ゆくけふも歸らむ時も玉鉾の道觸の神を祈れとぞ思ふ
八紅葉ばも花をもをれる心をば手向の山の神ぞしる覽
　鶴のかたに幣いるゝ物をしてよめる
九千年をば鶴に任て別る共逢見る事は明日もとぞ思ふ
　左中辨濟光の朝臣の人の馬の餞する所に幣にか
　ゝむとてよませたる、夏なりければ
〇いとまだき見ゆる紅葉は君が爲思初たる幣にざりける
一玉鉾の手向の神もわが如く我思ふとを思へとぞ思ふ
　師氏の少將信濃へゆく人に馬のはなむけせむと

てよませ給へる
二我にしも草の枕は乞なくに物へと聞けば惜くぞ有ける
三君がゆく所ときけば月見つゝ姨捨山を戀しかるべき
　同じ少將物へゆく人に火うちの具してこれに焚
　物を加へてやるに詠める
四折々に打て焚火の煙あらば心ざす香を忍べとぞ思ふ
　師尹の侍從のよませ給ふに
五遠くゆく君を思ふに人もみな時鳥さへ鳴きぬべら也
　物へ行く人まつ程すぐれば
六思ふ人またさも非ず逢坂の關の名社はさのみ也けれ
　橘の公頼の帥の筑紫へ下る時其の子の阿波守と
　しさだの朝臣の繼母の內侍のすけに贈れる物ど
　もにくはへたる歌、くすりに
七暫しわが止る計りに千代迄の君が贈りは藥こそせめ
　かつら
八打みえむ面影ごとに玉葛長きかたみに思へとぞ思ふ
　さうぞく
九許多にはぬひ重ねゝど唐衣思ふ心は千重にぞ有ける
　相しれりける人の物へ行くに馬の餞しけるあひ
　だに雨の降りければえいかずなりけるに詠める
〇四君を惜む心の空に通へばや今日止るべき雨の降らむ
　みちの國のかみ藤原のありときが馬のはなむけ
　宰相中將のし給ふによめる
一見てだにもあかぬ心に玉鉾の道の奥まで人の行く哉
　物へゆく人にやらむとて人のこふに贈れる
二逃へて忘るなと思心あれば我身を分くる形見也けり
　陸奥の守平のよりすけの朝臣の下るに幣のすは
　まの鶴の羽に書ける
三千年まで命たへたる鶴なれば君が往來を慕ふ也けり
　同じ人の馬の餞にやるとて兵衛のかみのよませ
　たるに
四遠くゆく君を送ると思ひやる心も共に旅寢をやせむ
　同じ人の馬の餞に橘のすけなはがさうぞく贈る
　とて加へたる歌
五玉鉾の道の山風寒からば形見がてらにきなむとぞ思ふ
　同じ人の馬のはなむけを大きおとゞの白河殿に
　てせさせ給ふにかはらけとりて
六人も皆遠道ゆけど草枕このたびばかり惜しき旅なし
　旅人にぬさやるとて
七別れゆく人を惜むと今宵より遠き夢路に我や惑はむ
　筑後守の下るに扇やるに加へたる
八あふげども盡せぬ風は君が爲我心ざすあふぎ也けり
　尾張守藤原のおきかたが女太郎の下るに幣さう束
　などやるに加へたる歌
九たつ幣のわが思をば玉鉾の道のべ毎の神も知るらむ
〇五其の人と香に思ほゆる唐衣忘らるなとてぬげる也鳧
一五人はいさ我は昔の忘れねば物へと聞きて哀とぞ思ふ
　近江守公忠のぬしの下るに贈る
二六別路を君にまだわが習はねば慕ふ心ぞ後れざりける
　同じ人の下るを逢坂まで送らむとて兼覽のおほ
　ぎみのこの料に詠ませたる
三出て行道とは知れど逢坂は歸らむ時の名に社有けれ
　源公忠朝臣の近江守にて下るに送る
四ねに鳴て侘しと思はぬ程なれど常の心に變りける哉
　師尹の頭中將東へ下る女に櫛の箱鏡など調じて
　やり給ふにそふとて
五別れても今日より後は玉櫛笥明暮見べき形見也けり
　信濃にゆく人に送る
六月影をあかず見るとも更科の山の麓に長ぬすなきみ
　人の國へ下るに旅にてよめる
七糸によるものならなくに別路の心細くも覺ほゆる哉

貫之集第八

哀傷

あひ知れる人の失せたるによめる

八五夢とこそ云べかりけれ世中に現ある物と思ひける哉

紀友則がうせたる時に詠める

九五明日知らぬ我身と思へど暮ぬ間のけふは人社哀なりけれ

山寺にゆく道にてよめる

〇六朝露のおくての山田假初にうき世の中を思ひぬる哉

あるじ失せたる家の櫻の花を見てよめる

一六色も香も昔のこさに匂へども植けむ人の影ぞ戀しき

河原の大臣失せ給ひて後にいたりて鹽竈といひし所のさまの荒れにたるを見て詠める

二六君まさで煙たえにし鹽竈のうら寂しくもみえ渡る哉

素性うせぬと聞きて躬恒がもとに贈る

三六石上ふるくすみこし君なくて山の霞は立ゐわぶらむ

躬恒

かへし

四六君なくてふるの山べの春霞徒にこそ立ちわたるらめ

とあるに又

五六消にきと身こそ聞えめ石上古き名失ぬ君にぞ有ける

世の中のはかなきことを見て

六六うけれ共いけるは扨も有物をしぬるのみ社悲かりけれ

七六昨日迄逢見し人の今日無きは山の雲とぞ棲きにける

いづみの大將うせ給ひて後に隣なる人の家に人々いたりあひてとかく物語などするついでにかの殿の櫻の面白くさけるをこれかれ哀れがりて歌よむついでに

八六君まし〻昔は露か古里の花見る毎にそでのぬるらむ

兼輔の中將のめうせにける年の師走の晦日にいたりて物語するついでに昔を戀ひしのび給ふによめる

九六戀ふるまに年の暮なば亡人の別や最と遠くなりなむ

題しらず

〇七立歸り悲しくも有か別れてはしるしも知らぬ煙也鳧

一七藤衣おりたる絲は水なれや濡れは增れど乾く時なき

東宮のかくれ給へる頃よめる

二七霞たつ山べを君によそへつ〻春の宮人なほや賴まむ

三七君まさぬ春の宮には櫻ばな涙の雨に濡れつ〻ぞふる

延長八年九月京極中納言の諒闇のあひだに母の服にて

四七一重だにきるはかなしき藤衣重ぬる秋を思遣らなむ

とよみて土佐の國にある間に贈られたる返し

五七藤衣かさぬる思おもひやる心は今日も劣らざりけり

題しらず

六七時鳥今朝鳴く聲に驚けば君に別れし時にぞありける

七七夢の如成にし君を夢にだに今は見ると雖くも有る哉

八七澄露を別れし君と思ひつ〻朝な〳〵に戀しかりけり

〔おやのおもひに侍りける時よみける〕

九七藤衣はつる〻絲は君こふる涙の玉の緒とぞなりぬる

かいせんうせぬと聞きてかのをひ在原のまさのぶがもとにいひて敦忠の中將のもとに贈る

〇八明暮て千年ある物と思ひしを猶世中は夢にざりける

一八人の如千年行くまは高砂の松と我とや今日を暮さむ

京極の中納言兼輔うせ給ひて後粟田に住み給ふ所ありけるにそこにいたりて前栽に松竹などあるを見てよめる

二八松もみな竹も別を思へばや涙の時雨ふるこ〻ちする

三八蔭にとて立ち隱るれば唐衣ぬれぬ雨ふる松の聲かな

同じ中納言うせ給ひて後

四八ふぢ衣新しくたつ年なれどふりにし人の猶や戀しき

貫之集第九

〔雜〕

屏風の繪なる花をよめる

五八咲初し時より後は打はへて世は春なれや色の常なる

夜の雲收まりて月行くこと遲しといふ題を人のよませ給ふ

六八天雲の棲けりともみえぬ夜は行月影ぞ長閑かりける

凡河内躬恒が月あかき夜きたるによめる

七八且見れど疎くも有哉月影の至らぬ里も有じと思へば

和泉國にある間藤原忠房の朝臣の大和よりこえきて贈れる

八八君を思ひ興津の濱に鳴たづの尋來ればぞ有とだにきく

とあるかへし

九八沖つ波高師のはまの濱松の名にこそ君を待渡りつれ

難波にてよめる

〇九難波がた生る玉藻を假初の蜃とぞ我は成ぬべらなる

池にみゆる月をよめる

一九二つなき物と思ふを水底に山のはならで出づる月影

身を歎きてよめる

二九春やいにし秋やはくらむ曇な陰の朽木と世を過す身は

冠給はりて加賀の介になりて美濃の介に移らむと申す間に内の仰にて歌よませ給ふ奥にかける

三九降雪や花と咲ても賴めむなどか彼身の成がてにする

こしの方なる人にやる

四九思遣る越の白山知ねども一夜も夢にみえぬ夜ぞなき

五九雨ふれば北へ棲く天雲を君によそへて眺めつるかな

志賀の山越にて山の井に女の手あらひて水をむすびてのむを見て詠みてやる

六九掬ぶ手の雫に濁る山の井のあかでも君に別れぬる哉

朱雀院の御門の御時やはたの宮に賀茂の祭のやうに祭し給はむと定めらるゝに奉る

七九松も生ひて又苦むすに石清水行末遠く仕へまつらむ

八九石清水松かげ高く影見えてたゆべくも非ず萬代迄に

藏人源のさねたゞがもとにいひやる

九九千世と思ふ君が便に今日待て摘まむと思し若菜なぞつむ

花の散る木のもとに來て歸りなむとて

〇〇我は來て家へと行くを散花は咲し枝にも返らざり鳧

源公忠の辨に日々に對めしけるにいかなる日にかありけむたいめせざりける時よみて奉る

一〇玉鉾の遠道を社人はゆけなどか今のまみねは戀しき

九月九日忠岑がもとに

二〇折菊の雫を多みわかゆといふ濡衣を社老の身にきれ

とよみておくれる返し

三〇露滋き菊なしなれる心あらば千世の無名の立むとぞ思ふ

竹生島に詣づるに守山といふ所にて

四〇白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず紅葉しに鳧

昔はせに詣づとて宿りしたりし人の久しうよらでいきたりければまさかになむ人の家はあると云ひ出したりしかばそこなりし梅の花を折りて

五〇人はいさ心も知らずふる郷の花ぞ昔の香に匂ひける

いるとて

返し

六〇花だにも同じ心にさく物を植ゑたる人の心しらなむ

秋の立つ日殿上のぬしたち川遊遙しにいきて歌よむついでに詠めりし

七〇河風の涼しくも有か打寄する波と共にや秋は立らむ

昔人の家に酒のみ遊びけるに櫻の散るさかりにて人々花を題にて歌よみし次でに

八〇散るが上に散も迷ふか櫻花斯してこそは春も過しか

春歌合せさせ給ふに歌一つ奉れと仰せられしに

九〇櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降ける

延喜の御時やまと歌知れる人を召して昔今の人の歌奉らせ給ひしに承香殿のひんがしなる所にて歌えらせ給ふ夜の更くるまでとかういふ程に仁壽殿のもとの櫻の木に郭公の鳴くを聞しめして四月六日の夜なりければ珍らしがりをかしがらせ給ひて召し出でゝ詠ませ給ふに奉る

〇一こと夏はいかゞ鳴けむ郭公今宵計はあらじとぞ聞く

興風が歌の返し

一櫻には心のみこそ苦しけれ飽て暮せゝ春しなければ

興風がもとに杜若につけてやる

二君がやと我がやと分ける杜若移はむ時みむ人もがな

かへし

三睦まじみかよひ隔てぬ杜若たが方にかは移ひぬべき

とあるを又かへし

四一直ちにて君がこえけむ杜若風を外にて移ろひぬべし

在原元方がもとに贈る

五一白雲のたなびき渡る倉橋の山の松とも君はしらずや

忠岑がもとに

六一甲斐がねのまつに年ふる君故に我は歎きと成ぬべら也

源宗于の朝臣のもとより

七一君獨とはぬからにやわが宿の道も露けく成ぬべら也

とあるかへし

八一草の露おきしも敢じ朝なげに心通はぬ時しなければ

躬恒が

九一まことなき物と思ひせば僞の涙は兼て落さゝらまし

かへし

〇二惜からぬ命なりせば世中の人の僞になりもしなまし

紀の國に下りて歸りのぼりし道にて俄に馬の死ぬべく煩ふ所にて道ゆく人々立ち止りていふ是はこゝにいまずかる神のし給ふならむ年ごろ社もなくしるしも見えねどうたてある神なりさきゝ〳〵もかゝるには祈りをなむ申すといふにみてゞらもなければ何わざもせで手洗ひて神おはしげもなしやそも〳〵何の神とか聞えむと問へば蟻通の神といふを聞きて詠みて奉りける馬の心

地已みにけり

一掻曇り文めも知ぬ大空にありと星をば思ふべしやは

難波の田籠の島にて雨にあひて

二雨にきる難田籠の島をきてみれば名には隱ぬ我身也鳬

源のとしのぶ朝臣のよびにおこせたるに今まで

こむとて遲くきければ

三春日すら我待人のこじとだに云ずは明日も猶賴まゝし

とあるかへし

四二こじと思ふ心はなきを櫻花ちると紛ふに障る也けり

七日の朝に躬恒がもとより

五二君に逢で一日二日に成ぬれば今朝彦星の心地社すれ

とある返し

六二逢見ずて一日も君に倣ねば七夕よりも我ぞまされる

あくる年の七月躬恒がもとに遣れる

七二朝戸あけて詠めやすらむ織女は飽ぬ別の空を戀つゝ

師走の晦日がたに身を恨みてよめる

八二霜枯に見えこし梅は咲に鳬春には我身あはむとはすや

九二ぬば玉のわが黒髪に年くれて鏡のかげに降れる白雪

〇三高砂の峰の松とや世の中を守る人とや我はなりなむ

一三今日見れば鏡に雪ぞ降にける老の知べは雪にや有覽

宰相中將のみもとに老いぬることを歎きて

二三ふりそめて友まつ雪はぬば玉の我黒髪の變る也けり

兼輔朝臣

かへし

三三黒髪の色ふり變る白雪の待つる友は疎くぞありける

又かへし

四三黒髪と雪との中のうきみれば友鏡をもつらしとぞ思ふ

五三色見えで雪積りぬる身の果や遂にけぬべき病なる覽

同じ中將のみもとにいたりてこれかれ松のもとにおりゐて酒などのむついでに

六三陰にとて立隱るればから衣ぬれぬ雨ふる松の聲かな

ある所に春と秋といづれか優れると問はせ給ひけるに詠みて奉りける

七三春秋に思ひ亂れて分きかねつ時につけつゝ移る心は

躬恒がもとより

八三草も木も吹けば枯ぬる秋風にさきのみ增る物思の花

返し

九三ことゝ繁き心よりさく物思の花の枝をやつら杖につく

花を折りてこれかれかざすついでに

〇四翳せ共花咲とやは賴まるゝみの成つべき時し無れば

承平五年十二月に左衛門督殿の男女公達のかうぶりし裳着し給ふ夜、との

一四今迄に昔の人のあらませば諸共に社ゑみて見ましか

とてたまへる御返し

二四古を戀る心のあるが上に君を今日見て又ぞ戀ふべき

三月晦日の日家うつりするに

三四我宿を春と共にし別るれば花は墓ひて移ろひにけり

宗于の左京大夫のもとより久しくあはぬことを

いひて

四四よそにても思ふ心は變らねど逢見ぬ時は戀しかり鳬

とある返し

五四櫻ちり卯の花も又咲きぬれば心ざしには春夏もなし

つかさなくて歎く間に正月の頃ほひ坊城左衛門督のもとに大い殿によきに申し給へと申し奉る

ついでにこれ奉り給へとて

六四朝日さす方の山風今だにも身のうち寒き氷とけなむ

七四枯果ぬ埋木あるを春は猶花の緣によくなとぞ思ふ

返し

八四埋木の咲かで過ぎにし枝にしも降積雪を花と社みれ

九四新玉の年よりさきに吹風は春ともいはず氷ときけり

延寛がもとより

〇五世中に誰か名高き垂乳男と我とが中を人は知らなむ

返し

一五我はいさ君が名のみぞ白雲の懸る山にも劣ざりける

又かへし

二五山に社劣らざるらめ君が名は天の川迄流れいにしを

世の中を歎きてありきもせずしてあるあひだ三月つごもりの日雅正の朝臣のもとより

三五君こずて年は暮けり立歸り春さへ今日に成にける哉

四五共にこそ花をも見むと待人のこぬ物故に惜き春かな

と侍るかへし

五五君にだにゆかでへぬれば藤の花黄昏時も知ずぞ有る

六五八重葎心の内に深ければ花見にゆかむいで立もせず

四月になりて同じ人のもとにやる

七五逢ぬまに梅も櫻も過ぬるを卯花をさへやりつべき哉

返し

八五散變る花こそすぎめ郭公今は來なかむ聲をだに聞け

源のみやこが年頃住みける近隣を外へうつると

聞きてやる

九五秋萩の散だに惜くあかなくに君が移ふ聞くぞ侘しき

式部丞三統が元夏が東なる隣に住みはじめてかく近隣なることなどいひおこせたるついでに詠

みておくれる

〇六梅の花匂の深く見えつるは春の隣のちかきなりけり

といへる返し二首

一六かたのみぞ春は有ける住人は花し咲ねばなもやかひなし

二六梅も皆春近しとてさく物をまつ時もなき我や何なる

同じ元夏がもとより

三六こち風に氷とけなば鶯の高きにうつる聲をつげなむ

といへる返し

四六いで傳ふ花にもあらぬ鶯は谷にのみこそ鳴渡りけれ
近鄰なりける男二月三日もとなつが許に到りて
なかりければかくなむ詣で來たるといひ置きて
歸りにたるつとめて贈れる
五六とはゞとひ訪ずは偖も有べきを物の始に歸るべしやは
とある返しに
六六心をし君に留めて年ふれば歸る我身は物ならなくに
元夏がもとにねて曉に歸りて門たゝくを聞きて
七六夜枯していつくからくる時鳥まだ明ぬより聲のしつ覽
三條の內侍の方遣にわたりてつとめて歸る間に
物などいふついでに結ぶ手の雫に濁るといふ歌
ばかりは今はえよみ給はじかしなどいひて車に
のる程によめる
八六家乍ら別るゝ時は山の井の濁りしよりも侘しかり鳧
六月に木のもみぢたるをとりて歌をよみて雅正
の朝臣のもとより
九六秋社あれ夏の野べなる木葉には露の心の淺くも有哉
とある返し
○七夏なかに秋を知する紅葉ばは色計こそ變らざりけれ
敦慶の式部卿のむすめ伊勢の御の腹なるが近う
すむ所有りけるに折りて瓶にさしたる花を贈る
とてよめる
一七久しかれあだに散るなと櫻花瓶にさせれど移ひに鳧
返し
二七千世ふべき瓶なる花は挿乍止らぬとは常にやは非ぬ
同じ所にちひさきくるみの木のありけるをこひ
てほるとてよめる
三七鶯に花しられげは見えぬ共春くる道の物にぞ有ける
返し
四七青柳の絲も胡桃のいかなれば花よりとに劣らざり鳧
近隣なりける所に方遣にある女の渡れると聞き
てある程に事にふれて見きくに歌よむべき人な
りと聞きてこれがよむさまいかで心みむと思へ
ど挑む心にしあらねば深くも思はず進みていは
ぬ間にこれも心見むとや思ひけむ萩の葉のもみ
ぢたるにつけておこせたりあはせて十首，女
五七秋萩の下葉に附て目に近くよそなる人の心をぞ見る
かへしに
六七世中の人の心に染しかば草葉の露も見えじとぞ思ふ
女
七七下葉には更に移らで只管に散ぬる花と成やしぬらむ
かへし
八七散もせず移ろひもせず人を思ふ心の內に花し咲ねば
女
九七花ならで花なる物はしかすがにあだなる人の心とぞきく
かへし
○八あだ也と名立てる人の言の葉に匂はぬ花も我は咲哉
女
一八色も香も無て咲ければや春秋もみえで心の散變るらむ
かへし
二八春秋はすぐす物から心には花も紅葉もなく社有けれ
女
三八春秋にあへど匂もなき物はみ山隱れの朽木なるらむ
かへし
四八奥山の埋れ木に身をなすことは色にも出ぬ戀の爲也
久しう住みける家をすまじとて外へうつるにま
へに生ひたる松と竹とを殘して
五八松も皆竹をも爰に留め置て別れて出づる心しらなむ
六八昨日けふ見べき限と守りつる松と竹とを今ぞ別るゝ
つかさ給はらで歎く頃おほき大い殿の物書かせ
給へる奥に詠みてかける
七八思ふ事心にあるをありとのみ賴める君に爭で知せむ

八八徒に世にふるものと高砂の松も我をやともと見る覽
十二月のつごもりがたに身の上を歎きて
九八雪だにも花と咲べきみにも非で何を便と春を待らむ
六月晦日に雅正の朝臣におくれる
○九花もちり時鳥さへいぬる迄君にゆかずも成にける哉
返し
一九花鳥の色をも香をも徒に物うかる身はすぐす也けり
三月つごもりの日人のもとにやる
二九又もこむ時ぞと思へど賴まれぬ我身にし有れば惜き春哉
世の中の心細くおぼえ常の心地もせざりければ
源公忠朝臣の許に此の歌をなむ詠みてやりける
三九手に結ぶ水に宿れる月影の有か無かの世に社有けれ
後に人のいふを聞けば此の歌の返しせむと思へど
いそぎもせぬ程に失せにければ驚き哀れがりてか
の歌に返し詠みておたぎにて誦經して川原にてな
むやかせける
三月二つある年左大臣實賴の君に奉る
四九餘さへ有て行くべき年だにも春に必ず逢ふ由もがな
春源といふ大德の櫻の花を薄紙につゝみて
五九空知ぬ雪かと人の云ときく櫻の降るは風にざりける
とある返し
六九吹風に櫻の波のよる時は暮れ行く春を空かとぞ思ふ
たゞひらと申す大臣の西なる殿に移り給はむと
て其の殿の一つやに御むすめの內侍督のおはす
べきかた殿のやのさうじに松鶴など一つ壁にか
きたる題にて詠ませ給ふ
七九色かへぬ松と竹とや垂乳根の親子久しき例なりけり
八九鶴の多くよそへて見ゆる濱べ社千年巢籠る心也けれ
春の暮るゝ日仰せにて仕うまつれる
九九こむ年の爲にはいぬる春なれど今日の暮るは惜くぞ有ける
○○櫻なき年ならなくに今はとて春の執ちかけふは行覽
山吹の花を見よとて給へるに奉る
一○音にきく井手の山吹見つれども蛙の聲は變らざり鳧
師輔の宰相の中將殿の四郎君の始めて袴着給ひ
ておほぢおとゞの御もとにまゐり給ふ贈物の返
りに加へむとてよませ給ふによめる
二○言にいはで心の內を知る物は髮の條さへぬける也鳧
〔比叡の慈惠といふ阿闍梨在しけるが失せ給ひな
むとて物病み給ひけるが痛く煩はれて〕例にあら
ずなん〔やみ給ひけるによめる〕
三○やみおきて今日か明日かと待つ程の折節知は涙也鳧
とよめるを內きこしめして御とぶらひに遣さむ
とてめされしに
四○鶯の花に鳴音を聞しまにいとほしきと知ずぞ有ける

伊勢集

孰の御時にかありけむ大御息所と聞ゆる御局に
大和に親ある人侍ひけり親いとかなしうして男
などもあはせざりけるを御息所の御せうと仲平
年頃云ひ渡り給ふを暫しは更に聞かざりけるに
いかゞありけむ親思ひつきにけりいかゞいはむ
となげきたりけるを年頃經にければ聞きつけて
けりされと宿世こゝありけめとてことにいはざ
りけり唯若き人は賴み難き物ぞと云ひける程に
時の大いまうち君に聲にとられにけり親もされ
ばこそなどいひければこの女耻かしと思ふ程に
この男のもとより人おこせたりけるこの女の家
は五條わたりなりける所にきて柿の紅葉に歌を

なむ書きたりける

五〇人住まず荒たる宿を來て見れば今ぞ紅葉の錦織ける

見て女いと心うき物から哀に覺えければ

六〇涙さへ時雨に添ひてふる里は紅葉の色も濃さ增り鬼

とてねずもちの紅葉にさしてなむやりける人の

子になりぬれば我を今はよも訪はじと思ひても

とありける大和に行きて暫し有らむと思ひて女

七〇三輪の山いかに待みむ年ふ共尋る人も有じと思へば

男返し

八〇諸越の吉野の山に籠るとも後れむと思我ならなくに

男これをいと哀と思ひて返しをば得せでかくよ

みたりける、枇杷大臣

九〇世を海の泡と消にし身にしあれば恨むる事ぞ數增ける

奈良坂のわたりにぞ追ひつきておこせたりける

女の返し

〇一渡つ海と頼めし事のあせぬれば我ぞ我身の浦を恨むる

とてぞ奈良にて返しやりける大和に三月ばかり

に住むにさうく〳〵しく寺巡りせむと思ひてあり

きけるにうもんと云ふ寺に詣でゝ睦月の十日

餘になむ有りける見れば其の堂の有樣瀧は雲の

中より落ちくるやうに見ゆ仙の窟と云ふは痛く

年積りて岩の上の苔八重にむしたり哀に尊く覺

えて涙落つる瀧に劣らず見知らぬ心地にたぐひ

なくめでたく見て物悲しく都思ひやられて石の

もとに暫く詠むるに此の寺いと閑うなりぬ雨や

ふらむとすらむと共にある人々急ぎければ雨は

降らじ雪など云ふ程にさかもと（原作さら）にて雪かき

くらし降るある人々いざ歌よまむと云ひければ

一一斷縫はぬ衣着し人もなきものを何山姫の布晒すらむ

とよみたりければ異人よまずなりにけりけふは

みちに出でゝこしと云ふ所に宿りぬかの寺の哀

なりしこと思ひ出でゝまた

一二見も果てず空に消なで限なく厭ふ憂身の世に歸る覽

と獨ごちて袖も絞るばかりに泣き濡しけるかゝ

る程につかまつりし所より早上らせよと仰せ給

ひければ早くのぼり給へもとより宮仕をこそし

給へと思ひしかと思はせて云ふに死ぬる心地す

べし由なき君たちをやは思ひかけしなど云ひて

明けて内參りつかまつる間にこの男も見かはし

て哀に云へど逢はで見かはす程にこの男の兄な

る男ありける今はあの人は世にもとはじなにか

頼み給ふ我を思へなどせちに云へど文ばかりは

見つゝも更にあはでありけりかく云ふけしき元

の人は知りたりけり女里に出でゝ秋前栽などの

をかしかりける尾花をなむ手すさびに結びたり

けるこのつらかりし人の來てよみたりける

一三花薄我こそ深く頼みしか穂に出でゝ人に結ばれに鬼

とよみて物おきたるはやなど云ひをり人數なら

ぬ身はなど打ち逃げたるさまに云ひければ男も

哀と思ひ女も哀と思へどあはでやりつこの兄の

男などか參り給はぬかの人の心のつらきをいで

ぬておぼすかとて

一四ひたぶるに思な侘そふるさるゝ人の心は其ぞ世の常

返し

一五世の常の人の心もまた見ねば何か此度けぬべき物を

斯く云ひける程にあくる年の神無月になむ有り

ける此の兄心いとつらければ吉野になむまかり

ぬるとてよみたりける

一六ひたぶるに厭果ぬる物ならば吉野の山に行方知れじ

返し

一七我宿と頼む吉野に君しいらば同じ挿頭をさし社はせめ

今は維摩會にあひに行かむとて吉野とは云ふな

りけり人の心つらしとて云ふにはあらざりけり

此の人の妹におはしましける御息所と聞えける

はおほむ樂のさわぎにて惱ましくなむし給ひけ

る宵に集まりて侍ふに此の人の聖になりにし男

きみの藏人と云ふものしてあからさまに參り給

へ物聞えむと云ひけりかへり事しけし暫しと云

ふふる言をなむ云ひやりけるされば、男

一八宵の間にはや慰めよ石上ふりにし事をうち拂ふべく

とよみたりける女かへし

一九渡つ海と荒にし床を今更に拂はば袖や泡ときえなむ

と云ひければ人々宵の目覺してなむ哀れがりけ

る人數ともせぬにそひて志いと深くありて男文

おこすれど返ごともせざりければ

二〇いなせとも云放たれず憂物は身を心ともせぬ世也鬼

とばかり云ひてやみにける斯て世に騷ぎいでき

て大臣も流され給ひける婿にて兵衛佐より但馬

介に其の人も流されにけり便の有りければ近ぐ

てはさ思ひてやみにしをこゝ遠くなり給ふが哀

なる事と云ひにやりたりければ返事にかくなむ

二一懸て云へば涙の川のせを早み心づからや又は泣れむ

又同じ女を云ふともなく云はずともなく年を經

て呼ぶ男有りけり返事もせざりければこゝら年

月になどかみつとだにの給はぬと云ひければ見

つとぞ云ひたりける それより此の女をばみつと

ぞつけたりける、男

二二立歸り踏行かざらば濱衛跡見つとだに君云はましや

女返し

二三年經ぬる事思はずば濱衛踏とめてだに見すべき物か

夏のいと暑き日盛りに同じ男のよみたりける

二四夏の日の燃る我身の侘しさに水戀ひ鳥の音をのみぞ鳴

返しもせず此の女は此彼云へど聞かず宮仕をの

みしけるに時の帝めしつかひ給ひけるやうぞけ

しからぬ人の事を聞かざりけると心にも親など

も思ひ渡りける内に孕みにけりさて男みこをぞ

產み奉りける我が親みづからもいと嬉しと思ひ

けり仕うまつりし御息所も后になり給ひにけり

產みたりける男み子は桂の宮と云ふ所に置きて

自らはきさきの宮に侍ひけるに雨の降る日打ち

詠めて居たりければ后宮のよみて給はせたる

二五月の中の桂の人を戀ふとてや雨に涙の添てふるらむ

御かへし

二六久方の中に生たる君なれば光をのぞみ賴むべらなる

斯て帝おり居さり給ひて二年と云ふに御髮おろ

させ給ひて仁和寺と云ふ所に住み給うて時々ぞ

后宮には坐しましける后宮も仕る人も限なく悲

しと見奉る元住み給ひし所に帝坐しまして御と

ぎ聞しめす仕りし人々君達などめし出でゝ御お

ろし給ふ后宮の御方よりよみて出し給へり

二七言の葉に絶せぬ露は置く覽や昔覺ゆる圓居したれば

御かへし

二八海とのみ圓居の中は成ぬめりそ乍ら非ぬ君が見ゆれば

となむこの帝に仕う奉りて產みたりし人は世に

さいはひなき物なりければ生み奉りし君は八つ

にて失せ給ひにけるいみじく悲しと思へどかひ

なし死なむと思へど死なれねば夜晝なきたるに

このみこになりけたりし人の云へりける

二九思ふより云ふは愚に成ぬれば譬ていはむ言の葉もなし

と云へど更に物もおぼえねば返事もせずなりに

けりかへりくる年の五月に時鳥なくを聞きてひ

とりごちける

三〇しでの山越えて來つらむ時鳥戀しき人の上語らなむ

今は心うがりてもとの宮仕をなむしける后の御

心は限なくめでたくなまめきて世に頼なくなむおはしましける此の程の曹子には前栽などいとをかしう植ゑてなむ住みける秋の頃里に出たるに宮よりなどか今までは參らぬ遲く參れば花の盛もみな過ぎぬべし松蟲も鳴き止みぬべかめりとなむの給はせたりける御返事に

一三松虫も啼已ぬ也秋の野に誰呼ぶとてか花見にも來む

御返し

二三呼ぶとしも聲は聞えで花薄忍びに招く袖も見ゆめり

又斯く聞えさせたりけり

三三人もきぬ尾花が袖に招れて最どあだなる名をやたちなむ

御返し

四三我が招く袖とも知らで花薄色變るとぞ思ひわびける

歌めすおくにかきて參らす

五三山川の音にのみ聞く百敷をみをはや乍ら見由もがな

常に惱ましくせさせ給ひけるを遂に六月に隱れさせ給ひにける淺ましくいみじく悲しくて仕りし人宛ら集りて夜晝泣き戀ひ奉るに後の御わざの折にやう〳〵成りぬ雨の降る日心うしと云ひし人しもになむ籠り居たりける上の人集りて御わざの組をなむしける下なる人糸はよりはて給ふべかなり只今何わざをかし給ふこゝには雨をなむ見出して詠め侍ると云ひあげたりければ上の御もとたちの返しには糸はよりはてゝ今はねをなむより合せてなき侍ると云ひおこせたれば下なる人

六三より合せて泣なる聲を糸にして我涙をば玉にぬかなむいとみそかに人にあひたりけるにやう〳〵云ひのゝしりけり男此のかうぶりの箱に玉をなむ入れたりけるそれが緒に女の結びつけたりける

七三瀧つ瀨と名に流るれば玉緒に逢見し程を較べつる哉

故中宮の春宮の女御とまだ聞えし時題給はせて歌よませ給ひ〻御屏風のわか梅の花の便に物云ひたる人と思はせて繪に男の行き合ひて物云ひ始めたるを一のひらにかゝせ給へる、男

八三見し人に又もやあふと梅花咲しあたりを行ぬ日ぞなき

返しと思はせて

九三一度に戀にし梅の花なれば散りぬと聞けど今はみなくに

櫻の盛りに同じ男

〇四我が宿にいざ誘はれよ櫻花人に普く告げざらましや

藤の花の咲きたる所を男の來て女をかいまみてよみて入れたる

一四藤の花今日見つるより濃紫村濃に色ぞ深くなりぬる

此の男來て門に立ちやすらふ程に花橘に時鳥鳴くを聞きて男よみて入れたり

二四とに立てるわれやかなしき時鳥花橘の枝にゐてなく

返し

三四何かとも君をば知じ時鳥來乍らなくはさるにやは非ぬ

六月に被へするところに男きあひけり

四四年中に我れが嘆は成ぬれば世にみそぐ共失せじとぞ思ふ

返し

五四嘆をばなでゝ祓ふる大幣は早河の瀨に流れ出にけり

七夕の日

六四朝まだき急ぎ引らむ今日の緒に心長さを比べてしがなかへし

七四七夕の細き緒をして比ぶらむ心のかたや先は絶せむ

秋の野に花見にいくと聞きて男の出で來にけり

八四秋の野に出ぬと聞くを花薄忍びに我を招きやはせぬ

返し

九四孰方に有りとしらばか花薄儚なき空を招きたてらむ

男せちに物云はむと云ひて來たり門に立てる程に時雨の降れば、男

〇五渡つ海の底に深くと入らず共時雨にだにも濡さざらなむ

せめて云へば呼びてすのこにすゑて物いふ、女

一五ふりとけぬ時雨ばかりに山彦の聲を儚く聞き交す哉

思ひ始めたる男師走ばかりに來たりあひぬべきやうなるを親聞きて騷ぎければえあはで、女

二五夜こゆと誰か告げゝむ相坂の關固むめり早く歸りね

と云ふ程に雪いみじく降りければ

三五歸さは道行べくも思ほえず凍りて雪の降りし增れば

と云ふ程に夜明けぬれば、男

四五逢事の明ぬ夜なから明ぬれば我こそ歸れ心やはゆく

長恨歌の御屏風亭子院にはらせ給ひて其の所々をよませ給ひけり御手にて

五五紅葉に色見えわかで散る物は物思ふ秋の涙なりけり

六五斯計り落つる涙の包まれて雲の便を告げましものを

七五歸來て君おもほゆる蓮葉に涙の玉と置きゐてぞみる

八五玉簾の明るも知らで寢し物を夢にも見しと思ける哉

九五紅に拂はぬ庭はなりにけり悲しき言の葉のみ積りて

これは后にかはりて

〇六知べする雲の舟だに無りせば世を海中に誰か問まし

一六月も日も七日の夜の契をば聞きし程にも又ぞ忘れぬ

二六消し身に又も消ぬべし春霞かすめる方を都と思へば

三六木にも生ひず羽も並べで何しかも波路隔て君を聞覽

四六居雲の人わきもせぬ物ならば水脈と涙は流ざらまし

此の内侍のかみの四十の賀を清貫の民部卿仕うまつり給ひける御屏風の若菜摘みたる所に

五六春の野の若菜ならねど君が爲年の數をも摘まむとぞ思ふ

梅の木の傍なる竹にたかんなぬく

六六竹の葉に散懸らなむ梅の花雪の中のを取と見るべく

櫻の花ある河づらあり

七六水底に映る櫻の影見れば此河づらぞ立ちうかりける

海づらなる家に藤の花咲きたり

八六我宿の影ぞと頼む藤の花立より來とも波にをらるな

石井のある所

九六沸くとのみ目には見ゆれど我宿の石井の水は温まざり鳧

鶴立てる所

〇七遙なる程に立ち舞ふ葦鶴を我まへ近く波もよせなむ

たきのもとなる人

一七水上と宜も云けり雲ゐより落てくるとも見ゆる瀧哉

鶴雲ゐに遊ぶ

二七大空に群れたるたづのさし乍ら思ふ心の有げなる哉

藻刈りたるあまあり

三七心して玉藻は刈れど袖毎に光も見えぬ蜃にぞ有ける

松の末海に入りたる

四七波にのみひたれる松の深緑幾汐とかは知るべかる覽

わたつ海より漕ぎ出でたる所

五七遙々と雲ゐをさして行く舟の行末遠く思ほゆるかな

海士の家に煙立つところ

六七袖濡れて蜃のたく火は見えねばや雲と煙の立昇る覽

亭子院の六十賀京極の御息所の仕うまつり給ふ

御屏風の歌、子日する所松のいとちひさきあり

七七生ふるより年定れる松なれば久しき物と誰か見ざらむ

松に藤かゝれり

八七頼つゝ懸れる藤は松樹の千代てふとも飽ずぞ有ける

或る所に北の宮の御裳着の歌ども、竹多かる所

九七年毎に生添ふ竹のよゝを經て變ぬ色を誰とかは見む

女郎花を折りみて硯の上に置けるを見て

〇八女郎花見るに心はなぐさまでいとゞ昔の秋ぞ戀しき

狩する人田舍の家の田などのまへなるに近うより來たり

一八假にとて聞くに心の見えぬれば我袂には寄せじとぞ思ふ

神樂するところ

二八年毎に神をぞ祈る榊葉の色も替らでをらむと思へば

北の宮の裳着給ふに院其の大臣の贈り物に御屏風の和歌奉れるかぎり

[八]古の心し絶ず行く水にわがまつ影も今日こそはみれ

浮草舟にて取るところ

[四八]根を絶て水に浮きたる浮草は池の深さを頼む也けり

后宮の五十賀せさせ給ふに御屏風に被する所

[五八]禊ぎつゝ思ふ事をぞ祈つる八百萬代の神のまにまに七月七日たらひに影見るところ

[六八]珍しくあふ七夕はよそ人も影見ま欲き物にぞ有ける

松の末に鶴立てり

[七八]顯はなる潟にしも住む葦鶴は千世を見よとの心也鳧

これも同じ后の宮の御賀おほきおとゞの仕り給ひし題の住の江の濱に鶴立てり

[八八]住江の濱の眞砂を踏むたづは久しき跡をとむる也鳧

紅葉散るまに酒のみしたる所

[九八]圓居する身に散かゝる紅葉ばゝ風の被くる錦也けり

陽成院の帝の七十の賀にうちみたり箱に龜鶴菊などかきたり

[〇九]露懸る菊の中なる葦鶴は今幾たびの千世かそふらむ

式部卿の宮の前栽合に、草のから

[一九]草のから色變りぬる白露は心おきても思ふべきかな

龍にん

[二九]風寒み鳴く雁音の聲によりうたむ衣を先やかさまし

[三九]梅の花香にだに匂へ春立ちて降る泡雪と色紛ふめり

[四九]心のみ雲ゐの程も通ひつゝ戀ゝそ渡れかさゝぎの橋

[五九]故郷は誰れ聞かめとや鶯の花よりさきに春を告らむ

亭子の御門の小野なるゆきとしが家の梅の花見におはしますに

[六九]思出でゝ見にこざりせば梅花誰に匂の香を移さまし

[七九]關越ゆる道とはなしに近乍ら年に障りて春をみる哉

宮に

[八九]櫻花あだに散らさぬ事をだに我心にも任せてしがな

内の御屏風に花見に行くところ

[九九]散り散らず聞まゝ欲きを故郷の花見て歸人もあらなむ

まひ女

[〇〇]移ろはむとだに惜しき秋萩に折れぬ計も置ける露哉

京極の院に亭子の帝おはしまして花の宴をせさせ給ひ參れと仰せられしに參りて池に花など散りたるを見て

[一〇]年を經て花の鏡となる水は散懸るをや曇ると云らむ

[二〇]春毎に流るゝ河を花と見て折られぬ水に袖や濡なむ

又の日

[三〇]けふまでも流ぬる哉水上の花は昨日や散果てにけむ

返し　季繩

[四〇]青柳の枝に籠れる春雨は絲もてぬける玉かとぞ見る

[五〇]淺綠そめてみだれる青柳の絲をば春の風やとくらむ

[六〇]見る人もたき山里の櫻花ほかの散なむ後ぞ咲かまし

[七〇]逢ふ事の君に絶にし我身よりいくらの涙流出ぬらむ

春日の歌合の所

[八〇]櫻花散てみ雪に紛ひなばいづれか花と春にとはなむ

[九〇]濡つゝも雨には行かむ松風は千歳の春を洩さざらなむ

或る處に五せつの頃堀河殿に枇杷の大臣おはしまして只忍びやかにと有るに

[一〇]八少女に小忌の衣のき乍らに馴ぬ程をば誰か忍ばむ

鏡の裏に鶴のかたを鑄つけて侍りければ

[一一]千歳とも何か祈む浦に住たづの上をぞ見べかりける

ふる家にあからさまにゆきて

[二一]見初めずはあらまし物を故郷の花に心の止りぬる哉

宮に

[三一]諸共に有し昔を思ひ出でゝ花見る毎に音こそ泣るれ

辛崎を題にて

[四一]浪の花沖から咲て見えつるは河の春とも風ぞ吹ける

花の散りたるを家にて

[五一]追風の我宿にしも吹こずば居乍ら空の花を見ましや

春物思ひけるに

[六一]櫻花匂ふともなく春來ればなどか嘆の茂りのみする

[七一]白玉を包む袖のみ泣るゝは春は涙もさへぬなりけり

せちぶんのつとめて四月朔宮にて

[八一]眺こまで春はいぬらむ暮はてゝ別しとは夜に成にき

兵衛佐の命婦

[九一]暮果てゝ春の別の近ければ幾らの程も行じとぞ思ふ

忘れ侍りにける人を夢に見て

[〇二]春の夜の夢に有つと見えつれば思絶にし人ぞ待るゝ

風いたく吹く日櫻のいたく散り侍りしかば

[一二]風さへもて騷ぐかな櫻花心とだにも散るに任せて

[二二]五月には鳴も古りなむ時鳥まだしき時の聲を聞ばや

夜深けて時鳥の一聲啼き侍りしに

[三二]一聲と聞くとはなしに時鳥夜深く眼をも覺しつる哉

[四二]今朝來鳴き未だ旅なる時鳥花たち花に宿はからなむ

撫子のおもしろきを見て隣にやるとて

[五二]孰くにも咲はすらめど我宿の大和撫子誰にみせまし

返し

[六二]獨のみぬる床夏の露けさは涙にさへや色はますらむ

年を經て物云ひ渡りける人の業平朝臣也

[七二]賴めつゝ逢はで年ふる僞にこりぬ心を人は知らなむ

返し

[八二]夏蟲のしる〳〵惑ふ思をばこりぬ悲しと誰か見ざらむ

はるかみの宰相の北の方月の明き夜かどの前を渡り給ふとてせうそこをのみ云ひ入れ給へりければ返事に

[九二]雲居にて逢語らはぬ月だにも我宿過て渡るとは見ず

[〇三]五月雨に物思ふ人の村雨は身よりすてふる誠也けり

[一三]夏虫の思ひに入てなども斯我心から消なむともする

すざ〻院の鶴を人の心にもあらでうち殺したりける今一つの鶴の戀ひて雨ふる日いみじう鳴きければ

[二三]啼く聲に添ひて涙は昇らねど雲の上より雨のふる覽

鶴は九月九日ぞしにける

[三三]菊の上に置ゐるべくもあらなくに千歳の身をも露になす哉

大和に親ありて通ひける人後に親なくなりければ昔戀しくて

[四三]獨り行く事こそうけれ故郷の昔習ひてみる人もなみ

山のへにて

[五三]草枕旅としなれば山のへに白雲ならで我やとまらむ

伏見にて

[六三]名にたちて伏見の里と云事は紅葉を床に敷けば也鳧

亭子の帝の御前に前栽植ゑ給ひて朝露おけるをめでさせ給ひて歌よめとのたまひければ

[七三]植たてゝ君がしめゝふ花なれば玉と見えて露も置くらむ

これは御かへし

[八三]白露のかはるも何か惜からむ有ての後も世は憂物を

前栽植ゑさせ給ひて歌よめと仰せられければしをに

[九三]受とむる袖をし緒にて貫かば涙の玉の數は見てまし

これも

[〇四]露だにも置くともみえぬ秋夜は更しを西に月のなる覽

[一四]思ふ人を今は見じなど云ひて

いかなれば見しよなる覽秋霧の紛ふまだにも悲しき物を

すざく院の七條のみこの御息所の八十賀大きおとゞのし給ひし屏風の

[二四]我宿も照滿つ秋の月影は長き夜見れど飽ずもある哉

鈴蟲取にやりてせんざいの中に放ちたりける夜

[三四]孰くにも草の枕を鈴蟲のこゝを旅とも思はざらなむ

[四四]わび果つる時さへ物の悲しきは孰くを忍ぶ涙なる覽

なき事を人の云ひしころ

四世と共に我濡衣となる物は侘る涙のきするなるべし
五柵に袖をとむれどせきとめずこぼるゝ物は涙也けり
六四逢見ても包む思の悲きは人まにのみぞ音はなかれける
七人のつらくなる頃

八四人知れず絶なましかば侘つゝも無名ぞとだに云まし物を
九四人戀ふる涙は春ぞ温みける絶えぬ思の沸すなるべし

物云ふ人の近くあらぬが音せざりけるに

○五故郷にあらぬ物から我爲に人の心の荒れて見ゆらむ

亭子院の御屏風に河の邊に紅葉あり

一五浮沈み淵瀬ながるゝ紅葉に深く淺くぞ色は見えける
二五ひたはへてもる綱なのみ引時は稻葉に露ぞ止らざりける

花の面白きみ折りて式部卿の宮に奉るとて

三五故郷の荒果にたる秋の夜に花見がてらに來人もがな

御返し

四五秋の野に我松蟲の啼くといはゞ折で根乍ら花は見てまし

人の

五五岩瀬山谷の下水うち忍び人のみぬまは流れてぞふる

返し

六五瀧つ瀬と速からぬなぞ恨つる見ず共音を聞かむと思へば

はらからのなくなりたる戀ひわたる頃

七五面影も相見るとになす時は心のみこそ沈められけれ

長柄の橋つくると聞きて

八五難波なる長柄の橋もつくる也今は我身を何に譬へむ

秋の頃うたて人の物云ひけるに

九五知と云へば枕だにせでねし物を塵ならぬ名の空に立覽

○六三吉野の山の下風寒からし妹背の河もなみ高くみゆ

一六難波潟短き葦のふしのまも逢で此世を過してよとや

二六沖つ藻を取でや止まむ仄々と舟出し事も何によりてぞ

或る大納言の家の比叡坂本に音羽と云ふ所にいとをかしく作りてありけるを見て遣水のほとりなる岩に書きつけゝる、音羽河に瀧など落したりける

三六音羽河堰入れて落す瀧つ瀬に人の心の見えもする哉

人の心かはりける頃給に浪の越えたりけるを見てかきつけたりける

四六松懸て頼めし事はなけれ共浪の越ゆるは猶ぞ悲しき

友達なる女筑紫へ行くとて

五六抑へつゝ我は袖にぞ堰止る舟こす汐に爲じと思へば

返し

六六後れずぞ心に乘てこがるべき波にも止よ舟見えず共

我は涙を海となしつゝ

疑ひたることありて人のし給ひければ

七六清けれど玉ならぬ身の侘しきは磨ける物に云ぬ也鳧

八六夢にだに見ゆとは見えじ朝夕〳〵我俤に果る身なれば

人のそらごとを云ひければ

九六憂事の斯くわく時は涙川目の前にこそおち增りけれ

人のおぼつかなく侍りしに

○七さも社は相見る事の難からめ忘ずとだに云人の無き

返し

一七年經れどいつも我こそ忘れずの濱衣とは鳴渡りけれ

二七逢事の湯におり居る葦鶴の洲に鳴聲は聞えやはする

三七涙にぞ浮きて流るゝ水鳥の濡ては人に見えぬ物から

四七鶏に非ぬ音にても聞えけむ明行く時は我は泣きにきかへし

五七曉の寢覺の耳に聞きしかど鳥より外の聲もせざりき

御屏風の和歌七夕のかげ見たる所

六七別るてふ影をだにみじ七夕は人のぬる夜を待も社すれ

人の許に炭やるとて

七七年をへて思は炭に有乍おき火ばつかぬ物にぞ有ける

八七誰爲にこれる嘆をうちつけに匂も知ぬ我におほする

屏風

九七山里に宿らざりせば郭公聞人もなき音をや鳴かまし

屏風、夜一夜物思ひたる女の面杖つきたる所

○八終夜物思時の面杖はかひなたるさぞ知られざりける

碁打ちたる所

一八斧の柄の朽つ計には非ず共返りみにだに見人の無き

是も屏風に

二八折つゝも見まくぞ欲き藤の花影をだにとや花はをる覽

式部卿宮うせ給ひて御四十九日はてゝ家にまかる人

三八悲さぞ增りに增る人の身にいかに多かる涙とか知る

四八君により儚き死にや我はせむ戀返すべき命ならねば

ことかはりたる人に

五八逢事の形見に聲の高からば我泣音とも人は聞かなむ

人に

六八身にかふる人にも我は倣てしが後安きを見せむと思へば

七八貫きためて數も見ゆべく荒玉の緒計だにも逢由もがな

八八夢ならで逢事難き世中は大方床を起きずもあらまし

九八我宿や雲の中にも思ふらむ雨も涙もふりにこそ降れ

○九身の浮ぶ事をも知で河中におり立ぬべき心ち社すれ

八條の大將の御四十賀權中納言の仕うまつり給ひける子日松植ゑたる所

一九千年ふる松と云共植てみる人ぞ數へて知べかりける

岩の上につる立てり

二九岩の上を栖にしたる葦鶴は千世を長閑に思べきかは

三九秋の野の花の名立に女郎花假にのみ來人に折らるな

文おこせたる人をたがもとにあるぞと問ひければ人の親なくなりたりけるいかにと云ひたりけるにおこせたりけるになむありける

四九大空に飛てふ事の遠ければ雲の上にぞさして聞ゆる

かへし、女

五九濱千鳥翼のなきを飛からに雲路に爭で思ひかへらむ

家の近かりければ立ち歸りて、男

六九翅無鳥となれば飛去ずま近きえにも住まむとぞ思ふ

此の返事に女にど紙を結びてやりたりければ

七九なだの海清き渚に濱千鳥ふみおく跡を波やけつらむ

返し、女

八九灘の海は荒やまさらむ沖つ波なごまむ方の淺き求めよ

又返し

九九なだの海荒增るべき物ならば焦れむ舟を打寄せよ浪

返し、女

○○荒れ乍ら舟よすべくも思ほえず方定めてし波の立ねば

又、男

一○涙川濱べによらね浮舟はこちてふ風や吹くと社まて

返し、女

二○追風に風は直りて吹きぬとも蠶の碇に留まりやせむ

又、男

三○風吹けば行じ留まる小舟には碇をおろす人は有じな

からにまかりける人心變りて侍りければ

四○裏うへに思遣らるゝ唐衣からに移りて君がきたれば

又、男

五○玉葛我來るとを君知らばつら乍らにも絶じとぞ思ふ

女

六○打はへてくるを見るにも玉葛手にだに懸じ結知ねば

をとこ、又

七○玉葛結も知らぬ物ならばこのいできせむとぞ怪しき

かく云ひつゝ參りこむと云ふものからえこで初雪のふる日

八○神無月時雨計は降ずしてゆきがてにのみなどかなる覽

返事

九○雪まぜて見るべき物を神無月時雨に袖の濡も社すれ

返し

○一風吹ば止らぬ露の我身かくいかむと思ふとの儚なさ

春宮の御息所の八十賀中務のみこし給ふ御屏風に、若菜つみたる所

一春日野の若菜の種は殘してむ千歳の春も我ぞ摘べき

稲荷山越えたる所

二稲荷山行きかふ人は君が代を一つ心に祈りやはせぬ

世の中の憂きこと嘆く人

三惜からぬ命なれ共心にし任せられねば浮世にぞふる

四果は身のふじの山とも成ぬなり燃ゆる煙の煙絶ねば

五逢に逢て物思ふ頃の我袖は宿る月さへ濡るゝ顔なる

六爭でかく心一つを二しへに憂くもつらくも做て見す覽

堀河院にとさの藏人とて侍ひける人みちの國の

すけつねくにと人のめにて下るに

七鹽竈の浦漕ぎつらむ舟の音聞しが如に聞くは悲しや

返し

八鹽竈の浦漕ぐ舟の音よりも君を怨みの聲ぞまされる

筑紫へ行く人に

九待侘て戀しくならば尋べく跡無き水の上ならでゆけ

甲斐へ下る人に

〇二君が代はつるの郡にあらできねど定なき世の疑もなく

思ふ事ある折に

一見し夢の思出しるく宵毎にいはぬを知るは涙也けり

せきう法師の和泉の講師に流されける頃皆人の

歌よみけるに

二別れてはいつ相見むと思らむ限ある世の命ともなし

物へ行く人にかつらをやるとて

三けづりこし心もしるく玉葛手向の神になるぞ嬉しき

これを思ふことありける頃

四身のうさを知ればはしたに成ぬべみ思へば胸の碎けのみする

五伊勢の海に年經て住し蜑なれど斯るみるめは被かざりしに

（下句百二十四本之句歟）　ば歟

孰の藻かは被き殘さむ

父の服ぬぎて返して

六伏轉び惑ふ形見を見るとてや泣れし衣に身は後れけむ

世の騒がしき頃

七定なき世を聞く時の涙こそ袖の上なる淵瀬なりけれ

前栽植ゑて砂こひけるに家人にもあらぬ人の奉らむとてすなごおこせたるにあきかたの少將なりけり

八荒磯海の濱には非ぬ庭にても數知ず社嬉しかりけれ

隣なる人のそこに見くらべよとて花おこせたるに

九春にだに忘られにける宿なれば色較べき花だにもなし

かへし

〇一我をこそ忘もはてめ櫻花さきしぞとだに思出でなむ

彌生の二つある年

一二櫻花春くはゝれる年だにも人の心にあかれやはせぬ

故中の宮の內侍の御もとに、中宮の御屏風

二百敷の花の匂はくれ竹のよゝにも似ずと聞くは誠か

かへし

三百敷に流るゝ水の流てもかゝる匂はあらじとぞ思ふ

五月二つある年思ふことありて

四梅雨の續ける年の詠めには物思ひそめる我ぞ悲しき

歌合の歌、右

五夏虫の身をも惜まで玉しあらば我さまねばむ人めもる身ぞ

六宵の間に身を投げ果る夏虫は消てや人に逢と聞らむ

七日

七戀々て逢むと思ふ夕暮は七夕つめもかくやあるらむ

桂にありし頃帝のたまはせし

八逢ふ程も河を隔てゝ戀ふ時は七夕つめに何か異なる

御かへし

九例ひなき物とは我ぞ引るべき七夕つめも人めやは見る

恨みて物云はじと人の云ひければ

〇一秋とてや今は限の立ぬらむ思にあへむ物ならなくに

內に菊の宴せさせ給ふ頃

一秋の夜も深くなるとや菊の花影さへそひて君を見らむ

亭子の帝おりゐさせ給ふ秋

二白露のおきし變れば百敷の移ろふ秋はものぞ悲しき

三別るれど相も思はぬ百敷を見ざらむ事の何か悲しき

と思ひて弘徽殿の壁に書きつけたりけるを帝御覽じて傍に書きつけさせ給ひける

四身一つにあらぬ計を押なべて行歸りてもなどか見ざらむ

五宿もせに植なめつゝぞ我は見る招く尾花に人や止ると

秋の花見にまかりて

六行と來し見れ共飽ぬ秋の野は行きも遣れず止るとも無し

七例へくる露と等しき身にしあれば我思にも消むとやする

八萎るとも涙ならねば濡しけむ春雨こそは哀ともみめ

九白雲の鍵き懸るみ山には照る月影のよそにこそきけ

かへし

〇五雲拂ふ照日曇れる山なれば明き月にも見えぬなる覽

一五花薄穗に出で出ずなる宿は昔忍ぶの草をこそみれ

二枇杷の大臣の兄のおとゝ

三時雨ふる冬の木葉の變らぬは物思人の見れば也けり

四濡々て色變るめる紅葉に袖はぬる共くちとまらなむ

五露乍經なむとぞ思ふそもにても一夜けぬると聞ひと思へば

六濁江は濁深くこそ成にけれ身を遣さへ見れば生けり

亭子の帝物へおはしましける序に桂なる家の花など御覽じて歸らせ給ひにけりその花につけさせ給へりける

七春霞立乍ら見し花なればふみとめてけるる跡ぞ嬉しき

初瀨の寺に參り侍りて親を思ひ出で侍りて

八名をだにも知人にせよ山賤の昔の聲は聞知れるらむ

宇治殿にて

九水もせに浮ぬる時は白波のうちの殿とも見えぬ紅葉

ぺたうのもとに

〇六山川に聲きくよりは紅の人め計りもまづ見てしがな

かへし

一六紅の人めはさこそ染れども人ばかりには薄く社みれ

二六置露になに明すとか秋夜の涙をさへはかりて染む覽

三六二しへに唉時分くる露なればもみづる方に宿るなるべし

扇のみだれたるに

四六結びけむ人の心はあだなれや亂れて秋の風にちる覽

五六住吉の岸にきよする沖つ波まなく懸ても思ほゆる哉

返し

六六住吉の眼に近からば岸にゐて波の數をも讀べき物を

七六濃さ增る涙の色もかひぞなき見すべき人の此よならねば

八六聲に身をあひかへば散迄も我物にして花は見てまし

枇杷のおとゝ

九六今と云て別るゝだにも有物を時雨る今日の況て悲き

かへし

〇七さらばよと別し時に云はまぜば我も涙に溺ぼれましを

かりの歸りぬべきを

一七雲路をも知ぬ我さへ諸共にけふ計りとぞ鳴渡りける

二七根も絶えず枯ぬる人の紫はなべてと思しとぞ絶ぬる

又、人

三七郭公鳴て立にし宿なればすみきと思へば鳴つゝぞゐる

かへし

四七我宿は今ぞ古巢と成ぬなる君故郷のさがの名なれば

又

五七山賤のよそに答へし聲なれど言問し社戀しかりけれ

かへし

六七よそ乍經なむとぞ思戀しきは馴ての後は有じと思へば

枇杷の大臣ちかごとなどたてし折に

七七逢事も頼むる事も過たば世にふる事も有じとぞ思ふ
かへし
七七云事も違はぬとにあらませば後憂事ぞ聞えざらまし
そらごと云ふ人ありと聞きて
九七ちりに立つ我名きよむる百敷の人の心を枕ともがな
かへし
八八涙のみしる身のうさも語るべく歎く心を枕にぞせよ
一八音にのみ聲を聞らむ足引の山下水にあらぬものから
二八いせ渡る河は袖より流れば年に問れぬ身はうきぬ也
三八更し夜の行合の霜にうてしかどなど身に寒く當ざりけむ
心ざしありながらえ逢はざりける頃おこせて侍
りける
四八頃をへてあひ見ぬ時は白玉の涙も秋は色かはりけり
かへし
五八紅に涙移るとと聞きしをばなどいつはりと我思ひけむ
こくりはを人のよみければ
六八紅の涙し濃くば緑なるそでも紅葉と見えましものを
人のちひさき子をこれ子にせよとておこせたり
ければ
七八片時の人を見るだにより物は只片おひに成ぞ侘ーき
七夕のそに
八八逢とだに形見にみえぬ物ならば忘るゝ程も有まし物を
九八折はへて鳴ぬべらなり時鳥繁るなげきの枝々にゐて
人のはらからのなくなりたるとぶらふとて、人
〇九程もなく誰も後れぬ世なれ共止をは行を哀とや見る
かへし
一九背かれぬ松の千年の程よりも共々とだに慕はれぞせし
返し
二九共々と慕ふ涙の川水はいかなる色かしてながるらむ
又
三九春霞はかなく立て別るとも風より外に誰か訪ふべき
かへし
四九目に見えぬ風に心を類へつゝやらば霞の別こそせめ
五九憂ながら人を忘れむと難みまだ心こそ歸らざりけれ
物思ひ侍りける頃野のやくるを見て
六九冬枯の野べと我身を思ひせば燃ても春を待まし物を
和泉へ人の流されけるに
七九泣留ぬ涙泉に絶せねば流るゝ身をぞ留めざりける
人
八九深き思染つと云ひし言の葉はいつか秋風吹て散ぬる
かへし
九九心なき身は草葉にもあらなくに秋吹風に疑はるらむ
〇〇名に立てる音だに泣かれば憂事は身のまだ消ぬ草にぞある
一〇人知れぬ我思にや秋の野の草木も散ずこがれ散らむ
二〇秋ならず散る言の葉は見え乍露やは人の心とはなる
三〇よもの蟹も潜き侘ぶなる白玉さみしよの袖は海と成にき
四〇濡返り玉も被けど飽なくに頼むみるめの絶て無れば
三日晦日雨の降りし日鶯の鳴きしかば
五〇行く春を一聲なきて鶯もよのまず涙をとむるなりけり
六〇秋の月一偏に飽ぬ物なれば涙をとめて移してぞ見る
七〇春霞たつを見すてゝ行艇は花なき里に住やならへる
そこよりも知らでほかに渡りたりける折に男かく
れにたるとなむ思ひつると云ゝたりければ返し
八〇思河絶ず流るゝ水の泡のうたかた人に逢で消えめや
人
九〇櫻花色は等しき枝なれどかたみに見れば慰まなくに
一〇見ぬ人の形見がてらは折ざりき身になずらへる色にぞある
友だちなりける人の思ふことありけるをとぶら
ふとて云へりける
一世中はいさともいさや風の音の秋に秋添心ち社すれ
法性寺にきさきのおはしましける御ともに
二久方の月の澄かに成頃は紅葉そむ共しぐれざらなむ

三我爲に何の仇とか春風の惜むと知れる花にしもゆく
四朝な〳〵袖をや絞る蛬秋の夜すがら鳴きあかしつゝ
或る處に帝ふたりおはしましけるとか
五日の光重ねてませば紫の雲もふたへに今やなるらむ
六七條のきさいの宮、帝入道し給ひての頃
人渡す事だになきを何しかも長柄の橋と身の成ぬ覽
御返し
七ふるゝ身は涙の川に見ゆればや長柄の橋に誤たる覽
八秋の夜に寢て置わたる白露は獨ある人の涙なるべし
九いとまだき飽ぬる秋の形見には枝に紅葉ぞ散殘ける
人
〇一逢坂の關は夜社もり增れ暮るゝをなどで我頼むらむ
かへし
一二守ませど夜は猶社頼るれぬるまも有らば越むと思へば
二二櫻花年にかへねど空蟬の夜を例にて散るにぞ有ける
三二名殘なく磨かれにけり白玉は拂ふ袖にも屋だにもぬず
かねもりが、道萩ぬ侘びてふせる男
四二八重閉る道は夢にも惑らしぬるたまにだに逢と見えねば
五二形見にも身を知雨の降し哉我も堰敢ず君もこしかば
かへし
六二濡通ふせかれぬみをに引れてや我さへ浮て流寄ける
忍びたる人と二人して
七二夢とても人に語るな知と云へば手枕ならぬ枕だにせず
八二徒に積る涙の包まればこれしてけりと云はまし物を
人
九二忘らるゝ我身を知で濱衡踏とめてだに見るべき物を
〇三面影は水に浮ても見えずやは心に乘りて流れし物を
かへし
一三心にや乘りてこがれし鐙てふ名は徒に水かけもせで
二三夏蟲の思に入りてなぞもかく我心から投むとはする
三三我招く袖とも知らで花薄色かはるとて思ひ侘びぬる
四三逢も見ぬ年の渡に濡くればみを深からぬ心とや見る
五三我如く物は思はじ七夕もあふ七日をし待つと思へば
六三忘れてふ事をも知らぬ七夕や年の渡りを待て逢らむ
七三限なく思ふ涙や河と見て渡りがたくはなり增らむ
八三床定む事こそ身には難からめ夢計には猶も見えなむ
人
九三隱沼の底の下草み隱れて知られぬ戀は苦しかりけり
かへし
〇四隱沼に隱るばかりの下草は長からじとも思ほゆる哉
一四宵の間に身を投果つる夏蟲は消てや人に逢と聞らむ
二四鶯のなく音をまねぶ山彦を友ありがほに求めつる哉
三四梅の花散るてふなべに春雨のふりでつゝ鳴く鶯の聲
四四足曳の山を遠しと郭公里に出でゝも音をのみぞなく
五四郭公夜深き聲は月待つと起きていもねぬ人ぞ聞ける
六四打解る山べの聲を時鳥長き夜にこそ聞かまほしけれ
七四匂ふかの君思ほゆる花なれば別しつべく袖ぞ濡ぬる
八四ひたぶるに消ば消なむ露の身の玉とはなしに消紛ふ覽
九四水莖の通ふ計りを宿世にて雲居遙にはてねとや聞く
〇五雲居にも通ふ悲しと思つゝ人に宿世はおかまし物を
一五霜雪に消て憂身の雫こそ袖たれぬ迄さやけかりけれ
二五白露の起て相見ぬ事よりは消返りつゝ寢なむとぞ思
帝物におはましけるに女郎花多かりと御覽じて
ほりに給へりける奉るを聞きて枇杷のおとゞの
たまへる
三五女郎花折けむ枝の節ごとに過にし秋を思ひ出でせじ
とは亭子の帝うせ給ひてのちの事なるべし
御返し
四五女郎花をりも折すも古を更にかくべきとならなくに
右京のかみ撫子多かるを見て
五五我袖に移らば移れ手もたゆく摘みや入まし撫子の花
御返し

六五こき限りとは摘入て撫子に移れる袖の色を見せまし
故中務の宮の琴をかり給ひて
七五天つ琴春の調をかりしかば返す物とも思はざりけり
かへし
八五程もなく返すに増る琴の音は人も留めぬ身をや果らむ
又御返し
九五返しても他ぬ心を添つれば常より聲の増るなるらむ
かへし
〇六常よりや添る心の返りけむ知らぬ聲なる聲の聞ゆる
中務宮の家の池に舟を造りておろし始めて遊び
けるに法皇の御覽じにおはしましてよさりつか
た歸らせ給ひなむとしける折によみて奉りける
一六水の上に浮べる舟の君ならば爰ぞ泊と云はまし物を
二六年ふれど忘られ果ぬ人の世は心止てぞ猶聞かれける
花につけて
三六花の色の濃きを見すとてきたる身の恩に人は思ふ覽やは
嚴を人の許へやるとて
四六我爲に咲こる共知なくに何に薬火を焚きてつけまし
四月に咲ける櫻の花につけて院の殿上人のもと
へおはします御とともにえ參でとまれる人の許
に
五六止りぬて春戀しとぬ思らむ花もかく社後れたりけれ
六六こいと云ひてむと思心の割なきは死にても知れよ忘形見に
かへし
七六もしもやと逢見む事を賴すば斯云ふ程に先ぞけなまし
人
八六濁江の澄まむ事社難からめいかに仄に影をだに見む
返し
九六すむとの難かるべきに濁江の戀路に影も濡ぬべら也
〇六待人の見えぬからにやさよ更て月の入にも音はなかる覽
九の宮の御息所の御許に小箱合せの頭箱に紅梅

のつぼめるを入れて進らせたるに
一七君にとし思ひかくれば鶯の花の櫛笥も惜まざりけり
御かへし
二七みつの江の形見と思へば鶯の花の櫛笥は明てだに見ず
或る人を思ひて、男
三七見ず聞かずあらまし時は幾機の經緯亂る思せましや
かへし
四七等閑の行手にかゝる經緯は長からじとも思ほゆる哉
五七河の瀬に浮て流るゝ程よりは衣の袖の濡れずも有哉
六七住む方のしるしを招く花薄心わくとも風は吹くらし
七七打とくる山べの聲は郭公長き夜に社聞かまほしけれ
方遠ふとて京極なる人の家にいきて其のわたり
に知りたる人に
八七此里の知べに君が出こなむ都よりとに我は來にけり
九七我袖の代りにをれる花薄人を招く〜知らざらむやは
帝の御國忌に
〇八糸薄呼子鳥にもあらねども昔戀しき音をのみぞなく
一八人待ちて泣つゝ明す夜な〳〵は徒寢にも成ぬべき哉
女四の宮かくれさせ給ひつるとぶらひ聞えさす
とて
二八こゝら世を聞が中にも悲しきは人の涙も果やしぬ覽
返し
三八聞く人も哀と云なる思にはいとゞ涙もつきずも有哉
又これより
四八爰にだに通ふ夜ならば亡人の涙の程も聞えきなまし
御かへし
五八行通ふ道は無く共しでの山言葉をだに行も越さなむ
亡くなりにける人の家にまかりてあしたにかし
この人に遣しける
六八亡き人の影だに見えぬ遣水の底に涙を流してぞこし
隣なりける人の許より九月八日菊に綿被けてお

こせたりけるつとめて取りてやるにつけて
七八數知ず君が齡をのばへつゝ名だゝる宿の露となりなむ
かへし
八八露とだにも名だゝる宿の菊なれば花の主は幾代なる覽
故式部卿宮の御手にて書き給へる物を見て
九八亡人の書き留めけむ水莖に打見るよりぞ流そめける
人のおこせたる
〇九伊勢の海に遊ぶ蜃とも成にしが波掻分てみるめ被かむ
かへし
一九朧げの蜃やは被く伊勢の海の波高き浦におふるみるめは
二九松山につらきながらも波越さむ事は流石に悲き物を
したにの木
三九此花を散さで爭で折つらむさ計り風の吹したにの木
かまつほぐさ
四九山まくしそぼつ計も洩りぬれば秋も刈むと我待ほぐさ
五九空蟬を思ふに聲し絶ざらばまだ衣手に露はおきてむ
六九明けぬともたゝじとぞ思ふ唐錦人の心し刀ならねば
中宮の失せ給へりし時かいねりこしとて檢非違
使のやらむとしければ
七九深草に君惑はして侘る身の涙にそめる色とやはみぬ
宇多の院よりおはれてひとかたきになりける人
の許に
八九のけ樣に人に追れし我なれや脊中合せに人の成らむ
かへし
九九はこつくり脊中合に成ぬとも同じ心に結ばれぞせむ
むすめの男の絶えにけるに遣しける
〇〇斯計りうしと思ふに戀しきは我心さへ二つありけり
かへし
一〇二あらば今一度は訪てましすべて心の無きと社見れ
からにまかりたりける人の心變りて侍りければ
二〇うらうへに思やらるゝ唐衣からに移て君がきたれば

三〇足曳の山あひに降れる白雪はすれる衣の心ち社すれ
までくることかたき人に七月七日
四〇いなといへば忍ぶものから終夜天の河社羨まれけれ
櫻を人に贈り侍るとて
五〇君見よと尋て折れる山櫻ふりにし色と思はざらなむ
物見に出でゝ傍らなる女車に云ひかはして後
六〇郭公はつかなる音を聞そめてあらぬも其と驚れつゝ
四月つごもり
七〇木隱れてさ月待まの郭公まだしき程の聲を聞かばや
男の人の許にあるにやる
八〇飛鳥川淵瀬に變る心とはみな上しもの人も云ふめり
かへし
九〇淵は瀬に成變るなる世中に渡り見て社知まほしけれ
又返し
一〇厭はるゝ身を憂はしみ早晩と飛鳥川をぞ賴べらなる
かへし
一飛鳥川堰て留る物ならば淵瀬に成と何か云はれむ
二味氣なくなぐ松山に波越さむ事をば更に思ひ離るゝ
かへし
三岸遠く汐し滿なば松山を下にて波を越さむとぞ思ふ
四さよ更て寢られぬ程に郭公君に知れぬ音をぞ鳴つる
人のもとに
五人心嵐の風の寒ければ木の芽も見えず枝ぞしをるゝ
物へ行く人に
六後れずぞ心に乘りて漕るべき波に求よ舟はなくとも
返し
七舟ならば天河まで求めてむ漕てむ星の中に消えずば
行人
八豫てより涙ぞ袖を打濡す浮たる舟に乘らむと思へば
春の心を

一春柳の糸よりはへておる機をいづれの山の鶯かきる
　昔ひと處なりし人の年頃いかにと云ひたるに
二身は早くなき物の如なりにしを消せぬ物は心也けり
三百敷の花を折てもすてしかな昔を今に思ひくらべて
四涙にぞ浮て流るゝ水鳥の浮ては人に見えぬものから
五つらくなりたる人に
六渡つ海の深き心の變らずば何かは人を恨みしもせむ
七こまひき
八望月の駒引渡す影見れば疊東なくて見えずぞ有ける
九滝落ちたり
一〇限なき心の落て瀧なれば世に傳はりて流れこそせめ
一一鹽の浦をあひつも逢す嘆けむ人の上こそ我身也けれ
　このかへしにや
一二思事無て止にし中をしも我身の上になどかなしけむ
一三折つれば袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯のなく
一四よそに聞く袂より社ばちけれ逼く法の雨は注げど
　かへし
一五云へばこそ心を乘する法の雨の濺ぐ驗に濡るゝ袂か
　家を人のになして
一六飛鳥川淵にも非ぬ我宿も瀬に變りゆく物にぞ有ける
一七親に後れて侍りける頃男のとひ侍らざりければ
一八亡人も有がつらきを思ふにも色わかれぬは涙也けり
　是も同じ忍ぶの中なる中かきの歌として
一九來て見ればなゝの浦迄よる貝の拾ひも敢ず君ぞ嬉き
二〇熊野の浦より遠に漕ぐ舟の我をばよそに隔つる哉
二一　出づやみのゝを山の一松契りしとはいつか忘れむ
二二沖つ風吹飯の浦に立つ波の名殘にさへや我は忘れむ
二三あま舟の海鹽やく海土の藤衣なるとはすれど逢ぬ君哉
二四伊勢の海駿河の富士のねは我ごと斯や山ももゆらむ
二五人知ず思駿河の富士のねは我ごと斯や山ももゆらむ
二六空の浦の色の濱とは成ぬ共波のかひとかならむとす覽
二七足引のはらたに生ふる玉草は久しく成ぬ夢に逢見で
二八津國のみつの堀江に雨降れば限も知らずたまる我戀
二九爭でかと思心は堀かねの井よりも猶ぞ深さまされる
三〇近江のや志賀の浦風恨めしの尋來たれどかひ無り鬼
三一石清水云はぬ物から木隱れて瀧の心を人は知らなむ
三二有と聞響の瀧と聞しかば戀しからずのせをぞ行らむ
三三美作や久米のさら山さら〳〵に昔々の戀しきやなぞ
三四山城の岩田の杜の柞原かくしや妹がいづち行くらむ
三五片岡のあしたの原をすぎゆけば山郭公今ぞ鳴くなる
三六をちへ行こち風河に誰しかも色さり難く緣染むらむ
三七はつかにも君を三島の芥川俺とや人の音づれもせぬ
三八更科のをばすて山の有明のつきずも物を思ふ頃かな
三九しほの山さしでの磯に居る衛君が齡は八千代とぞ鳴
四〇音に聞く天の橋立橋たてゝ及ばぬ戀も我はするかな
四一夕さればさほの河原に居るたづの獨寢難きねをゝ鳴哉
四二忘れなば世にも越路の歸山いつはた人に逢むとす覽
四三音無の山の下行くさゝれ水あなかま我も思ふ頃かな
四四いはせ山谷の下水打忍び人の見ぬ間に流れてぞふる
四五我戀はありその海の風速み頻に寄する波のまもなし
四六春日野の中の朝顏俤に見えつゝ妹がわすられぬかな
四七人はいさ我は春日の篠薄下葉しげくぞ思ひみだるゝ
四八秋風の音羽の山の谷水の渡らぬ袖もいろ濃きやなぞ
四九さを鹿も妻とふ時に成に鳥嵯峨野の花も下紅葉して
五〇音羽山木の下蔭にかほ鳥の見え隱れせし顏ぞ戀しき
五一難波潟濱べの葦を踏しだき鳴らむたづは我爲にかも
五二いかごなる物きゝ山の谷水の濁らぬ音に聞ゆなる哉
五三武藏野の草葉に宿る白露の幾夜有へき物ならなくに
五四柳無の橋の小舟の荒き磯にあなた〳〵となど獨漕ぐ
五五磯に出てあさりする火の消ぬれば吹飯の浦を尋つゝ哉
五六心のみ雲居の程に通ひつゝ戀ひこそわたれ鵲のはし
五七音にのみ有と聞つる三吉野の瀧はけふ社袖に落けれ

五八岩くゝる山井の水を結び上て誰が爲惜き命とかしる
　是は有馬の皇子の罪せられける時よめる
五九岩代の野中の松を引結び命しあらばかへりきて見よ
六〇三吉野の山の下風寒からし妹背の川の波たかくみゆ
六一白波の打驚かす浮島に立てる松だに根こそわぶなれ
六二かこの島松原ごしに鳴たづのあな長々し聞人の無き
六三難波潟短き葦の節の間も逢で此世を過ぐしてよとや
六四白波のよする磯間を漕舟の數をばまなく思ほゆる哉
六五沖つ藻を取でや已まむ仄々ゝ舟出せしとは何に依てぞ
六六深山木の蔭のこ草は我なれや露茂けれど何人の無き
六七浦近み波の立よる小れ石の中の思は知るや知らずや
六八蓮葉の浮葉の下に立つ波の君に心は寄せてこそふれ
六九山川の霞隔てゝ仄にも見しばかりにや戀しかるらむ
七〇夕されば道迦々し月まちて歸れ我せこ其まにも見む
七一山水を手に掬ひても心みむぬるくは石の中も頼まじ
七二天つ風雲吹き亂る久方の月のかくるゝ道まどふべき
七三知るらめや我衣手は秋霧の覺束なくてふるに濡とは
七四けふ有てあすは消ぬの身の思澄べき言葉もがな
七五卯の花のにほふ盛の月清みいねず聞けとや鳴く郭公
七六聲をだに聞ての後は郭公あはぬ五月も有じとぞ思ふ
　かへし
七七聞聲を長くと思はゝ郭公いむ五月をば過ぐしやはせぬ
七八人の楓を折りて時雨する日
七九言の葉の移ろふだにも有物を最ど時雨の降增るらむ
　かへし
八〇時雨にし濡と濡ぬる言の葉は薄乍だに散ずも有なむ
八一土御門の中納言の家の隣に住む頃其の家の花の
　散るを見て云ひやる
八二垣越に見れども飽かぬ梅花ね乍ら風の吹もこさなむ
　かへし
八三梅花植て我のみ見むとかは隣あるきも人やするとぞ
八四假そめに染ざらましを唐衣かへらぬ色を恨みつる哉
　又人
八五身にしみて深くし成ば唐衣返すと社知られざりけれ
　かへし
八六白き女を見て
八七ぬき止ぬ髮の筋もて怪しくもへにける年の數を知哉
八八さよ更て寢られぬ折に鵲君に聞かれぬ音をぞ鳴つる
　〔いかなる折にかありけむ〕
八九徒然の　春ひたすらに　詠ひれば　立つしら泡の
　日の前に　せけど堰れず　流れつゝ　我身はあわと
　浮びつゝ　きえみ消ずみ　燃るひの　こゝろは灰と
　溢れつゝ　有かなきかに　侘をれば　みしも著しも
　うぐひすの　行がてにのみ　鳴く聲は　語らむかたも
　なく鳴ぬ　鳥だにも　人のあはれは
　あひ語らはぬ　濱ちどり　跡ふみたれば
　知る物を　斯もつらきか　業にして　心とはねば
　山びこの　答ふばかりを　恨みられけれ
　行く舟の　ほに揚てこそ　宮の内は　年經てすみし
　荒れのみ增　心ちして　よらむ方なく
　沖つなみ　舟ながしゝる　くれなゐは　我らがなかの
　伊せの蜑も　人びとは　己がちり〳〵
　悲しきに　成果てゝ　とまる物とは
　時雨にて　空をまねかば　群立ちて
　秋のもみぢと　よそにこそみめ
　別れなば　鳴き渡りつゝ
　花すゝき　君なきには
　頼むかげなく
　はつ雁の　影見れば最ど心ぞ惑はるゝ　近からぬけの疎き也けり
九〇吹風の下の塵にもあらなくにさも立易き我なき名哉
九一見えもせぬ深き心を語りては人に勝ちぬと思物かは
九二隱てだに我身の上と思きやこむ年春の花を見じとは
九三郭公ねぐらながらの聲聞けば草の枕ぞ露けかりける
九四海にのみ滿ちたる松の深綠幾汐とかは知べかりける

○八渡つみの沖中にひの離れ出て燃と見ゆるは鹽の漁か
○九そらめをぞ君は御手洗河の水淺しや深し其は我かは
○一年月の行らむ方も思はえず秋のはつかは人の見ゆれば
○二思ひきやあひ見る程の年月を數ふ計にならむ物とは
○三遙なる程にも通ふ心かなさりとて人の知らぬ物ゆゑ
　恨みて物云はじと云ひける人に
○四かたしきの衣手さむき松風に秋の夕と知せずもがな
○五水の面にあや織り亂る春雨や山の綠をなべて染らむ
○六山風は吹けど吹ねど白波のよする岩根は久しかり鳧
　撫子の咲けるを人の許へやるとて
○七獨のみぬる床夏の露けさは涙にさへや色をそふらむ
○八夕されば最ど干難き荒磯に宿る月さへ濡るゝ顏なる

赤人集

○九久方の天のはやすにこの夕霞たなびく春立ちにけり
○一あづさゆみ春山近く家居して絶えず聞くらむ鶯の聲
○二打靡き春さりくれどしかすがに空曇合て雪は降つゝ
○三櫻花咲散くらししかすがに白雪に似て庭にふりつゝ
○四卷向の檜原に立てる春霞晴れぬ思にわかな摘まめや
○五こらがてを卷もく山に春くれば木の葉凌ぎて霞雛く
○六春霞別れて共に青柳の枝くひもちてうぐひすなきつ
○七陽炎の夕さりくれば狩人の弓槻がたけに霞たなびく
○八紫の根はふよこ野の春の野に君を戀ひつゝ鶯ぞなく
○九我兄子をならしの山の呼子鳥君呼返せ夜の更ぬ間に
○一朝毎にきなくはこ鳥鳴たにも君に戀らし床なべて鳴く
○二冬ごもり春たちくらし足引の山にも野にも鶯なきつ
○三春なれば妻やもとむる鶯の梢つたひてなきつゝ渡る
○四春日なるはがひ山よりさほの上さして行なる誰喚子鳥
○五答ぬに呼な犯しそよばひ呼子鳥さほの山べを上下りに
○六朝霧にしとゞに濡てきけむは鳥神なび山に鳴渡る也
○七今更に雪ふらめやも陽炎の燃ゆる春日と成にし物を
○八吹雪つゝ雪は降れ共しかすがに霞雛く春は來ぬらし
○九山ぎはに鶯鳴きてうち靡き春と思へば雪ふりしきぬ
○一嶺の上に降置雪は風の音も共に散らし春はありとも
　筑波山をよめる
○二君が爲山田のさはにゑぐ摘と雪げの水に裳裾濡しつ
○三梅が枝になきて移ろふ鶯の羽根白たへに泡雪ぞふる
○四山高み降くる雪を梅の花散りかもくると思ひける哉
　此の歌はよみかはせる
　霞を詠ず
○五昨日こそ年は暮れしか春霞春日の山に早立ちにけり
○六冬過ぎて春ぞきぬらし朝日さす志賀の山べに霞雛く
○七梓弓春立ちぬらし春日山霞たなびくよめに見れども
○八霜枯の中の柳はみるひとも靈にすべく思ほゆるかな
○九淺綠染めかけたりと見る迄に春の柳は萌えにける哉
○一朝な〳〵我見る柳鶯のきゐてなくべき時にはなりぬ
○二青柳の糸の細きを春風に亂れる色にみせむとぞかし
○三櫻花折りても見れば我宿の柳の眉もあはれなるかな
　花を詠ず
○四鶯が木傳ふ枝の移香はさくらの花のときかたつきぬ
○五櫻花時は過ぎねど見る人のこひは盛と今やなるらむ
○六我が里の柳の糸を吹き亂る風にや妹が梅の散るらむ
○七年毎に梅は咲けども空蟬の世に我しもぞ春無りける
○八打靡にとは思へども始てもすゞ見まほしき梅の初花
○九あは山の櫻木の花今日もかも散亂る覽見る人なしに
○一蛙鳴く野吉の山の瀧の上にあせみの花ぞ咲てあだなる
○二春のきじ鳴谷もとに櫻花散ぬべらなりみる人もがも
○三春雨に爭ひかねてわが宿の櫻の花は咲きそめにけり

○四春雨はいたくな降そ櫻花まだ見ぬ人に散まくも惜し
○五春されば散まく惜き櫻花暫はさかすふゝみてもがも
○六春の野に菫摘みにとこし我ぞ野を懷しみ一夜寢にける
○七いつしかも今宵明けなむ鶯の木傳ひ散す梅の花見む
○八見渡せば春日の野べに霞立ち開くる花は櫻ばなかも
○九淀川の水底さへに照るまでに三笠の山は明にけるかも
○一今日見ればまだ冬なるなしかすがに春霞立つ雪は降つゝ
○二去年咲きし花は今更徒に土にや散らむ見る人なしに
　月を詠ず
○三朝霞春日暮なば木の間より移ろふ月をいつか頼まむ
○四春霞たなびく今日の夕月夜きよく照るらむ高圓の山
○五春くれば木がくれ多き夕月夜覺束なしや山陰にして
　雨を詠ず
○六春の雨にありける物を立隱れ妹が家路に此日暮しつ
○七春日野に霞立めりあなしかは春のおほきに雨の降かも
○八春の野に心延べむと思どちこし今日の日は暮ずも有なむ
○九百敷の大宮人は暇あれや櫻かざして今日もくらしつ
○一逢へるをよろこぶ
○二住吉の里行しかば初花の最稀に見む君に逢へるかも
　頭べを旋らす
○三春日なる三笠の山の月も出でぬかも關山に咲ける櫻の花も見るべく
○四古き身をなげく
○五冬は過ぎ春は來ぬれど年月は改まれども人は衰行く
　春の相聞
○六春山にゐる鶯のあひぬれば歸る待つ間の思するかな
○七我宿の木の下月夜妹が爲め雲は心よしうたて此の頃
○八我宿に春咲く花の年ごとに思はますと忘れめやわれ
○九梅の花咲きちる野べに我行かむ妹が使は我を待らむ
○八藤波の咲く野べ毎にはふ葛の我は齡は久しくもあれ
○一春の野に霞たなびく櫻花うちちる迄に逢はぬ君かな
○二我見ふらはく奥山のあせみの花の今盛なり
○三梅花しだり柳にこきまぜて花に添ふるは君に有かも
○四女郎花咲く野に生ふる白躑躅知ぬよもて云れし我せ
　霜による
○五春立てば草木の上に置霜の消えつゝ我は戀や渡らむ
　霞による
○六春霞山に雛きかくす妹を逢ひ見て後ぞ戀しかりける
○七春霞立にし日より今日迄に我戀やまず人めしげきに
○八青葛籠妹を尋ぬと春の日に霞立ち舞ふ今日し暮しつ
○九さにづらふ妹を思ふと霞たつ春の日ぐらし戀渡る哉
○一見渡せば春日の野べに立霞たれゐれども君が心に
○二戀つゝも今日は暮しつ霞立あすの春日を爭で暮さむ
　雨による
○三我脊子に戀て術なみ春雨の降わざ知ず出てくるかも
○四春立てば繁し我戀渡つ海の立つ白波にちへぞ增れる
○五覺束な君に逢見ですがの根の長き春日を戀渡るかな
○六今更に君はよもこじ春雨の心を人の知らざらなくに
○七春雨の心も人は知りぬ覽七日し降らば七夜こじとや
○八梅の花散す春雨おほくふる旅にや妹が家居をるらむ
○九國栖らが若菜摘まむと占し野に蜑の君がよきり頃ひ
　雲による
○一白眞弓今春の野に行く雲のゆきや別れむ戀しき物を
○二益荒男をふしみ嘆きて作りたるしだり柳の蔓せよ妹
　かづらを贈る
○三別をかなしぶ
○四朝戸出て君が姿をよく見ずば永き春日を戀や渡らむ
○五春山のあせみの花の憎からぬ君にはしあやふしぬともよし
　とひこたふ
○六石上ふるの社の過にしを我さらく〳〵に戀に逢にける
○七此の歌春歌にあらねどもかへしせりかゝれば此の

次でに入れたるなり

四〇さのかたはみに成ず共春にのみ咲てな見せそ戀の草ぞも

五〇さのかたは身に成にしに今更に春雨降て花咲かむやは

六〇梓弓引津のべなるなのりその花咲く迄に逢はぬ君哉

七〇河上のいつもの花のいつも〳〵來ませ我春子絶ず待つはた

八〇春雨のやまず降り落て我戀ふる我妹久に逢はぬ頃哉

九〇我妹を戀つゝ居れば春雨の彼も知るごと休ず降つゝ

一〇春くれば先鳴鳥の聲の如まづ先だちし君し待たるゝ

一一相思はぬ人をや常に菅の根の永き春日を戀や暮さむ

一二相思すあらむ子故に玉の緒の永き春日を歎き暮しつ

たとひうた

三春霞棚く野べに我曳ける網はまを網絶えむと思ふな

夏の雜の歌どもを、ほとゝぎす

四益荒男の　出たち向ふ　ふる里の　神なびやまに

明くれば　つみのさ枝に　夕ざれば　小松がうれに

さと人の　聞戀ふるまで　山びこの　答へするまで

ほとゝぎす　妻ごひすらし　小夜中になく

反歌

五旅に出て妻戀すらし郭公神なび山にさよ更けて鳴く

これはふる歌のなかに入れたり

六時鳥鳴く初聲は我聞かむ五月の玉にまきてぬきてむ

七朝霧のたなびく野べに足引の山時鳥いつきてか鳴く

八足引の八重山越て呼子鳥鳴やながくる宿も有らなくに

九藤波の散らまく惜しみ時鳥いまきの岡に鳴て行らむ

一〇朝霧の八重山越えて時鳥卯花がくれ鳴きて行くなり

一一木隱れて妹が垣根に時鳥鳴き響かして聲やまどはむ

一二逢ひ難き君に逢へる時郭公いづこを家と鳴渡るらむ

一三月清み鳴時鳥見むと思ふ我が草とれる見む人もがな

一四時鳥今朝の朝けに鳴つるを君まだ聞ずいやはねつ覽

一五郭公花橘の枝にゐて鳴きしひらけばはなは散りつゝ

一六五月山卯の花月夜時鳥鳴けどもあかず又も鳴かなむ

一七宵の間の曇東なきを郭公鳴くなる聲の音のはるけさ

一八卯花の散まく惜み鵑野に出で山に入りきなきとよもす

一九山とには鳴てかく覽時鳥なが鳴く毎になき人思ほゆ

二〇物思ふと寢ざる朝げに時鳥我衣手にきなきをりつゝ

二一元つ人鵑をや稀に見むいまやながきてこひつゝをれば

二二橘のはやしを植つ時鳥つねに冬まで住みわたるべく

二三ふまはれの雲間に類ふ時鳥春日をさして今鳴き渡る

二四かくばかり雨のふるをや時鳥卯花山になはか鳴らむ

蟬を詠ず

二五唯ならむ折に鳴なむ卒蟬の物思ふ折に鳴つゝぞをる

はしばみを詠ず

二六思ふ子が衣摺らむに匂ひこそ島の榛原秋立たずとも

詠花

二七風に散る花橘を手にうけて君がみためと思ひぬる哉

二八香はしき花橘を玉にぬき送らむ妹はみつれても有か

二九時鳥鳴きてひゃかす橘の花散るやどにくる人やたれ

三〇我宿の花橘は散りにけり悔しきときに逢へる君かな

三一野べ見れば撫子の花散にけり我待秋は近づくらしも

三二我妹子に枸の花は散に鬼妹はきけるか事有とかきく

三三春日野の藤は散にき何をかもみ狩の人の折て翳さむ

三四時ならで玉をぞぬける卯花の曉はまだ散り果ぬべし

とひうた

三五卯花の咲ける垣根は子規鳴きてぞ渡る人は聞きつや

三六聞つやと君にとひつゝ時鳥ぬれつゝ今ぞ鳴渡るなる

草によす

三七人言は夏野の草としげくとも妹と我とし携はりなば

三八此頃の戀の茂らく夏草の刈り拂へども生ひ茂るごと

三九類あらばふなつの繁みかく戀は程我命常ならめやは

四〇我のみや斯戀すらむ杜若にづらふ妹はいかゝある覽

たとひうた

四一橘のはな散るさとに通ひなば山時鳥ひゝかざらむか

夏相聞、鳥によす

四二夏なればすごく鳴なる時鳥ほと〳〵妹に逢で來に鳬

四三五月山花橘にほとゝぎすかくらふ時に逢へる君かも

四四時鳥なくや五月の短夜も獨しぬればあかしかねつも

蟬によす

四五蜩は時と鳴け共我戀ふるたをやめ我は時分かずなく

花によす

四六片よりに糸をこそよれ我兄子が花橘をぬかむと思て

四七時鳥通ふ垣根の卯花のうきことあれや君が來まさぬ

四八卯花の咲とはなしにある人に戀や渡らむ片思にして

四九我こそは憎くもあらめ我宿の花橘を見にはこじとや

五〇人知ず戀れば苦し撫子の花に咲いでよ朝な〳〵見む

五一夏草の露分け衣きもせぬに我衣手のひるよしもなき

秋の雜の歌

五二天の河水底までにてらす舟つひに舟人妹と見えつや

五三久方の天河原にぬえ鳥のうらびれをりつ苦しき迄に

五四我戀ふる妹は遙に行舟の過てくべしやともつげなく

五五赤ら引敷妙の子をしば見れば人妻故に我戀ひぬべし

五六天川安の河原に舟うけて秋を待とは妹に告げよとて

五七空よりも通ふ我すら汝故に天川路をなづみてぞくる

五八八千矛の神の御代よりえし妻人知にけり告し思へば

五九我戀にほに上て見む今宵かも天の川原にいそ枕まく

六〇己が紐長しとは聞きつ手に卷てまたきて寢よ君まきにし

六一天地ゝ分れし時より己が妻然ぞ手に在る秋待つ我は

六二ながら戀ふる妹が妻は飽までに袖ふる見えつ雲隱る迄

六三むば玉のよる雲曇り暗く共妹がよをば早く告げてよ

六四夕づゝも通ふ空までいつとてかあふぎて待む月人男

六五天の川水かげ草の吹風に靡くと見れば秋は來にけり

六六我待たぬ秋萩咲ぬ今だにも匂ひか行かむをち方人に

六七我背子にうら戀ひ居れば天の河舟こぎ渡す音聞ゆ也

六八天川こぞの渡りの移ろへば川瀬を行て夜ぞ更にける

六九昔我があけて衣を返さねば天の河原に年ぞへにける

七〇天川夜舟浮びて明ぬれども逢むと思ふたもと返さむ

七一遠き妹と手枕易くねぬるよは庭鳥鳴くな明は過ともも

七二逢見らく飭足らぬ共東雲の明にけらしな舟出せむ妹

七三萬代を携り居て逢見とも思ひすくべき戀ならなくに

七四萬代に照すべき月雲隱れ苦しき物ぞ逢はむと思へば

七五白雲を幾重隔てゝ遠く共宵さらず見む君があたりを

七六我爲に棚機つめのその宿におる白布は織てけむかも

七七昔に逢はで久しく成ぬ織る機の白妙衣は垢つく迄に

七八天の河棹音聞ゆ彦星のたなばたつめと今宵逢ふらし

七九秋立て河霧渡る天河かはにむきゐて戀ふる夜ぞ多き

八〇一年に七日の夜のみ逢人のこひも盡ねば夜更行かも

八一天の河安の河原に定まりて斯る別はとくと待たなむ

八二七夕の五百機立てゝ織布の秋立つ衣たがとめてきむ

八三年に有てけふか卷らむむば玉の夜霧隱りて遠妻の手を

八四我待し秋は來りぬ妹と我と何事あれぞ紐とかざらむ

八五あはなくはけ長き物を天河隔てゝ又やわが戀をらむ

八六彦星と七夕つめと今宵合ふ天の河原に波立つなゆめ

八七秋風の吹たゝよはす白雲は七夕つめの天つひれかも

八八嬰々も相見ぬ君を天の河舟出はやせよ夜の更ぬまに

八九秋風の清き夕に天のがは舟こぎわたる月ひとをとこ

九〇天の河霧立渡るひこぼしの棹音聞ゆ夜の更けゆけば

九一君が舟今漕きくらし天の川霧たち渡るこの川の瀬に

九二秋風に河波立ちぬたゞ暫し八十舟のつにみ舟留めよ

九三天の川川かせ清し彦星のあきこぐ舟の波のさわぎか

九四天河川邊に立ちて我待ちし君來るなり紐ときまたむ

九五天河川瀬にをりて年月に戀つるいもに今宵逢ふかも

九六あすからは我玉床を打拂ひ君と二人は寢ず成ぬべし

九七天の原行てやいると白眞弓ひきてかくせる月ひと男

九八此夕ふりくる雨は彦星のとく漕ぐ舟の櫂のしづくか

九九天川八十瀬きりあゝ彦星の時まつ舟は今や漕ぐらむ

〇一風吹て阿波立ちぬ澪舟に渡りもきませ夜の更ぬ間に
一天のがは打橋わたす我が家路へて我が思ふ妹にあへ
るよはやまず通はむ時まだずとも
二天の川打橋わたす妹が家とまらず通へ時またずとも
三月をへて我思妹に逢ふ夜は今し七夜を繼ぎこせぬかも
四年にもて我舟渡る天の河風は吹くとも渡たつなゆめ
五天の河風は吹とも我舟はとく漕いでむ夜の更けぬ時
六唯今宵逢たる妹に言どひも未せずして小夜ぞ明にける
七天の河白波高しわが戀ふる君が舟出は今ぞすらしも
八春霞君待ちかねて天の川うち橋わたす君がこむため
九天の川霧たちわたる七夕のくもの衣のかへる袖かな
〇古の織りにし機を此ゆふべ衣にぬひて君待つわれを
一あし玉も手玉もゆらに織機を君が衣に縫きせむかも
二よき月日逢よしあれば別路の惜かる君はあすさへもがな
三天の河渡るせ深く舟うけてさしくる君が楫音ぞする
四天の原夜深くなれば天河霧立ち渡るきみはきぬらし
五天河渡る瀬毎のみてぐらの心は君をさきくきませと
六久方の天の河原に舟うけて君待つ夜は明ずも非ぬか
七天の河足濡れ渡り君が身を枕もせねば夜の明ぬらく
八渡守舟渡せをとよぶ聲のゆかぬなるべし楫音のせぬ
此の歌は人丸が集にあり
九天河我むき立て戀ふらくにとだに告む妻といふ迄は
〇戀る日はけ長き物を今だにも乏しむべしや逢べきものを
一まけ長く川に向ひて有し袖今宵卷なむと思ふがよさ
二天川渡る瀬毎に思つゝこしくも著し逢へらく思へば
三人さへやみつかずあらむ彦星の妹呼聲の近付ぬるを
四天河瀬を早みかも烏羽玉の夜は明けつゝ逢はぬ彦星
五渡守舟はや渡せ一年にふたゝびかよふ君ならなくに
六戀ふる日はけ長き物を今宵だに乏しむべしや逢ふべき物を
七七夕の今宵明なば常のとあすをへだてゝ年は越なむ
八天川たなはし渡せ七夕のいわたらさむに棚橋わたせ
九天川かはと八十あり孰くにか君がみ舟を我待居らむ
〇秋風の吹にし日より天原瀬に立いでゝ待と告げこせ
一天川こぞの渡りは荒けるを君がきたらむ道の知なく
二彦星の妹よぶ舟の引綱の絶えむと君を我思はなくに
三渡守舟出しゆかむ今宵のみ逢見て後は逢はぬ物かは

長歌

四天つちの　別れし時より　天のかは　いかむかひすゑて
一とせに　二たび逢はぬ　妻ごひに　もの思ふ人は
天のがは　やすの河原に　あり通ふ　としの渡りに
そぼ舟の　艫にもへにも　ふな裝ひ　眞楫しげぬき
はたずすき　本はもそよに　秋かせの　吹きくる宵に
天のがは　しら波しのぎ　落たぎる　早瀬をわたり
若ぐさの　妻が手まかむと　おほ舟の　思ひたのみて
漕來らむ　此男の子らが　あら玉の　としをながく
思ひこし　戀はつきなむ　ふん月の　七日のよひは
我もかなしも

かへ〻歌

五こま錦紐ときかはしあま人の妻待つ宵ぞ我ら思はむ
六四天つちと　別れし時より　久かたの　月をかさねて
おほ君の　天のかはらに　あら玉の　天しるしとて
我妹子に　あふ時まつと　立待つに　我が衣手を
あき風の　吹きし返さば　立居まで　だづきを知ず
むら鼎の　心おぼえず　とき衣の　おちひ亂れて
いつかも　我が待つ今宵　この川の　行きて長くも
ありえたるかも
七天河川淀きらずたつ霧の思ひすぐべき戀ならなくに
八四春立ば若菜摘むと占し野に昨日も今日も雪は降つゝ
九四今朝去りてあすはきなむと云しかど笠つき山に霞棚くく
〇五こちらが名につげの宜しきあさ妻の片山ぎしに霧棚くく
柿本人丸の歌とぞ
一五打靡き春立ちぬらし我宿の柳が枝にうぐひす鳴くも

二五山ぎはに霧なきつ打靡き春とおもへば雪降りしきぬ
三五山本に雪は降つゝしかすがに此河柳萌えにけるかも
四五花は咲てみはならねど共長きけに思ほゆる哉山吹の花
五五藤波の咲春の野に匍ふ葛の下にし戀ひば久しくもあらむ
六五春の野に霧たなびく櫻花かくなる迄は逢はぬ君かも
七五櫻花我は散らさで青によし都の人のきつゝ見にしぞ
八五玉きはる我山のうへに立霞立ても居ても君が隨まに
九五相思はぬ人をや妬く菅の根の長き春日を戀し暮さむ
〇六郭公厭ふ時なく菖蒲草かざゝむ日より爰に鳴かなむ
一六彦星が恨る妹がとだにも告にぞ來つる今日は苦しも
二六なが戀る妹が妻はあく迄に袖ふりはへて雲隱るまで
三六我返す楫棹なくば渡守舟かさむやはしばらくのまも
四六秋過ぎて蔭にもせむを故郷の花橘も散りにけるかも

遍昭集

春

五六花の色は霞に置てみえずとも香をだに偸め春の山風
西寺の柳を
六六淺みどり糸よりかけて白露の玉にもぬける春の柳か
二月ばかりみちをまかるとて
七六折つればたぶさに穢るたてながらみよの佛に花奉る
大和のふるの山をまかるとて
六六磯のかみふるの山べの櫻花植けむ時をしる人ぞなき
雪林院のみこひえの舍利會にのぼりて歸り給ひ
けるに
七六山風に櫻ふきまき亂れなむ花の紛れに君とまるべく
春花山に法皇のみゆきありしとくかへらせ給ひ
なむとせし時
〇七まてといはゞ最も畏し花の山暫となかむ鳥の音もがな
同じ山に人の入りて夕方罷り歸りなむとせしか
ば
一七夕暮の離は山も見えなゝむ夜はこえじと宿り取べく
題しらず
二七今こむといひて別し朝より思暮しのねをのみぞなく
內わたりに侍りし時人にこむと賴めて夜ふくる
程に丑みつと奏するをきく
三七人心うしみついまはたのまじよ
といひ侍りしかば
ゆめにみゆやとねぞすぎにける
五節のころまひゝめを見侍りて
四七天っ風雲の通路吹きとめよ少女の姿しばし見るへく
何くれといひありき侍りし程に仕うまつりし深
草の帝崩れおはしまして變らむよをみむもたへ
難く悲し藏人頭中將などいひて夜晝なれ仕うま
つりしなごりなからむ世にも交らじとて俄に家
に人々にも知せでひえに登りて頭おろし侍りし
にもさすがに親などのとは心にやかゝりけむ
五七垂乳根は斯れとてしもむば玉の我黑髮を撫ずや有けむ
はじめて山ふみ侍りて
六七今更に我は歸らじ澁みつゝよべど聞かずと問はゞ答へよ
深草の山に納め奉りしを思ひ參らせむ心のほど
は思ひやるべし
七七空蟬は殼をみつゝも慰めつけぶりだにたて深草の山
夕暮に蜘蛛のいとはかなげにすがき侍るをみて
つねよりも哀にて
八七笹蟹の空にすがくも同しと全き宿にも幾夜かはふる
世のはかなさいとゝ思ひしられて侍りしかば

九七末の露もとのしづくや世中の後れ先だつ例なるらむ
など思ひつゞけてまかりありきしほどに年も返りて諸共に見し殿上の人々あるはかうぶりえあるはつかさ給はりなどしてかはらにいでゝ御ぶくぬぐ所にあやしの法師して遣はしつゝ
○八皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ
かくていづこともなくありき侍りて初瀬のみ寺にさぶらふほどに傍なる女の寺の僧をよびよせていふやうとしごろの人なうなりたるをいかにしてもある物ならば今一たびあひみせ給へ身をもなげ死にもしたらば道をもなし給へたゞともかくも此の人の有様を夢にも現にも見せ知らせ給へとて男の具をおひたちまで誦行にせさすとてえもいひやらず泣くを始は何人ならむと思ふ程にわが上にきゝなして近くよりて名をきけばめのと[罪]のなりけり子どもゝそひていみじう泣くいと悲しうてなぞや走りもいでなまし と千たびおもへどもいみじうかへされて終夜泣き明したる所は簑なども紅になむしみたりけるさてまたよにありとも聞えぬを小野の小町こもれりけるに傍に經よむ誰ならむとてつれなる人して見せければ簑一つきる法師のさてがにあてやかなるなむ隅の方にゐて侍るといひければ耳をたてゝきくにいと尊く哀なりたゞ人にはあらず少將の大とくにやあらむと思ひていかゞいふとこのみてらになむ侍るいとさむきを御こゝろきこえ侍ればいと頼もしくなむみぞ一つ貸し給へ
一八岩の上に旅寝をすれば最寒し苔の衣を我にかさなむ
といへるかへりごとばかりを
二八山伏の苔の衣は只一重かさねばうとしいざ二人ねむ
といへるたゞ少將なりけりと思ひてたゞにも語らひしなかなれば物いはむと思ひて尋ねいきたりけれどふと失せにけりときこしめして五條のきさきの宮より内舎人を御使にて野山を尋ねさせ給ひけり辛くしてわりなくかくれたる所にゆくりなう入りにければえ隠れあへで逢ひぬ宮の仰言になむ帝おはしまさぬに睦じくおぼしめしゝ人をだに御形見にと思ふべきをかくよに失せられたうびにたればいとなむ悲しきなどか山林にいるともこゝにだにせうそこを云はざるまじきみさと在所にも音せられざらむなれば泣きてわぶなる如何なる所にてかく物せらるとなむ侍りしかば此處彼處わりなく尋ね侍りて畏く參りたるといへば仰言畏まりてなむ帝崩れさせ給ひて後世にふべき心ちし侍らざりしかばかゝる山の末にこもり侍りて死なむをまち侍るにまたなむあやしくまじらひ侍るにいと畏くとはせ給へることわらはべのはべる所も心には忘れ侍らずとて
限なき雲ゐのよそに成ぬとも人を心におくらざらめやとなむまうしつると啓し給へといひける入道のかほ委いとなむかなしかりけるそのほどにもゐらずなりてたゞ簑をのみなむ着たりける少將なりし時清げなりしを思ひいでゝいと悲しかりけるかたとき人のあるべき所ならねば歸りまゐりてことの由かくなむと啓せさすれば宮畏くしほたれさせ給ひて御返しつかはすに人々もみなせうそこつけてやり給ひけれど隠れにければえ尋ねあはずなりにけれど僧正までなりて後のことにや仁和の帝のまだみこにおはしましゝ時布留の瀧御覽せむとておはしましける道に逼昭の母の家侍りけるに庭を秋野につくりていとをかし

う御物がたりのついでによみたてまつりし
四八里は荒て人は舊りにし宿なれや庭も離も秋の野らなる
同じ帝の御をばの八十賀に白銀を杖に作りて奉り給ひし時このをばに代りて
五八千早振神や切けむつくからに千年の坂も越ぬべら也
題しらず
六八諸人のそこら祈し驗あらば八十憂身に傳へざらめや
嵯峨に侍りし法師の坊の前に前栽のはべりけるを女どものたちとまりて見侍りしかば
七八こゝにしも何匂らむ女郎花人の物いひさが憎き世に
さう〳〵しう侍りしかば馬にのりて物にまかりし道に女郎花の見えしをおよびて折りしほどに馬よりおちてふしながら
八八名にめでゝ折れる計ぞ女郎花我落にきと人に語るな
九八花とみて折らむとすれば女郎花轉有る樣のなに社有けれ
○九秋の野になまめきたてる女郎花あな事々し花も一時
奈良へまかるみちにあれたる家に女のことひき侍りしをきゝ侍りていひいれてし
一九侘人の住べき宿と見なべに歎加はることの音ぞする
二九秋山の嵐の聲をきく時は木のはならねど物ぞ悲しき
殘の紅葉を
三九唐錦枝に一むら殘れるは秋の形見をたゝぬなりけり
雲林院の木かげにたゝずみありきて
四九侘人のわきて立よる木の木は頼む蔭なく紅葉散けり
くたにをだいにて
五九散ぬれば後は芥になる花を思ひしらずも惑ふてふ哉
は文字をかみにてる文字をはてにてながめをかくす
六九花の中めに飽やとて分行けば心ぞ共に散ぬべらなる
志賀よりかへり侍りし人花山に入りてふぢのはな見はべりしかば
七九よそにみて歸らむ人に藤の花這まつはれよ枝は折る共
はちすに蓮のおきたるを
八九はちす葉の濁にしまぬ心もてなどかは露を玉と欺く
九九我宿は道みえぬ迄荒にけり難而き人を待とせしまに
○○世を厭ひこの木毎に立寄てうつ伏薬の麻のけさなり

源順集

西の四條の宮の源中納言のお前にちひさき紅梅を植えたりけるを初めて花咲きたる年悦びてをのことも各文字一つを探りてよむにう文字を給はれり哀れ春の始は東よりといふを西の宮よりなりけりとは此の梅の初花を見てなむ驚かれけるこれにより我がおとゝの君やまとことのをのこども引きつらねてさぶらはせ給ふから竹の笛の一よあそびあかさせ給ひかゝるふしをたゞにやはすぐすべきとて此の小木の生ひ出でゝ萬代の老木にならむまでの心ばへをよませ給ふに
一〇白浪のしらぬ身なれど大淀の仰ごとをば如何背かむ
二〇梅津川このくれよりぞ流ての嬉しきせゝはみえむ水底
あめつちの歌　四十八首
もと藤原の有忠の朝臣藤六が返しなり彼はかみの限りにその文字をすゑたりこれはしもにもすゑ時をもわかちつゝよめる
春
三〇荒さじと打返すらむ小田山の苗代水にぬれて作るあ
四〇めも遙に雪まも青く成に鳥今日社野べに若菜摘てめ
五〇筑波山咲ける櫻の匂をば入て折らねどよそ乍ら見つ

六〇ちぐさにも綻ぶ花の匂ひ哉いづら青柳ぬひし糸すぢ
七〇仄々と明石の濱を見渡せば春の波ともいづる船のほ
八〇雫さへ梅の花笠しるきかな雨にぬれじと君や隱しゝ
九〇空寒み結びし氷うちとけて今や行らむ春のたのみぞ
一〇らにもかれ菊も枯にし秋のゝ萌にける哉さほの山づら

夏

一一山も野も夏草繁く成にけりなどかまだしき宿の苅萱
二まつ人も見えねば夏も白雲や猶ふりしける越の白山
三片戀に身をやきつゝも夏蟲の哀れ侘しき物を思ふか
四一はつかにも思掛てはゆふ禊賀茂の河波立よらじやは
五一みをつめば物思ふらし郭公きのみ惑ふ五月雨の闇
六一ねを深みまだ顯れぬ菖蒲草人を戀路にえこそ離れぬ
七一誰により祈る瀬々にも非なくに淺く云なす大幣にはた
八一庭見ればやほ蓼生て荒に鳬辛くしてだに君が訪ぬに

秋

九一呉竹のよさむに今はなりぬとや假初ぶしに衣片しく
〇二もがみ河稻船のみは通はずており上り猶さわぐ葦鴨
一二昨日耕行て見ぬ程いつのまに移ろひぬ覽野べの秋萩
二二りうたうも名のみ也鳬秋の野の千種の花の香には劣れり
三二結びきし白露をみる物ならば夜光るてふ玉も何せむ
四二榜もかぢも船も通はぬ天河七夕渡るほどやいくひろ
五二木の葉のみ降しく秋は道をなみ渡りぞ侘る山川の底
六二けさ見れば移ひにけり女郎花我に任せて秋は早ゆけ

冬

七二ひを寒み氷も解ぬ池水やうへはつれなく深きわが戀
八二とへと云し人は有やと雪分て尋きつるぞ三輪の山本
九二泉ともいさや白波立ぬれて下なる草にかける蜘のい
〇三ぬる毎に衣を返す冬夜に夢にだにやは君が見えこぬ
一三打渡しまつ網代木の最ひをの絶て寄ぬはなぞや心う
二三へび弓のはれるにも非で散花は雪かと人にいる人にとへ
三三炭がまのもえこそ渡れ冬寒み獨思のよるはいもねず
四三何乞する君がはし鷹下枯の野になる放そ早く手にすゑ

思

五三夕さればいとゞ侘しき大井川篝火なれや消返りもゆ
六三点ずも思ゆる哉朝な〳〵ねし黒髪のねくたれのたわ
七三笹蟹のいとだに安く寢ぬ頃は夢にも君に逢見ぬがうき
八三るゝ草の葉に置露の玉をさへ物思ふ君は涙とぞ見る
九三思をも戀をも瀧々に禊する人形なでゝ祓へてはおく
〇四吹風につけても人を思ふには天つ空にも有やとぞ思
一四せは淵に五月雨河の成行けばみをさへ海に思社なせ
二四吉り川底の岩波いかでのみ苦しや人を立居戀ふるよ

戀

三四えもいはで戀の亂るゝふ哉いつとや岩に生る松のえ
四四殘なくおつる涙は露けきをいづら結びし草村のしの
五四えもせかで涙の川の果々や強て戀しき山は筑波えね
六四小倉山覺束なくも逢見ぬる鳴く鹿ばかり戀しき物を
七四泣むる涙は袖に滿汐の干るまにだにも逢みてしがな
八四獵師にもあらぬ我こそ逢事を照射の松の燃焦れぬれ
九四ゐても戀臥ても戀るかひもなく影淺ましくみえゐ山の井
〇五照月ももるゝ板まの逢はぬ夜は濡こそ渡れ返す衣手

天暦の御屏風の歌

春たつ日

一五けふとくる氷かへりて結らし千年の春にあはむ契を

天暦五年宣旨ありて始めてやまと歌えらぶ所を梨壺におかせ給ひて古萬葉集よみとき選ばしめ給ふなり召をかぶるは河内掾清原元輔近江掾紀時文讃岐掾大中臣能宣學生源順御書所の預坂上望城なり藏人左近衛少將藤原伊尹その所の別當に定めさせ給ふに神無月の晦日に御題を封じてくだし給へり神無月かぎりとや思ふもみぢ葉のとある各歌を奉る

二五神無月果は紅葉もいかなれや時雨と共に降に降る覽

又くだし給へる判に曰くもみぢ葉の神無月はてぬと思ひてもり過ぐるをば知りにけりいかなれやとおぼめてさだめなしするつ方たをやけきさまなれとなよ竹のよゝのふるごとにもなむなりにける

佐保山をはせまでによむ

三五千鳥なく佐保の河霧さほ山の紅葉計りは立な隱しそ

西宮源大納言の大饗の日奉る料に四尺の屏風新しく調せらるゝ料の歌

元日

四五昨日まで雪に籠りし三吉野の霞はけふや立て初らむ

子日する所を

五五岩に生る子日の松も種し有ば千年の春は我におほせよ

二月初午稻荷の社に詣づる人に

六五稻荷山尾上に立てるすぎ〳〵に行かふ人の絶ぬけふ哉

あら田うつ所を

七五おりたてば裏迄ひづる袂ゆゑ何打返す荒田なるらむ

三月花つみの所

八五いかにして花を摘まゝし花の香を袖に摘つる罪も社うれ

小弓射るところ

九五春深き宿にいればや梓弓ふく風にさへ花のちるらむ

四月神祭るところ

〇六神のまつる杜の下草風ふけば靡きても皆まつる頃かな

五月ともしする所

一六郭公待につけてや照射する人も山べに夜を明すらむ

六月はらへする所

二六願事も聞ず荒ぶる神だにも今日は夏越と人はしらなむ

七月七日棚機祭する所

三六棚機は空にしるらむ笹蟹のいとかくばかり祭る心を

十五日ぼんもたせて山寺に詣づるところ

四六今日の爲をれる蓮の葉を廣み露おく山に我はきに鳬

八月逢坂の關に駒むかへの人々こゆる所

五六何に我夜はにきつらむ相坂の關あけて社駒も引けれ

八月釣殿に人々あつまりて月見る所

六六水の面に宿れる月の長閑さは並ゐて人も寢ぬ夜なればか

九月小鷹がりのところ

七六里遠み暮なば野べに泊るべし稻負鳥に宿や借らまし

月夜にきぬうつところ

八六風寒ふ鳴く雁音にあはすれば夜の衣は擣ち增りけり

十月志賀の山越の人々

九六名をきけば昔長柄の山なれど時雨る頃は色增りけり

十一月賀茂の臨時祭に

〇七千早振かもの河霧きる中にしるきはすれる衣也けり

十二月佛名おこなふ家

一七冬山の雪まにこれるあはれ木の上にぞくゆる隱す罪なく

天德四年三月卅日内裏の歌合のひだりかた仰せにより奉る三首、鶯

二七氷だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯のこゑ

山吹

三七春深み井手の河波立かへり見てこそ行かめ山吹の花

戀

四七たが爲に君を戀らむ戀侘て我は我にも非ずなりゆく

應和元年七月十一日四歳なる女ごを喪ひて同年八月六日又五つなるをのこ子を喪ひて無常の思ひ物にふれておこる悲びの涙乾かず古萬葉集中に沙彌滿誓がよめる歌の中に世の中を何に譬へむといへることをとりてかしらにおきてよめる

五七世の中を何に譬へむ茜さす朝日まつまの萩の上の露

六七世の中を何に譬へむ夕露もまたできえぬる朝顏の花

七七世の中を何に譬へむ飛鳥川定なき世にたぎつ水の泡

八七世の中を何に譬へむ轉寢の夢路ばかりに通ふ玉ほこ

九七世の中を何に譬へむふく風は行へもしらぬ峰の白雲

〇八世の中を何に譬へむ水早みかつ崩れゆく岸のふし松

一八世の中を何に譬へむ秋の野をほのかに照す宵の稻妻
二八世の中を何に譬へむ濁江のそこにならでも宿る月形
三八世の中を何に譬へむ草も木も枯行頃の野べの蟲のね
四八世の中を何に譬へむ冬を淺み降と見るまにけゐる泡雪
民部丞清原元輔が弟學生元眞あざな清男みまかりて後はふりするまでしちずして遲　聞きにたる由元輔にいひやる
五八宵のまの空の烟と成にけり天の原からなどか告こぬ
應和元年勘解由判官の勞六年右になづらふるにかくしづめる人なしつかれたる馬のかたを作りてつかさの長官朝成朝臣に給ふに加へたる長歌
六八あら玉の年のはたちに足ざりし　ときはの山の
山さむみ風もさはらぬ　藤ごろも
あさ霧に　こゝろも空に　二たびたちし
成しより　惑ひそめ　みなしら雲と
物思ふことの　葉を繁み　けぬべき露の
はに置て　夏はなぎさに　もえ渡る　ほたるを袖に
拾ひつゝ　冬ははなかと　みえ紛ふ　木のまゝに
ふり積る　雪をたもとに　聚めつゝ　ふみ見て出し
道はなほ　身の憂きにのみ　有ければ　こゝも彼處も
葦根はふ　下にのみこそ　沈みけれ　誰こゝのへの
さは水に　鳴く鶴のねは　久かたの　雲のうへまで
隱れなく　高くきこえて　かひ有と　いひ流しけむ
我はなほ　かひも渚に　みつ汐の　世には比べて
住の江の　松はむなしく　老ぬれど　みどりの衣
脫更へむ　春はいつとも　白なみの　波路にいたく
ゆき通ひ　ゆもとり敢ず　成にける　船のわれをし
君しあらば　哀れといまだ　沈めじと　あまのつり縄
打はへて　引としきかば　物は思はじ
應和二年五月に東宮の藏人になりて月の内に民部丞にうつりて二度よろこびあり思をのべてくらの命婦にやる
七八引人もなしと佗つる梓弓今ぞうれしき諸矢しつれば
同年十一月前朱雀院の姫宮の御裳着の日の料に御屏風つかうまつるに人々に仰せて奉らせ給ふ歌
八八露を重み堪ぬ計の青柳は幾めかけたるこがねなる覽
春柳
四月卯花さける所
九八我宿の垣ねや春を隔つらむ夏きにけりとみゆる卯花
旅人ほとゝぎすをきく
一〇九おぼつかな行旅人に誰とてか山郭公まづなのるらむ
池のほとりに鶴たてり
一一九池水に靡く玉藻の水清み千代さへしるき鶴の影かな
一二九葦鶴の影のみ浮ぶ池水は千世になるべき驗とぞみる
とほき雁を見る人
一三九里遠み雲路搔分け水莖の跡かとみゆる雁はきにけり
一四九山川に紅葉ながる
山川の瀨にも紅葉の色深くみゆ
五月あめふるらし山川の瀨にも紅葉の色深くみゆ
一五九水上に時雨ふるらし山川の瀨にも紅葉の色深くみゆ
五月あめふる日東宮にはべらひて雨ふる心の歌を奉るとておのゝ〳〵文字一つを探りてあ文字を給はりて
一六九雨ふれば草葉の露も增りけり淀の渡りの思ほゆる哉
內裏に女みこたちの御れうに月並の繪かゝしめ給うて殿上人に歌おしへさせ給ふある人のれうによめる四月うの花さける家に郭公をまつ
一七九時鳥聞かで待夜は明にけりほのに卯花白くみえゆく
九月大井川に人々遊ぶに紅葉ちる
一八九紅葉をば柚山川に吹つめば船に時雨の秋は來にけり
人の家の池に蓮おひぬなは生ひたり
一九九蓮だに生ざらませば水の上に露置き鳧と爭で知まし
康保二年女五男八親王御屏風の歌、春田舍の家にをんなのもとに男きたり

九九道遠み人も通はぬ梅の花君には風やわきてつげつる
雉のなくをきゝて山櫻を見る
一〇狩にくる人も社あれ春の野に朝なく雉の近くも有哉
一一山櫻木の下風し心あらば香をのみつてよ花な散しぞ
卯の花さけるに郭公をきく
二〇卯花のをらまゝほしき山里に郭公さへ來つゝ鳴なり
賀茂の祭のさるの日みあれひく
三〇我引かみあれにつけて祈るとなる〳〵鈴も先聞ゆ也
海のつらに鹽やき網ひく
四〇見渡せば螢の栲繩名のみして立つは鹽燒く煙也けり
九月三十日の日男女野べに出でゝ紅葉を見る
五〇いかなれば紅葉にもまだ飽なくに秋果ぬとは今日か云覽
雨のうちにのこりの菊を見る
六〇時雨つゝ移ふ見れば菊の色を濕々と降雨にざりける
人の家に水鳥あり
七〇朝氷とけにけらしな水の面に宿る鴨鳥往來なくなり
雪降る日あづまの方にあひつらねたり
八〇旅の空くもる苦しな東路の往き來の方もみえぬ白雲
田のなかに水をひくをとこあり
九〇遠山田種蒔おける人よりも井堰の水はもり增るらむ
人の家の池のほとりの藤の花を
一〇藤波のかゝれる岸の松は老て若紫にいかでさくらむ
四月神祭る所
一一夏山にをれる榊の葉を茂み囀り增るけふにぞ有ける
五月五日
一二澤水になくつるのねを尋てや菖蒲の草を人の引らむ
六月はらへの所
一三夏草に祓へかくれば久方の天つ罪とに露やけぬらむ
七月七日たなばた
一四七夕の心をくみて天の川しづくに袖のひちぬべき哉
八月十五夜駒引
一五今日しもあれ逢坂山の山端に先出で來ぬる望月の駒
九月九日菊を
一六今日をみて後こそ知め菊の花開くに遲はぬ驗有とは
十月あじろ
一七紅葉さへきよる網代のてをかけて立白波は唐錦かも
一八水上に嵐吹らし山川のせにも紅葉のはやく見ゆれば
十二月佛名
一九夜を寒み風さへ拂ふ宿なれば殘れる君が罪も有じな
四のみこ子日に北野にいで給へる日
二〇右の例をひけば八千代まで命をのぶる小松なりけり
右兵衛の督新しくてうずる屏風のれうに正月一日人の家に遣水梅の花あり
二一氷とく風につけつゝ梅の花行く水にさへ匂ふ也けり
二月たび人櫻の花を折らす
二二春日すら長ねしつるを妹間ば見せむと折れる花な散しそ
三月人の家に女とも柳のもとにあそぶ
二三枝茂み手にかけそめて青柳の暇なくても暮すけふ哉
四月神まつる
二四夏衣きもこそ增れ同くば神のひもろぎときて歸らむ
五月五日庭に馬ひかせて見る
二五若駒の解もみるべく菖蒲草曳ぬ先にぞ今日は懸まし
六月はらへするところ
二六岩波の立返るせは井堰より夏越の御禊すとや聞らむ
七月七日庭に琴ひく人あり
二七琴のねもなぞやかひなき棚機の他ぬ別を引し留ねば
八月相坂の關に駒迎ふる人あり
二八武藏野の駒迎にや關山のかひ打越て今日はきつらむ
九月志賀の山越の人々
二九山嵐の風に紅葉のちり行げば漣ぞ先づ色づきにける
十月山里に狩する人來る
三〇山里に心合する人やあると我はし鷹に代りてぞとふ

十一月あじろ

一三朝氷解る網代のひをなれば寄れど泡にぞ見え渡りける

十二月佛名導師にかづけ物する

二三渡つ海の底の冬殘もけさは有じ潜　ばいかに蟹ならず共

右近少將業孝朝臣と加賀掾正通と碁うつとてやまと歌十首をつくる正通まけてつぐのふ日せめてきたりてこふにまつ仁智をとらす、春のくれ

三四心して風もふかなむ花のちる方へや春も行くと尋む

秋月

四五久方の空さへ澄る秋の月いづれの水に宿らざるらむ

あはぬ戀

五六逢ずして言のはも祓聞えけれ待で消なむ露の悲しき

逢ひての戀

六三我ながらくらべ侘ぬる心哉今さへ猶や戀しかるべき

宰相中將たてまつる後漢書の光武紀よみをへたる日わたりかゆの饌多きに設けて文作る又のあしたに祝の心ある歌奉る

七五老ぬれば同事社せられけれ君は千世ませ君はちよませ

藤大夫誠信の家に五月朔日なるに庚申するに曉になりて鳥のなくを聞きて女房よりいひ出す

八三鳴聲を鳥だにかふる物ならば郭公とぞ聞き明さましこれがかへり事

九五君きかばなけ時鳥黒髮のふゃきになれば我も劣らず

ある所に男女方わきてお前の庭の面に薄、萩、らに、しをに、草のかう、女郎花、刈萱、撫子、小萩など栽ゑさせ給ひ松蟲鈴蟲を放たせ給ひて人々にやがて其の物ともにつけて歌を奉らせ給ふに己が心々に我も〳〵とあるは山里の垣根にさを鹿のたちよりあるは限なき洲濱の磯づらに蘆たづのおりゐるかたを作りて草をもおほし蟲をもなかせたり仰せ事とて花の有樣蟲の委は孰れもいとをかしかめり歌ゃ劣り優りは定めでやはあるべき誰してか定め申さすべきと仰せ給ふに是かれ申す前和泉守源順朝臣なむおほやけには梨壺の五人がうちに定められ宮には思ふ人八人がうちに侍ひし人なりこれを召してこそ定められむに宜しからめと申すによりてかねて其の事とはなくて今夜すぐすまじきまめ事なむあるとて召したり民の司たゃすつかさのおほいすけの君だちこなたかなたに侍ひ給ひ加賀の掾橘の正通によみあげさせ順の朝臣にことわらせ學生爲憲なむ同じ源といふべくもなくちぐさに匂ふ花のあたりにはもぎ木のやうにてまじりにくゝ侍れどもやんごとなくさぶらふ深山の麓よりおひでたる草のゆかりにて仰せ事の辭びがたさに心もともについにける水莖して奉りおく其の歌ども順朝臣の定め申せる判かくなむ

すゝき　侍從のおもと

○四花の皆紐とく野べに篠薄いかなる露か結びおきけむ

源すけまさの朝臣

一四秋風になびく夕の花薄ほのかに招くたちとまりなむ

此の薄の歌はすけまさが靡く招くといへるわたりらうたけたるやうなり今暫しぞ思ひ合せまし

こなたしも靡劣るは花薄玉まく葛の眞葛なるべし

女郎花　そちのきみ

二四玉の緒をみなへし人の絶ざらば拔べき物を秋の白露

ありたゃの朝臣

三四くらぶ山麓の野べの女郎花露の下より移しつるかな

此の女郎花の歌はありたゃの朝臣嵯峨野をうち過ぎて倉橋山まで索めありきけむもおぢきなし又やまとことにいひにくき事をこそ添へて

我妹子が女郎花てふ可惜名を玉緒にやは結打べき

萩　兵部君

四四さを鹿のすだく麓の下萩は露けきとの難くもある哉

橘のもちきの朝臣

五四萩葉におく白露の溜りせば花の形見は思はざらまし

此の萩の歌は誰も〳〵同じさまなれどすだく麓のなどいへるわたりは少しいひなれたりもちきの朝臣の萩の葉におく白露なといへるわたり珍らしからねど歌めいたり

露を浸み下葉も未紅葉ねば紅くも見えず勝負の程

らに　辨君

六四別行く秋をし知らに鳴鹿は命をさへや留めかねらむ

もりのぶの朝臣

七四あだし野の叢にのみ交りつる匂ひは今や人に知らむ

此のもりのぶの朝臣のあだし野は野の名正しからねばにやあり所知る人少なし又かみにはなもみえずしもに匂といふにつけて此の歌殊なる心はなければどもそへ所少なきに今一文字を加へてしらにといへる所今少し優れり

覺東なあだし野見ば花もなし空に匂ふと云は何ぞも

草のかう　左衛門君

八四常夏の露うちはらふ宵ごとに草のかうつる我袂かな

源爲憲

九四野べ毎に花をしつめば種々のか移る袖ぞ露けかりける

此の草のかうの歌ざまは左衛門少し和らかにいはせて侍るめりされどもかみの草はもとの草にて下のかうのみそへたれば人に隱れむ人の身のみ隱れておもてあらはなる心ちなむしける

千草のか移る袂も有けるをなど槿を隱さざりけむ

しをに　日向のかみ

○五高砂の山のを鹿は年をへて同じをにこそ立馴しけれ

藤原もろふむ

一五白雲の懸りしをにも秋霧のたてばや空に山の見ゆらむ

此のしをにの歌は此も彼も同じやうなれど秋霧のたてばや空に山のみゆらむといへるわたり河霧の麓をこめて立ちぬれど空にぞ秋の山はみえけるといへる古ごとを思ひ合すれば似劣りになむみえける

麓とも峰ともみえず秋霧の立なば何か空に見ゆべき

萩　すけの君

二五そよとなる秋の萩だに微せば何につけてか風を知まし

源すけなか

三五萩の葉の末こす風の音よりぞ秋の深行く事は知るゝ

此の萩の歌自も見給へ入してもよみあげさするに萩の葉を末こす風の音高み末こす方は少し優れり

撫子　もとゝき

四五山がつのかきほの外に朝夕の露にうつるな撫子の花

藤原のたかたゞ

五五秋深く色移りゆく野べながらなほ常夏にみゆる撫子

此の撫子の歌はいづれも〳〵いとよく云はせ侍るめりたゞし

秋も猶とこなつかしき野べ乍ら疑置ける露ぞ儚き

と見れば萩も少し負けに見ゆ

かる萱　こはひと

六五行秋の風に亂るゝ刈萱ほしめゆふ露も止らざりけり

たゃのぶ

七五移し栽ば東の間もなく刈萱はみちよの數を數ふ計ぞ

此の刈萱はたゃのぶが三千代の數などいへるわたり秋の野は刈萱にやは少し春の野べに咲きけむ物の花なむ思ひいでられける

言の葉はこほく見ゆれどすまひ草露には移物にざりけ

蟲のね　但馬のかみ

八五澁茅生の露吹き結ぶ木枯に亂れてもなく蟲の聲かな　橘正通

九六秋風に露を涙となく蟲のおもふ心をたれにとはまし

此の蟲のねの歌露吹き結ぶ木枯のなどいへるわたりいひなれたりなど定むるほどに正通が申すやう木枯とは冬の嵐をこそいへ此の頃の風をいはゞ雨をも時雨とやいふべからむといふを聞しめして御簾の内にこれかれか丶る事をいふことをこそはためしにひかめとて

木枯の秋の初風吹ぬるになどか雲居に歴の音せぬ

又

我宿のわさ田も未だ刈なくにまだき吹ぬる風の風などいへるは冬の嵐を秋の初風といへるにやあらむ其のわたりをこそ定め申されめとあるにつけて又々見給ふれば

なく蟲の涙になせる露よりも露吹結ぶ風は優れりそも〳〵順梨壺には奈良の郡のふる歌よみとき選び奉りし時には少し呉竹のよごもりて行末を頼む折も侍りき今は草の庵に難渡の浦の蘆のけにのみ煩らひて籠り侍ればすべてわれ船のひく人も渚に捨てられおかれたらむ心ちなむしけるか丶る内にも此の年頃は

しらけゆく髪には霜や翁草言の葉も皆枯果にけりかく侍れば此歌ども定め申せるさまどもいといひしらずことやうなり尚お前にて定めさせ給はむやよからむと申すを聞きて正通が申すやう

霜枯の翁草とはなのれども女郎花には尚靡きけり今日の判を見ればなど云ひ戯ぶれて罷り出でなむとする程にみすの内をきけば帥のすけ橘のなかきといひし人のむすめ此彼侍ひて夜の更けゆくまゝにさやけさまさる琴のねを調べ合せたるにおまへの庭の面をみれば月影の朧なるに花の色々にうち亂れたり風の夜寒になりゆくに蟲の聲々もなきあひたりかゝる事どもを聞き忍びすてゝ今は罷り出でなむとて萩の下露に衣手ぬるゝもしらず起きゐて大みきたぶなりときこしめして贄殿よりはみこの宮の藏人所の雜色藤原のたかたゞして御くだ物のおろし政所よりは長門の權守源の有忠の朝臣してさかなに給ふべき物を樣々いろ〳〵に給へりこれかれ替たまひあきて申すやうまだあかぬ物は御前の花の色と蟲の聲になむありけるなど申してやう〳〵罷りいでぬ爲憲一人明くるまでさぶらひて昨日より今日までのことを書きしるして奉りおく天德といふ年始まりて三とせの秋のなかばなが月のしもの十日に今二日おきての事なり

一品宮とうちと御碁あそばさるあふぎつく日なり宮まけ給ひて七月七日に奉り給ふさま〳〵にたへなることを盡せり綾のもんにもんじをもりてはれる歌

○六天つ風仰ぐとも夢ちりたつなこは棚機のおれる衣ぞ

枇杷殿にて菊を翫びて探りてみ文字をえたり

一六移はむ時や見わかむ冬の夜の霜と一つにみゆる白菊

右馬頭遠度朝臣家にきたり宿りける頃望月の御まひいぬる秋日かすふゆになりてひき奉るむかふなる司の官人どもにに御みきなど給ひての歌

二六君だにも荒たる宿に宿らずばよそにぞみまし望月の〻

八川左大臣後院にて宴をなす夜の歌

水上月

三六水清み宿れる秋の月さへや千世迄君とすまむとすらむ

岸のほとりのはな

四六色深く岸のまに〳〵咲る花淺き波にはをられざり鳬くさむらの内の蟲

五六叢の底まで月の照せばや鳴く蟲の音の隱れざるらむ

中のみかどの家に南に中務すむ六月梅の枝につゝたるを折りて北の家にやる其の詞に云はくこのはまだかくなむ殘りたると即ちいふ心は

六六井堰にも障らず水のもるに逢へば前の梅づも殘らざり鳬

南のかへし

七六泉にも殘らで爭でもりにけむ堰の古杭くひも飽ぬに

北かへし

八六泉にもあらぬ井堰の島近み波の越つゝをるゝと社きけ

南かへし

九六打越る波の音せばもらぬよりしまきの風ぞ吹返さまし

又其のかへし

○七花を社人や折とも咎しか數ならぬみは何にかはせむ

貞元元年初齋宮の侍從のくりやにおはするあひだに八月二十五日庚申の夜人々參りあひて遊ぶに祝の心を

一七神代より色も變らぬ竹川のよゝをは君ぞ數へ渡らむ

同じ年の九月はつる日齋宮野の宮に前栽うゑて

又よむ

二七頼もしな野の宮人の栽る花時雨る月にあすはなる共

此の歌のかへし女房いひ出す

三七あすよりは時雨に懸る花を植てのへやるべくも非ぬ秋哉

かへし

四七君が爲八千代の秋は無ればやのへやゝべくも非ずと云覽

永觀元年一條の藤大納言の家に寢殿の障子に國々の名ある所々を紛にかけるかく歌

鏡の山、夏

五七名にしおへば曇らざり鳬鏡山宜こそ夏の影は見えけれ

大井川、秋

六七大井川そまに秋風寒ければたつ岩波も雪とこそみれ

天橋立

七七滿潮ものぼりかねてぞ返るら　波さへ高き天の橋立

やそ島

八七八十島を誠に爭で見てしがな春の至らぬ島は有りやと

浮島

九七定なき人の心に比ぶればたゞ浮島は名のみなりけり

高砂

○八打寄する波と尾上の松風と聲高砂やいづれなるらむ

大淀

一八伊勢の蜃に問ひは聞ねど大淀の濱のみるめは著くぞ有ける

しかすがのわたり

二八行通ふ舟路は有れどしかすがの渡は跡もなくぞ有ける

初の冬のかのえ申の日の夜伊勢の齋の宮にさぶらひにて松聲夜の琴に入るといふとを題にて奉る歌の序伊勢の齋の宮秋野宮に渡り給ひて後冬の山風寒　なりての初廿日七日の夜庚申に當れり長々しき夜をつく〳〵とやは明すべきと思ほしてみすのうちに侍ふおもと人御階のもとに參れるまうち君たちに歌よませ遊びせさせ給ふ歌の題に曰く松聲夜の琴に入るこれにつけてきけば足曳の山嵐に響く〻なる松の深緑もむば玉のよはに聞ゆる琴のおもしろさも偏に皆亂れあひ行き通ひてうべも昔の人風松に入るといふことの詩句を作りおき傳へそめけむとない覺ほえける順が頭の髮夏も冬もわかぬ雪かと誤たれ心の闇はからにもやまとにもすべてつきなく御前の遣水に浮べる殘の菊に思ひあはすれば泉ばかりに沈める身耻かしく名に高き衣笠岡に照るもみぢ葉を見渡せばかゝるまとゐに侍ふ事さへまばゆけれどさもあらばあれ世人こそ聞きてそしり笑はめかけまくも畏き御神は哀とも惠みさいはひ給ひてむ今の古を後の人も見よとてかき記して

奉るは仰せ言にしたがふなり

三八夜を寒み琴にしも入る松風は君に引れて千代や添らむ

天元二年の秋ろおかなるをのこさうしに平の兼盛駿河の守にてくだるにやる歌二首

四八時しもあれ小鹿の橋を秋行けば吾妻なきへぞ戀渡べき

五八思侘び己が船々行を船田子の浦みてきぬといはすなしもつふさの守藤原のすゑたかが國に下るに中納言中宮大夫の家のをのこども餞給ふ夜よめる

六八君は早や人並々に出立ちて沈みに沈む我に逢ふなよ

伊勢齋宮規子内親王群行の後長奉送使廣幡の中納言京に歸り給ふに齋宮の御前にて饗まうけ祿給ふに男女歌よむとて奉る

七八神のます山田の原の鶴子は孵るより社千代は數へめ

天元二年十日初の亥の日右大臣の女御の火桶にもちひくだもの盛りてうちの女房どもにつかはすついでに大臣にも火桶一つ奉らせ給ふしろかねしてゐのこがめのかたを作りてするさせ給へるにくはゝ　る歌、ゐのこの歌は平兼盛が集にあり

八八渡つ海の浮たる山をおふよりは動なき世を戴けや猿

天元二年正月一條藤大納言石山に詣でゝ七日さぶらひ給ふ家人の詩作り歌よむあまた侍り暇の隙にからの歌作りやまと歌よむ大方かきあつめたるに侍從誠信さはりありてつかうまつらず後に此の歌どもを見て自思ひ作りてこれに又加へよとすゝめられたるなかに三河の權の守これしげの朝臣の江山此地深といふ詩に　客帆有り月風千里仙洞無し人鶴一雙　とつくれること内記爲憲の朝臣が渚の松といふことをよめる

九八老にける渚の松の深緑しづめる影をよそにやは見るといへるを

○九深緑松にもあらぬ朝あけの衣さへにぞ沈みそめけむ

天元二年十月依二宣旨一奉る御屏風の歌、

子日の野べに遊ぶ人

一九小松引人にはつれし深緑木高き影ぞ千代はまされる

梅の花ある家

二九朝氷吹とく風はぬるけれど急ぎて梅は早咲きにけり

春の野の霞める梅の花さけるに鷹をすゑて人ゆく

三九梅の香を假にきて折人やあると野べの霞は立隱ずらむ

人の家に櫻柳あり

四九鶯はわきてくれども青柳の絲は櫻に亂れあひにけり

花の木あまたある下に人々あそぶ遣水あり山吹の花さけり

五九山吹の花の下水咲ねども皆くちなしと影ぞ見えける

六九河風はさらむ方なみ山吹の散行く水を堰やとめまし

松の木に藤かゝれり男をんな群がれ居たりあるひはをりてさる

七九住吉の岸の松社羅思ほゆれ手にさへかゝる藤波の花

八九松風の音に聞つる藤波は折つゝ返る名にこそ有けれ

九九紫の藤さく松の梢にはもゝの緑も見えずぞありける

七月七日をんな庭におりて七夕祭る男きたりてまがきのもとにたてり

○○彦星をまつとはなしに何すとて天の河霧急ぎ立らむ

一〇棚機にけさはかしつる麻糸を夜は祭ると人は知ずや

二〇天河渡守にもなりてしが棚機つめに今日はまかせじ

三〇名にしおへば鵲の橋渡す也別るゝ袖は狗やぬるらむ

八月十五夜人の家にはちすあり木の葉浮ぶ月の影おちたり男をんな心々にあそぶすだれを隔てゝ物語するもあり

四〇蓮葉も紅葉もしける水の面に底まで見よと照す月影

五〇水の面に照月なみを數ふれば今宵ぞ秋の最中也ける

秋の夜月あかし林のもとに鹿たてり

六〇月明み今宵ぞ數は數へつる常もしか立つ木とはみれ共

秋の野に色々の花紅葉ちりまがふ林のもとに遊ぶ人あり鷹すゑたる人もあり

七〇紅葉ゆゑ家も忘れて明す哉歸らば色や薄くなるとて

八〇時雨かと驚れつゝふる紅葉紅き空をも曇るとぞみし

池水に紅葉ちり浮ぶ水鳥あり馬にのれる人ゆきすぐ空の霧のなかに雁鳴きて渡る野にかりする人あり

九〇朝霧をわけゆく雁は何なれや遲れて後に惑ふ今日哉

一〇水の面に浮ぶ紅葉の唐錦をしてふ鳥ぞ立てゐるらし

此の歌を奉らするついでに仰せ承る藏人にやる

一程もなき泉計に沈む身はいかなる罪の深きなるらむ

二天つ風空に吹揚ぐる雲も有ば澤にぞたづは鳴と告なむ

天德三年の春能登守になりて下るに一條大納言の家の人々餞する日の歌

三越の海にむれはゐるとも都鳥都の方ぞ戀しかるべき

おなじ時左衞門佐誠信餞する日の歌

四神のます氣多のみ山木繁く共分て祈らむ君が千年は

〔同じ頃〕

五一昨年も去年も今年も一昨日も昨日も今日も我戀る君

六搖絶て問ぬはうくも思ほえず斯るに死なぬ身ぬいかにせむ

五日さうぶにつけて或る所に奉る

七進上　深

右葉之菖蒲草　千年五月五日可刈

元輔集

村上の御時に紅葉合殿上人にせさせ給ふに

八我が思ふ倉部の山のもみぢ葉に劣らぬ物は心也けり

梨壺にへい内侍のすみ侍りけるにさうじの隔てのかみより餌袋に物いれて藤の花してゆひてうちこしてはべりしに

九立返り見れどもあかず春風の名殘にこゆる藤波の花

三月盡

○二風早み吉野の山の櫻花ちらぬに春の過ぎぬてふらむ

藏人所のをのこども川原に涼みにまかりたりしに

一吹く風は涼しかりけり草茂み露の至らぬ荻の下葉も

同じ御時の菊合に

二譬ふべき色もなき哉菊の花枝をわきてや露も置らむ

つかさ給はらで又の日左近藏人の許に遣し侍る

三年毎に絶ぬ涙や積りつゝいとゞ深くや身を沈むらむ

小野宮の太政大臣の家の池のほとりにて櫻の花を惜む

四櫻花そこなる影ぞ惜まるゝ沈める人の春かと思へば

藏人所の櫻の花の散るを見てつかさ給はるべき年の春給はらで

五櫻こそ雪と散けれ時雨つゝ春とも知らで過しつる哉

小野宮の太政大臣月輪寺に櫻の花見におはしたりしに

六誰が爲かあすは殘らむ山櫻こぼれて匂へ今日の形見に

梨壺の櫻の花盛りなりけるにくにちか歌よみてつけてはべりける後に聞きて詠みてはべりし

七花櫻思ひやりてもたへぬ哉あかぬちりけむ折の心を

藏人所まかりはなれて後梨壺にてをのこども雨

ふる日さけたうべしついでに友だちにあひてはべるよしを

八三石上よりにし人にあふ時は嬉しかりけり夏の夜の雨

冷泉院の池のほとりにて藏人所のをのこども櫻をしみはべるゝまかりあひて

九二古のなごりなるべし池水に映れる花の波と見ゆるは

天德三年二月三日權大納言源朝臣舟にて八幡に詣ではべるに道にて人々の思はむ事をいへとはべりしに

〇三渡守君にみたれて老にけり雲居の岸にまどふべき哉

又の年の十月に同じ大納言の家に殘れる菊を惜みはべりて

一三長き夜の星かとも見よ初霜のおきて殘せる白菊の花

同じ大納言菊惜む曉に紅葉折らせてよみ侍りし

二三終夜殘れる菊ををしむとも紅葉の色も忘れざらなむ　元輔

かへしに

三三忘れめや深き紅葉の影ならで移ろふ菊のあらば社有めば

また

四三遠江の岸をば波の隔つれど通ふは花の色にぞ有ける

ちひさき人の許に貝を人のおこせてはべりしに

五三行先を心もとなく頼みける千尋の濱のかひぞ嬉しき

天德二年正月比叡によしたかの少將登りて鶯の聲心もとなき由よめとはべりしに

六三鶯の音は打解け　足引の山のゆきこそ下さえにけれ

小野宮太政大臣嵯峨野に花みに罷りて侍りしに

七三秋の野の萩の錦を故郷に鹿の音ながら移してしがな

天德四年六月十四日の夜大納言右大將藤原朝臣など月のあかきに昔を戀ふる心人々よみはべりしに

八三天の原月は變らぬ空ながらありし昔のよをや戀しむ

兵部卿の親王の始めていをまねりける日

九三螢舟に釣せし人も今日よりや千年を松の江に渡る覽

故宮内卿元中八十賀にやがて法師になりて布引寺といふ所にこもりはべりしに

〇四夜を深み松にゆづりて歸る哉浮世を背く程の遠さに

天德二年八月廿四日白川院に大納言源朝臣秋の花露を帶びて開くといふ題を右大將藤原朝臣などまかりあひて

一四綻びて花咲にけり藤袴にほひをむすぶ露にまかせて

安和二年二月五日一條のおほいまうち君白河の院にて子日しはべりしに

二四若菜つむ子日の松の千代の影澄つゝ見せよ白河の水

ありひらの左大臣の八十の賀あせちの更衣のしはべりしに、若菜の歌

三四春毎に若菜つみてぞ祈るべき小鹽のかひに色深き松

大將の子のいか子日にあたりてはべりしに

四四二葉なる子日の松をいかばかり行末遠き物に譬へむ

小野宮の太政大臣の家にて子日しはべりしに

五四千年へむ宿の子日の松を社外も例に引かむとすらめ

内の女房ども子日しにまかり出でむとて侍りけるに中宮の惱み給ひて俄にとまりにければまうけてはべりけるわりご遣すとて

六四春霞子日の野べに立出ねばまつかひ無て暮しつる哉

つかさめしの子日にあたりて侍りしにあせちの更衣の局より松をはしにて物を出して侍りける

（欠脱、一本はひくのはもなくて年上るのよしの、まつはまりなくとにこそ）

七四船岡に若菜つみつゝ君が爲子日の松の千代を送らむ

式部卿親王の子日の日人々に代りて詠みて侍る

八四子日する松　千年の春毎に若菜はつまむ野べの隨に

安和二年二月五日頭中將さねすけの朝臣小野宮の大臣の子日しに遣しはべりしに詠みはべりし

九四老の世に斯る子日は有きやと木高き嶺の松に問ばや

女房の車に梅の花折りて遣すとて

〇五松をのみ引て歸らば梅の花思ふ心の殘るらむかし

人に代りてよみはべりし

一六萬代の春の子日に出て見む松は幾度おひかはるとまた

二六淺緑けふ引きそふる松をこそ千年の春の始とは見め

天德二年二月五日一條の太政大臣齋院にて子日しはべりしに庭の松を翫ぶといふ題にて

三六千早振齋の宮の庭の松幾らの千代をもとめかぞへむ

其の日齋院のお前のものゝ洲濱に鶴小松舟などあるに

四六積みて送れ海土の釣舟棹さして松の千年も鶴の齡も

大武くにのりが女の賀しはべりしに

五六二葉なる松は引すと思ふ覽千年の春の今日に殘すを

又

六六今日よりは二葉の松ぞ睦じき君諸共に老いむとすれば

周防に侍りし程に岩に生ひたる小松を岩ながらもちてまうできたりしを

七六萬代に千年を添てみつる哉巖ながらに引ける小松は

また

八六植てみむ千歳の春の今日毎に子日の松は斯り鳥とも

周防に侍るまつまのうまやといふ所にて子の日しはべりしに

九六思出でよちよの子日の今日毎にまつまの浦の岸の壺松

或人の子の孕める程にその父身罷りにける後生れて侍りける七日の夜遣し侍りけるきぬの首に

〇七千とせへむ形見とをみよ忍つゝ櫛すだゝむ鶴の毛衣

中將さねすけの朝臣子生ませて侍りし七日の夜

一七小鹽山いかなる種の松なれば千世を一夜に做て生ふ覽

九月九日に人の生れて侍りける七日にあたりてはべりしに

二七時しまれ今日のけふにし逢ぬれば千世をぞ置む菊の白露

人の裳きたる夜よみてはべる

三七千年ふる松に玉もぞかゝるべき沖つ白波立返りつゝ

たかときが子の賀茂の祭の日袴着しはべりしに

四七千年をは我ならねども木綿襷結ぶの神も祈かくらむ

朱雀院の御めのとの侍從が七日の夜

五七垂乳根も皆長らへて住吉の二葉の松の千代を社みめ

なかきよが生れてはべりし七日の夜

六七松蔭の通へる枝をとぐらにて巣立て守べき鶴の雛哉

人の裳着はべるに

七七萬代を長柄の濱の細れ石の今宵より社苦もむすらめ

これも人の裳着はべるに

八七住吉の浦の玉もを掬ひあげて潜の松の影をこそみめ

頭中將あつとしが子うませてはべりし七日の夜

九七姫小松大原山の種なれば千年はたゞに任せてをみむ

又人の裳きはべりしに

〇七玉藻よる巖のほとに成に鳥ながらの浦の濱の眞砂は

宰相元輔の朝臣のうまごの袴着はべりしには

一七はぐゝみて君すだてすば鶴の子の雲居年ふる千世を知らまし

人の子うみてはべる七日の夜

二七たづの子の雲居に遊ぶ齡こそ空に知らるゝ物には有けれ

清原のすけときが子うませたる七日の夜

三七遙にぞ思ひやらるゝ疎からぬ我か中山の松の末の世

宰相元輔の朝臣のむすめの裳きはべりしに

四七結び上ぐる君が玉藻の光にはさやけき月の影ぞ添覽

紀の守ためみつが小さき子を出してこれを祝ひて歌よめといひはべりしに

五七萬代を數へむ物は紀の國の千尋の濱の眞砂なりけり

右大將藤原朝臣子うませて侍りし七日の夜さきそむる梅といふ題をよみはべりしに

六七咲きそむる梅の花笠かざす身は後ろ安きを萬代の春

又子うませてはべるに

七七年毎に新りしくれば思馴て珍しげなき千代と社みれ
　元輔がとみはたといふ子の袴着侍りしに
八七世の中にとなる事は有ず共とみはたしなむ命長くて
　また後に着せ侍りしに
九七緑兒の千代ぞ常磐に祈らるゝなるべき山の松と見々
　大貳くにのりの朝臣うまごの五十日に侍りしに
　わりご調じて歌を繪に書かせはべりし
一八見てしがな二葉の松の生茂り八十氏人の影となりむ世
二八住の江の蛍の眞砂の苔ふりて巖となりむ程をしぞ思ふ
　また
三八松の如千歳を懸て生茂れ鶴のかひこの巣とも成べく
　おほみといふ所を人に代りて
四八荒間より綱手の舟の障り多み乘て行べき程の遙けさ
　又かはもといふ所に
五八行春の惜むに止る物ならば何かはものを人の思はむ
　冷泉院に渡らせ給うて池のもとの初雪といふ題
　を殿上のをのこどもよみはべりしに代りて
六八池近くふる初雪の名殘には玉の臺ぞあらたまりける
七八五月ふたつありし年かうしに人に代りて
八八五月雨の數くはゝれる夏だにも山郭公聲にあかめや
　また
九八五月雨の餘りもまたじ時鳥唯一聲にあけもこそすれ
一〇八百敷になびきてみゆる藤波はいく萬代の春を驚さむ
　壺前栽の宴せさせ給ふに人に代りて
一一八月影の至らぬ庭も今宵こそさやけかりけれ萩の白露
　天祿四年七月七日一品宮の扇合にあやの文におら
　せたりし歌
一二九天の何あふぎの風に霧はれて空すみわたる鵲のはし
　又同じ扇合に人に代りて
一三九萬代の秋や忍ばむたなばたは扇の風のなごり久しく
　村上の御時五月四日庚申女方男方歌合せさせ給
　ふに男方かちにければ八月廿日にまけわざして
　糸を結べるこに松蟲鈴蟲いれて女郎花につけて
一四九女郎花空に懸りてはふ葛はまくるとや思ふ露の分かぬを
　また
一五九千世をへてくる秋毎に聞えなむ行末遠き松蟲のこゑ
一六九　うちの御前の紅梅を藏人どもによめと仰せられ
　けるに代りて
一七九春雨やふりてそむらむ紅の色こくみゆる梅の花がさ
　また
一八九梅花香はことゝに匂はねど薄くこく社色は咲けれ
一九九紅に色こき梅は鶯のなきそめしよりにほふなるべし
　中務がある所にまかりたりしに貝をこに入れて
　はべりしに
二〇九波間分けみるかひ有るは伊勢の海の孰の方の名殘なる覽
　かへし　中務
二一九伊勢の海は名殘だになくあせに見名のみ高師の濱と聞えて
　又かへし遣す
二二九白波の昔をかけて聞くからに潮みつ浦と成ぬべき哉
　つかさめしの頃過ぎて雪の降りて侍りしに兼盛
　が許に遣しゝ
二三雪深み越の白山我なれやたが敎へしに春を知るらむ
　中務がむすめの中納言清水に詣でゝ人に物いひ
　けるを聞きて
二四匂ふらむ霞のをちの山櫻思ひやりても惜まるゝかな
　梅の花に雪凍りつきたるを人の花か雪かといひ
　はべりしに
二五花を雪ゆきを花かと見てぞふるうめの氷の解ぬ限は
　西の京に住みはべりし人のとはぬ心ばへの歌よ
　みてはべりし返事に
三〇草若み結びし萩はほにも出ず西なる人や秋を先知る

　順が子なくなりて侍りしにとぶらひに遣すとて
四〇思遣る子こひの森の雫にはよそなる袖も露けかり鬼
　順がかへし
五〇朽果てなき木の木は君がとふ言の葉みるも先ぞ悲き
　又かへし遣しゝ
六〇生立たで枯ぬと聞く木の木は歎きの森と爭で成けむ
　正月二日鶯　聲は聞きたりやととへりしに
七〇年ごとに春の忘るゝ宿なれば鶯のねもよきて聞えず
　老いたる人の鳴門よりめをおこせてはべりしに
八〇渡の原淺くも思あらめ哉老の浪わけみるめかるうら
　櫻の散れる所にて
九〇花の蔭たゝまく惜き今宵哉錦をさらす庭と見えつゝ
一〇貫之が集を人のかりて返し侍りける折にときふ
　が許に遣しゝ
一返しけむ昔の人の玉章を聞きてぞそゝぐ老いの涙を
　ある所に松蟲鈴蟲籠に入れてひわりごなど添へ
　てやりはべりし
二萬代の秋を待ちつゝ聞き渡れ巖にねざす松蟲のこゑ
　四月一日とも時が有馬よりまうできて道に時鳥
　のなきしといひはべりし次でに
三春はをし時鳥はたきかまほし思ひ侘ぬるしづ心かな
　元輔が子に侍る者の若菜の樣なる物して侍しに
四二葉にてみし俤も變らぬに若菜摘ける今日に逢ふ哉
　又おとにはべりしものゝしてはべりしに
五下立て若菜を爭で摘ませむ膝を離れ一程もへなくに
　加階まうしはべりしにえ給はらで鶯の鳴く折に
六鶯の鳴く音ばかりぞ聞えける春の至らぬ人の宿には
　みちゝゑ同じごと加階をえし侍らでいかなる花
　かまづは開くるなどやうなる心を詠みて侍りし
　かば
七遲く疾く開くる枝を花故に身をもうしとは何か思む
　宰相中將藤原朝臣子うませて侍りし七日の夜梅
　の花を題にて
一咲初る梅の花笠いつよりか天の下をば知らむとす覽
　時ふがめのなくなりて又の年の同じ頃いひおこ
　せてはべる
八年をへて馴こし人を別にしこそは今年の今日にぞ有ける
　かへし　元輔
九別れけむ心をくみて涙河思ひやる哉こぞの今日をも
　菊の花のいと白きにつけて、時文
一〇菊の花盛の色の我身には白くなるなど侘しかるらむ
　かへしに
一一露のわく世をぞ恨むる我身には盛の色の盛ならねば
　小一條太政大臣なくなりはべりて後櫻の花面白
　きを翫びはべる日歸る雁といふことを
一二歸る雁君もしあはば故郷に櫻惜むとなきて告げなむ
　右大將藤原朝臣八月ばかり月の面白き夜昔の物
　語などしてはべりし次でに
一三かく計り秋の月影きよけれど曇りし冬の空ぞ戀しき
　大貳くにのりはらかといふ物おこせて侍りしに
一四三吉野も若菜摘らむ卷もこの檜原霞て日頃へぬれば
　同じ國章がめ死に侍り！又の年忌日に遣しける
一五月影を隔てし程のゆ霞みてながむらむ今日の悲しさ
　かねもりが駿河にまかりしに遣しゝ
一六知ざりき田子の浦波袖ひぢて老の別にかゝる物とは
　大貳くにのりの朝臣のめのなくなりぬと聞きて
　筑紫へ遣しける
一七年深き人のわかれの涙河袖のしがらみ思ひこそやれ
　同じくにのり秋風の夜寒なるよし詠みて侍りし
　返事に遣しゝ
一八思ひきや秋の夜風の寒けくに妹なき床に獨ねむとは
　左大將比叡へのぼりて歸り侍るに迎へにまかり

はべりて後久しくまからざりしがば覺束なきよしの歌の返しに

九草深き谷の秋霧うづみてむ覺束なくぞ忘られぬべし

頭中將さねすけが許にまかりて昔物語などしてはべるによみてはべる

○三おいて後昔を戀る涙こそこゝら人めも包まざりけれ

加階しはべるべき年もれてえしはべらで雪のいたくふる日

一三憂世には行隱れなで搔曇りふるは心の外にもある哉

人のかうぶりしはべりしによみてはべりし

二三紫のたなびく雲をしるべにて位のやまの峰を尋ねむ

ぶくなる人の許にきぬの袖のかぎりを遣すとて

三三うらさびて常にも非ぬ衣手は袖の限を見るぞ悲しき

おほいまうちぎみのいへにて藤の花を見はべりしに

四三藤の花こき紫の色よりもをしむ心をたれかそめけむ

ともときが四月一日有馬よりまうできて時鳥の鳴きつるといひはべれば

五三時鳥まつ初聲をいつしかといかなる人にきて語なむ

堀河の中宮うせ給ひて御服すぐして內侍のまかり出でしに雨のふりはべりしかば遣しゝ

六三故郷は有ともと君は忘れけむ今日降出る雨はやまじを

盞人の入りて侍りし又の日人の搔練をおこせてはべりし返し遣はしゝに

七三淺からず思染めてし衣かは斯る時こそ袖もひぢけれ

すけゆきが家に冬の月の面白きにまかりて侍りしに

八三いざ斯て折ながら明してむ冬の月春の花にも劣らざり鳬

男なくなりて侍る女の程なうこと人にあひてはべりしに遣しゝ

九三年經にし人の形見の藤衣すてやしてけむ又や懸たる

大貳くにのりすはうおこせてはべりしに

○四位きぬ賴みそめてし色なれば最ど深くも成ぬべき哉

又めのなくなりたる秋さむき風をとはぬこと、いひてはべりし返事に

一四こし方も見えで詠むる雁音の羽風に拂ふ床よ悲しな

年頃つかさもえ給はらで子日しに人のねていでゝはべりしに

二四谷深く沈む誓ひにひかされて老ぬる松は人も手觸ず

能宣が伊勢へ御てぐらの使にてまかりしに

三四天皇の鈴の限し有ければ振りでゝ行もをしからぬ哉

人の子うませてはべる七日の夜

四四千年をば松と竹とに任せつゝ八百萬代は云で思はむ

兵部卿のみこの入道してはべりしに

五四暮るゝ間も戀しかりける月影を入るゝ山べのつらくも有哉

兵部卿のみこの入道して侍りしに中務のよみてはべりし歌の返し

六四月影をいるゝ山べはつらからで思入けむよなぞ怨むる

女三の宮にまゐりてよみはべりし

七四世を捨て山へ入る人いらましや昔の月の曇ざりせば

とほふるが子の七日の夜

八四おひしげれ平野の宮のあや杉よ濃き紫の色重ぬべく

えいしちがもとに罷りてつかさのほしく侍ることはくどくの爲なりといひてよみてはべりし

九四世を渡す聖をさへや惱まさむ深き願のならず成なば

九月二十日のほどに大將の嵯峨野にまかりたりしに詠みてはべりし

○五こぬ人を何に譬て語まし暮るゝ秋惜む野べの心地を

歸り侍りて又の日かの大將の家にして時雨し侍りしに

一五冬を淺みまだき時雨と思ひしを絶ざり鳬な老の涙も

同じ大將の家に長月ばかりのかふしし侍りしに

菊の花

二五秋深き籬に老ゆる菊みれば花の上とも思ほえぬかな

十月ついたちごろ殿上のをのこども嵯峨野にまかり出でゝ詠みはべる

三五秋はまだ遠くならぬに爭で猶立返りぬ人に告ばや

と大貳よみてはべりし

四五秋深みまだきに老る菊の花立返れとも告げに遣ばや

さとの梅咲ける家にまかりて

五五梅の花こぞの色には優らじを深からむとも思ふ春哉

六五三輪の山印の杉は有ながら教へし人はなくて幾世ぞ

くにのりの朝臣のごくのおびかりてのぼりきて

そのおびかへし遣すとて

七五行先の忍び草にも成やとて露の形見におかむとぞ思ふ

三月ばかりかみと云ふ所に花のいとおもしろう

咲ける風の夜いといたう吹きはべりしかば

八五暮れてのみ後めたきを山櫻風の音さへあらく聞ゆる

屏風の歌梅に鶯なく

九五鶯の鳴き渡らずば山里のいつの梅とか知べかりける

人々山櫻を見る

○六行く先はまだ遠けれど山櫻駒をとゞめて催されぬる

柳ある家

一六淺緑くる春毎にたえねども猶めづらしき青柳のいと

八月十五夜

二六月影の露はよろづよを置てのみ眺見べかりけれ

三六霧はれぬ倉部の山の麓にも今宵の月を見る程ぞなき

九月九日

四六我宿の菊の白露ふごとに幾世積りて淵となるらむ

小一條の右の大臣の五十賀し侍りしに屏風の繪

五六竹のもとに花植ゑたり

竹のよ長き秋の露を置き常磐に花の色も見えなむ

濱つらを行く人衛鳴けばひきとゞめたり

六六千鳥鳴く浦ぞ過ぎうく思ほゆる我行方は遙なれども

柳櫻のある

七六花櫻飽かぬ匂の過ぎうくて千年經ぬべし青柳のいと

船にのりてありて八月十五夜

八六琴の音も池の底ひも大空のさやけき月に曳れてぞ澄む

これが返しえいしちがよみてはべりし又返し

九六長き夜の夢の春こそ悲けれ花を花とも思はれぬ身は

きかり歸りとて又

○七山櫻見おきて歸る心をば何にたとへて人にかたらむ

みつなか常陸になりて下らむとしはべりしに

一七筑波嶺のつくづく物を思ふ哉君を見ざらむ程の心を

人の子生ませてはべる七夜

二七千年ふる松や何ぞも萬代の岩根に生ふる常磐也けり

こかうたうの兵部卿のみこ土佐へまかり下りし

女三宮まつことといふ所に物語などして侍りてみこは下りみは京

小野宮の太政大臣七十の賀の御屏風の歌、青柳

三七青柳の緑の糸を繰返しいくらばかりの春を經ぬらむ

冬のきく

四七紫の千種の色しふかければ行末遠く見ゆるしらぎく

うづゑ

五七位山嶺につきぬる杖みればたゞ行末のさかの爲かは

或人のよませ侍りし舟にのりて梅の花見たるところに

六七春深み散らむ事だに惜き梅を波の寄にも任せたる哉

七七打はへて君しもすまじ逢坂の關に心をとゞめつる哉

子日して侍る

八七春の野に千代も無てや長へむいつか子日の松と知ねば

九七君と我行逢ふ道を世と共に嵯峨野の原も有せてしがな

法師の詣で來たる所に蟬のなく

〇八蟬の聲聞からにこそ最どしくあつき思も燃增りけれ

歸り侍りしに

一八かつ見ても惑れけるは行歸り妹脊の山の遠近のみち

はべる所に菊の花の咲きたる頃山里なる所にま

からむとて人に遣しゝ

二八我が宿の垣根の菊の花盛まだ移ろはぬ程に來て見よ

公任の朝臣壺坂に詣でゝ侍りし道に菊の花岸づ

らに咲きて侍りしかば

三八老の菊衰へにける藤袴岸にのこりてありとこたへよ

極樂寺わたりに碁うち侍りしに紅葉散りてまか

らむと人に云ひ契りて其の日障る事ありしかば

えまからで云ひ遣しゝ

四八吹風の便にもしや聞てけむ今日と契りし山の紅葉も

八月ばかりに桂と云ふ所にまかりて月いとあか

き夜まかりて水の面にきようてかげ見え侍りた

りし同じ人に

五八桂河月のひかりに水まさり秋の夜深くなりにける哉

まかり歸り見侍りし人の許に遣しゝ

六八思ひ出づや人めながらも山里の月と水との秋の夕暮

正月申し文につけて侍りし藏人に

七八露の命もし留まりて年ふとも今年ばかりぞ秋の嶺は

つかさ給はらで同じ人の許に

八八いたゞきの霜打拂ひ鳴くたづを我身の外と思ける哉

なかふが許よりのぞみのえならぬを花につけて

とぶらひて侍りしかば

九八春を經て春待遠に見ゆるには秋の頼の無くば社有め

同じ頃子日にまかりて

〇九諸共に生ひける松やいかゞ見む身を捨難み若菜つむとて

七月ばかり花開きたる所にまかりて

一九ほか見れば秋萩の花咲に晁など我宿の下葉のみ濃き

山寺にまかりしを或る人の法師になりたるなど

申し遣しゝ

二九つれ〴〵と詠る春の鶯は慰めてだになかば鳴かなむ

つかさめしの後うちに侍らひし人の許に遣しゝ

三九試に折もしあらば傳へなむ咲かで露けき櫻ありきと

山里にまかり通ふ所ありしゞ花見む春人の詣で

きたるに

四九訪人も有らじと思ひしに山里に花の便に人め見る哉

おなじ山里に侍りし頃人々とぶらはむとて詣で

きて物など云ひ侍りしに

五九惜しと思ふ命や更に延びぬらむ終の煙こむる宿にて

七月七日かふしにあたりて侍りしに

六九最どしくいも寢ざる覽と思哉けふの今宵に逢る七夕

又人の許に遣しゝ

七九云ふかひも今日は有じな七夕は後の秋待程の遠さに

かへし

八九行返り程はるかなる秋よりも名殘はいかゞ天の河波

つかさえ給はらで春人に遣しゝ

九九我宿の櫻は咲かで年ふれば外の花をもよそに見る哉

同じ頃くにのりの朝臣あまたの春をつくす事と

申して侍りしに

〇〇いかならむ物とかはしる侘つゝ老せぬ松の子日知らぬを

三月ばかり院の櫻折りにまかり侍りて

一〇さだかにも行き過ぎなやめ故郷の櫻見捨てゝ歸る魂

三月ばかりにある所にまかりたれば女車に誰ぞ

〻問ひ侍りしかば内へ參ると云ひ侍りしにの給

へし

二〇百敷に行人あらば傳へなむ子日曳ける松も見えつと

肥後守むねとしがみまかりたる所を人々のぞみ

申すと聞き給へてうちの靱負がもとに遣しゝ

三〇誰か又年へたる身を振捨てゝ吉備の中山越むとす覽

十二月宰相中將の朝臣むしゝ 初元 侍りしにゆき

むらかれて梅さかずと云ふことをよみ侍りしに

四〇打解けて爭で咲かぬと云べきを梅はた云じ雪を含て

正月ちもくに申し文奉らする人の許に

五〇若からば後の春をも賴めつゝ待たまし物を爰を敎て

つかさ給はらぬことを前大貳くにのりの朝臣鶯

の音に知らせむなどやうによみてはべりし返事

に

六〇春毎に啼く鶯の音を知らで大方にのみ思ひけるかな

正月七日ばかりに人の許に

七〇最どしく老行冬は惜まれてありは替らぬ春を待らむ

ある所にいと小き梅の木の花咲きてはべりしに

八〇去年植し梅だに春を知る物を雪に埋れて年をふる哉

七月七日さぬすけの朝臣の久しく訪はぬ心ばへ

歌によみてはべる

九〇今日よりぞ荻の葉露けく吹風の音に附ても先問れける

二月つごもりばかりにひんがしの院にまかりて

櫻の花のすこしつぼめるを見給うて二三日ばか

りありてその院なる人のもとに遣しゝ

一〇咲きぬとも思遣りてぞ惜まるゝ心もとなく見えし櫻を

返し待ちかねて散りぬるよしをよみてはつかに

云ひ遣す

一我宿に散ぬる花を惜む間にうとまれぬらむ外の櫻に

太上天皇の子日し給ひしに紫野にいでさせ給ひ

しに仕りし

二君が引子日の松は朽めやはいざ斧の柄にすきて頼まむ

河原院と云ふ所に人々諸共に花見にまかりたる

にそこには花も無くて櫻の遙に見え侍りしかば

三春霞立ちなゝかは寄りそ薄く濃き錦と見ゆる山の櫻に

おなじ所にて庭のあれたるを見はべりて

四一夕闇の月待つ程に惜しと思ふ秋の深くも成にける哉

津の國にまかりて漁するを見たまへて

五一漁火の影にも滿て見ゆめれば浪の中にや秋を過ぐさむ

前の大貳くにのりの四十九日の物ず行によみて

そへて侍る

六一鐘の音に淚の玉を添てだに王の飾を添へむとぞ思ふ

山里なる所に住み侍りて秋の頃はひ人に遣しゝ

七一紅葉散る頃也鳧な山里の事ぞとも無く袖の濡るゝは

四月朔日頃にみたけに詣でゝ吉野山のわたりに

八一古ものぼりやしけむ吉野山山より高きよはひなる人

さぬすけの朝臣子生ませて侍りし七夜

九一日本を後ろやすくぞ思ひぬる國の乳房の頼もしき哉

桂なる所に參らむとすと人に云ひ侍りしそこに

はまからで月のをと云ふ所にまかり歸りて

〇二月の夜に改まるとも知ずして桂は又や君を待つらむ

すけなりが入道して侍りしに遣しゝ

一二風早み秋はて方の葛の葉と身を恨みつゝ頃をふる哉

とく遣したる返しはなくて外へ遣しける返事を

取りたがへてまで來たれば又遣す

二二とひ通ふ文の便りに散りにきと聞し櫻の花を見る哉

又人にかはりて女のもとに遣しゝ

三二思ひつゝ程ふる雨に淚川いとゞ深くもまさる頃かな

また

四二聞くごとに頼まるゝかな郭公覺束なくて過しつる哉

又ある女の返事にいなぶねと云ひて侍りしがと

に人に盜まれぬと聞きて

五二最上川頼めし舟のつれなくて漕離れぬる行先も見む

忍びて人すみはべりける女の親にかはりて

六二戀しくば解けてを結べ宮城野の小萩もたわに結ぶ白露

しげすけが懸想しはべりける女の許に文を置き

てとりに遣すとて

七二笛の音になきて恨みむ葛のねを吹返されむ木枯の風

男の人の國にまかる程に子をおろしてける女の
八二垂乳男の歸程をも知ずして爭で捨てゝし雁の貝こぞ
大夫に住みはべしみすとてふるがおともせでは
べし
九二たらちをの親の心を知ねどもこの身に社は思侘ぬれ
返事　元輔
○三結びけむ程をも知らで花薄秋を定めて穗には出なむ
或人に遣しゝ
一三うしと云て世を只管に背かねば物思知らぬ身とや成なむ
或人に遣しゝ
二三大井川井堰の水のわくらはに今日は頼めし暮にやは非ぬ
又
三三逢事を暫しもふれば白雪の積る思にきえぞしぬべき
人にかはりて
四三津の國の難波の蘆の轉寢は臥し所こそ猶わりなけれ
心變れる女に遣す人にかはりて
五三契りきな互に袖をしぼりつゝ末の松山浪越さじとは
あり所知らせぬ女に
六三篠蟹のいどこに人を有りとだに心細くも知でふる哉
時々まかる女にこと人まかると聞きて
七三憂きながら流石に物の悲しきは今は限と思ふ也けり
とて遣はしたりければ
八三思はむと頼めし事も有物を無名は立てゝ唯に忘れぬ
又つかはす
九三春日野の飛火の野守みし物を無名ぞと云はゞ罪も社うれ
服なる頃忍びたる人に
○四藤衣はつるゝ袖の糸弱み絶えて逢見ぬ程ぞわりなき
人の許より歸りまできて又の日遣しはべりし
一四小夜深み歸りし空も無りしを孰こより置露にか有覽
又
二四朧氣に結びしつとも思はねばいつか刈べき森の下草
三四世と共に心一を燒鹽のとくともなしに君ぞしぬべき
また
四四諸共に心一を燒鹽のとくともなしに消えて見ゆらむ
また
五四慰むる心はなくて終夜かへすころもの袖ぞ濡れける
早く見はべりにし人の稻荷に詣であひてはべり
しにつかはし
六四水上に祈かくとも今更に立ちかへらめや沖つしら波
早う物云ひ侍りし人の美濃國に侍るにさるべき
日ならで上り詣でくとて雪の降りはべりしかば
七四雪深み鏡の山は曇るともおぼつかなくて歸るべき哉
早う物云ひはべりし女の或所に物云ふ聲をきゝ
はべりて聲ばかりこそと云ひはべりしかば
八四住吉の松より越えし波の音も昔ながらに聞えける哉
女のもとへまかるに
九四よそにても思おこせば冬の夜の袂に凍る涙とくやと
また
○五知人もなくてやみぬる逢事を爭で涙の袖にもるらむ
又人に
一五人知れず思ふ心の深きかな八重山吹の立よりもこで
また
二五春夜の割なく深て止りしを嵐の風のあらしとや云はむ
はやく住みはべりし女の許にまかりてはしの方
にはべるにねてはべる所の見えはべりしかば
三五古の常世の國やかはりにしもろこし計遠く見ゆるは
忍びたる女の鼓の忘れて侍りけるにつけて遣す
四五打はへて思はぬ事は世と共に人め包みも侘しかり鳬
或る女に
五五移香の薄くなりぬる焚物の燻る思に消えぞしぬべき
なか〳〵獨あらましかばと女の云ひ侍りしかば
六五獨のみすぐしけむにも劣らじな數ならぬ身の有も有かは

男はべる女に文遣しければひとりある人みやき
くとありしに
七五鹽竈の誰かは獨有りと聞く知ても燃る身をいかにせむ
昔はべりし女に
八五草深みあせに清水は深く共むすびし水は今も變らじ
按察の大納言太政大臣に若菜の樣なる事しはべ
りしに繼母の始わろくしてはべりしを思ひてよ
みはべりし
九五野べならば殊に見え鳬山賤の垣ほをせばみ飽す摘しを
元輔がむすめ遠くまかりしに
○六年ふればいたゞき增る雪深み打拂へとも誰に云まし
出羽守にてまかるに遣す
一六君若み我身老ぬる別こそ暫しばかりと思ひなかれぬ
二月うちの藤
二六百敷に靡きて見ゆる藤なみは幾萬代の春をたゝまむ
四月女の許に遣しゝ
三六きく毎に頼まるゝかな郭公覺束なくて過してしより
五月五日講聞きはべりて
四六夏山の木暗き道を尋來て法の師に逢へる今日にも有哉
藏人所のをのこども河原に涼みしにまかり出で
て
五六吹風は涼しかりけり草茂み露のいたらぬ荻の下葉も
六六七夕にとふ由もがな天川けふも契りて幾夜過ぎぬと
右衛門督入道しはべりしに遣はしゝ
七六增鏡二たび世にやくもるとて塵を出ぬときくは誠か
人にかはりて
八六風早み秋果方の葛の葉と恨みつゝのみ世をもふる哉
或人かうぶりしはべりしに
九六のぼり行位の山の峰までも巖に生るまつのみ［　］
山寺にまかりたりしを或人の法師になりにたり
と云ひはべりければ遣しける
○七浮世芥外になしやと家出しを道に入ぬと誰か傳へし
筑紫へ下る人の御ぞ給へるに
一七唐國の人にも見せむ葦鶴の巢立つとおろ　千代の毛衣
ある人に
二七いか許思ふらむとは思ふらむ老て別るゝ遠き道をば
筑紫にてたかわのみかとにはひたす（初元）たてま
つりあげらるゝに
三七磨くらむ玉の光を頼む哉かすにもあらぬたてし瓦を
式部卿かねずみ早く死にけりとて訪はざりけれ
ば國よりよみてあげゝる
四七わくらばに生きてもみゆる物ならば蘇るとて猶や疎まむ
むすめどもに裳きせけるに
五七白川の玉藻は今宵結び揚つ千歲にすまむ光しるしも
三月三日亭子院にて文など作りて
六七池近くうへなる庭の影見ればたけにけゝ哉春の深くも
又
七七春霞立ぬる月に隔てけむをりは春をもおもひやる哉
藤さきの宮にて子日に
八七藤さきの軒の巖に生ふる松今幾千世か子日過ぐさむ
大貳ともまさがうまごの袴着はべりしに
九七咲繁れ千世を込たるませの内に形見におほす撫子の花

朝忠集

朝忠の中納言の物にやりける文をほかに違へて
もていきたりければ、女
○八道知らぬ物ならなくに足引の山ふみ迷ふ人も有けり

返し

一八白樫の雪も絶えにし足引の山路を誰か踏み惑ふべき

同じ女に

一九逢事を松に懸れる白雪も久しき程に消えぞしぬべき

人に始めて

二〇淀川の汀に生ふる若草の根をし尋ねば底もありなむ

又同じ人に

二一山城の瓜のつらさは見ゆれ共思心のならざらめやは

又大輔に

二二古は思ひ出でずや渡り河わたるてふ名は流れずや君

返し

二三流れての名にも人をば渡河逢瀬やあると頼みける哉

二四濡渡る水の下にもいかなれば戀てふいをの絶ず住覽

始めにや

二五池水の云出るとの難ければ水籠り乍ら年ぞ經にける

世の中騒がしき頃

二六人の身の老を果にしせましかば今日かあすかと急がぞ

女返し

二七心にも適はざりける命もて頼みも置ず常ならぬ身は

物言はで返し

二八徒に立ちかへりしに白波の名殘の袖の干る時もなし

返し

二九何しかは袖の濡る覽白波の名殘有げも見えぬ景色を

殿居ものたがへて大輔の君の局にもて來たるが

なえたるに結びつく

三〇故郷の奈良の都の始より馴にけるとも見ゆる衣かな

返し

三一ふりぬとて思も捨じ唐衣よそへてあやな恨もぞする

返し女

三二白波の立歸るまの濱千鳥跡や絶ぬるしるしなるらむ

式部の命婦に通ふ頃つゝむ事あるに

三三雲間には最ど詠ぞ增りける天の岩戸に隙やなからむ

程へて女のわづらひけれど知り給はで消そくや

り給へれば

三四露計思置くべき心あらば消えぬ先にぞ人の問はまし

返し

三五諸共にいざと云ずばしでの山越ゆ共越さむ物ならなくに

人知れぬ中の女男つかさ得て下るに男あはれと

思ひて

三六數へやる我魂のいかにして空しき空にもて離るらむ

七月七日人に

三七七夕の天の戸渡る今日さへや遠方人の難面かるらむ

本院の侍從かねみちの君と寢たるを立ち聞きて

三八よそに我人々ごとを聞しかば哀とも思あな憂とも思

又同じ女に

三九言はでのみ思心を知る人は有や無やと誰かとはまし

返し

四〇知る人や空になからむ思ふなる心の内の心ならでは

本院ゆげひにかうじのかはにかきて

四一薄けれど薄くもあらぬ山吹の八重の色にし思染れば

返し

四二重ぬれど薄き衣のやへなれば染むてふ色の數は物かは

本院少將しはぶきしたるを聞きて

四三下野やしはぶき拂ふ白露のかゝる折にや色變るらむ

かたらふ女の音せざりければ

四四今年生ひの竹の一よも隔つれば覺束なくも成增る哉

返し

四五幾世しも有じ物から若竹の生添はりけむ春さへぞ憂き

中將にてそら名立つ頃中納言と云ふ人のあだ名

立つに

四六諸共に君も乾さなむ濡衣かゝる無名は我のみぞ立つ

をんなくらひと盤と云ひける東へ下るに

四七別れ路を惜む心の櫻ばな逢坂までは散らであらなむ

醍醐の帝かくれさせ給ひて後好古のさいさうに

四八夢かとぞ侘ては思ふ邂逅に訪人あれやまだや覺ぬと

返し

四九哀とも思ひぞ分ぬむば玉の同じ夢にて惑ふ身なれば

うまごに迎へられて歸りなむとて車こへど贈ら

ぬにほかに求めて歸りたるに

五〇天の戸の明るまをだに許れてまだ夜に乘りて歸ぬる哉

權大納言桃園に通ひそめて四十日と云ふに

五一我妹子が閨の上なる菖蒲草根も顯れて今朝や見ゆ覽

故内侍督の御はてに母君の御許に忠房兵衛佐

五二逢事の宮仕にと侘びつるを今朝の袂ぞ露かかりける

御返し

大將

五三人知れず打拂ひつる朝露に怪しく君も濡れにける哉

五四いつとなく濡るゝ袂は古を忍ぶる露となりぬべき哉

返し

五五人知れぬ野の下草と成れる身も露は同き露ぞ置ける

村上の御時の歌合、霞

五六倉橋の山のかひより春霞年を積みてや立ち渡るらむ

鶯

五七我宿の梅が枝に啼く鶯は風の便りに香をやとめこし

藤

五八紫に匂ふ藤波うちはへて松にぞ千代の色もかゝれる

春の暮

五九花だにも散で別るゝ春ならば今日を割なく惜ざらまし

戀

六〇人傳に知せてしがな隱沼の水籠りにのみ戀や渡らむ

六一逢事の絶てしなくば中々に人をも身をも恨ざらまし

朱雀院の若宮の御裳着の御屏風に、柳

六二青柳の糸は影さへあやなれや氷も解けて今は結ばぬ

子日

六三子日する野邊ならむ共我宿の松も千年の蔭にゃは非ぬ

櫻花を

六四心社花に後れて止るらめ駒さへあやな過がてにする

撫子の花の開けたるを人の弄ぶに

六五初花を見てこそしのべ白露の置きて殘せる撫子の花

女郎花

六六仄にもかけ見てしかな女郎花野べに勝れる色は有やと

八月十五夜

六七秋霧は月の心もこゝろみに入る山の端と立隱さなむ

あじろ

六八紅葉ばの流るゝ水を尋ねてぞ山の麓に我はきにける

村上の御時の齋宮の下り給ふに長奉送使にて下

りて歸るとて

六九萬代の始と今日を祈りおきて今ゆく末は神ぞ數へむ

權中納言の音羽の家にて

七〇音羽山水はたぎりて流る共君が宿には勝りしもせじ

みちの國のかみに白河にてせんし給ふとて

七一別るともまた逢坂の關近く知も知ぬも惑はざりけり

七二行歸るものと知る/\怪くも別と云へば惜まるゝ哉

少將にて駒迎に本院の女御の御前を曳かせて御

前に參る人々ゐたる所によりて

七三望月の駒引渡る秋の夜は光さやけきものにぞ有ける

人に

七四時しもあれ秋しも人のつらければ思ほぬ山に入ぬべき哉

女御に

七五富士のねをよそにぞ聞し今は我思に燃る煙なりけゥ

返し

七六印なき思と聞けば富士のねもかごと計の煙なるらむ

七七流ての名にこそ有けれ渡河逢瀬ありやと頼みける哉

十一月右兵衛尉藤親盛からものゝ使にいきたる

に別を惜むとて人々歌よみけるに

一四別路のいとなれば唐綿こひて行べき方ならなくに
朱雀院の帝院にならせ給ひて御遊の折に
けづりばなを挿して御遊の折に
二四年毎に梅は折れ共いかなればけふ折袖の露も變らぬ
これは醍醐のせんたいの御時にありけることど
も年號なんどの無ければ始もはてもえわかず
三四一本の千代に云べき藤の花限もなくぞけふは咲ける
天暦三年正月子日院におはしましたりけるに
四四松を引き若菜を摘て昔より千年を祈る今日にぞ有ける
同じ五年内裏の殿上にて
五四斯しつゝ春惜まずば行先の限もなくぞ悲しかるべき
六年八月十五夜朱雀院の御門崩れさせ給ひて御
四十九日籠り候ひける殿上の人々詠集めけるに
六四徒然と經にける年を數ふれば昔遠くもなりにける哉
御四十九日女房のなかにいれける
七四しぐれつゝ梢々にうつるとも露に後れし秋な忘れそ
重光朝臣の許に女誰とも知らで、朝忠朝臣

（歌撰）

朝　忠

八四世中は只今日のごと思ほえて哀昔になりや行くらむ
これはおほんわざはてゝしが詣でしたりける歌
九四そばちつゝ物思ふ人の行道は流るゝ水ぞ知べ也ける
其の年十二月若宮の御袴褂を奉らせ給ふに
〇五大原や小鹽の山の小松をば茂み千年の蔭となしてむ
たいふがもとより曙に出でゝ
一五諸共に折るとはなしに打解て見えやしぬらむ槿の花

借二請右大弁入道之本一
建長六年十二月二十四日申刻書二寫之一同夜於二燈下一
校合了　在判

高光集

十月九日冷泉院の釣殿にて神無月といふとをか
みに置きて歌よませ給ふに
二五神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
三五秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
四五ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
五五詠るを空も知ればや日暮に小休もせずは降そはる覽
世の中はかなくのみ覺ゆる頃雪の降るに
六五世中にふるぞ儚き泡雪の且は消ぬるものと知る〳〵
七五たつ雉の上の空なる心にも道れ難きは此世なりけり
打ちとけてもあらぬ人をわりなき所に引きとゞ
めてかくやはと爪はじきをしかくればあなかま
人きくらむと侘ぶれば
八五遮莫人のきくらむともいさての限なるもの思ふ身は
歌合に
九五萬代の松に醒れる秋の月久しき影を見よとなるべし
ひごのめのとの出羽にくだるに餞たぶとて人々
歌よむに
〇六旅を行く草の枕の露けくばおくるゝ人の涙とを知れ
天暦三年三月つごもりの日文人召して花も鳥も
春のおくりすといふ心を詩に作らせ給ふにやが
てやまと歌一つそへて參らせよと仰せられしに
一六櫻花のごけき春の雨にこそ深き匂もあらはれにけれ
紅梅合せに
二六鶯のすをくひそむる梅の花色も匂もをしくもある哉

小宮かくれ給へるころ
三六世中はかく社みゆれつく〳〵と思へば假の宿り也鳧
おほん葬送の後
四六賴みこし常磐の山も大空の霞に霞むよにこそ有けれ
おなじ頃おほん服にて七月七日のことにやあり
けむ
五六七夕の渡るせも有じ天の川藤の衣の滿てる夜なれば
といひしかば
六六鵲の橋ながれなば藤衣きしより身をや誰もすつべき
姫君にきこえし
七六常よりも秋の恨ある今年也野べの草葉も露に萎れて
八六秋風の始めて結ぶ白露はいひおく程もゆゝしかり鳧
御返事
九六草のはにかゝる心を白露と云おく程も久しかりけり
白川に涼みにわたりて
〇七白何の松の色こき影みれば孰れが色も變らざりけり
姫君の御かたにこじと思へど來られぬこむと思
へどこられずと聞えたるを宮きこしめておほせ
られたる
一七賴むには繁さ增れと思へ共こられざらむはになき事也
おほんかへし
二七年をへて繁さ增ればみやま木のよゝをへつゝもしたなれて
帥の大納言の女左衛門の督にいかなりし折にか
三七いふ事の辭び難さに白露の超居てのみも明しつる哉
にしのご文たてまたしたりける返りごとのなか
にかく書きて加へたりける
四七年をへて思ふ心のしるしにぞ空も便の風は吹きける
又これも同じ人に
五七片時も忘れやはするつらかりし心も更に頼なければ
七月七日九條殿の御まへにて君たち參りたまへ
るにけふの心よめと仰せられしに
六七打寄する波にまかせて七夕をたちな隱しそあまの川霧
これは一條殿　謙　德　公
七七七夕のまちかげにする今宵すら何立ち騷ぐ天の河波
ほり河殿　忠　義　公
八七あすよりはゆゝしかるべき七夕の羨しきは今宵也鳧
すけまさの朝臣を語らひわたりて殿居したる夜
もろともにいひてさはる事やありけむ見え給
はざりければ又の日
九七程へたる覺束なさも有物を一夜ばかりに增る侘しさ
女七宮みこにならせ給ふよ人々歌よみ給ふに
〇八あやまたぬ種にしあれど姫小松心殊にも祈るけふ哉
天暦九年宇佐の使にきよとほくだるにせんせむ
と上のぬしたち歌よみ給ふついでに
一八露のごと儚き身をばおきながら君が千年を祈りやる哉
おとゞうせ給ひての年新嘗會の頃うちにも參ら
で内侍のもとに
二八霜枯の蓬の門にさし籠りけふの日影をみぬぞ侘しき
ある人のむすめに物語するほどに女の親淺ましし
しとて諸共にねあかして歸りてつとめて
三八戀やせむ忘やしなむともなくねずとも無て明しつる哉
女の親のかへし
四八ぬともなくねずとも無て明す夜を戀もな戀そさらば忘るな
世の中はかなくのみ覺えて法師になりなむと覺
ゆる頃
五八賴む夜が月のねずみの騷ぐまの草葉に宿る露の命を
村上の御門かくれさせ給ひての頃月をみて
六八かく計りへ難くみゆる世中に羨ましくもすめる月哉
多武峰に住む頃人のとぶらひたる返事に
七八いかでかは尋ねきつらむ蓬生の人も通はぬ我宿の道
花盛に故郷の花を思ひやりていひやりし

八八みても亦復もみまくの欲かりし花の盛は過やしぬ覽

ある女の搔練のきぬを十月ばかりにくとくにつくるに

九八もみぢ葉の落るほどしも唐衣錦かくるぞ哀なりける

たゝきよの衛門督五節たてまたしたまふにたきものかうばしう合すとてそらだきものすこしと多武峰にこひ給へるに橘のなりたる枝にみをとりうてゝそれに入れてたてまたすとて

○九末のよに成もて行けば橘の昔のかには似可くも非ずかへし　衛門督

一九香をとめて戀しもしるく橘のもとの匂は變らざり鳧

多武峯に住む頃あさみつの大納言びはの北の方わづらひ給ふ祈りせよとのたまふに

二九昔より聞ならしこしいかゝ崎淺からじとぞ思做さなむ

返事　大納言

三九早くより聞馴しけるいかゝ崎末の人さへ頼もしき哉

比叡の山にすみ侍る頃人のたきものを乞ひて侍りければはべりけるまゝに梅の花の僅にちり殘りけるにつけて遣すとて

四九春立て散果てにけり梅の花唯香ばかりぞ枝に殘れる

在二新古今一歌

五九白露のあしたゆふべに奥山の苔の衣は風もとまらず

六九百敷の内のみ常に戀しくて雲の八重立山はすみうし

友則集

春立つ日

七九水の面にあや吹亂る春風や池の氷をけふはとくらむ

○八九花の香を風の便りにたぐへてぞ鶯誘ふ知べにはやる

梅の花折りて人にやるとて

○九九君ならで誰にか見せむ梅の花色なも香なも知人ぞ知る

櫻の花のもとにて年の老いぬるとを思ひて

○〇〇色も香も同じ昔に咲くらめと年ふる人ぞ改まりける

寛平の御時きさいの宮の歌合

○〇一三吉野の山べに咲ける櫻花雪かとのみぞ誤たれける

○〇二久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

雪の降れるを見て詠める

○〇三雪降れば木毎に花ぞ咲にける孰を梅と分きて折まし

音羽山を越えける時時鳥聞きて詠める

○〇四音羽山今朝こえくれば時鳥梢はるかに今ぞなくなる

屏風の歌、左大將の四十賀の料

○〇五珍しき聲ならなくに時鳥こゝらの年をあかずも有哉

寛平の御時中宮の歌合

○〇六五月雨に物思ひ居れば時鳥夜深く鳴ていづち行らむ

○〇七夜やくらき道や惑へる時鳥我宿をしも過ぎがてに鳴

○〇八夕されば螢よりけに燃れども光見ねばや人の難面き

○〇九けふよりは天の河原はあせなゝむ浮瀬とも無く唯渡なむ

○一〇天の河流れてこふる七夕の涙なるべし秋のしらつゆ

○一一天河瀬々の白波高けれど唯渡りきぬまつにくるしみ

○一二天の河戀しき時ぞ渡りぬるたぎつ涙に袖は濡れつゝ

寛平の御時殿上の人々歌よみけるに人に代りて詠める

○一三天河淺瀬白波たどりつゝ渡り果てぬに明ぞしにける

○一四聲立て鳴ぞしぬべき秋霧に友惑はせる鹿には非ねど

○一五誰聞けと聲高砂にさをじかの長々し夜を獨なくらむ

○一六打はへて影とぞ頼む嶺の松色どる秋の風にうつるな

○一七夕されば佐保の河原の河霧に友惑はせる千鳥鳴く也

惟貞の親王の歌合に

○一八秋風に初雁音ぞ聞ゆなる誰が玉章をかけて來らむ

大和國に下りけるに佐保山に霧のたちけるを見て

一九誰が爲の錦なればか秋霧の佐保の山べを立隱すらむ

寛平の御時繪に菊の花のもとに人立てる書きたるを見て

○二〇花見つゝ人待つ時は白妙の袖かとのみぞ誤たれける

惟貞のみこの歌合に

○二一露乍折てかざゝむ菊の花老せぬ秋の久しかるべく

立田山を越えて詠める

二二斯計りもみづる色の濃ければや錦立田の山と云らむ

二三見るからに秋にも成哉立田姫紅葉染むとや山べ知覽

二四初時雨降れば山べぞ思ほゆる孰の方か先もみづらむ

二五唐衣立田の山のもみち葉はものの思ふ人の袂なりけり

大澤の池のかたを作りて菊を植ゑたるに

二六一本と思ひし菊を大澤の池のそこまで誰かうゑけむ

二七春霞たなびく山の櫻花見れどもあかぬ君にもある哉

二八我戀を忍びかねては足曳の山たち花の色に出ぬべし

二九宵の間も儚く見ゆる夏蟲に惑ひまされる戀もする哉

寛平の御時中宮の歌合に

○三〇蟬の聲聞けば悲しな夏衣薄くや人のならむと思へば

○三一紅の色には出でじ隱れ沼の下に通ひて戀はしぬとも

我より高き女を思ひかけて

二三玉潛く蜑ならねども渡つ海の底ひも知らず思入る哉

二四みるも無くめもなき海の濱に出て返る〳〵も恨つる哉

二五我心いつ習ひてか見ぬ人の思ひやりつゝ戀しかる覽

○二六我宿の菊の垣根に置霜の消かへりてぞ戀しかりける

二七思へども儚き物は吹風の音にも聞かぬ戀にざりける

二八秋風は身を分けてしも吹かねども人の心の空になる覽

○二九笹の葉に置く霜よりも獨ぬる我衣手ぞさえ增りける

三〇君てへば見まれ見ずまれ富士の嶺の珍しげなく燃る我身を

○三一河の瀬に靡く玉藻の水隱て人に知られぬ戀もする哉

○三二東路のさやの中山なか〳〵に何しか人を思ひ初けむ

○三三敷妙の枕の下に海はあれど人をみるめは生ずぞ有ける

○三四年を經て消えぬ思はありながら夜の袂は尙凍りつゝ

○三五とに出て云はぬ計ぞみなせ河下に通ひて戀しき物を

○三六命かも何ぞも露のあだ物はあふにしかへば惜からなくに

○三七立返り思ひ出づれど石上ふりにし戀は忘られにけり

○三八下にのみ戀れば苦し玉の緒の絶て亂れむ人な咎めそ

○三九水の泡の消て浮身と知ながら流れても猶頼まるゝ哉

○三〇浮乍ら消ぬる泡と成なゝむ流てとだに頼まれぬ身は

○三一雲もなく風たゝ朝の我なれや厭れてのみ世をばへぬ覽

本院の大臣の御前にして四十よになるまで無官にはべるよしをまゝして

二三春々の數は惑はず有ながら花咲かぬ木を何に植けむ

返し

二四今迄になどかは花の咲ずして四年餘の年ざりをする人のもとよりとのゐ物おこせたりけるを返すとて

二五蟬の羽のよるの衣は薄けれど移香濃くも成にける哉

筑紫にありける時に通ひて碁など打ちける人のもとに京へ上りて後にやりける

○二六故郷は見しとも有ず斧の柄の朽ちし所ぞ戀しかりける

物へいく道に來逢ひて物など云ふ人に別るとて

二七下の帶の道はかた〳〵別る共行廻ても逢むとぞ思ふ

藤原のたゞゆきが身の沈むよしを嘆くをとぶらひにやりたる返事に菊の花を折りて

二八枝も葉も移ろふ秋の菊見れば果は影なく成ぬべら也

とありける返事に

二九雫もて齡延ぶてふ花なれば千代の秋にぞ影はみつ覽

三〇君てへば見まれ見ずまれ富士の嶺の珍しげなく燃る我身を

親のよみたりける歌ども書き集めて惟喬のみこ

にとらすとて奥に書きたりける

九七 とならば言の葉さへも消なゝむ見れば涙の瀧増り鳥

藤原敏行失せて後にかの家に贈りける

○六 寝ても見ゆ寝ぬ見え鳥大方は空蟬の世ぞ夢には有ける

一六 取りも敢ぬ年は水にや流るてふ老の心の淺く成行く

〔をみなへし〕

○二六 白露を玉に抜くとや笹蟹の花にも葉にも糸をみなへし

○三六 朝露を分けそぼちつゝ花見むと今ぞ山べをみなへ知ぬる

をかだまのき

四六 三吉野の吉野の瀧に浮び出る泡をか玉の消ゆとみゆ覽

きちかうの花

○五六 秋近う野はなりに鳥白露の置ける草葉も色變り行く

ゆうたん

○六六 我宿の花踏散す鳥擊たむ野はなければや爰にしも鳴

惟真のみこの歌合に

七六 秋霧は今朝はな立そ佐保山の柞の紅葉よそにても見む

八六 池水や凍りとづらむあし鴨の夜深く聲の騷ぐなる哉

小町集

花をながめて

九六 花の色は移りに鳥な徒に我身世にふる詠めせしまに

ある人心かはりてみえしに

○七 心から浮たる舟に乗初めて一日も波に濡ぬ日ぞなき

前渡りし人に誰ともなくてとらせたりし

一七 空を行月の光を雲ゐよりみでや闇にて世は果ぬべき

返しあしたにありしに

二七 雲はれて思ひ出れど言のはのちれる嘆は思出もなき

對面しぬべくやとあれば

三七 みるめかる蜃の行かふ湊路に勿來の關も我は据ぬを

女郎花いとをく堀りて見るに

四七 なにしおへばなを懐しみ女郎花をられに鳥な我れが名立に

五七 やよやまて山時鳥言づてむ我れ世中に住わびぬとよ

あやしき事いひける人に

六七 結びきと云ける物を結松爭でか君にとけてみゆべき

めのとの遠き所にあるに

七七 よそにこそ峯の白雲と思ひしに二人が中に早立に鳥

山里にて秋の月を

八七 山里のあれたる宿を照しつゝ幾夜へぬらむ秋の月影

又

九七 秋の月いかなる物ぞ我心何ともなきにいねがてにする

人と物いふとてあけしつとめてかばかり長き夜

に何事を終夜侘び明しつるぞとあひなうとがめ

し人に

○八 秋夜も名のみ也鳥逢ふと云へばとぞともなく明ぬる物を

かへし

一八 長しとも思ひぞ果ぬ昔より逢人からの秋のよなれば

やんごとなき人の忍び給ふに

二八 現にはさも社あらめ夢にさへ人め包むと見が侘しさ

人のわりなく怨むるに

三八 蜃の住里の知べも有なくに恨みむとのみ人の云ふ覽

ゆめに人のみえしかば

四八 思つゝぬればや人のみえつ覽夢と知せば覺ざらましを

これを人に語りければ哀なりけることかなとあ

るかへし

五八 轉寝に戀しき人をみてしより夢てふ物は頼み初てき

かへし

六八 頼むじと思はむとても如何せむ夢より外に逢夜無れば

七八 最せめて戀しき時はむば玉の夜の衣を返してぞぬる

人の心かはりたるに

八八 色みえでうつろふ物は世中の人の心の花にぞ有ける

九八 みもなき苗のほに文をさして人のもとへやるに

秋風にあふ頼こそ悲しけれ我身空しく成ぬと思へば

人のもとに

○九 渡つ海のみるめは誰か刈果し世の人とになしと云ずば

常にくれどえ逢はぬ（男カ）女のうらむる人に

一九 みるめなき我身を浦と知ねばや枯なで蜃の足たゆく來る

二九 人に逢む月の無夜は思ひ置て胸は尻火に心やけをり

三九 夢路には足も休めず通へ共現に一めみしとはあらず

四九 かざま待つあまし潜かば逢事の便に波は海と成なむ

五九 我を君思心のけすのへにありせば正に逢みてましを

六九 よそにてもみずは有とも人心忘れ形見をつみて忍ばむ

七九 宵々の夢の魂あしたゆく有ても待たむ訪らひにこそ

ねでのしまといふ題を

八九 おきの居てみを焼くよりも侘しきは都嶋べの別也鳥

忘れぬるなめりと見えし人に

九九 今はとて我身時雨に降ぬれば言の葉さへに移ひに鳥

かへし

○○ 人を思ふ心木葉にあらば社風のまに〳〵散も紛はめ

定まらず哀れなる身をなげきて

一〇 蜃のすむ浦漕舟の楫をなみ世をうみ渡る我ぞ悲しき

いそのかみといふ寺にまうでゝ日のくれにけれ

ばあけて歸らむとてかの寺に逼昭ありときゝて

心みにいひやる

二〇 岩の上に旅ねをすれば最寒し苔の衣を我に貸さなむ

逼昭

かへし

三〇 世を背く苔の衣は唯一重貸ねばうとしいざ二人ねむ

中たえたる男の忍びてきて隱れてみけるに月の

いと哀なるをみてねむことこそいと口惜しけれ

とすのこに詠むれば男いむなるものをといへば

四〇 獨寝の侘しきまゝに起ぬつゝ月を哀といみぞ兼つる

忘れやしにしとある君たちのの給へるに

五〇 陸奥の玉造江にこぐ舟のほにこそ出ね君を戀ふれど

康秀が三河になりてあがた見はいでたゝじやと

いへる返りごとに

六〇 侘ぬれば身を浮のねを絶て誘ふ水有らばいなむとぞ思ふ

安倍のきよゆきがかくいへる

七〇 包めども袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの泪也けり

とある返し

八〇 おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我は堰敢す瀧つせなれば

九〇 みるめあらば恨みむやはと蜃問はゞ浮びて待む泡沫のまも

一〇 いつはとは時は分ねど秋のよぞ物思ふ事の限也ける

一一 蜩のなく山里の夕ぐれは風よりほかにとふ人ぞなき

二一 百草の花の紐とく秋の野に思ひたはれむ人な咎めそ

三一 漕ぎ出ぬや蜃のかぜまち待ずしてにくまひがける蜃の釣舟

五月五日さうぶにさして人に

四一 菖蒲草人にねたゆゝ思しを我身の憂に生ふる也けり

五一 こぬ人をまつと詠めて我宿のなどて此暮悲しかる覺

六一 露の命はかなき物を朝夕に生きたる限逢見てしがな

七一 人知れぬ我が思に逢ぬまはみさへぬるみて思ほゆる哉

八一 戀侘ぬ暫もねばや夢の内にみゆれば逢ひぬみねば忘れぬ

九一 ものをこそ岩ねの松も思らめ千代ふる末も傾きに鳥

○二 木枯の風にも散らで人しれず憂きとのはの積る頃哉

一二 夏の夜の侘しきとは夢にだにみる程もなく明る也鳥

二二 現にもあるだに有を夢にさへ飽でも人のみえ渡る哉

三二 春雨のさはにふる如音もなく人に知れでぬるゝ袖哉

四の みこの失せ給へるつとめて風ふくに

三一 今朝よりは悲しき宮の秋風や又逢坂も有じと思へば

四一 我身にはきにける物を憂事は人の上とも思ひける哉

五一 心にも叶はざりける世中を憂身はみじと思ひける哉

六一 妻戀るさを鹿の音にさよふけて我片戀を明し兼つる

七一

二卯花のさける垣ねに時ならでわがごとぞ鳴く鶯の聲
九秋の田の假庵にきぬるいな方の否さも人に云まし物を
井手の山吹を
〇三色も香も懐しきかな蛙なくゐでのわたりの山吹の花
一三霞たつ野をなつかしみ春駒の荒ても君がみえ渡る哉
二三難波めの釣する人に目枯けむ人も我ごと袖やぬるる覽
三三千度とも知られざり鳧泡沫の憂身はいさや物忘して
人の昔よりしりたりといふに
四三今はとて變らぬ物を古もかく社君につれなかりしか
五三波の面を出入る鳥は水底を覺束なくは思にざらなむ
あしたづの雲居の中にまじりなばなどいひて失
せたる人のあはれなる頃
九三久かたの空にたなびく うき雲の うける我身は
つゆ草の露のいのちも 又きえて 思ふことのみ
まろこ菅 繁さぞまさる あら玉の 行く年つきは
春の日の 花のにほひも 夏の日の 木の下かげも
秋の夜の 月のひかりも 冬の夜の 時雨のおとも
世の中に 戀もわかれも うき事も つらきもしれる
我身こそ 心にしみて 釉の浦の ひる時もなく
哀れなれ かくのみ常に 思ひつゝ いきの松ばら
生たるに ながらの橋の 長らへて 瀬に居たづの
鳴わたり うらこぐ舟の ぬれ渡る いつか浮世の
くにさみの 我身かけつゝ かれ離れ いつか戀しき
雲の上の 人にあひみて 此世には 思ふことなき
みとはなるべき
日の照り侍りけるに雨乞の和歌詠べき宣旨有て
七三千早振神もみまさば立騒ぎ天の戸川の桶口あけ給へ
やり水に菊の花のうきたりしに
八三瀧の水の木の本近く流れずば泡沫花も有とみましや
九三限なき思のまゝに夜もこむ夢ぢをさへに人は咎めじ
かれたる淺茅に文さしたりける返ごとに小町が姉
〇四時過て枯行くをのゝ淺茅には今は思ぞ絶ず燃えける
あだなに人の騒がしういひ笑ひける頃いはれけ
る人のとひたりける返りごとに
一四うき事を忍ぶる天の下にして我濡衣はほせと乾かず
二四ともすればあだなる風に漣の靡くてふ如我靡けとや
三四忘草我身につまむと思ひしは人の心におふる也けり
四四我如く物思ふ心けの末に有りせば正に逢見てましを
みちの國へいく人にいつ計にかといひたりしに
五四陸奥は世を浮島も有と云を關小搖ぎの急がざらなむ
定めたるともなくて心ぼそき頃
六四須磨の浦の浦ごく舟の楫よりも寄べなきみぞ悲しかり
いかなりし曉にか
七四獨寢の時は待れし鳥のねの稀にあふ夜は侘しかり鳧
八四流れてと賴めしとは行末の涙の上をいふにぞ有ける
見し人のなくなりし頃
九四有るはなく無きは數そふ世中に哀孰の日まで歎かむ
〇五夢ならば又みる宵も有なましなに中々の現なりけむ
一五武藏野に生ふとし聞けば紫の其色ならぬ草も睦まし
二五世中は飛鳥川にもならばなれ君と我とが中し絶ずば
三五武藏野の向ひの岡の草なれば根を尋ねても哀とぞ思ふ
四五見し人も知られざり鳧泡沫の憂身はいさや物忘して
五五世中に孰ら我身の有てなし哀とや云むあなうとや云む
六五我身社有ぬかとのみ辿らるれ訪べき人に忘られしより
七五長らへば人の心もみるべきに露の命ぞ悲しかりける
八五世中を厭ひて蜉の住かたは憂めのみ社みえ渡りけれ
九五儚くて雲と成ぬる物ならばかすまむ空を哀とは見よ
〇六我のみや世を鶯と鳴きわびむ人の心の花とちりなば
一六はかなくも枕定めず明す哉夢語りせし人をまつとて
二六世中の憂もつらきも告なくにまづ知る物は泪也けり
三六吹き結ぶ風は昔の秋ながら有しにもあらぬ袖の露哉
四六あやしくも慰めがたき心かな嫉捨山の月もみなくに

五六しどけなきねくたれ髪をみぜじとやはた隱れたるけさの槿
六六誰をかもまつちの山の女郎花秋と契れる人ぞ有らし
七六白雲の絶ず靈く峰にだに住めば住ぬる物にぞ有ける
八六紅葉せぬ常磐の山に吹く風の音にや秋を聞渡るらむ
他本歌　十一首
九六いつとても戀しからずは非ぬ共怪しかりけり秋の夕暮
〇七長月の有明の月の有つゝも君しもまさば待社はせめ
一七淺香山影さへみゆる山の井の淺くは人を思ふ物かは
なが雨を
二七詠めつゝ過る月日も知ぬまに秋の景色に成にける哉
三七春の日の浦々毎を出てみよ何業してか蜃はすぐすと
四七木間より洩り來る月の影みれば心盡しの秋はきに鳧
五七天つ風雲ふきはらへ久方の月の隱るゝ道まどはなむ
六七哀てふ事こそうたて世中を思ひ離れぬほだし也けり
七七世中は夢かうつゝか現とも夢とも知ず有てなければ
八七哀てふ言のは毎におく露は昔を戀るなみだなりけり
九七山里は物の寂しき事社あれ世の憂よりは住よかりけり
又他本　五首　北相公本也
〇八小倉山消し照射の未もがなしか習はずば安くねなまし
一八別つゝみるべき人も知ぬまに秋の氣色に成にける哉
二八形見こそ今は仇なれ此なくば忘るゝ時も有まし物を
三八はかなしや我が身の果よ淺綠野べに棲く霞と思へば
四八花咲てみならぬ物は渡つ海の挿頭にさせる沖つ白波

忠岑集

ふるうた召しゝ時添へて奉る
五八くれ竹の　よゝの古ごと　徵りせば　いかほの沼の
いかにして　思ふこゝろを　のばへまし　あはれ昔べ
有きてふ　人まろこそは　嬉しけれ　身はしも乍ら
言の葉を　あまつ空まで　聞え上て　末の世までの
跡となし　今もおほせの　下れるは　塵につげとや
塵の身の　積れることを　間はる覽　これを思へば
古へに　くすり漬せる　けだ物の　空にほえけむ
心地して　千々の嘆きも　思ほえず　一つこゝろは
訪らしき　斯はほこれど　照ひかり　近きまもりの
身也しを　たれかは秋の　くる方に　あざむき出て
御垣もり　をさ〳〵しくも　思ほえず　こゝの重ねの
中にては　聞ざりき　今はのやまし
近ければ　春はかすみに　夏はうつせみ
鳴き暮し　秋はしぐれに　袖をかし　冬はしもにぞ
責らるゝ　かゝる侘しき　身乍らに　つもれる年を
數ふれば　いつゝの六に　なりに鳧　是にそはれる
わたくしの　老のかずさへ　攻くれば　身は賤しくて
年たかき　ことの苦しさ　斯しつゝ　長柄のはしの
長らへば　なにはの浦に　立つ波の　老のしわにや
溺ほれむ　流石にいのち　惜ければ　越のくになる
しら山の　成ぬとも　おとはの山の
音にきく　老ず死なずの　藥もが　君が八千代を
わかえつゝ見む
九八君が代に逢坂山の石清水木がくれたりと思ひける哉
右大將の四十賀の屏風に、夏
七八大荒木の杜の下草繁りあひて深くも夏の成にける哉
秋
八八秋萩は先さすえより移ふを露の心の分くるとな見そ
夏の夜郭公を聞きて
九八暮るかと見れば明ぬる夏の夜を飽ずとや鳴く山時鳥
早う住みし家に郭公を聞きて
〇九昔べや今も戀しき時鳥ふる里にしも鳴きてきぬらむ

七月八日

一九今日よりは今來む年の昨日をぞ早晩とのみ待渡べき
　秋の夜月のいみじう明かりしに
二九久方の月の桂も秋くれば紅葉すればや照り增るらむ
　同じ頃ほひに
三九秋の夜の露をば露と思置きて假の涙や野べを染む覽
四九秋の野の萩の白露今朝見れば玉や敷けると驚れつゝ
　中宮の御屏風に山田ある所
五九蛙鳴く井手の山田に蒔きし稻は君待なへと生立に鳧
　菊の花の露に袖を濡してあるじにかく云ふ
六九折る菊の雫を多みわかゆてふ濡衣を社老の身に着れ
　或る女どもに遣しゝ歌ども
七九搔くらし降る白雪の下消に消えて物思ふ頃にも有哉
八九秋風にかきなす琴の聲にさへ儚く人の戀しかるらむ
九九たきつ瀬に根ざし止らぬ萍の浮たる戀も我はする哉
〇〇風ふけば嶺に別るゝ白雲の絶えてつれなき君が心か
　昔物など云ひはべりし女のなくなりしが曉方の
　夢にみえて侍らでさめ侍りしかば
一〇命にも增りて惜くある物は見果ぬ夢の覺むる也けり
　或る女のいみじく心かろくはべりしかば
二〇獨して思へばくるしいかにして同じ心に人を敎へむ
　女の許に始めてやりはべりし
三〇須磨の蜑のこれる鹽木か燃る共に人知れぬ我戀ならむ
　女に始めて逢ひはべりしにいみじく哀に覺えし
　かば其の女に
四〇思てふ事をぞ妬く古しける君にのみこそ云べかりけれ
　忍びて女の許にまかりはべりしにいくばくもな
　くてあけはべりしかば其の女に
五〇夢よりもはかなきものは夏の夜の曉方の別なりけり
　寬平の御時中宮の御屏風にあまのかづきたる所
六〇心ざし深く水底かづきつゝむなしくいづな沖つ島守
　世の中常ならず心うかりし頃
七〇ぬるが中に見るなのみやは夢といはむ儚き世をも現とはみず
　相知りたる人のすゞひの使に遠き國に下るに
八〇湍をせけば淵と成つゝ淀みけり別を止むる柵ぞなき
　或る女に物云ひたりと騷がれし頃はひ
九〇陸奥に有と云ふなる名取河無名とりては侘しかり鳧
　后の宮の御屏風に瀧おちたる所
一〇落ちたぎつ瀧の水上年積り老にけらしな黑き筋なし
　初春
一春立と云ふ計にやみ吉野の山も霞みて今朝は見ゆ覽
　仲春
二春はなほ我にて知りぬ花盛心のどけき人はあらじな
　秋
三山里は秋社殊に悲しかけれ鹿の鳴音に目を覺しつゝ
　泉の右大將の四十賀の屏風に
四濁なき清瀧川のきよければ底よりせくと見ゆる藤波
　秋
五千鳥鳴く佐保の川霧立ぬらし山の木葉も色變りゆく
　春の始
六春來ぬと人は云へども鶯の鳴かぬ限は非じとぞ思ふ
　惟貞のみこの御歌合に
七雨降れば笠取山の紅葉ばは行かふ人の袖さへぞ照る
八神なみの三室の山を分行けば錦立きる心地こそすれ
九山田守る秋の假庵に置露はいなおほせ鳥の涙也けり
　寬平の御時后の宮の歌合に
一〇三吉野の山の白雪踏分けて入にし人の音づれもせぬ
二白雪の降りて積れる山里は住人さへや思ひ消ゆらむ
三鹽竈の磯のいさごを包みもて逢夜の數と思べらなる
　戀歌
四春日野の雪間を分て生出來る草のはつかに見えし君かも
五獨ぬる我敷妙の鹽竈はうき玉なれやよるかたも無し

六二月影に我身を變ふる物ならば思はぬ人も哀とや見む
　友則がなくなりにし後
七二時しもあれ秋やは人の別るべき有を見だに戀しき物を
　思に籠りたる人を訪ふとて
八二墨ぞめの君が袂は雲なれや絶えず涙の雨とのみ降る
　相知りたる人の住吉に詣づと聞きて
九二隱沼の下より生る根蓴のねぬ名は立たでくるな厭ひそ
　松風を聞きて
一〇二松の音に風の調を合せては立田姫こそ秋はひくらし
　相知りて侍る人日頃久しく訪はずしていきたる
　にかくせば
一一三住の江の松に立寄る白波のかへる折にや音をば鳴覽
　暇ありてこもり居て侍るに人の訪はねば
一二三大荒木の森の草とや成にけむ假に來て訪ふ人も無身は
　三月三日ある處にて土器とりて
一三三千歲へてなるてふ桃の今年より花咲春に成にける哉
　雖入集不見家集歌
一四三年をへて濁だにせぬ錆江には玉も却りて今は往べき
一五三子日する野べに小松の微せば千代の例に何を引まし
一六三色々の木の葉流るゝ大井川しもは桂の紅葉とや見む
一七三夏果つる扇と秋の白露と孰れかまづは置かむとす覽
一八三東路のさやの中山清かにも見えぬ雲居になや盡さむ
一九三年經れば朽ちこそ增れ搖柱昔ながらの名だに變らで
二〇三脆く共いざ白露に身を倣て君があたりの草に消なむ
二一三惜むべき庭の櫻は盛りにて心ぞ花にまづうつりける
二二四天原宿かす人のなければや秋くる雁の音をばなく覽
二三四侘人の心の内を比ぶるに富士の山とやした焦れける
二四四山の端は斯こそ秋も時雨しか何を今朝より冬と云覽
二五四逢事の今は片帆になる舟の風待つ程は寄る方もなし

頼基集

天曆の御時屏風に春日野に若菜つみたる處
二四若干の年摘みくれど春日野に生る若菜は老せざり鳧
　三月
三四花だにも散殘らなむ過ぬ共惜むに止る春かともみむ
四四秋の夜召ありて春宮に參りて雁のなくを
五四鳴雁はくるか歸るか覺束な春の宮にて秋のよなれば
　寬平の御時の御屏風に
六四白露の奥手の稻も刈てけり秋はて方に成やしぬらむ
七四照月の流るゝ水し清ければ上した秋の紅葉をぞみる
八四水底に影のみ見ゆる紅葉は秋の形見に波やをるらむ
九四霧のたつ紅葉の錦亂るれば行へも知ぬ物にもある哉
　きたの宮の御裳着給ひしに內侍の督殿に贈られ
　たる御屏風に笠取の山のほとりを人ゆく程に時
　雨のすれば袖をかづきたる處
一〇五笠取の山を賴しかひもなく時雨に袖を濡してぞ行く
一一五宇多の院にて梅の花をよみ侍りける
一二五ちる迄はきつゝだにみむ春雨に我を濡すな梅の花笠
一三五同じ院の中宮に四十の賀奉り給ふ竹の杖の歌
一四五一節に千代をこめたる杖なればつく共盡じ君が齡は
　ある所の屏風に志賀の山越に瀧おちたる所
一五五水上に掬ぶ人なみ白玉は山のをよりぞぬきて落ける
　ある人の扇にかく歌
一六五涼しさはやがて心に任せたる扇を煽ぐ風ならずして
　朱雀の院の御屏風、子日に松ひける處に鶯なく
一七五子日する野べに小松を引連れて歸る山べに鶯ぞ鳴く
　宇多の院の御前に松の末に藤の花さきかゝりた
　るを、三月つごもり
一八五藤の花まつのみならず暮ぬべき春の末にも咲懸り鳥

先代の皇后の九條の右大臣殿の五十賀奉り給ふ

御屏風に、年暮れて竹のある家

九長きよを思しやれば呉竹の暮行く冬も惜からなくに

ある處の屏風の繪に、志賀の山越の處

〇六なには負へどなれるもみえず瓜生坂春の霞の立てるなる

人の扇にかゝむとて侍るに

一六内もともみえぬ扇の程なきに涼しき風を爭で込けむ

亭子院の御使に越へ行く人に帶をとらするにたゝなるよりはとて

二六ゆふ帶のとくはあふ共別なば越を巡らむ程の久しさ

同じ院の御前にまゆみの紅葉に簽蟲のかゝりたるを歌仕うまつれと仰せあるに

三六紅葉ばの枝に懸れる簽蟲は時雨ふる共濡じとや思ふ

女のもとに始めて文やるに

四六初霧の空に立つる心かな思はれむともしらぬ我身を

大井川の行幸に樣々の題をよませ給ひしに秋の水に浮ぶといふ題を

五六色々にうける心も秋の水紅葉ながすと人やみるらむ

秋山を

六六白露はわきておかじな秋の山などか紅葉も薄くこがるむ

紅葉散る

七六紅葉の流渦まく淵をこそくれ行く秋の泊りとはみれ

旅の雁

八六すむ里の定めなければ旅の雁空にぞ浮て鳴渡るなる

菊の花

九六御幸をばけふとや兼て菊の花昨日の色のあせて殘れる

鶴澤に立てり

〇七河近み住ひすればや眞鶴の流れて千年ありと云るゝ

鷗馴れたり

一七白浪やの身によせ懸るとも思はで立も驚す馴るゝ鳥哉

江の松老いたり

二七えに深く年ふる松は水底の影にさへ社色は見えけれ

天暦の御時の屏風に七月七日人いでゐて空を詠めたり

三七逢事は別れて後も七夕の思ひはるべき隙もなきかな

五月五日駒くらべする處

四七若駒とけふに逢くる菖蒲草生ひ後るゝや祭るなる覽

入二拾遺集 歌

五七潮たるゝ身は我とのみ思へ共よそなるたづもねをぞ鳴なる

源重之集

三位大貳佐理は故小野宮の大殿實賴の御むすこなり童より殿上し給へり宰相を返し奉られて下られたる人なり道風おきな立ちてはいとゝ賢き手書なりとて公も下されたることを悔しきことに仰せられて御手本は筑紫に下し遣してぞ書かせ給ふかの御手本書きに下されたるに書くべき歌どもよみてえむとの給へば新らしき昔のも中頃のも書き集めて奉る此の歌の斯くも心に適はぬうき物におぼして筑紫に下るにやあらむ大貳かくておもゞたまへるよしどもあるべし所々をかしきなどもあめり

六七松が枝に住て年ふるしらつるの戀しき物は雲居也鳥

七七春はもえ秋はこがるゝ竈山煙絶えぬや紅葉なるらむ

八七都へといきの松原いき歸り君が千年に逢むとぞ思ふ

九七幾世にか數へ盡さむ箱崎の松の千年も一つならねば

〇八見よや君しかの島へと急げ共鹿子斑らに波ぞ立ける

一八秋くれば戀するしかの島人も己が妻をや思出づらむ

二八染川の岸に寄せくる白波は聞にも逢ふ色にぞ有ける

三八筑紫へと悔しく何に急ぎけむ數ならぬ身のうきや變れる

四八名を賴む近の島へと漕ぐれど今日も舟路に暮ぬべき哉

五八白雲の懸れる嶺と見えつるはちかの島には非ぬなるべし

六八村雨の濡るゝ衣の文なきに猶簽島の名をや借らまし

七八雨雲の下にのみ住む我なれば思事なき時もぬれけり

秋

八八紅葉を己が物とも見てしがな見るに諫むる人は無れど

九八初霜の置かぬだに濃き紅葉の色の盛を誰に見せまし

八月七日ばかりに庚申の夜大貳のみたちにて箏に雁の心ある歌につけていだされたり

〇九琴の音に引きつらなれる初鴈の己が聲々珍らしき哉

又昔惠慶れいの人

一九紅葉せぬ常磐の山に住鹿は己れ鳴てや秋を知るらむ

二九思ひ出のけながき物は人知れぬ心の内の別なりけり

みちの國の柳河の家にてふみてにもちなどして

七月七日七夕の心を

三九袂こそ思ひやらるれ七夕の明けゆく空のあまの羽衣

四九吹風に色染め渡る藤波は春しもかゝる物にぞ有ける

又廣澤の池に波のいみじう立つを僧正の君など

五九廣澤の池にうかべる白雲は底吹く風の波にざりける

海土の家に宿りたるに日暮るゝまで釣舟の見えざりければ

六九波間より深く出にし釣舟の待つ程過ぎて物を社思へ

右近大夫よしのぶにみちのくにより

七九別れてはいかに戀しと思らむ己が心は人を知りけり

網代に紅葉よせたり

八九紅葉を寄する網代は多かれど秋を留て見る時ぞなき

筑紫へ行くに

九九天の原波のなるとをこぐ舟の都戀しき物をこそ思へ

〇〇山高み落くる瀧の白糸はあわによりてぞ亂初めける

一〇山吹の八重咲く花を睦じくとへや一重のうら解に鳥

又春たつに

二〇青柳のいとよりかくる春くれば池の氷も綻びにけり

この御手本いるべき箱にあしでをぬひ物にすべしとせめられける

三〇玉櫛笥二見の浦の中におつる月の影こそ鏡なりけれ

四〇孰くぞや二見の浦の有と云し心をいれて問まし物を

同じやうなれどもかき集めて定めらるべしとて

五〇箱の内に明暮遊ぶ葦たづは千年の蔭ぞ共に見ゆらし

六〇難波津に角ぐみ渡る葦の根のねはひ尋て世を賴む哉

又大宮の仰せごとにてよめれどおほん手本にかかれたれば

七〇いつしかと急ぐ心の先だちて朝の原を今日見つる哉

また

八〇東雲 朝の原を越くればまだ夜籠れる心地こそすれ

ふたむら山

九〇秋風にはたゝ織る虫の聲しげみ尋ねぞきつる二村の山

ふるの社

〇一年を經て植し榊の變らねばふるの社と云にぞ有ける

恵慶人の家の櫻を見て

一さかしらと思はざらなむ櫻花散らば隣の人も惜まむ

この人いとわろしとてよむ

二徒然と花なきさとにひとり居て隣の春に心をぞやる

睦まじき人のめのをかしきを見てそねむとて

三心には染めて久く成ぬれど云で思ふぞ口なしにして

もろともに住む女に

四日は照るに我衣手の乾ぬは一夜の露をいかに置しぞ

あふみと云ひしに冬

五冬籠り逢に相見ず成果てぬ雪ふりにきと人に語らむ

うまのすけにて播磨へ行くに明石の濱にて夜い

と暗きに千鳥鳴きて沖の方へいぬ

一白浪に羽打ちかはし濱千鳥悲しきものは夜の一こゑ

七印南野に村々見えし柏木の葉廣になれる夏は來にけり

八村雨に立隠れせし柏木の青葉に夏はあつまりにけり

日向の國に琴ひきの松あり岸に波寄す

九白波の寄りくる糸を緒にすげて風に調ぶる琴彈の松

筑紫にて或る女語らひて曉に

〇何事の今朝は嬉しき我なれや涙は分ぬ物にぞ有ける

又みちの國にて鴨のくびかはに虎のをたちいれたる乞ひにやるとて

一冬の池の同じ友には遊べ共なしとな云そ鴨のくびかは

うまごのよりこで京へ行くを恨みて女に代りて

二親の親と思ましかば訪てまし我子の子には非ぬなるべし

又粟津にやどかるときゝて云ひやる

三湖の粟津にやどる君故にはかなく鹽を垂れてける哉

むねたかゞみちの國にて子ども三人がかうぶりし侍りける又のあした

四松島の磯にむれ居る葦たづの己が樣々見えし千世哉

末の松山に子の日にこの人の母車にて出でたるに守しげみ介つねみなどいひたり

五末の松引きにぞきつる我ならぬ波のみなるとは聞が妬さに

ある人あゆ三つを荻の葉につけて

六水莖の跡踏みつけて試みむ思ふ處にあゆみつくやと

暮の春

七春毎に今日の別は惜めども葦のうら葉は歸らざり鳥

八年毎に別るゝ春と思へども猶なぐさまず惜まるゝ哉

九來る夏と別るゝ春と中に居て靜心なく物をこそ思へ

〇三櫻花散りにし春はうけれども今日の別は猶ぞ悲しき

一三年毎に止らぬ春と知りながら心盡しに惜まるゝかな

二月ばかりに世のいと憂きことを思ふころ梅の花に雪ふりかゝりたるを

一四花の上に散くる雪の我ならばいかに嬉き命ならまし

かゞみにしろさや見えけむ

一五雪消ぬわがみ山なる朽木には春もまだこの心ち社すれ

春たつ

一六初春の思ひ立らむ山道をあやにくなれや今朝の降雪

一七まだ咲ぬ枝にぞ冴る白雪は花とも云はじ春の名立に

春たつにまだ雪ふかし

一八雪深み山の山路や迷ふらむ春の迎ひに今ぞ越ゆらし

一九春ぞとは鶯のみぞ知せける鳥の聲にや花もこもれる

二〇山里は住てあだにぞ成ぬべき春の心も花と見ゆれば

二一吹風を知べにはして梅の花今宵計りぞ折べかりける

二二風寒み春やまだこぬと思ふ迄山の櫻を雪かとぞ見る

二三雪と見て覺束なきに山櫻花ぞとつげて行くや何なる

女の家に桃の花すもゝの花むら〳〵に咲きたり

鶯なく

二四鶯の聲に呼ばれてこちくれば物云はぬ花も人招き鳥

二五春夏の中に懸れる藤波はいかなる岸に波をよすらむ

或る大臣のむすめかくれてものにまゐる冬昔と

ひしに

二六よそに見る物と社見め白雪の白々しくも覺ほゆる哉

人のなれどもをかしとそのかみに思ひしかばなり

遙に京より下りし人に

二七天雲の別し中に通へばやよそなる袖の乾く間もなき

昔のばおぼつかなけれども

二八いと高き巖に生ふる松だにも風の吹には靡くてふ也

二九云ひさして已ぬと思ふな池水の深き心の淀むとを知れ

三〇仄々と明石の濱をこぎ來れば昨日戀しき波ぞ立ける

大宵會に主基の方に、明石の濱

三一朝日さす明石の濱を立ゐせし波も長閑になる世也鳥

丹後にて舟遣に岸の藤の花を折りてやかたに

させるこれにかける

〇三潭舟に棹をば懸じ藤波は夜さへ見ゆる物にぞ有ける

昔秋別れにし人に

一三年毎に昔は遠く成行けどうかりし秋は又もきにけり

やどりはなし

二三花咲かぬ我宿さへぞ匂ひ來る隣の梅に風やふくらむ

また

三三散る雪を花の盛と見すべきは春の心の淺きなるべし

四三梅が枝に物憂き程に散る雪は花とも云じ春の名立に

五三萬代の春を數ふる鶯は花の木かげにすめばなりけり

六三消果ぬ雪かとぞ見る山櫻匂はざりせば爭で知らまし

七三花にのみ埋れにける鶯は啼く聲さへぞほのか也ける

八三散花を惜むとや啼く鶯のをり知れりとも見ゆる春哉

九三世の中はおとろへ行けど櫻花色は昔の春にぞ有ける

〇四山里は咲花こそはあだならめ見る人さへや靜心なき

一四鶯の隣に我もすむものを聲をわきてぞ人はとひける

二四春ごとに忘られにける埋木は花の都を思ひこそやれ

春の暮つかた

三四花も散り鶯の音も枯ゆけば我山里はあくがれなまし

四四急ぐらむ夏の境に關すゑて暮行く春を留めてしがな

五四憂事も春は忍びて有ぬべし花の散りなむ後の悲しさ

六四打忍びなどか心もやらざらむ浮世の中に花は咲ずや

七四音もせで谷隠れなる山吹は只口なしの色にぞ有ける

八四我のみやて行てをらまし山櫻人の怨を思はずもがな

九四初聲は聞まほしくて時鳥春に別れむことのわびしさ

歸鴈

〇五雁音の歸る羽風や誘ふらむ過ぎ行く峰の花も殘らず

一五山里は浮世も有じと思ひしを厭ふも知らで尋來に鳧

二五阿武隈に霧たてと云し唐衣袖のわたりに夜も明に鳧

又春思ひいづるに、したがふ

三五春過ぎば最と物をぞ思べき花も散ぬに浮世捨てゝむ

波の聲に夢驚かすと云ふ題をためきよとむねち

四五夢にだに戀しき人を見べきに波の聲にぞ驚かれぬる

むねちか

五五浦近みぬるかとすれば白波の寄る音に社夢覺にけれ

これはわろしとて親おきな

六五戀しさは夢にのみ社慰むれつらきは波の音にぞ有ける

七五渡つ海の己が次々尋見ばいとくち亂りいづち行く覽

八五枝もなき浦々に咲く波の花風に宿れる春かとぞ見る

舟路の哀なる事を思ひて

九五舟路には思ふ人のみ戀しくて行末のみぞ先問ける

〇六吹風の靜心なき舟路にはさればと云ひし人ぞ戀しき

一六都出でゝ今日は幾日ぞ覺束な留めし人は數へおく覽

山崎河を立田川と云ふを筑紫へ行くとて

二六白波の立田の河を出しより後悔しきは舟路なりけり

げすにあらぬ人の世の中をわづらひて鍬鋤取り

ておりたちたる程もなく死にければ

三六打返す鍬のまつはにまみれつゝ秋の頼も長からぬ哉

四六春毎に忘られにける埋木は時めく花をよそに社みれ

五六雁音は花に住む共見えなくに散ぬと思ふに歸る聲する

六六蛙鳴く苗代水に影みれば時すぎにける我いかにせむ

七六山櫻散行く春の木のしたは松も見えぬに茂合ひに鳧

みちの國に山の郡と云ふ處ありそこにて冬月を

八六雲晴れて空に磨ける月影を山の氷と云ひなおとしそ

この山の郡に秋ならねど鹿子まだらに雪降れり

九六秋來れば鳴や小鹿のまだら雪山遠きか聲音もせぬ哉

京よりくだるに田子の浦にてむすめ

〇七急ぎ行旅の心や通ふらむ立たぬ日ぞなき田子の浦波

一七實方の君の許にみちの國へ行くにいつしか濱名

の橋を渡らむとてくるに早う燒けにければ

二七水の上の濱名の橋も燒に鳧打けつ波や寄こざりけむ

大嘗會の主基方、丹波國桑原の里を

かとに詠ませて親はことわるこのかみためきよ

二桑原の里の引繭拾ひて置て君が八千代の衣糸にせむ
同じ方、玉つくり江を
三一つにて萬代照す月なれば底も見えける玉つくり川
院冷泉の帝春宮におはします程に戀の歌よみて
奉れとなりたゞして仰せらるれば司給はらぬほ
どに
四戀しさに見ゆやと見れど水鏡沈影には添ずぞ有ける
又御繪に春巌折る女かたみひきさげてあり
五我ならぬ野べの巌も生ひに鳧命ぞ春のかたみ也ける
六又繪に女石井に水汲むとてさしのぞきて影見る
七年を經て澄る泉の影見ればみづはくむ迄老ぞしにける
昔衣の關の長ありしよりも老いたりしを
八昔見し關守も皆老にけり年の行くをばえやは留むる
信濃のつかまの湯におはしたりしかば書きつけ
し、これたゞの宰相の折
九出る湯のわくに懸れる白絲はくる人絶ぬ物にぞ有ける
やがて脈をたてたりける同じやうなれどもをか
しと思ひしかば
十最上川落添ふ瀧の白絲は山の繭よりくるにぞ有ける
此の最上川いみじき川なり世に似ず面しろきも
のなれば人過ぎがたし
○最上川瀧の白絲くる人の心よらぬはあらじとぞ思ふ
昔堀河の大殿石山より歸り給ふに走井にてよま
せ給ふ
○逢坂の關とは云へど走井の水をばえこそ留めざりけれ
法師の色このむをにくしとて
○常ならぬ山の櫻に心入れて池の蓮をいひなはなちそ
二月ばかりにみちの國に臨時の祭に雪にぬれ困
じたるがかちなるをのここづるの池を過ぐる程
にこゝはいづくぞと問へばこづるの池のつゝみ
と云へば心やりによめと云へば、むねちか
三千とせふる小鶴の池も變らねば親の齢を思ひ社やれ
ちゝ
四千年をば鄙にてのみや過しけむ小鶴の池と云て久しき
みちの國の權守腹々のをのこゝ女に裳着せかう
ぶりせさせ又袴着せなどするにかはらけ取れと
あり母君失せてのことなり
五色々に許多千年の見ゆる哉小松が原にたづや群居る
かへし
六古を今日にあらする物ならば獨は千代を思ざらまし
皷の瀧はこれに過ぎてよむ人あらじたゞにあら
ねば
七山川に吹かるゝ笛のあれば社皷の瀧に泡ゝまくらめ
初春
八春來ればまづぞ打見る石上珍しげなき山田なれども
やんごとなき女にむかし
九春の雨は忍ぶる事ぞ增りける山の綠も色に出でけり
夏
○我里のまづ明たてば空蟬の空しき音をも鳴き明す哉
肥後にてためちかゞ鳥巡りに出でゝいみじかり
ける處を見せずなりにけるとて歌よめりされど
わるければ書かず
一磯菜摘む蜃のみるめも有物を君が舟路に後れてぞ思
みちの國の守さねあきら或る人の親後れたるに
やるとてきぬと又綿などこを作りておこせたり
二育みし君を雲居になしてより大空を社頼むべらなれ
云ふべきあらばいへとあれど吹く風春たのむと
云へればなるべしかへる春になりて
三吹風も今日は長閑になりに鳧物思ふ程に春や來ぬ覽
又春つかさめしを思ひやる
四春ごとに忘られにける埋木は花の都を思ひこそやれ
やんごとなき處に召せばお前に出でたるに何と

なく御覽じてかへさるゝにつけて聞ゆ
五天の原渡る千鳥の羽たゆみ岸をかはとも見て歸る哉
ある女に、秋
六蟲の音の悲しき野べの花薄こち吹く風に打靡かなむ
五月ばかりに樣をかしきわらはの唐の薄えふに
蟬のもぬけを包みてもて來て人にさし取らせて
うせぬよろづ思へど誰がとも知らぬをもし一年
のなつ頃行きたりし人こそよくなく見えしかと
おしはかりて云ひやる
七古の夏來にけれど空蟬の是から音もするにぞ有ける
みちの國の權守の母君に云ひはじめに
八笹蟹の絲筋ならずあらぬ身を雲のよそにな思放ちそ
又この君あしたか蜘蛛のて一つ落ちたるが二三
日までをごくを
九笹蟹の蜘のはたてのをごく哉風を命に思ふなるべし
齋宮の女御内におはせし時かやあるたちはきの
長承香殿の西の戸口に立ち寄れり少納言と云ふ
人いと口とうものをかしう言ひ歌よむこの友だ
ちどもこの人に物言ひかけよと云ふよりてまづ
いかで言はむと思ふとて袖とりかはしたりたれ
ぞと問へば源のこたへずといらふ同じきなのら
ずと云ふ
○小動ぎの磯の草告藻名のらねば底計をぞ探り知たる
さればよといひて聞きもはてぬに詠む
一磯菜摘む蜃ならば社渡つ海の底の物めく事を許さめ
と云ひつゝぞ年經ける又波の立つを見て
二吹風に色立まさる藤波は岸によりてや數ををるらむ
春何事を思ひけるにかあらむ
三昔へをおもふ涙の春雨は我が袂にぞわきて降りける
諸共にほかへゆかむと云ひちぎりてふとひとり
いぬるによみてやる
四行春に立ちおくれぬと春霞思はぬ山を歎きつるかな
法師のこと好むが歌の返しおそくすれば
五梔や君が園には茂る覽色めくなるにいらへせじとや
大貳の御手本の歌の中の落ちたる
六年毎に枝さし松の葉を茂み君をぞ頼む露なもらしそ
又法師に
七行末を思ふ涙をしるべにて蓮の池をたのむばかりぞ
また
八花をのみ春の宮にて折りしかば思ひ出つゝ鶯ぞなく
九古の戀しき人の見えこぬに花のゆかりを相見つる哉
桃の花すける人のうち醉ひてあるを見て
○人知れず過ぐとは聞けど桃花色に出てはけふぞみえける
たけぐまの松一本は枯れにけり
一たけぐまの松も一本枯にけり風に傾ふく聲の寂しさ
二年を經て誰を待とか武隈の常磐にのみは爭で立つ覽
かりやどりに遣水をして心をやれど古にも似ず
や
三行水に心を添へてやりけれど昔までには波も返らず
霞もたゝず鶯も啼かず春あやしとて心長閑なゝ
處へおはせと云ふに久しければ
四鶯の聲の使もまだこねば思ひぞたゝぬ春のかすみも
曾禰好忠が但馬にていづしの宮にてなのりそと
云ふ物よめと云へば
五千早振出石の宮の神の駒ゆめな乘そよ祟りもぞする
六曉の雛に見ゆる朝顏は名のりぞせまし我にかはりて
故右大將になつきに弓そへて奉る
十陸奥の安達の眞弓ひくやとて君に我身を任せつる哉
みちの國の守せきうぢ國符ぞなくていれるとて
ゑし給ふに歌よみて奉る
八去年の春關に留ると聞ませば今年は花も長閑からまし
九花見には許しぞまし白河の水ならば社堰に淀まめ

ひら野の祭に諸共に詣づ一尺ばかりの松立てり
まひこめたり
○四千代のこもれるこゝちこそすれ
おきな
二葉なる人の小松を今日見れば
はこかたの磯にて京にのぼるに
一四白河の關より内は長閑くて今はこかたの急がるゝ哉
みちの國にて子のかくれたるに
二四我爲と思ひおきける墨染は己が衣の色にぞありける
三四言の葉に云置く露も無り鳥忍ぐさには音にのみぞなく
四四弱竹の己が此世を知すしておほし立てつと思ける哉
五四さも社は人に劣れる我ならめ己が子にまへ後れぬる哉
六四嘆ても云ても今はかひなきを蓮の上の玉とだになれ
時たゞがむすめ
七四世に經れば心の外にあくがれて君が立名をよそに社聞け
かへし
八四人馴ぬみつの御牧の駒なれや立名も更に有じとぞ思ふ
あづまの方へ下るに美濃國とき郡にて
九四旅人の侘しきものは草枕雪降る時のこほりなりけり
○五東路に爰をうるまと云ふとは行かふ人のあれば也鳥
あすは五日にあるべければ
一五夏の夜の短きもつらかす明日の菖蒲に逢むと思へば
秋の月を見るに雁鳴きわたる
二五月影に待つらむ里もある物を雁の羽風ぞ寒く聞ゆる
百首の歌
重之帶刀にてはべりし時春宮に歌召しければ
春二十首
三五吉野山峰の白雪いつ消えて今朝は霞の立かはるらむ
四五難波江に生出る蘆の程見れば數知らぬ世ぞ思やらゝ
五五昨日迄凍りて見えし山川の今日吹く風に瀧の音する
六五珍しく今日しも鴨の群居るは池の氷や薄くなるらむ
七五春日野に朝立つ雉の羽音は雪の消間に若菜摘めとや
八五春立ちてほどや經ざらむ信樂の山は霞に埋れにけり
九五常磐なる峰の松原春來とも霞立ずば知ずぞあらまし
○六けふ聞けば井出の蛙も騒ぐ也苗代水をたれ任すらむ
一六春の日の浦々毎に出て見よ何わざしてか蜑は暮すと
二六風にのみ任せては見じ梅の花折て袂に香をも移さむ
三六孰れをか花とも分む春立て散來る雪におも馴にけり
四六鶯のきゐる羽風に散花をのどけく見むと思ひける哉
五六我宿の花の盛になりぬれば道行く人も立ちとまる哉
六六鶯の啼く聲をのみ尋ぬれば春咲く花は我のみぞ見る
七六青柳の絲を汀に染めかけて春の風にや波もよりける
八六幼くぞ春のみとふと思ひける花の便に見ゆる也けり
九六花櫻つもれる庭に風吹けば舟も通はぬ波ぞ立ちける
○七春の日は行もやられず蛙鳴井出の渡りに駒を留めて
一七み絶せぬ井出の山吹影見れば色の深さも增らざり鳥
二七夏にこそ咲懸りけれ藤の花松にとのみも思ひける哉
夏二十首
三七花の色に染し袂の惜しければ衣替うき今日にも有哉
四七夏草は結ぶ計に成にけり野飼し駒やあくがれぬらむ
五七懸てだにあふひと聞けば千早振我ねぎ言の驗有かも
六七夏刈の萩の古枝も萌にけり群居し鳥も空にや有らむ
七七山城の淀のこ草を刈にきて袖濡ぬとは恨むべしやは
八七卯花の咲るあたりに宿りせじ寢ぬに明ぬと驚かれ鳥
九七初聲の聞かまほしさに時鳥夜深くのみも起き明す哉
○八春蒔きし山田の苗も生にけり諸手に人は引て植なむ
一八我身こそぼち增らめ梅雨の同空とは思はざらなむ
二八五月山照射に出る狩人は己が思ひに身をややくらむ
三八さを鹿の通ふも見えぬ夏草は我高しとは思はざらなむ
四八旅人のたく火と見ゆる螢こそ露にも消えぬ光也けれ
五八夏刈の玉江の蘆を踏しだき群居る鳥の立つ空なき
六八夏の夜は音づれもせぬ蟲なれど秋はた空に秋と告覽

七八草の葉も動かぬ庭の照日にも思ふ中には風や吹らむ
八八行馴れぬ道の茂さに夏の夜の曉おきは物憂かりけり
九八空蟬の空しきからは音もせず誰に山路を問て行すし
○九聲聞けば同じ緣りの蟲なれど日暮にこそ蟬も鳴けれ
一九我手にて夏は經ぬとや思ふらむ扇の風も今は物うき
二九秋風はふきぬと音に聞きしかど盛に見ゆる床夏の花
三九夏草の茂みをわけし君なれど今は心に秋ぞ來にける
秋二十首
四九秋來れど夏の衣も替なくに有し樣にも非ずなり行く
五九天の川水まさりつゝ七夕のかへる袂に波やたつらむ
六九七夕の歸りし日より秋風の夜毎に寒くなりにける哉
七九音もせで思に燃ゆる螢こそ鳴く蟲よりも哀なりけれ
八九おぼつかな越る山路の闇ければ蜩の音に宿をかる哉
九九秋風は昔の人にあらねどもふきくる宵は哀とぞ思ふ
○○啼く鹿の聲聞く毎に秋萩の下葉焦れて物をこそ思へ
一○待人の影は見えずて秋の夜の月の光ぞ袖にいりぬる
二○荻の葉に吹秋風を忘つゝ戀しき人の來るかとぞ思ふ
三○秋風のふかぬ宵だに有物をいとゞ今宵は人ぞ戀しき
四○衰をば知らじと思へど蟲の音に心弱くも成ぬべき哉
五○秋風は旅の空にも吹ぬらしせこが衣は返すらむやは
六○秋の夜の有明の月に拾へ共草葉の露は溜らざりけり
七○山城の鳥羽のあたりを打過ぎて稻葉の風を思社やれ
八○白露の奥手の稻を出にけり刈くる風はむべも吹けり
九○名取河梁瀨の波ぞ騷ぐなる紅葉や最ぞよりて堰らむ
○一秋風に汐滿來れば難波江の葦の穗よりぞ舟も行ける
二一白雲のおりゐる山の唐錦重ねて秋のきりぞ立ちける
三一風さむみ宿へ歸れは花薄草むらごとにまねく夕ぐれ
四一白露の置きける菊を折つれば袂ぬれつゝ色增りけり
冬二十首
五一紅葉ばの殘れる枝におく霜の暫の程を厭ふべしやは
六一淺茅生に今朝吹く風は寒く共枯行く人を今は賴まじ
七一水鳥の羽に置霜の寒きをば誰に馴てか消つべかる覽
八一霜の上に今朝降雪の寒ければ重て人をつらしとぞ思ふ
九一千早振神のかざせる日影にも解けずも霜の夜結ぶ哉
○二葦の葉に隱て住し津の國のこやも顯はに冬は來に鳥
一二我宿に降來る雪の消えざらば早晩春と待れましやは
二二數知ずかづくとすれど渡つ海の蜑の衣の寒げなる哉
三二降雪にぬれてまだ干ぬ我袖を氷ながらも明しつる哉
四二冬來れば氷柱に見ゆる石山の氷は堅き物と知らなむ
五二古郷の垣根の雪し高ければ通し跡も見えずぞ有ける
六二信濃なる淺間の山の怪しきは雪社消れ火やは燃なむ
七二燒人もあらじと思ふ富士の山雪の内より煙こそ立て
八二今朝見れば蜑の小舟も通ふめり潮滿海は凍らざるらし
九二近江なる安の入江に引網の氷をいをと今朝ぞみえける
○三信濃なる否には非ず甲斐が嶺に積れる雪のとけむ程迄
一三水鳥の住む池は皆凍りつゝ春立つほども我ぞ苦しき
二三年をへて雪降り積る白山の懸れる雲や孰れなるらむ
三三山の上とよそにみしかど白雪は舊ぬる人の身にもきに鳥
四三雪積る己が年をば知ずして春をば明日と聞ぞ嬉しき
戀十首
五三戀しきを慰兼て菅原や伏見に來ても寢られざりけり
六三思ひやれ我衣手は難波なる葦の裏葉の乾くよぞなき
七三風をいたみ岩打つ波の己のみ碎けて物を思ふ頃かな
八三打解る世社なからめ人知れず結ぶ計に逢ぬ身ぞうき
九三松島やを島の磯にあさりせし蜑の袖社かくは濡しか
○四淀野へとみま草刈りに行人も暮には唯に歸る物かは
一四その原や伏屋にとつく懸橋も誰故にかは我は渡しゝ
二四筑波山端山茂山繁けれど思ひ入るには障らざりけり
三四名取川渡て作るを島田をもるに附つゝ夜枯のみする
四四白波の離の島に立寄れば海士こそ常に誰ととがむれ
雜十首
五四高砂の尾上の松の我ならばよそにてのみは立てらざらまし

五四水の上に浮たる泡を吹風の共に我身も消やしなましと
六四憂しと思心に我はきにけれど黄昏時は空しからせじ
七四みさご居る荒磯波や騒ぐらむ鹽焼く煙靡くかた見ゆ
八四衣川見馴れし人の別るれば袂までこそ波はたちけれ
九四古は波をりきてふ松山に思ひかれたるはたの無き哉
〇五きし方や渚に立て見渡せばつらしと思し心やは行く
一五磯は皆潮満ぬれば鴛鳥の波の中にぞよるは寢ぬべき
二五水上に人のみ渡る川なれば心きよくも頼まれぬかな
三五武隈の塙に立てる松だにも我がごと獨有とやは聞く
四五枝分かぬ春にはあへど埋木は萌も増らで年をふる哉

信明集

亭子院うせさせ給ひつる御ぶくにて

五五去年の春枝にて折し藤の花衣にきむと思ひけむやは

又の年御はてに

六五故里の梢の紅葉散果てゝおのが散々なるがわびしさ

村上の御時に國々の名だかき所々を御屏風の繪にかゝせ給ひて、春日野

七五春日野の野守と身をも做てしが待らむ春を我物とみむ

三熊野

八五うきとも山道しらず尋こし我三熊野に入やしなまし

長柄橋

九五心だに長柄の橋は長らへむ我身に人は譬へざるべく

難波

〇六我戀は難波の葦の裏なれや波の寄々るそよと聞つゝすな

一六なにはえで藻鹽のみ燒すまの浦に堪ぬ思を人知るらめや

この歌仕うまつれと仰せごとあるに奉る、渚岡

二六うちつけに渚の岡の松風を空にも波の立かとぞきく

佐保山

三六さほ山の桂の紅葉散にけり戀しき人を待とせしまに

田子浦

四六我戀は慰めかねつ駿河なる田子の浦波やむ時もなく

しかすがの渡

五六ゆけどきぬくれど止りぬ旅人は唯しかすがの渡也鳥

六六年をへて君に心をつくまま山峯は雲ゐに思ひやるかな

しら山

七六昔よりなに降つめる白山の雲ゐの雪は消るまもなし

ふたご山

八六長き世に君と二兒の山のねはあくとも知ぬ朝霧ぞ立つ

よしの山

九六行年の越てはすぎぬ芳野山いく萬代の積りなるらむ

あさかの沼

〇七花がつみ且見る人の心さへ安積の沼になるぞ侘しき

なこその關

一七なこそ世に勿來の關は行かふと人も咎ずなのみ也鳥

こと御屏風の繪に紅葉散りたるを見る人々

二七ほの〳〵と有明の月の月影に紅葉吹おろす山颪の風

朱雀院のわか宮御もぎの御屏風の繪に梅のはな

山里の家にある所

三七色もかも外我宿の梅をこそ心しれらむ人は見にこめ

おなじ所雪ふる

四七降雪の下に匂へる梅の花しのびに春の色ぞ見えける

おなじ花折る女を男みる

五七梅の花折袂をも見つる哉香を尋ても訪はむとぞ思ふ

初鶯

六七待つ人にいかでつげまし雲の上に仄に聞ゆ初鶯の聲

たき落ちたる所

七七紅葉の落添りぬる瀧つせは秋の深さぞ底に見えける

内裏の御屏風の繪に子の日したる所

八七行歸り野べに木高き姫小松これも子日の二葉也けり

九七子日して歸る家路の遙々と行くさき遠く思ほゆる哉

天暦八年中宮の七十の賀の御屏風のれうの和歌

〇八わたつみの渚の岡の花薄まねきぞよする沖つ白なみ

芳野山

一八芳野山雪には跡も絶にしを霞ぞ春のしるしなりける

おほあらきの森

二八時鳥きなくを聞ば大荒木の森こそ夏の宿りなるらし

うきしま

三八憂事も聞えぬ物を浮島は所たがへの名にこそ有けれ

磯上

四八年をへて云古さるゝ石上名をだに變てよを經てしがな

ふしみの里

五八行春に伏見の里と告てしが逢まくほしみ立や止ると

高砂

六八すむ鹿のなかぬ時さへあやなくも聲高砂と聞渡る哉

をばすて山

七八秋の夜の曉がたの月みれば姨捨山ぞおもひやらるゝ

こゆるぎの磯

八八風吹ば玉もりいだす白波のよせすともなき小搖の磯

又こと御屏風三月

九八鶯のなき歸る音を知べにて春の行方を知る由もがな

六月

〇九水上に祓へて流す麻の葉ををりな隱しそせゞの白波

一九葦のねの生ふる荒田を打返し下にぞ思ふ心あるらし

二九あぢきなく思ひこそやれ七夕の稀に逢らむ夜の下紐

三九散ぬべき紅葉の色も月影も山端にこそ止らざりけれ

四九紅葉折る折も變らでいつのまに降敷ぬらむ峰の白雪

五九今日を知る雲の衣も宜なれや清かに見えつ今朝の初霜

六九霰ふる峰の山べの榊葉にゆふかけてこそ暮は歸らめ

志賀の山ごえしたる所

七九我だにもけふ珍しく見る山に數多の年も越にける哉

八九山路には絶て水だに無りせば最ぞ涙ぞそぼち增まし

九九そぼつ共爰に暮さむ山の井に戀き人の影やみゆると

朱雀院うせさせ給ひける時

〇〇悲さの月日に添へて今よりは我身一つに止るべき哉

御いみはて〻人々出でける日

一〇時雨つゝ梢はこゝに移るとも露に後れし秋は忘れじ

式部卿宮敦實の出家し給ひける時御とぶらひに

小野の宮殿まゐり給へるに御あるじなどあるついでに

二〇嬉しきも哀も深き春なれば別れ難くも見ゆるけふ哉

敦慶のみこのむすめ中務に

三〇年ふれば忘やせむと思ふ社逢見ぬよりも我は侘しき

かへし

四〇長らへむ命もしらぬ忘れじと思ふ心は身に添りつゝ

五〇うしと思ふ心の越る松山は頼めしかひもなくぞ覺ゆる

かへし

六〇秋といへど色も變らぬ松山は立とも波の越む物かな

をとこ

七〇懲ずまに絶るまもなき水莖の泣々書る文にぞ有ける

又をとこのかへりて

八〇千早振かもの葵を祈りつゝかざして君を頼みける哉

かへし

九〇千早振かもの葵を懸くるより最ぞ浮ても思ほゆる哉

をとこ

〇一神代より忌むと云なる梅雨の此方に人を見由もがな
　かへし
一五月雨の此方彼方も逢事はいつも忌とぞ人は云なる
　又かへし
二孰こにも思もいらむよと共に忌ぬ絶まの中も何かは
　をとこ
三今宵ねて近江へ行とみし夢の悲しと袖にふるは涙か
　かへし
四一程もなく止ぬる雨に喩るはいかに悲しき涙なるらむ
五一限なく悲しと人を思ふには物思ひます物にぞ有ける
六一梅雨は君にや有けむ子規人しれぬ音をこゝら鳴つる
　かへし
七一爭でかは聞咎めつる時鳥人しれずこそ音をば鳴つれ
　をこと
八一人やりに有ぬ事にもあらなくに身も徒に成ぬべき哉
　かへし
九一身を捨て思ふと見しは徒に成べき事に卿たれもせむ
　又をとこ
〇二僞をたれならはして限なき我信をもうたがはすらむ
　かへし
一二世の人の同じ心にあらばこそ皆おしなべて僞もせめ
　又かへし
二二偶さかに信やすると君ならぬ人してよをも知らせてしがな
　又
三二身の上に人の心も知ぬまは事ぞともなきねをのみぞ鳴
　〇かへし
四二君だにも事ぞともなき涙をばいかに知てか哀と思はむ
　又
五二明る迄と思ふ時だにある物を泣々とくも歸るべき哉
　かへし
六二我思ふ心もまだき歸るまも深くは非ぬ中にぞ有ける
七二けふの内に否ともう共云果よ人頼めなる事なせられそ
　かへし
八二今と云て假の心も見べきをかひ無き人に頼めつる哉
　又
九二かくなむと人しるらめや行道も心留めて思ほゆる哉
　かへし
〇三行道も止らば止れ知とてもやるべき事の心ならねば
　又
一三早く此上の十日も過なゝむ廿日にてだに晦日也やと
　かへし
二三廿日にて卅日ならむとも思えず後やよそかにならむと思へば
　又
三三涙とも雨とも分ず大方に我はふるとぞ人はみるらむ
　かへし
四三涙とも知ぬ先よりむべ社は常より疾も詠められけれ
　又かへし
五三知ねども同じ心に詠めける事ばかりをぞ哀とはきく
　又
六三契けむ日をも過ぐさじ七夕に我ごと斯や思ざりけむ
　かへし
七三七夕の契けむ日は過す共譬ふべしやは事もゆゝしく
　又かへし
八三ゆゝしとも思はざり鳥七夕は忘れぬ中の有ま欲さに
　又
九三數ならぬ心の内にいとゞしく空さへ許す頃の侘しさ
〇四我を社世に見苦しく思しか人はいかなる心なるらむ
　又かへし
一四逢もみずとをば云む方もなし誰がつけ初し病なるらむ
二四かひもなき君によりつゝ碎くれば心も無も成ぬべき哉
　又
三四憂き增る我身も知でよそにのみ聞し昔に返してしがな

四四徒に度々毎にしぬといへば逢には何を替むとすらむ
　かへし
五四しぬ〳〵と聞々だにも逢みねば命ないつの爲に殘さむ
　はじめてのつとめてかへりたる、女
六四儚くて同じ心になりにしを思ふが如く思ふらむやは
　かへし
七四侘しさを同じ心ときくからに我身を捨て君ぞ悲しき
　ちかづきて、をとこ
八四終夜風も涼しく吹く頃は心ことにてまたじとやする
　又
九四波高く松の懸れるよにや有む頼めて行ぞ靡かずと云
　かへし
〇五未の松昔よりまつ君を置て波高く共こさじとぞ思ふ
　鏡かりてかへすとてしきのしたにかきつく、男
一五曉の別はをしの鏡かもおもかげにのみ人のみゆらむ
　人のゆるさぬ中にやありけむ、をとこ
二五染て思ふ色は深きを口なしの云れぬ色と人や見らむ
　いきたるにあはねば
三五可惜よの月と花とを同くば哀しれらむ人にみせばや
　かへし
四五君ならで誰にかみせむ梅花色をもかをも知人ぞしる
　内へいそぎまゐりたるつとめて、女
五五いそぎけむ心の中をしらぬ哉もし百敷に床や定むる
　かへしあるべしとか
　又　女
六五有しよりつらき處も勝らなむかひ無よりは墻て已なむ
　山里にあるに女もさてあるに
七五我ごとや人も云ふらむ山里は心細さぞ住うかりける
　おなじ女のぶくなるころ絶えまがちなるをうらみて
八五なき人もあるがつらきを思ふにも色分れぬは涙也鳥
　同じ頃いきて叩くにあけねば、をとこ
九五東雲の明けざりしかば終夜槇のとよりぞ立歸りにし
　かへし
〇六夏の夜も槇の板戸も徒にあけてくやしく思ほゆる哉
　絶えてのちきゝたるに鏡をいだしたれば、男
一六あけはみじ影珍しき增鏡蓋よりみよりねこそ泣るれ
　かへし
二六心から見ざりし影は增鏡みよりなく共今はかひなし
　おなじころ、女
三六思遣る心もよゝも後れぬる野にも山にも行とみえつゝ
　かへし
四六世と共に惑ふ心や人めには野にも山にも行と見ゆ覽
　こと人に通ふときゝて、をとこ
五六年をへて我こそ下に住の江の松をば人の上と聞つゝ
　かへし
六六心にも非で浮世に住の江の年ふる松ぞみぬは苦しき
　女小野の宮に參りてさぶらふを聞きつけてさぶらひにねて月のあかき夜人していひやる
七六戀しさは同じ心に非ずとも今宵の月を君みざらめや
　かへし
八六さやかにも見るべき物を我は唯涙に曇る折ぞ多かる
　行平が三の君をたえたるころ、女
九六侘つゝも此世はへなむ渡り川後の淵瀬と誰に問まし
　かへし
〇七此世をばおひも擠ぎて渡してむ後は始の人を尋ねよ
　閑院のおほい君いと重く煩らひて怠れる頃いか
　であはむなどいひておこせたる
一七辛くして惜のとめたる命もて逢事をさへやまむとやする
　かへし
二七諸共にいざとは云でしでの山爭でか獨越むとはせし

さてきたるにえあふまじきやうありてかへりて
つとめて
三七 曉になくゆふつけの我聲に劣らぬ音をぞ鳴て歸りし
かへし
四七 曉のね覺の耳にきゝしかば鳥より外の聲はせざりき
人の文をえてかくせば女の怨むれば文のうらに
かきて見する
五七 此はかく怨み所もなき物を後めたくは思はざらなむ
女のもとにやる
六七 秋とだに思ざりせば人しれず時雨る事を何に告まし
七七 いひ初めぬ程は中々ありにしを靜心なき昨日けふ哉
返事にかみをつゝみておこせたれば
八七 割なくて止やしなむと侘つるに助る神をみるが嬉さ
九七 まだ知ず惑ふ心に最どしく覺束なきは侘しかりけり
返り事にみゝずがきをしておこせたれば
〇八 侘しきに戀に惑へる心には其とともしもみえずぞ有ける
一八 程もなく消ぬべきよに白露のつらかりきとな思置れそ
二八 音無の山より出る水なれやおぼつかなくも流行く哉
三八 中々に覺束なさの夢ならば逢はする人も有もしなまし
四八 人しれぬ思をすれば秋萩の下葉焦るゝ物にぞ有ける
五八 露ほ置ど我をる宿の萩がえは斯こそ秋を知ず顏なれ
たいふの君といふ人にいひやる
六八 思事ありて久しく成ぬとはきくか聞ぬか知て知ぬか
右大辨なくなり給ひて人々いみにこもりてある
ほどに
七八 ものをのみ思ふねざめの枕には涙かゝらぬ曉ぞなき
おとうとの許に久しくあはぬころ
八八 手荒びに火桶のおきや割りてけむ戀しき人に逢ぬ頃哉
五月のせちにやあらむ題たしかにしらず
九八 限なく思へる駒に較ぶれば身にそふ影は後れざり鳥
さくらの花をみて
〇九 年毎のなをだに變へば世の常の櫻とのみは云ず有まし
そでといふ女使ひたる人に其の女につけていふ
一九 人しれぬ我物思の涙をば袖に附けてそみす可りける
二三日ばかりあはぬ女に
二九 思きや相みぬ程をいつなりと數ふ計にならむ物とは
堀川のおとゞの宮の權大夫ときこえし時みちの
くによりきこゆる
三九 明くれば離が島を眺めつゝ都戀しきねをのみぞなく
大別松といふ人の出家したるをいひやる
四九 いかにして君が心ぞたちつらむ小松の山の墨染の雲
しれたりといはれたる人の牛のしりにたちては
しりけるを見て人々のかれを題にて歌よまむと
いひければ
五九 荒牛のしたしの浦の床しさに取てみつれば彈れに鳥
はせをば、長谷寺やけたりときくところ
六九 世中の賴み所にせし物をはせをば斯や燒かむと思し
中務に忍びて物いふよ時鳥のなくをきゝて
七九 今宵社しでの田長も聞つらめ今は五月の空に知れむ
かへし、女
八九 時鳥聞渡るとも五月雨に空ごとにだに人のなさなむ
九九 知るや君知ずばいかにつらからむ我斯計り思ふ心を
〇〇 みるめ故蜑ににたれど女郎花けふは我にぞ潜き劣れる
御障子のゑに深き山に鶯の聲をきく人あり
一〇 鶯のなくねをきけば山深み我より先に春はきにけり

以三相傳之本一書寫校合了消字等如レ本也
建長元年八月日　藤原朝臣在判

元眞集

朱雀院の御屏風に、正月一日
二〇 荒玉の年を送りて降雪に春とも見えで今日の暮ぬる
中春池のほとりに山吹櫻さけり女すだれをあげ
て見けり
三〇 我宿の八重山吹はちりぬべし花の盛を人の見にこぬ
櫻の花のもとに人々あそぶ
四〇 春風も今年ばかりは櫻春人のこゝろに任せたらなむ
田うゑのころ
五〇 淺綠野べの荒田を打返しせなかに秋を待ちや暮さむ
暮の春池のほとりに藤の花さける所に人々遊ぶ
六〇 岸近き松に懸れる藤の花波さへをりて返るめるかな
同じ花さけるわたり
七〇 藤の花咲る渡りをこぐ舟のよそにて波は思ひ懸なむ
八〇 水のわのをりゐる毎に亂らざり池の葦鶴立ぬなるべし
はじめの夏ほとゝぎす
九〇 待つ人はあまたありとも立とまり山郭公二聲となけ
中夏、五月五日
〇一 駒なべてすさめぬ澤の菖蒲草けふに逢ずば猶や刈まし
七月七日
一一 一年に一夜はこめて七夕の朝は今宵の月日ならぬか
初雁を送る
二一 初雁を送るなりけりふき風の雲ゐ遙に吹てすぐるは
中秋十五夜
三一 白露のおける草葉に浮ばずは今宵の月を晝と社みめ
田かる所此題相違歟落歟不審
四一 秋の田刈を立出てみれば足引の山の錦に劣ざりけり
初の冬網代の上におきなをり
五一 我宿に有べき物を此度の網代によりてひをもふる哉
雪みる所
六一 大空に花ともみえて散雪の雲の上にて尋ねてしがな
十二月つごもり
七一 徒に過る月日はおほけれど今日しも積る年を社思へ
同じ十二月春宮女御藤壺の御局にてちゝの御五
十賀うちにせさせ給ひしにその御屏風さうじに
て奉る初の春男女かた岡の水のほとりにて遊ぶ
八一 子日する山田の水の影しあれば千年の松は影こえ鳥
梅の花ある所に人あそぶ
九一 山風に任するよりは梅の花匂の宿につきずも有かな
松に藤のかゝれる所
〇二 春深み咲きて匂へる藤の花松ぞ千年の宿りなりける
人の家の花橘にほとゝぎすなく
一二 よになれぬたゞ一聲も時鳥はな橘にかくれてぞなく
瀧あるところ
二二 山高み落ちくる瀧の白糸は空に亂るゝ玉かとぞみる
池のほとりに鶴たてり
三二 葦たづの千代の影すむ池水は波立てれ共長閑かり鳥
おなじ題
四二 水底に沈める千代の影をみて池の葦たづ長閑かり鳥
頭しろき翁ある所に雪ふる
五二 年深き色としみれば白雪のふるにも己が上を社思へ
人の家に竹あるところ
六二 窓近き常磐のかげは呉竹のよをへて深き綠なりけり
おなじうちのみさうじの繪に女宮のつけさせ給
うける女稻荷にまうでたる所
七二 千早振神の社にいのりくる道の程さへ面馴れにけり
吉野川にくれくだす所
八二 吉野川おろす筏のをりごとに思ひもよらず波の心を
廣澤の池のほとりに女どもねぬなはくる
九二 廣澤のいけのねぬなはくりよする

相模の足柄の關に旅人ゆく

三〇足柄の山に繁れる玉小菅行かふ駒らすさめざりけり

いではのやそしまに舟に乗りて人あそぶ

三一八十島の浦の渚に數へつゝ止れる年も許多へぬべし

みちの國の安積の沼のほとりに京よりくだれる人たちとまれり

三二音にきく安積の沼の朝ぼらけ絶ぬ煙は名のみ也けり

屏風の繪に柳おほかる人の家にかすかにてあり

三三青柳の糸によりくる年をへて浮世背けば跡も立ける

旅人道ゆく櫻の花ちる

四三いつしかと行故里の櫻花我だにみての後にちらなむ

おなじ題

五三行くてだに爭でとくみむ我宿の櫻はけふの風に殘らじ

郭公

六三時鳥こぞの初聲飽ざりし人のきくがに先もなかなむ

櫻咲きたる家に女見いだしたり

七三我宿に咲にし日より櫻花かくこそはみめ飽ずも有哉

また

八三我宿の櫻は風に散はてぬあすこむ人や悔しと思はむ

山里に梅さける家に男まらうど馬よりおりて立てり

九三知人もなき山里の梅の花匂ふ日よりそきても尋ぬる

卯月のついたちにいまだよそなる女に

〇四けふよりは偖も過なむ夏衣みるより薄き心とやみむ

かへし

一四懸てだに云社うけれ夏衣あるより增む薄さと思へば

をとこ

二四逢でふる程に暮たる唐衣けふは身さへも流るべき哉

かへし

三四大空に降てぬるとも濡衣をほしても侘ぶる頃の詠か

をとこ

四四うれ高み鳴音空なる時鳥おとにたへてや夏を過さむ

五月五日おなじ人

五四菖蒲艸ねも心みで逢事をいつかと待しけふは暮しつ

かへし

六四待きけるけふ過ぬれば菖蒲艸今は五月も非じとぞ思

さてのあしたに、をとこ

七四いだにねず成にし物を逢事の夢かとのみも思ほゆる哉

えあはでかへりて、男

八四寢覺にて夜は明ぬとも杜鵑こと語らはむ一聲もせず

かへし

九四怪しさにねざめて聞けば子規など古郷に聲も聞えぬ

小野の宮の御ものいみにさま〳〵語らひしごた

ちに女郎花につけて

〇五移ろはむ程だにみえむ女郎花心長閑に露はおかなむ

同じ年前栽合に神無月を題にて

一五神無月時雨る空の紅葉をば秋をたむくる幣と散ける

過ぎにし秋ををしむ

二五霧立て別し日より時雨つゝ過にし秋ぞ悲しかりける

もみぢを惜む

三五秋霧の立ぬさきにもさほ山の紅葉の錦殘らざりけり

神無月といふ心を

四五散果て木葉も空に殘らぬを神無月とは云にぞ有ける

又

五五雁音は霜と共にやおきてくる時雨る空に鳴聲のする

菊の花を惜む

六五年深き色としりせば初霜の殘しおきけむ白菊のはな

二條の式部卿の御おとゞの六十の賀北の方のし

給ふ御屏風の歌松原のあひだにみな渚にいでゝ

人あり

七五日をふれど松の濱べに有舟の千年をみむと出ぬなるべし

田舍の家の前に川ありそれに河龜ながる

八五河龜も今萬代はもろともに波の底にてすみぞ渡らむ

大將殿の女御のなでしこ合せに

九五百敷に移し植ずて常夏にをへて絶ぬ色を見るべき

〇六山がつの垣ねを狹み生初めて色ともみゆや瞿麥の花

天德三年九月十六日庚申に中宮の女房歌合せむ

といふによりめる、庚申

一六難波潟こげぞ小舟は葦わかのえざる程社久かりけれ

花すゝき

二六月影にほのかに見ゆる花すゝき風の便に結びつる哉

萩

三六高砂の尾上の萩を折つれば鹿の立どや疎くなるらむ

女郎花

四六女郎花野べの故里思ひつゝ宿りし蟲の聲やこひしき

きりぐ〳〵す

五六露むすぶ秋はてがたの蟋蟀草のねごとに寒くこそ鳴け

日ぐらし

六六秋風の萩の下葉に吹亂る空にみちぬる日ぐらしの聲

松むし

七六松蟲の絶ずなくなる女郎花千年の秋はたのもしき哉

同じ八月二十三日女御の前栽あはせのむしのう

た

八六人しれず秋のくれぬる女郎花蟲のねよりも尋つる哉

萩

九六萩の葉に風の涼しき秋まてば暮に怪しき物を社思へ

蘭

〇七武藏野の草のゆかりに藤袴わか紫にそへてにほへる

なでしこ

一七露結ぶ風は吹どもとこなつの花の盛にみゆる秋かな

菊の花

二七所より植るも著く菊の花移ろふ色をけさはまたなむ

紅葉

三七立田山ふかき紅葉も君こずば夜の錦と猶ぞくれまし

同じ年二月三日うちの御歌合にかたゝ〳〵のをよ

める、霞

四七吉野山霞たちぬるけふよりや朝の原に若菜つむらむ

右方同じ題

五七春霞立や込つる小倉山ほとりのかひに雪も見えぬは

左方

六七今朝よりは霞山邊に立昇り三輪の故里仄かにぞみる

おなじ

七七冬乍らけふばかりにや春霞たなひく空のとに見ゆ覽

人のれう、鶯

八七春きぬと待らむ顏に鶯の木高き枝にふりでつゝ鳴く

又右のれう

九七春は猶をしみつゝ鳴く鶯の聲に雲居も匂ふべらなり

左、柳

〇八淺緑みだれてなびく青柳の色にぞ春の風はみえける

又左

一八青柳の糸には節ぞ無らまし風のくるにも亂ざるべく

また、櫻

二八咲き咲ずつげよ吉野の山櫻霞晴なばよそにてもみむ

左

三八よと共に散ずもあらなむ櫻花飽ぬ心はいつか絶べき

右、山ぶき

四八散迄も賴もしき哉山吹の八重を盡さむ程もありやと

同じ方に

五八花盛八重山吹を折つれば井手の蛙のねにやなくらむ

左、藤

六八諸共にちよは盡なむ藤の花松に懸らぬ春しなければ

右

七八常磐なる松に懸れる藤波の花だにちるな春の名殘に

左、くれの春

八八あすだにも暮べき春にあらば社心長閑にけふを惜まめ
右、卯花
九八咲にけり我山里の卯色は垣根にきえぬ雪とみるまで
右
〇九白妙にさける卯花闇ならば月とやみまし妹が垣ねは
人のれうに、時鳥
一九初聲のよはに聞ゆる時鳥わがごと人も待ちやしつ覽
左のれう
二九夏の夜の短さよりも時鳥まだ二聲となかで行くらむ
同じ方のれうに、夏草
三九夏草の繁きに跡もみえぬ哉野中ふる道就れともなく
右
四九夏草はしげりにけりな玉鉾の道行人の結ぶばかりに
同じ方のれう、戀
五九戀しさの忘られぬべき物ならば何しか活る身とも恨みむ
右
六九君戀てあふとみる夜の曉は夢に嬉しきかひ無りけり
同じれう
七九我胸の絶す燃るを忍ぶ哉人にいふべき中にし非ねば
右
八九君戀ふと且は消つゝふる程を斯でも活る身とや見らむ
九九打解ていをだにねゝば逢事の夢路をさへぞ隔果つる
〇〇戀侘て堪ぬ涙の洩れければ遂に水屑となをや流さむ
一〇夏山の繁き思はふりはへてしげらぬ程に道迷ひけり
二〇夢にだに逢とみる夜の曉は落る涙のかげ添はりけり
春筑紫にて歌よみあまたしてよむに天つつみち
といふ所を十二にて
三〇須磨の蜑の包て底を潜かねば深き玉藻も見えぬ也鳥
つくづくしを十三にて
四〇雲かゝる空に漕つく筑紫船就こか今日の泊なるらむ
唐くだ物おなじ題

五〇小搖ぎの渚に風の吹しからくだも殘さず波もよせ鳥
五葉
六〇跡絶て行もかへるも年をへて人のこえふる相坂の關
うへとの濱
七〇大島の鳴門の浦の漕ぎ難さ上との濱も斯くや有らむ
すゞむし
八〇飛鳥川岸や崩れて打濁すすむ白波のせゞにみえぬは
九〇み山木のはたな分ても白露はをかし〳〵のまつもみつ覽
らに
一〇人知らでたちさる山の唐錦小倉の山の紅葉なりけり
りうたう
一思きや萩の下葉の露計りうたうまひさきに移はむとは
おほみつ
二蘆分のを舟に乘て障り多みつきに逢見ぬ戀もする哉
十一にて梅花に雪のかゝれるを見て
三匂をぞわくべかりける梅枝に花紛はしてふれる白雪
若菜
四君が爲若菜摘つゝちよはへむ珍げなく野べはみる共
又
五吉〻山麓の雪は消えにけり衣かたしき若菜つむなり
梅花
六春霞立つ片岡の梅の花にほはざりせば誰か知らまし
紅梅
七白妙に匂ふもあかぬ梅の花紅ふかきいろさへぞ見る
ある所にて雨のうちの紅梅をしみて文作り人々
歌よむに
八紅の梅の花がさ雨もよにけふを惜まず花をみださじ
同じ年はじめの所の紅梅を殿上人所の衆なとし
て惜む
九梅の花紅ふかき春のよの色をもかをもてらす月かげ
春藏人どころにかれこれうこのうまばにて櫻を

惜む
〇二櫻花散て千世をもみてしがな飽む心は僧もありやと
人のさうじの繪に山里に櫻のはな咲けるに道行
く人のいひいるゝ
一嵐のみ吹く山里の櫻花いとゞのどけき程はみえじな
梅の宮にて櫻の花を惜む
二風にのみおほせつれ共櫻花けふは心と散果てぬべし
ある女の許にて櫻を借む
三一とせに一年ながら散ず共いつか櫻の花にあくべき
又おなじ
四春風の吹くたびごとに櫻花心のどかにみる程ぞなき
人々別るゝ所にて櫻花ちる
五惜めどもとまらぬ君を櫻花別るゝ道のみえぬ迄ちれ
四月一日人のもとに時鳥待つ
六我にまづ鳴て聞かせよ時鳥まだよに馴れぬ頃の一聲
同じ
七里よきてまづも鳴なむ時鳥みの憂事も傳へまはほし
八月十五夜くら人所にて八月の心をあはれがり
て立ち出でゝ行くに麗景殿　み曹子のごだち花
薄を折りてたて蔀よりさし出したり
八白露のおくより招く花薄結ばぬさきにまづぞ亂るゝ
かへし
九なべて人結ばぬさきの花薄風にのみ社亂るべらなれ
又、をとこ
〇三定めなく招く尾花の花薄ほに出る秋ははからるゝ哉
又、女郎花
一三我宿に植てだに見む女郎花人はしたなる秋の野よりは
秋の野にいでゝ遊ぶ
二三なべて咲花の中にも女郎花多かる野べは過うかり鳥
嵯峨の前栽はる
三三百敷に移し植うとも女郎花我が尋ね來し心わするな
おなじ野にて人にいひかく
四三めにつくは少かり鳥女郎花許多多かるさが野なれ共
女郎花のはなもてきて人の植うるに　植つる
五三蟲のねの仄かに絶ぬ女郎花いとゞ物思ふ宿
ときゞゝ通ふ人のもとに女郎花の花うゑ程へて
六三女郎花植て後なりいかなれば露の心もおきてなる覽
山里のをみなへし
七三嵐ふく深山里なる女郎花うしろめたくて歸るけふ哉
物いふ人にこと人かよふと聞きていきたるに女
郎花を折りていだしたるに
八三女郎花なべて草葉に置露の秋はて方に見ゆる頃かな
ごせゞの前栽ほるとて
九三女郎花許多見捨てゝ過行かばさがの心と思ふべき哉
その野より歸りたるにあるさうじのごだち物い
ひかくるに
〇四百敷に移して植る女郎花心おごりのいかゞせざらむ
萩の花人にやるとて
一四さを鹿のねに鳴初むる秋萩を折てぞみゆる人の心は
或人の許に行きたるに萩を折りてさし出したり
二四秋萩の色づく儘に鳴く鹿の聲をばよその物ときゝ鳥
人の家に萩植えたるみて
三四妻戀る鹿の涙もかゝらじを今さへかゝる萩の上の露
人どもの遊ぶ所　萩の花あり
四四秋きても程はへぬれど此暮に驚くばかり風は吹ぬる
六月十餘日秋のせちに入る
五四今宵より荻の葉風の音すらし秋の境にいりや立らむ
七月七日
六四一年に今宵計りぞ天の川戀つゝ渡るせをすごしてよ
同じ題を
七四天川今はみなせに成なゝむけふ彦星の舟路こぐべく
同じ秋を

八四大方に吹く秋風も心あらば物思ふ宿の荻の葉はよけ
七月七日秋の夜の蟲といふ心を
九四名にしおふ草の枕に思ふらむ鳴く聲絶ぬ秋の夜の蟲
七月山寺に參るついでに野べの草村の露をみる
〇五秋の野をけさきて見れば闌わがぬぎ懸し露も拂はず
紅葉を遠くみやる宮の御屏風の繪に
一五秋霧はたちかくせども足引の山の錦は玉にみがけり
おなじ題
二五龍田山峰の紅葉もみるべきに霧たちこめる秋の空哉
波近き山の紅葉さかりなる所を人の馬にのりて
行く
一六足引の山の錦を惜むとて渡さへけふは立ぬなるべし
十二なりけるとし九月によめる
四五花薄招く袂は許多あれど秋はとまらぬ物にざりける
武藏守ひでしげが鶴のかたとうかいあせち殿に
奉れり其の使に白銀の龜の箱に藥納めてそれに
五五今年より君に千年を讓るをぞとうかいだうに求出たる
かへし
六五千年ふる鶴の有けむ方にやは今日萬代の龜をすませむ
同じ殿の北の方はぐろめすみゑ舟につみてすみ
うきよしある所に
七五をりはへて君が薪に漕舟は住江にこそ程はへにけれ
親のしもつふさになりて下るに兄の近江守の打
出の濱にてよめる
八五諸共に打いでの濱に立つ波の返らむ程を思ひ社やれ
かへし
九五よの人の打出の濱といふとは涙のさきに立名なり鳥
さて尾張より歸りて藏人所にゝしたる夜もの哀
れにてこれかれ秋の夜の雨といふことをよむに
〇六東路へ行く旅人を別れにて思ひこそやれ秋の夜の雨
〔きちかう〕

一六白露のおける草葉に風涼し曉ちかくなりやしぬらむ
くさの香
二六白露のいかに染れば草のかう置度毎に色のまさらむ
ほそををとこ
三六春の田を打返しつゝ塩立つるほそををこみと思ける哉
たゝの戀
四六霜氷心もとけぬ冬の池によふけてぞ鳴くをしの一聲
ある所の前栽合に
五六白雲のはるけき峰の姫小松君が千年の影とこゝみれ
志賀の山越に紅葉のかげに鹿
六六瓜生山紅葉の中に鳴く鹿の聲は深くも聞えけるかな
宇治の網代にて
七六紅葉の流るゝ川はむば玉の夜ぞ網代の色はみえける
八六秋くれば移ふ色のこきからに萩の下葉を見ぞ露けき
九六秋の野は唐紅になりに鳥鹿のふりでゝ鳴初めしより
〇七靡くとも頼みける哉花薄風にのみこそ任せたりけれ
一七さを鹿の音に鳴そむる秋萩を折てぞみゆる人の心は
人の許に女郎花植ゑて
二七我宿に移し植つる女郎花秋の野風はあたりしもせじ
宇治のあじろにて
三七水上に紅葉散るらしうぢ川のせゞさへ深く成增る也
人のもとへやる
四七花薄風に亂るゝ夕暮ぞあしかりけりと思ひしらるゝ
五七いつとなく時雨の空に秋くれば物思添る事ぞ多かる
六月に萩の下葉をみて
六七先だちて萩の下葉も色附ぬ後れて秋はいづく迄きぬ
朱雀院の御屏風にはらへする所に
七七大弊をはらへよるとも此川の神はしるらむ深き心は
三宮にこちまき奉るとて
八七五月待つ程は澤水增りつゝ淀の眞菰もおひにける哉
九七木隱れて五月まつまの時鳥忍びてなけど聲盡ぬべし

和歌合に
〇八卯花の影にかくれてけふまでぞ山郭公聲もをしまむ
一八今よりは聲な惜みそ時鳥五月待つまの程ぞあるらし
和歌所にて
二八櫻花をしむに年の老ぬれば恨み すぎし折ぞ多かる
三の宮の御息所千日若菜を奉る小松あり
三八片岡の子日の小松を雪まより心殊にもけふぞ引つる
また
四八霞立野べの若菜をけふよりぞ松の便に千代は積べき
同じ殿の北の方おとゝに若菜まゐり給ふ
五八淺緑野べの松引く子日し一摘る若菜は千世添はるべき
〔子日承香殿女御〕
六八君引で子日の野べの老ぬるを何を待つとか世をば盡さむ
人の子うみたる七夜に
七八兼てより千年の影ぞ思はゆるまだ二葉なる今年生の松
おなじ心を
八八雲居にも今ぞまつらむ蘆べなる聲振立つる鶴の雛鳥
九八冬の夜のながきを送るほどにしも曉がたの鶴の一聲
物へ行く人にこうちきぬはでやる
〇九此度はえだに縫敢ず唐衣たつにとまらぬ涙ならぬに
一九年毎の春の別をあはれとも人に後るゝ人ぞしりける
物へ行く人にきぬとらすとて
二九別路の草葉の露も拂へとてやがて乾かぬ衣をぞやる
三九同じくはきぬに心も類へてむ涙の止る物ならなくに
四九道露は拂ふはかりの唐衣かけてもうすき心とな見そ
五九みぞきつゝ別るゝ方の川波に立返りけむ程を社思へ
六九釉の上にうべ白露ぞ懸りける別るゝ道の草の緑りに
七九別れては思出よと朝ぼらけ露けながらもぬるゝ衣ぞ
八九いかなればつげでも人の別けむ深き心を後れざりける
その所にて人の別をしむ
九九よそにても君忘れめや百年のおのが樣々をしむ別を
〇〇惜まねど我身のいける程は猶思ひも知ず長らふる哉
はらからの身の沈むよしよめりけるに
一〇君をだに浮べてしがな涙川沈む中にも淵瀬ありやと
服にて親のむかへてかへるにはやう川を渡るとて
二〇音にきく淵せの川を立返り悲しき瀬をも渡りぬる哉
正月六日鶯のはつねを聞きてはらからに
三〇鶯の初音ばかりぞ聞ゆなる春の到らぬところ〳〵に
四〇大磯の浦に漕よする白波の打みて歸る程はまさらじ
忘れたる女の家に雨宿りしてゐたるを今はこゝ
にかといひたり
五〇古里は雲ゐの外に飛雁をよそなる人は歸るとやみむ
六〇憂事もまだ白雲の山のはに懸るやつらき心なるらむ
七〇深山木のこりやしぬ覽と思ふまに最ど思の燃增る哉
八〇君により幾ら許りか落ぬらむ盡ぬは人の涙なりけり
九〇はかもなき跡と見乍に嬉しきはいくら計の涙出らむ
〇一煙とぞ憂世の事は成ぬべき空に分るゝ我名とならば
一一神無月時雨に添ひて紅葉の降もかひ無物にざりける
二一春風になびく柳のいとよわみ心細くてたゆる君かな
三一憂事を空に知せば白雲のかひなき山に懸らましやは
四一秋野の草葉をみれば押なべて憂身の程に置る白露
五一忘貝よせもやすると住吉の岸うつ波を數へつるかな
六一思遣る夢路變らぬ物ならば覺束なしと君もまちみむ
七一いひしらぬ思ひぞ鄙の東雲に己が衣ぞ露けかりける
祓へしたる女をみて
八一御禊し夏越のよゝり人知ず頼み渡ると人は知ずや
九一をしの聲絶ず鳴つる初霜に心をさへもおかせつる哉
〇二下紅葉散り來る秋の風旬にしぐれぬ先も袖ぞ露けき
一二忘れ貝拾ふ計に住吉のうらみてわたる程はへにけり
二二花盛すぎもこそすれ女郎花匂ひて風にまづ靡かなむ
三二吹く風に靡く物かは女郎花露の心もおかせざらなむ

一消ぬべき露の我身も言の葉に懸れば止る程ぞ悲しき
二忘られぬ心を君にとゞめてむ今は限に思ふなるらむ
三煙とも雲とも遂に成のべし難而き人はよそに社みめ
四思ふ事云でやみなば山城のとはに苦きみとや成なむ
五斯社は逢見る事の難からめ疊東なさは如何にせんとぞ
六唐衣絞る計りになりにけり涙も雨も降りてきゆれば
七人しれずふりかゝれども唐衣涙にのみぞ顯れぬべき
八末の山待人をのみ頼みつゝ我をば波に思ふなるべし
九よにもにず物思ふからに苦きは己が心のしわざ也鳥
一〇世のうさも人のつらさも忍ぶるに戀しきに社思侘ぬれ
一一伊勢海の蜃の濡衣きぬ人は我なと思へば殘らざり鳥
一二忘るやと暫しばかりも忍ぶるに心よわきは涙也けり
一三最どしく物思ふ事の增る哉いつ我戀のやまむと下覽
一四戀侘てみの徒に成ぬとも忘るな我によりてとならば
一五心にも命叶はぬ世也けり斯てもいける我身と思へば
一六けさ社は別てきつれいつのまに疊東なくは思ふなる覽
一七逢見ぬに死べき物と知ぬれば心をさへぞ殺し果つる
一八逢　てもちゞに碎くる魂の疊東なさゃ思ひおこせよ
一九風吹けば箱根の山の玉こすげ靡きて我に心とゞめよ
二〇大井川井堰の外になる瀧は己が上こそ悲しかりけれ
二一云知らぬ思のみ社勝りけれ行先いかでまして惑ふむ
二二住吉の怨つべくぞ思ほゆる潮の干る間も今は無れば
二三涙川えもせき敢すなりぬれば今は限と思ふなるべし
二四雨ふれば常よりまさる澤水と聞しは君が涙なりけり
二五心をも且は刈たしと思　哉いつのまにかは燃返る哉
二六雲がくれ過行く月の夜もすがら朧げにては歸る心か
二七夏衣うすき袂ゝ立かゝる涙はしばしとまらざりけり
二八こりずまに猶も歸るか玉鋒の道行く末にみゆる物哉
二九心をぞ智はし物と云なれど片時のまもえやは忘るゝ
三〇恨みてもかひ無物と知ぬれば生てかひなき我身也鳥
三一住吉の岸によすなる忘貝せめて戀しきけふぞ求むる
三二夏衣最ど涙にそぼちつゝおぼしき事もいはできに鳥
三三戀といふとをも變へぬ頃なれば云し昔は長閑かり鳥
三四白雲の知ぬ山ぢに隱れなむかゝる浮世の處せき身に
三五我ながら割なき事はしられ鳥今宵計は長閑かれかし
三六音にのみ聞き渡りつる衣川たもとにかゝる心也げり
三七いなりにまうでたるに瀧のもとにをんな手あらふ
三八稻荷山山下水を掬ひ上て君さへかげにならべつる哉
三九山川の流るゝ水の早ければむすぶ計のかげも留めじ
四〇又かへし
四一飽ずして別るゝ今日に掬ぶ手の雫ならねど濁ざり鳥
賀茂にて人に
四二瑞離のよそに見るともゆふ襷かけてゃ我を思忘るな
四三木綿附の鳥に附ても忘にを悲しなをやに君は殘さぬ
四四雲まより遙にみゆる白雲の山ぢを爭で越てきつらむ
四五今はとて別るゝ袖の涙こそ雲の上より落つるしら波
四六山高み嶺の白雲ふりはへて歸ると思へば物うかり鳥
四七君こふと我ぞ流れていはるべき涙の川に浮沈みつゝ
四八いせの海になごりを高み侘る蜃も物思事はえしも增らじ
四九いかならむと思ふ心の疑に恨て且はゆゝしかりけり
五〇むすめは京にて親は人の國にあるに
五一めに近くつらきに惑ふ魂をいとゞ遙に賴めつるかな
五二朝ぼらけ歸るまもなく降雪に道の行方も惑ひぬる哉
人の國なる女に
五三里遠みいかにせよとか斯のみは暫も見ねば戀しかる覽
五四行先に思ひしりなむ秋霧の暫しも見ぬに惑ふ物とは
五五常よりも物思ふ人の增る哉うべもいひけり秋の夕暮
五六よそにても靡かざらめや人知ず心を春の風に附れば
五七わび果ぬ今は限の身也けり生て歸らむとぞゆゝしき
五八憂しとても且は消なでふる程に我身は雪に劣ざり鳥

五九よもすがら落かゝりつる草枕涙も懸る旅もありけり
六〇よの常の思なむずと我戀を君には爭で殊にしらせむ
六一限なく賴むにのみや雖面きとほに出てのみ且は苦き
六二思つゝへぬる月日の程よりも忍兼つる我にやは非ぬ
六三風吹けば入江に騷ぐ蘆鴨の賴むかたなくなりも行哉
六四みなせ川流れてとまる水莖のみえぬ絶まは涙也けり
六五初雪に隱れてみえぬ跡よりも覺束なくて程もふる哉
六六清水の山郭公聞きつれは我がふる里の聲にかはらぬ
六七えぞ言ぬ我は蘆べのたづなれゃ知人なしに濡て年ふる
六八秋霧の晴ぬ思にまどはれて雁の羽風におどろかす哉
六九ゑそめぬ程ばかりこそ池水の深き心も包みこめつれ
七〇蟲のねの數ぞ勝らむ同じくは君が離の露にだになけ
七一小蟹のいかにせよとか我戀の賴しげなき空に忍ぶる
七二君戀て露の命のきえ返る程をだになど待ずきえぬる
七三住吉の岸の白波袖ひぢて今はいふかひなくぞ成ぬる
七四云放つ君にし逢ば大澤の生けるかひなき身をぞ恨むる
七五いひそめし池の水莖絶ねども深き心は忘れざりけり
七六今ぞしる馴ての後もから衣袖に涙のかゝりけりとは
七七君こふる夢の魂行き返り夢ぢをだにも我にをしへよ
七八ゆふつけの鳥の一聲明ぬれば飽ぬ別に我ぞなきぬる
七九藻鹽燒く蜃の焚火の下にのみ燃つゝ辛き我にやは非ぬ
八〇みをゝみに同じ涙は懸らじを盡きず袂に落にける哉
八一中絶て許多の年に成ぬれば今はかひなし身をぞ恨る
八二戀しなば今宵もあすも知ぬ身をいける程だに心留めよ
八三涙川みもうく計り流るれど消えぬは人の思なりけり
八四疑に猶も賴むか伊勢の海のあまの栲縄くり返しつゝ
八五常陸なるいかこの崎の忘貝拾ふかひなき物にも有哉
八六飛鳥川人賴めなる世也けり渡りそめむ我ぞ悔しき
八七同くば我身も露と成なゝむ消なばつらき言のはもみじ
八八みのうさに思明石の浦風に蜃の歎きはいつか絶べき
八九住吉の戀忘草たね絶えてなきよにあへる我ぞ侘しき
九〇惑ひつゝ幾世へぬ覽貌鳥のみえし山ぢの猶も遙けき
九一いつかわれ涙の絶えむ唐ごろも君が心のつらき限は
九二侘ぬれば曉かけて歸りたる鳴のはねがき我ぞ數かく
九三思ひつゝ獨ぬるよの唐衣夢ぢにさへも露はおかじを
九四三輪の山印の杉も枯果て無き世に我ぞきて尋ねつる
九五なき人のゆきけむ方は尋ぬ共此世の事は行て敎へむ
九六いせの海の蜃の釣舟春風になごりを高み何か侘らむ
九七霞たつ三輪の山本人知れず春の歎きを我につまする
九八雪降ば先ぞ悲しき三輪の山印の杉もみえじと思へば
九九朝ぼらけおき行露は消ぬべし早晩くれと賴みける哉
一〇〇君こふる涙にぬるゝから衣かへす程なく我ぞ悲しき
久しくこずとてふすべて出でぬ人に
一〇一こむらさき君が結びし元結の塵打拂ふ程までやこぬ
一〇二君こずば我も歸らむ神無月時雨にさへや濡て歸らむ
一〇三假初の心くらべにあふ事の命も知らぬことは知ずや
又人に
一〇四つらさのみ增り行く哉思ひやる夢の魂いかに行らむ
一〇五草わかみ植で別れし女郎花わがみぬ程に枯にける哉
一〇六君だにも我だに淺く成はてば思はぬ山に入ぬ計りぞ
一〇七獨寢の侘しき旅の草枕くさのゆかりに訪ふ人もなし
一〇八君こふと思ふ心の便にも今はおろかになりぬべき哉
一〇九夢にても逢と見えなむ戀渡る涙の川は淵せありやと
一一〇白玉か露かと問む人もがな物思ふ袖をさして答へむ
忘れたる人にいひやる
一一一網代ゆく宇治の川波流てもひをの屍を見むとぞ思ふ
かへし
一一二世にし經ば海月の骨はみもしてむ網代のひをはよる方もなし
（朱雀院にて）
一一三霞立野べ吹風も寒からで我身のよそに春はたちぬる
一一四春くれてなく鶯の一聲を木隱れてこそ聞まほしけれ
一一五散る程は雪とみゆれど梅花風に匂ひてきえぬ計りぞ

かたらふ人の殿ゐ物のうらのいたくあれたりければ

九年をへてなれる中をは唐衣うらみてかへす哀也けり

〔人の子になれる女に物などいひて歸る道にやすむ所にて〕いく野といふ所より人をかへして

七別れにし程に消にし魂の暫しいくの丶野べに宿れる

仲文集

けさうし侍りける女の契りてはべりけるがなくなりにければいと悲しくて女のはらからの許にいひやる

八流れてと頼めし事は行末の涙の上をいふにぞ有ける

たびの道行く人美濃の國ときの郡といふところに宿りて

九結び置し人や解らむ下紐のときの郡に旅寝しぬれば

忍びて通ふ人の許に大方のまらうどにていきたるに雪のいたく降りければ忍びていひはべる

〇四春かけて忍ぶる中も有物をいかなるまより行通ふ覽

女の許に來むとての夜は來で後の夜來たるにふすべてこねば

一四理や今宵のつみの底にはめ入れよ臥なむさり所なし

中將殿前栽つくろはせ給ふに心なき人の撫子をすきて捨てたるを

二四好物を花のあたりによせざらば此常夏も根絶ましやは

大風の又の日家のほかよりもうたてこぼれたれば近き所の程なるさきの中將公任の君に

三四我宿は野分のほかも隣より荒增りたる心ちこそすれ

御返し

四四隣より荒增れりと云なるはいかなる風に身をば吹寒

花の枝に文のあるを見て

五四春のとふ心づかひを尋ぬれば花の便りにてふ也鳥

承香殿に侍ひける人を語らひけるがみそかに人をもたりとて罷りたりしかば惑ひ隱してけるに

沓のありけるを見て前の遣水に生ひたりける根芹をとりて

六四澤水に積顯はるゝ忍び根を隱せりけるはうき心かな

みたけさうじすとて石山に籠りたる女ばう人參りあひてとはずはべりければ

七四孰くへも身をし替ねは雲懸る山蹈しても訪れざりけり

返し

八四鳥の音も聞えぬ山に爭でかは雲路を分て人の通はむ

或る女臨時の祭に車に乘りながら來てたゝいねいりければ小屋にてえ隱れあへず夕日のさして

九四思きや掛ても斯はゆふ襷今日の日影に眩ゆからむと

返し

〇五ゆふ襷神に掛ても誓ひてむ夕日にあて丶見では非じと

古きめのくれこひたるに

一五花咲かぬ朽木の柚の柚人のいかなるくれに思出らむ

二五斯計くるに苦しき拷繩を唯にくたして止まむとやする

賣りける鼎をこなく云ひ落しけ　ば賣る人

三五地う獄の鼎にも社煮え給へ多くのせんな落し給ひそ

返し

四五買ふよりも賣る社罪は重げなれ宜社釜の底に有けれ

舍人のそのに男ありとて舍人のうれ　申さむと

いふを聞きて

五五古はとねりのねやの物語語りあやまつ人ぞあるらし

紀の國の郡ごもをよめる、いと、なか、なくさ、あまり、ありた、ひたか、むろ

六五最長き夜は慰まず餘あり絶ずひたかむ室に住まばや

雪降りたるつとめて院の御かゆのおろしたまはせて歌よめと仰せられしかば

七五白雪の降れる朝の白粥はいと能似たる物にざりける

同じ人元輔周防にくだれる道にえとまりといふ所にて云ひやる　仲文

八五え泊りに我來たるとは知ねばや今迄君が見に來ざるらむ

返し　元輔

九五限なきよはこを好む君なれば返はみしに勝るなり鳥

堀河の中宮うせ給ひて中宮の内侍のすけせしなど尼になりたるもとに　仲文

〇六數へつゝ偖も有つる世を背く後手ともぞ思やらるゝ

返し　なしし

一六背きぬる後手よりも極樂に向はむ君が顏をこそ思へ

又返し

二六あが佛顏比べせよ極樂のおもて起しは我のみぞせむ

正月七日、左衛門内侍に

三六老らくも子日の松に引れてや今日より若きなば摘らむ

同じ人のゆきのかみになる人のむすめ懸想しける人に

四六解け難き下紐しても心みよ思ふ心のゆきのしまゝで

元のめをやんごとなき物には思ひながら又知る人多かりけるにもとをばはしのまゐにて物語なんとしてこゝに居給へれ今參らむとていにければ誠とて筵のかぎりに居明して曉に歸りきたるに板の上にさゆばかり置かれて冷えにけりと怨みければ

五六理や下はさこそは冷えつらめ君に敷べき思なければ

物へいきけるに女にいき秋は必まかりのぼりなむと云へりければ、女

六六待ずとも秋こざらめや初雁の雲ゐになかむ聲をこそ思へ

東三條院にて粟田の大將中春花雪の如しといふ題をよませけるに　仲文

七六降紛ふ花か雪かと紛ふまに我世の痛くふけにける哉

三條院殿にて公任の宰相八月ばかりの月のあか夜き前栽の花見給ふ　仲文

八六常よりも今宵の月はさやかなれ秋の夕も迫る計りに

國茂がしき此の使にありきける時にざれたる所の若き人々聲しければそれうけさせ給へといひ入れたりければさうじの繪に女のかた有りけるをやりてこれ給へと云ひ出し給へりければ國茂深うみがこどもと聞きて

九六垂乳めの昔の親の顏見ればうみの子供ぞ思遣らるゝ

國茂が父は馬の頭にてなむありける

女返し

一七垂乳めの昔の親は遙莫さてやはうまの頭のこはよき

婿のともみつたえて置きたりける物のぐども運ぶに鏡のとまりてありける遣るとて

二七影絶て覺束なさの增鏡見ずば我身のうさも知られず

返し　ともみつ

三七君と我形見に見むと增鏡底にとまれる影さへやうき

國茂がめに物云ひけるにことを出したりけるにひきて返すとて

四七語らへどかひ無り鳥睦言の調べて歸るねにし遙へば

同じ人に服なる程に壻の藏人に

五七今はとて返しゝよりも藤衣きたりと聞くは最ぞ悲しき

返し

六七きたりとは聞らむ物を藤衣かけて哀と云ふ人のなき

同じ人左京の君

七七あな侘し人日の關を越分て道を忘るゝ時の間ぞなき

返し

心にも非ずうかりし夢路には忘ぬ物ぞ侘しかりける

又、をとこ

程もなく明けて別し曉にいとゞ露こそ起うかりしか

春宮の藏人所にて月待つ頃

有明の月の光をまつ程に我世のいたくふけにける哉

をとこの恨むれば又

つらきをし人の恨る物ならば關には我ぞ立むといはまし

恨むれどかひなき物と忍ぶるに又忘れつゝ嘆つる哉

返し

思ふと云名には絶せぬ物なれば恨むる事は誰と劣ず

本院の侍從の君國茂が扇を取りてこへど返さで

又のあしたに

君にても思下らぬ心には扇といふ名立たじとぞ思ふ

を　と　こ

返し

あらがへど人に云へとや云なとや思返せどかひ無物を

男音せざりければ　左京

とも斯も云言の葉の見えぬ哉孰らかは露の懸り所は

かへし

あだならぬ心に懸る露なれば云でぞ思ふ起てこしより

院の大將殿の侍ひに厨が尊たゝくを見て同じ人

厨よりまだ宵なればねぬなはの我等が水鶏叩く也鳥

返し　侍從の君

手もたゆく叩く水鶏も殘らねばなほ根尊の厨苦しや

を　ん　な

みるのいと長きにつけて

潜きけむ蜃にもとはむ伊勢の海の千尋の底の誠とぞ思ふ

雖レ入二勅集一不レ見二家集一歌

かは柳絲は綠にある物をいづれかあけの衣なるらむ

かをさして馬と云ふ人有ければ鴨をもをしと思也鳥

忠見集

春、御屏風春吉野山に霞立てり河に船あり

霞立つ吉野の山を越えくれば麓を春のとまり也ける

春日野やく

燒ず共草は萌なむ春日野を唯春の日に任せたらなむ

いそのかみに山田うつ人あり

春來れば先づぞ打見る石上珍しげなき山田なれども

飛鳥川人わたる

飛鳥河淵瀬かはらぬ今更に昔がたりのなぞ流れぬる

井出に山吹あり

咲かでやむ年は無けれど此春は井出の山吹盛也けり

伏見、あれたる家を人わたる

年經れば伏見の里も荒にけり昔の人は住ぬなるべし

夏、淀のわたりに舟あり郭公なく

孰方に鳴て行らむ時鳥よどのわたりのまだ夜深きに

同じ所にこもかる

敷けること眞菰の生ふる淀野には露の宿りを人ぞ刈ける

もる山、松おほかり

誰が爲に民の年經て守山に世をへて松の生添はる覽

難波に葦多かり舟漕ぐ

難波潟行かゝ舟の綱手繩くる社見えぬ葦の間をなみし

山に雪あり

年經れば越の白山老にけり多くの冬の雪つもりつゝ

熊野に舟よせて濱ゆふとる人あり

三山熊野の浦の濱ゆふわれ舟の中に幾らを積て歸らむ

長柄の橋

人知ず渡し初めけむ橋なれや思ひ乍らに絶にける哉

みをづくし

吹風に任する事も浮標待つと知でやさしてきつらむ

秋、須磨の浦に關あり

秋風の關吹越ゆる度ごとに聲うちそふる須磨の浦波

高砂に旅人ゆく鹿立てり

高砂の鹿鳴く秋の嵐にはかの子まだらに波ぞ立ちける

佐保山に紅葉あり霧立てり

佐保山の紅葉の錦いくらとも知てや空に霧の立らむ

こゆるぎの磯に海士あり

小搖ぎの蜃は求食に寢れつゝいかなる時かなまめ刈覽

冬、武藏野に旅人あり

行き暮す旅の宿りも武藏野の草むすぶ夜は睦じき哉

あさかの沼

月宿るあさかの沼の水清み夜も玉藻の靡くをぞ見る

浮島

沖つ波よせばよせなむ浮島に年經る松を爰乍ら見む

同じ御屏風に正月子日若菜摘む

若菜とて多くの年を我摘めば君ぞ子日の松に似べき

二月初午に、稻荷詣

神のとくみつの社に祈すと今日より君が榮え行べき

三月櫻の木のもとにてかち弓射る

心にもいるひの弓はみ山なる花のあたりに音ぞ答る

四月池のへんの藤を翫ぶ

池近く移りに鳥な藤の花こゝのそこのと爭で惜まむ

五月郭公なく山に女車ゆく

みみ山出て都へならば時鳥よびなきそへて言傳にせよ

六月河のほとりにかぐらす

水上の心流れて行く水にいとど夏越の神樂おもしろ

七月七日かは浴む

波の立水のあやをも今日は猶棚機のとも思ほゆる哉

八月逢坂に駒ひく

清かにも見えずぞ有ける逢坂の駒より見ゆる望月の影

九月九日菊に綿かづけたる

萬代を若ゆる菊ぞ置露のまゆを開くる時はきにけり

十月大井川の井堰に紅葉流れたり

色々の木の葉流るゝ大井河しもは蔓の紅葉とや見る

十一月臨時の祭みる車あり

姫小松見れ共飽すゆふ懸て賀茂の祭におひやつがまし

十二月なやらふ雪ふる

年毎にやらふなほして有つるを今年や終に雪消ぬべき

ある所の屏風正月せちする所あり

春霞立と云ふ日を迎へつゝ年のあるじと我や成なむ

二月子日女出たり例懸想する男來合て消そこす

子日とも契で君がのへくれば松に懸りてよなや盡さむ

三月春惜む所

人の身にきつゝはとまる春故に惜む心の惑ひぬる哉

四月家のかみ祭る

年毎に祭らむ數はきねぞ見む戴く神のしらくる迄に

五月五日さうぶと蓬家にあり

よはにのみ鳴く時鳥覺束な菖蒲見るべきさは孰ちぞ

七月七日棚機まつりしたる所あり

彥星が影を待つより覺束な仄かに照す月の入るらむ

八月駒迎

見まほしと思ひし駒に引迎へ君がくるにぞ逢坂の關

九月九日

花の香を今朝はいかにぞ君が爲まゆ擴げたる草の上の露

十月宇治の網代に女車もみち見る

底深きしきつの淵に住ずして網代によれる日なのみやへむ

十一月山づらなる女の家に狩する男物云ひたる

夕暮になれば聞ゆる鈴蟲は思へばかりの便なりけり

十二月佛名する所

罪とがは目にし見えねば降雪の消えむ朝を見る計也

降雪は今宵寒げに見ゆれども罪も共には積らざり鳥

天曆十年三月二十九日麗景殿の女御齋宮女御なり

の歌合によめる　霞

六あら玉の春をも知らで故郷は龍田の山の霞をぞ見る

風

七風寒み凍れる谷の下水は春くるとをとくと待つらむ

雨

八春雨は降初しかどうつたへに山を緑になさむとやみし

鶯

九我宿のこずゑを高み朝ぼらけ鳴く鶯の聲はるかなり

梅

〇香をとめて人も見にこぬ梅の花待暮しつゝ獨をる哉

柳

一青柳の絲は靡きて春毎に露の玉ぬく緒とやなるらむ

櫻

二惜むべき庭の櫻はさかりにて心ゑ花にまづ移りける

山吹

三山吹の花なき宿に住まば社振はへ遠く出でつと思はめ

藤

四遲く咲く藤の花故いつしかと我さへ松に懸りぬる哉

若菜

五振はへて君が爲にと春の野に摘める筐の若菜也けり

あはぬ戀

六限なき戀をのみして世中にあはぬ嘆きを我や殘さむ

あひての戀

七夢の如などか夜しも君を見む暮る待間も定なき世に

右方のれうに、霞

八淺緑春はきぬとや三吉野の山の霞のいろに見ゆらむ

風

九山河の流れまさるは松風のたにの氷を吹きや解らむ

梅

〇我宿の梅の匂の滿ぬれば折りてつめると人や思はむ

鶯

一鶯の初音はのかに足ひきの山べを出づる聲聞ゆなり

櫻

二我宿の物〻も云はじ櫻花折りて比ぶる人もあらなむ

柳

三青柳の絲より染むる程もなくとくくる物は月日也鳥

藤

四我宿の松にひさしき藤の花紫野には咲きやしぬらむ

山吹

五山吹の花のみぎはに匂へばや澤に蛙のこゑ聞ゆらむ

若菜

六春くれば若菜摘む野ぞ思ほゆる筐に洩らぬ人し無れば

あはぬ戀

七暮ごとに同じ道にも迷ふ哉身の内にのみ戀の燃つゝ

あひての戀

八別ては暮るゝも待ず戀しくば君や程なく物を思はむ

折々の歌、梅のつくり花

九梅の花春待わびて咲にけり今は匂の添はるばかりぞ

子の日

〇子日する野べの小松の徹せば千代の例に何を引きし

一松は唯千歳こそつめ引く人は幾世の子日數へ渡らむ

二行き返る程さへ遠き子日哉千代の松ひく亀の尾の山

三一本に千代を籠てむ松なれば餘り多くも引てける哉

四引替ふる子日の松の千年をば待見む君ぞ久かるべき

五引く人に千代をわくとも鶴山に殘る齡の思ほゆる哉

若菜

六若菜生る世には幸きも無り島松に知べき君に任せて

七春を淺み筐の底にみたねども君が爲にと摘る若菜ぞ

八春日野の草は緑に成にけり若菜摘むとは誰か占けむ

櫻散りてなき折に折りたるを人のもたれば

九此折れる櫻の散で殘れるは荒き風にも當すや有けむ

〇朝毎にはきけむ庭を櫻花けふより後や散ながらみむ

櫻折りておこせたる人に

一諸共に我し折らねば櫻花たがとも枝に知ずぞ有ける

二き午らに見べかりけり櫻花折間に多く散ぞしにける

三幾十度春の櫻にこりぬらむ暫しの色に頼められつゝ

四櫻見に有明の月に出たれば我より先に露ぞおきける

柳

五我宿の柳の色の春くればみどりの絲となりにける哉

六散花をぬきも留なむ春くれば糸より懸くる青柳の糸

山吹

七井出にのみ有と聞つる山吹の九重近く咲きにける哉

八我を思ふ人ぞあるらし故郷に井出の山吹折午ら見む

九山吹を折るとはなしに夕暮の蛙鳴くまで立てる霞か

春の別れ惜む

〇春ゆかば花の本にや遠ひなむ後れば何の身にか成べき

一儚くも花の散り〻〻惑ふ哉行方も知らぬ春に後れて

二大空と山ぢを頼む春くればたび行く雲を霞と思はむ

鶯

三鶯のなく聲聞けばみ山出て我より先に春はきにけり

四花なれば枝に木傳ふ鶯の春の末まで鳴くを聞くかな

五鶯の聲を知るべに行暮し知らぬ山路に宿りをやせむ

六月鶯なくを

七別路をいづ方へとも知ぬ身は行人を社問べかりけれ

八幣よりも我や行かまし陸奥の忍ぶ計りの形見送りに

九遠ければ思ひはすとも忘なむ形見かわけて戻る憂れり

〇鶯にだに當てじと思し君しもぞ時雨降頃旅に行ける

一幣よりも泣々我ぞたゝへまし涙を受くる盥有りやと

二行ゑを恨みとのみはわび果じ歸るの山の松を頼みて

せ栽に螢の飛ぶを

三いづくとか夜は螢の渡るらむ行方も知らじ枕の枕に

四吹風に散る物ならば菊の花雲居也共今朝にみてまし

播磨の國なる夢さき河を渡るとて

五別ても寢るとは無しに我見つる夢崎川を誰に語らむ

人に菊奉るとて

六あまた有らば添べき物を神無月殘れる菊の限也けり

洲濱に菊植ゑて鶴立てる

七千年ふる霜の鶴をも置午ら菊の花こそ久しかりけれ

八菊花移らぬ枝の交れるを今日より後に霜は置かなむ

九又やあると問ふ人あれや菊の花限なし共惜まるゝ哉

初雪を見て

〇初雪と今朝は起故で惜む哉偽も有へば我身ふりぬと

戀

一誰ならむ儚な午ぞ頼まるゝ斯ても終にやまじと思へば

二はかも無く浮て見ゆれど白雲の山にも懸る物と知ずや

三水莖の行きて返らず成ぬるを何に流るゝ涙なるらむ

四つてにても訪べき物を儚くも便なき身と思ひける哉

五孰くにか暮ぬ逢む身を分けて君が許さぬ心遣ひに

六人を待つ心は池の底なれや云初むるより戀の積れば

七仄かなる聲ばかりにや蕣ねなくに秋の夜を明しける

八よそにのみ聞て渡らぬ逢坂の關の清水に流れぬる哉

或る人の思ふとは云ひながら逢はぬに

九底にして深しと云は頼まれず淺くて影の絶せずもがな

おほやけより祿給はるべきが遲ければ

一八十氏の頂く山の雲なれば久しけれ共待つは頼もし

一我宿は煙と成て雲居なる孰くをさして行ひとすらむ

六月つごもりの日人に

二空蟬はさも社鳴かめ君なしで暮る夏をば誰か告きし

返し

三唐衣くるゝ夏ぞと思へ共秋も立やとなどかきざらむ

うちの仰せ事にて父忠岑が歌奉れと召あるに書き集めて奉る

一四言の葉の中を泣く〳〵求むれば昔の跡に逢見つる哉
一五君が代に榮ゆくべしと思ひせに訪まし物を忠岑の道
人の國に行く人に衣贈るとて
一六旅人の露拂ふべき唐衣まだきも袖の濡れにけるかな
一七後れじと云ぬ涙も手向には留め兼つる物にぞ有ける
直垂取らせむとすれど裏なむ無きといふ人に
一八住吉の岸とも云はじ沖つ波猶打かけよ浦はなくとも
物かづけて後になまみる女郎花にはあらぬ我にぞ被き劣れる
一九みるめかる蟹に似たれど女郎花けふは我にぞ被き劣れる
屏風の繪に霞立てる山より瀧落つ岸のほとりに
藤の花咲けり
二〇手も懸で爰には惜む藤花そこに映れば波ぞをりける
柳櫻ならべる處
二一背柳の絲をぞよれる櫻花綻びはて〻散らむひのため
霧たちて道かくせる處
二二色々の紅葉の錦霧たちて殘れるはてを孰くとか見む
山里に住む女鹿の聲を聞く
二三妻こふる鹿鳴く時になりに鳥我獨寢を誰に聞かせむ
おきな稻はこびつみす
二四秋毎に刈つる稻はつみつれど老にける身は置所なき
昔語らひし人の年頃ありて津の國玉さかといふ
所にありけるを聞きつけてまかりあひて夕暮に
鈴蟲鳴きければよめる
二五偶さかに今日逢見れど鈴蟲は昔ながらの聲ぞ聞ゆる
美作國にてかつまたのゆを
二六この山や道の限と思へども勝間田のみゆ遠き也けり
播磨のこふに宿りたるに時鳥のなけば
二七誰ぞかはこふ渡りなる杜鵑草の枕にたび〳〵ぞ鳴く
同じ所の舟ぞかの山といふ所にて
二八風おはぬふなさか山は年月も同じ所ぞ泊りなりける
或る人のもとの男にかへれるに

二九なり〳〵て元に落ぬる人を社色好とは云べかりけれ
津のかみのふる歌こひたるにやる
三〇難波津のおなたの事は住江も年ふる松ぞ知らば知りなむ
たちに呼びて物いふ序に
三一難波潟茂り合へるは君が代に惡かる事をせねば也鳥
筑紫へ下る道に安藝國のあしの山を雨降る日越
ゆとて
三二一度もまだこぬ道に惑はぬは天の下こそ知べ也けれ
布引の瀧
三三雲の上にたえす雲のみ鬚くは白く落ちくる布引の瀧
女のもとに行きて物云ふに雨のいみじう降れば
いと聞うて空も見えぬに夜中ばかりに戸を引き
立て〻入りぬれば
三四音に聞く鳴戸の水に潜きする蜑よ侘しきめを見する哉
京のたよりなかりければ津の國に住むとて行
く道に知りたる人あひてなにしにかくは行くぞ
と問ひければ
三五都にはありわびぬれば津國の住吉と聞里へこそゆけ
かれより京へ云ひおこす
三六津の國の我頼みこし住吉も便なみこそ間なく立けれ
伊豫に行きたるによしある浮れ女の云ひたる
三七音に聞きめには見だ見ぬ播磨なる響の灘と聞は誠か
返し
三八年ふれば朽こゝまされ橋柱昔ながらの名だに變らで
津の國に年頃身を沈めて籠り居たるをその先の
帝聞しめして召しあげさせ給ひてけりよさり藏
人所に侍ひてまかでにけるあしたにありとしの
朝臣しておほせ給ひける
三九見しかども何共知ず難波潟波のよるにて歸にしかば
御返りまゐらす
四〇住吉の松と仄に聞しかばみちこし汐やよる返りけむ

前代の御時凡河内の躬恒が候ひけむ例にてみづ
し所に候へと仰せごとありしを其の後せじの遲
かりければ奏せよと思しくて藏人のもとにやる
一櫻花高き梢の靡かずば返りやしなむをりわびぬとて
御返し
二をり侘て返らむ物をきしかげの山の櫻は雲居なり共
三さてせじ給はりて御厨子所に候ひて參らす
四年を經て響の灘に沈む舟波のよするを待にぞ有ける
五朱雀院の若宮より藤の花給はせたるに
六爭でかは散さとるべき藤の花風により社君も見らめ
七重光の中將とのゐ所に菊を植え養きて咲きうつ
ろふまで參り給はねば奉る
八菊ならぬ花に有せば散なまし植て霜には置せたれ共
宮仕へする女をさそふとて
九月影にみちの問はあかく共今宵は共に出むとぞ思ふ
一〇絹二むら給ふと仰せと給はせければ
一一昨日まで恨みし風は大空の叢雲拂ふつかひなりけり
一二かくおほやけに仕うまつりてもと住みし處へ通
ひて
一三古の錦はものか百敷をきつ〻通ふとおもふこゝろは
繪に住吉のかたをかけるを
一四住吉の松も老ぬと思ふらむ影にも波の添てみゆれば
山より瀧落ちたる所
一五水底のわく計にやくゝるらむよる人も無き瀧の白絲
一六皆人の子日する野を九重に霞隔つとよそに見るかな
あゝ御息所の御方に仕うまつりける人につけて
上のきぬのうらなどやはべりけむ給はりければ
詠める
一七波高く寄るべくゝ非ぬ船なれや浦にも附けで沖午見む
同じ御息所まかで給へりけるに暫しとまりたり
ける人もまかでにければやりける

一八巣守子も出けるかと見る時はかひ無身さへ羨まれぬる
うちにさぶらふ程に家の燒けにけるを後にいき
て見て藏人のもとにやりける
一九栖かなみ宵にわびたる蟲の聲鳴て聞く時君に告なむ
二〇またいつにかありけむ
二一神無月いかでかはふる世中に落る涙ぞ時雨なりける
かるかやを
二二白露の懸るが頓て消ざらば草葉ぞ玉の櫛笥ならまし
又云ひにやる
二三よそにして侘る涙を我ならぬ人は時雨とよそに見らむ
二四年かへての頃恨みたる人に
二五孰方に立寄れとてか霞思はずにのみ空に見ゆらむ

中務集

子日
二六野べに出てけふ引つれば時わかぬ松の末にも春はきにけり
二七野山にも見るべき物を我宿の花を詠めて日をば暮しつ
藤の花見る春をしむ所
二八藤の花咲を見捨て〻行春は後ろめたくや思はざる覽
山里に時鳥きく
二九山里にまれら也ける時鳥またともなかぬ聲を聞く哉
田のなかに狩したる所
三〇袖ひぢて植し春より守る田を誰かは知で狩にきつ覽
長月の九日菊におもてのごひたる人あり
三一老にける身には著しも白菊の花の名立に成にける哉
前齋宮の五十賀の御屏風、わかな

五六若菜生る野を占おかむ君が爲千年の春は我ぞ摘べき
　つるのあそぶ所
九六君といへば命をゆづる葦たづは雲の中をや思出らむ
　濱づらに松おほく立てり
一〇浦近く波立つ松は色かへで世に住江に生ふる也けり
　濱に貝ひろふ
八六求食する浦ゝ長閑に波立でけふはかひ有心地社すれ
　三條のおほいまうち君の賀權中納言のつかうま
　つれる屏風の繪に花見て歸る所
九六飽でけふ歸ると思へば花櫻折べき春ぞ盡せざりける
　池にのぞきたる松に藤かゝれり
〇七君を思ふあだし心もなき物を池の藤波まつ越にけり
　たちばなに時鳥のなくに
一七色かへぬはな橘に時鳥千よをならする聲ぞきこゆる
　野に狩したる
二七女郎花かりの便と聞しまに許多の秋は野べに來に鳥
　やり水のつらに菊さけり男文書く
三七流れつゝ影も見べく汀なる菊に戀しき人はならなむ
　村上の先帝の御屏風に野火やく所
四七春は斯野をのみ燒と思まになべて草木のいかに燃覽
　春ををしむまに歸雁なく
五七留まらぬ春を惜むゑ最どしく歸る雁さへ鳴渡るらむ
　岸に藤さける
六七河岸に生たる松に藤波のかゝれど年のつきぬ也けり
　五月五日田舍家に女ども絲くりさうぶ葺きたり
七七菖蒲草てびきの絲も身にかけて永き日暮人ぞ戀しき
　田まもる人しゝのはむをもしらでねたり
八七守くる山田の稻にすさぶよは夢とぞ鹿の音をも鳴哉
　村上の先帝の御屏風に國々の所々の名をかゝせ
　給へる、よしの山を
九七吉野山ゆきかよ跡も絶にしを霞ぞ春の知べなりける

飛鳥川

〇八定なき名にはたてれど飛鳥川早く渡りしせに社有けれ
　石上
一八石上ふるき渡りを來てみれば昔驛しゝ花さきにけり
　伏見
二八櫻花散かふ空はくれにけり伏見の里に宿やからまし
　もるやま
三八人めのみ守山になく呼子鳥忍びに誰を待音なるらむ
　すま
四八藻汐やく煙に馴し須磨の蜑に秋立霧も分ずや有けむ
　佐保山
五八初雁の夜深かりける聲によりけささほ山ぞ思やらるゝ
　しかすがの渡り
六八行ばありゆかねば苦ししかすがの渡に來てぞ思煩ふ
　うきしま
七八頼まれぬ心からにや浮島に立よる波のとまらざるらむ
　なこその關
八八陸奥の勿來の關と聞つれどなく〳〵猶も越ぬべき哉
　御屏風萩の下に鹿なく
九八人しれぬ萩の下なる棹鹿もほに出る秋や音にも立覽
　當夏
〇九打はへてみる當夏に飽ぬ哉日毎に增る色のみゆれば
　十二月晦日に
一九程近くきぬなる物をいかなれば春にも逢で年の越らむ
　村上先帝の御屏風の繪に田舍家に男まらうど來
　れり
二九梅の香をとめてきつれば珍しき鶯ならぬ聲も聞かな
　きじの聲
三九春霞朝たつ野べに立鳥も忍ばぬねにや人もしるらむ
　近き山のさくら
四九我宿の春の山べのつまなれば外の花とも思ほえぬ哉

　四月みあれひく
五九君をのみ祈り置ては打むれて立歸りなむ加茂の河波
　五月五日
六九著き香も匂ふなる哉菖蒲草けふこそ玉にぬく日也見
　泉
七九下くゞる水に秋こそ通ふらし掬ぶ泉の手さへ涼しき
　秋の曉花か見る所
八九有明の光にまさる女郎花長きよにみむ露におきつゝ
　野の紅葉をみる
九九けふ折らぬ人も誘はぬ紅葉ばによのま吹くる山風の風
　冬ごもりしたる池
〇〇氷ゐる池の汀は水鳥の羽かせに波もさわがざりけり
　雪降るに物へゆく人
一〇雪深く行く東路も遠ければ道にて春にあひぬべき哉
　朱雀院のわか宮の御もぎの御屏風の和歌、子日
二〇小松原野べにいづれど伴はぬ春の霞も立まじりけり
　梅の花見る所
三〇梅の花折る手元をもみつる哉香を尋ても訪むとぞ思
　柳あり
四〇繰返り春はきぬれど青　る色哉
　道行くに時鳥をきく
五〇打はへてまちくる道の時鳥たゞ一聲や聞てやみなむ
　神まつる所卯の花さけり
六〇祈るをも聞く便には卯花の盛をさへや神はみるらむ
　初雁を旅人きく
七〇初雁の旅の空なる聲きけばわが身をおきて哀なる哉
　やり水に紅葉うきてながる
　紅葉ばも落積りぬる谷水は秋の深さぞ底にみえける
　神樂したる所
八〇小夜更て霜はおけども山人の折れる榊の色は變らじ
　高き山に雪ふる所

一〇瀧の絲は皆とぢつらむ吉野山雪の高さに音を變つゝ
　御屏風松に藤かゝれる
一疎からで懸れる藤の花ながら松に心は遠はざらなむ
　うめ
二かくてなほ千代迄かざせ梅花花も變らで春も絶ずば
　道行く人時鳥を聞く
三行道もはるけきほどは郭公聲に心のとまりぬるかな
　六月祓する所
四君が爲いのる心は水上も流るゝ如く今日やしるらむ
　前栽うゑたる所
五露をだに落さで堀つ女郎花植ば孰れの秋か見ざらむ
　御屏風に秋の野に花見る所
六花の色の飽ぬ限し歸らずば宿とも秋の野べやなる覽
　御屏風、池のほとりの柳
七水底に影の映れる青柳は波のよりける絲とこそみれ
八浦遠く立つる春の霞をばやくしほがまの烟とぞみる
九よと共に藻汐燒つゝが爲か火にも水にもいれる我身ぞ
〇卯の花の盛にのみや山里の垣根も白く人の見るらむ
　かぐら
一〇年毎に神をぞ祈る榊葉の色も變らでをらむと思へば
　たかうなほる所
二〇土分る底來てみれば呉竹の籠ハる春のよとも知れず
三〇吹風に亂れぬ岸の青柳はいとゞ波さへよれば也けり
　まつの下に水やれり
四〇古の心もたえず行水に我が松かげも今日こそはみれ
　坊城の右のおほい殿の五十の賀中宮し給ふ村上
　の先帝のめしたる、紅梅
五〇吹風に匂變らぬ梅の花たが染出でし色にかあるらむ
　子日
六〇水底に色も變らぬ小松原千年千代よふ野べに來に鳥
七〇岸近き松にかゝれる藤波　春の名殘に立とまるらむ

八二山櫻人しらぬども清瀧の底なる花やながれ出でけむ
九二住吉の岸の藤波春深くいくしほにかは色まさるらむ
〇三五月雨の夜も明方に歎く哉物思ふ耶や秋になるらむ
一三河水に影のかにぶく山吹は蛙の聲をあはれとや聞く
二三山吹の花の盛はかはづなく井手にや春の立止るらむ
三三白波のをるかと見えて遠方の岸のまに〳〵咲る卯花
四三片岡の御垣の原の雪は花ちりぬとや音をばなくらむ
五三　みつあきらの少將歌合するに、夜梅
六三　匂ふ香の知べならずば梅の花倉部山にも折惑はまし
七三　柳
八三繰返す年へて見れば青柳の絲は舊せぬ物にそ有ける
九三　同じ少將のむすめのもゝかに子日にあたりけれ
一四ば一條の左の大殿に物などして奉らるゝに
二四　春雨に空の景色を包めどもけふの小松は猶ぞ引つる
三四　朱雀院の御時歌めすに奉る
四四九今さらに老の袂に春日野の人わらへなる若菜つむ哉
五四　御覽してひげこにわかな入れて少將を使にて賜
六四へる
七四　春日野に多くの年は積つれど老せぬ物は若菜也けり
八四　御返事
九四〇年積めどと同樣なる若菜にもけふだに我や有むとす覽
一四女一宮の御いかにすはまなどして奉れ給ふに
二四一波たてゝたづの影さへみゆる哉千世の數添驗なるべし
三四水底に影をみせつゝ葦鶴も君には千世を隔てざり鳥
四四雲居にて君を見べきたづなれば千代も最社遙かりけれ
五四　人のうぶやに七夜
六四四千年侍君ありそ海の影みれば小松も今ぞ生始めける
七四　物へいく人につるのかたを幣にして
八四五四君がゆく雲路おくれぬ葦たづは祈る心も知べ也けり
九四　秋物へいく人に
六四風よりは手向に散せ紅葉ばも秋の別は君にやは非ぬ
七四もみぢ葉の錦にみゆる浦々は波の文をや立重ぬらむ
八四　返し
九四色深き紅葉染けむ浦々は滿ちこし汐の數やましけむ
一五大貳のくだるに
二五老ぬれど猶行く先ぞ祈らるゝ千年迄にもいきの松原
三五風ふくに物へいきける人に
四五〇風吹は思ほゆる哉住の江の岸の波にもあらぬ君さへ
五五　物へいく人に
六五一時のまも數多度のみ悲きは君が行べき道にぞ有ける
七五　物へいくに雨ふるとてとまる人に
八五二泣涙空にみてるや大空にけふしも雨のふり留めつる
九五　返し
一六三五こきまぜて涙に雨も降つるに孰れによりて君止る覽
二六　越へいく人に扇やるとて
三六四五白山の雪の餘波は寒く共かたみの風は扇ぎつゝゆけ
四六　物へ行く人に枕とらすとて
五六六別るらむ人の心は此をさへあだなる草の枕と思ふな
六六　越へ行く人に
七六六白山に雪降り布きて寒くとも絶ず扇の風をわするな
八六　順朝臣の能登守にてくだるに
九六五雪深く春ともみえぬ心にも折し梅こそ花は咲きけれ
一七五　返し
二七五梅花色は雪にも通ふめり歸るやゝまて君はとはなむ
三七　又返し
四七五いつはたと待程過ぎば白山の雪間の跡を尋ざらめや
五七　豐後守にてくだりたる人の又筑後守にて下りけ
六七〇別ゆく君が手向の祈りにときにし道へもゆく心かな
七七　るにやる
八七一身にかゝる扇の風を添るゝ舟路をゆかむ君が爲とて
九七　給にあれたる家に時雨ふる男きたり

讃岐にて、かげあきら

二六神無月そらの時雨も故郷に君尋ぬくる袖もかわかず
三六　法師ふかき山にゐたる所
四六跡絶て入りにし日より西山の瀧の音にも人め聞えぬ
五六人の家の前より水流れたり馬引留めたる男有り
六六　旅行く人あり雁なく
七六四爭でかは過て行らむ河波の立とまらるゝ宿の前より
八六行人にそふる心のあやしくも知人なきと迷ひぬる哉
九六ゆくを唯思ひやらなむ雁音の歸る聲だに聞ぬ雲居を
一七六たつときく空を詠めて春霞雁の別ぞはかなかりける
二七　あさりしたる所
三七六あさりしてかひ有鳥と思身を恨てふると人やみる覽
四七六　荒れたる宿の紅葉家のうちに散り入りたる所
五七九身をすてゝ底潛くとも桁繩を長くくる人有じとぞ思
六七〇空見えて影も隱れぬ故郷は紅葉さへぞ止らざりける
七七　七夕の繪ある所に
八七一さよ更てけふ渡るらむ天の河影社みえぬ水增るらし
九七　七夕の繪の中宮のひゝな遊びにかはらのかた洲
一八　濱につくれりひゝなの車のかた七月七日
二八七　棚機もけふは逢瀨と聞物をかはと計や見て歸るらむ
三八　麗景殿の女御中宮に奉れ給ふ扇に葦手にて
四七白波にそひてぞ秋は立くらし汀の蘆もそよといふ也
五七棚機の心や空に通ふらむけふ立ちわたるあまの河霧
六七　三條の女御なでしこ合せし給ふに
七七五葦鶴のおれる濱邊の撫子は千世をや色も引は添らむ
八七六垣ほなる倭撫子色深き今日やこふてふ人をまたまし
九七七撫子の花のかげみる川波は孰れのかたに心よすらむ
一八七なでしこの花咲そむる夏の野にけふ蜩の聲の聞ゆる
二八　村上の御門の御時の菊合に洲濱につる菊あり
三八九七たづの住汀の菊は白波のをれど盡せぬ影ぞみえける
四八　同じ御時に御前に紅梅ををらせて鶯のすなどつ
五八　くらせ給うて
六八〇鶯の歸る山の梅の花香をしるべにて人はとはなむ
七八　きたの宮のうちに奉り給ふ扇に
八八一君が手に任する秋の風なれば靡かぬ草は有じとぞ思
九八二袖の浦の波吹き返す濱風は雲の上まで涼しかるらむ
一九　七月七日一品宮のみこのかけものゝれうとうの
二九　中將奉れる葦手のぬひものにして
三八三銀河かはべ涼しき棚機にあふぎの風を猶やかさまし
四八　東宮の殿上人あふぎ奉れ給へる
五八四こよ無くてけふは涼しき袂より煽ぐ風さへ秋に成つゝ
六八　中宮の御さうしかゝせ給ひけるに玉ざゝの葉わ
七八　けに宿る露ばかりとある歌を書きてまゐらせた
八八　りければ宮より
九八五みれば猶のべに枯せぬ玉笹の葉分の露はいつも絶せじ
一九　御返し
二九六八消ぬまを憂き事にする玉笹の露は風まつ程ぞ久しき
三九七　堀川中納言の韻ふたぎの所にめしたりけるに
四九八山々の繁りを分けて鳴鹿を爭でともしの人尋ぬらむ
五九　後撰の歌ども書きて人に遣すに
六九八亡人の言のは寫す水莖のかきもやられで袖ぞ濡ぬる
七九　人のさうしかゝせける奥に
八九我よりは久かるべき跡なれど忍ばぬ人は哀とも見じ
九九　村上の天皇の御時にいれもじの仰せ言ありて上
一〇　たきといふもじもありといふとを入れさせ給ふ
二〇九よゝをへて落くる瀧の白絲にぬける玉とは泡やみる覽
三〇九一盡もせず落ちくる瀧の白絲も結びし泡や數も知らむ
四〇　たけ
五〇九二雪を重み枝は靡けど呉竹の下に變らぬよ社見えけれ
六〇　〔宮の御もぎの歌よみて奉りしを見たまひて〕
七〇　〔右　大　將〕
八〇九三吉野山瀧の白絲とぢつれど早くしりにし聲は忘れず
九〇　短き桔梗を根ごめにひきて女三宮より

四九 鳶しげき淺茅が原の花なれば短きほどに秋を知る哉
御返し
五九 淺茅生の下に咲ける花の色を蟲のねごとに誰か引けむ
知たりける人の早ういきける所に又いきけるに
六九 見る人の袖をあやなく濡す哉野中の水の深き計りに
かへるのかれたるをおこせて人
七九 枯にける蛙の聲を春立てなどかなかぬと思ひける哉
返し
八九 誰か斯くからを置ては忍ぶ覽蘇るてふ名をや頼みし
早うすみし家の櫻をはこに入れて人
九九 年をへて住けむ人も訪なくに春を過さぬ花をみよ君
かへし
〇〇 明暮にとはぬ計を玉櫛笥そこなる花のいつか忘るゝ
櫻のまたはえしたる枝のあかきにつけて
一〇 春過て秋はまだこぬ程なれば花か紅葉かえ社定めね
又人
二〇 逢と見し夢を頼て春の日の暮れ難きをも詠めつる哉
返し
三〇 心してあらまし物を夢にても爭で面なく見え渡る覽
又人
四〇 頼め共虚しき空を詠めつゝ忍びに袖の濡ぬ日ぞなき
返し
五〇 哀とも思ふ心の空なるは詠むと人もきけばなりけり
五月まゆみの紅葉につけて大納言
六〇 時雨をば待も附でや山端の己れまだきに紅葉そめけむ
返し
七〇 待兼て移ろふ枝のあたりには人に知れぬ秋やきぬ覽
又人
八〇 君戀る涙も袖にもりぬれば我より外に人や知るらむ
返し
九〇 我戀る涙ながらもみに添ひて後めたくも知すなる哉
又人
一〇 身の上も人の心も知ぬまは事ぞともなき音をのみぞ鳴
返し
一一 君だにも事ぞとしらぬ涙をばいかに知てか哀と思む
又人
一二 はかなくて同心に成にしを思ふが如く思ふらむやぞ
返し
一三 侘しきを同じ心と聞からに我身をすてゝ君ぞ悲しき
又人
一四 川水の心をしれる君ならば常より増る今日を知まし
返し
一五 増るらむ汀の程も知らね共よどの濱べぞ思ひ出ける
思ふ事ある頃人に
一六 あるよりも亂増りて蘆の刈る物おぼすとも君は知ずや
ある人
一七 斯しつゝ世をや盡さむ陸奥の阿武隈河は如何渡らむ
返し
一八 阿武隈を渡りも果ぬ物ならば河中々に我いかにせむ
きたるにかへしたればまたきて
一九 秋風に靡く心は葛のはのふき返さるゝをりぞ侘しき
返し
二〇 心より吹にもあらぬ秋風は返る葛葉の恨みざらなむ
又人櫻を見て
二一 人知れぬ我身也せば宿乍ら花見にともいはまし物を
返し
二二 花見にと云がてらにて人知ずをる共風に散さずもがな
ある人忍びて物いふほどに時鳥のなきければ
二三 今宵社しでの田長も閉つめれ今や五月の空に知れむ
返し
二四 時鳥きゝ渡るらむ五月雨の空ごとにだに人はなさまし
語らふ人に物いひて

二五 現とも夢とも分で明ぬるを孰れのよにか又は見べき
返し
二六 夢にても思しわかぬ物ならばみて忘なむとの侘しさ
又人
二七 現には心もこゝろねぬるよの夢とも夢と人に語るな
琴をかりて人に
二八 年をへて音に聞つる琴のねを手に馴しつる秋ぞ嬉き
返し
二九 音にのみ聞けるとに劣らめやならし初るに秋のそふ覽
方違に人の家にいきて歸りてつとめて萩に朝が
ほのかゝりて咲きたるを折りてかれより
三〇 初秋の萩の朝がほあさぼらけ別し人の袖かとぞ思ふ
返し
三一 袖の色も見えやはしけむ朝顔の晝は移ふ別ならぬに
よべの月みけむやと人のいへるに
三二 いつとても哀と思をねぬる夜の月は朧げ泣々ぞみし
人のこむと云ひてこぬに
三三 契けむひたも過さぬ棚機は我ごと斯も思はざらなむ
返し
三四 棚機の契けむひは過す共譬ふべしやは事もゆゝしき
また
三五 ゆゝし共思はざり鳥棚機の忘れぬ中の有まほしさに
秋の月あかきに人
三六 戀しさは同じ心にあらず共今宵の月を君みざらめや
返し
三七 さやかにもみるべき月を我は唯涙に曇る折ぞ多かる
年頃ありて人來て歸りて
三八 衣だに隔てし宵は憂かりしを簾のうちの聲ぞ悲しき
返し
三九 うちとなく馴もしなまし玉簾たれ年月を隔て初けむ
又人
四〇 時雨にも雨にもあらで君戀ふる我衣手の濡るゝ頃哉
返し
四一 こさ増る紅葉ならねぬるめど色の深さも知れざり鳥
秋いたく風吹く日人に
四二 秋萩の色づくだにもある物を心すごくも風の吹く哉
返し
四三 寢がてに成べき頃の風の音は萩の葉ならぬみにも泌けり
誰にかあらむまた人
四四 秋のよの夢路と思はゞ徒に行きて歸るも恨ざらまし
返し
四五 行歸る道もしられぬ心にてまどひし我は誰を恨みむ
雨のふる夜人の來けるに
四六 月見にもこの夜の許多過ぬれば雨もよにこしと思ける哉
人に
四七 袖敷てふしゝ枕を思出て月みるごとにねをもなく哉
七月八日
四八 いむと云へば忍ぶ物から終夜天の川こそ羨まれつれ
人
四九 高砂の尾上に立る松をだに折ば折つる我としらなむ
返し
五〇 高砂の松は折れ共霜がれにまじれる枝を知人ぞなき
門さゝで和泉守順朝臣の垣を隔てゝあるに梅を
こなたの人みなとりたりといふを聞きて梅をや
りたれば、順
五一 井堰にも障らず水のもる時は前の梅さへ殘らざり鳥
返し
五二 井堰にも障らで爭で洩りにけむ杉の丸杭食も飽ぬに
又、順
五三 和泉にはあらぬ離の島近み波の越〻もると社きけ
又返し
五四 打越る波の音せばもらぬよりしまさの風ぞ吹返さるゝ

五五花を社人や折るとて咎めしか數ならぬ身をいかにかはせむ
　みつあきらの少將に
六六木高くて雨もさはらぬ三笠山陰に隱れぬ人は有じを
　同じ所にてかげあきら紅梅を折りて
七五常にかく恨て過す春なれど梅にやこりず後も待なむ
　返し
八五立てぬる春とぞ聞し春霞かくまで梅に後るべしやは
　又これ誰かならむ
九五思ふどち惑ひてをれば梅の花心憎くや深くみゆらむ
　同じ少將二月十餘日の夜の月のあかきに
〇六春の夜の宵ゐながらも長らへむと思心も命たへずば
　返し
一六此春をのぶる心の始にて千世ふるまでと思ふやは君
　人に代りてある女に、みつあきらの少將
二六いかゞせむ絶間がちなる岩橋を頼渡らむとの難さよ
　返し
三六葛城のつらき久米路の岩橋の其方も堪る心とぞ聞く
　又返し
四六言つぐる君葛城の神よりも絶間は我ぞ渡しわづらふ
　又返し
五六絶間なく渡さましかば葛城の神も解てぞ我頼まゝし
　人にかはりて
六六驚かであらまし物をみも果ぬ晝間の夢の戀しかる寛
　物へまかる人に扇やるとて
七六君が行く舟路に添ふる扇には心に適ふ風ぞ吹きける
　又人のれうに
八六待つ程の遠江こそ佗しけれ勿來の關に今はさはらじ
　雨ふるよ人と物など云ひてねぬるを思ふ人にかはりて
九六をやみせぬ雨に萎れて床夏は今宵ふしぬと聞は誠か

また人

七月七日

〇七星まよふ程をまつとて棚機の安き空なき雲居也けり
一七今日と皆知ぬ人なき棚機のなかさへ更に夜や深す寛
二七今宵こそ風も涼しく天の河波立ち渡る君を見えけれ
三七何事を思ふともなく終夜ねぬに明ぬる夜をぞ恨むる
四七ぬる折も無てや床を明すべき夢とだに社つらきをば見め
五七かゝらむと思はむ人の夢路にもつらき心はみえじとぞ思
六七よそにのみ近江の海はかひ無て戀しき波ぞ立渡ける
七九斯てのみ憂に命の堪ぬれば頼めぬよ迄待むとぞ思ふ
八七かひなくて明石の浦の秋風に戀しき波ぞ立增りける
九七秋風の吹折にしも問ぬ哉荻の葉ならば音はしてまし
〇八月影の同じ色なる梅花いるとも折てみつべかりける
一八あだに散花うけなむと見るからに水の上社先云れけれ
二八今日迄と流れ出ぬる水上の花は昨日や散果てにけむ
三八佗しくはならぬ迄にも愁へつゝ人に云べきとの無哉
四八年月の行らむ事も思ほえず秋計りのみ人のみゆれば
五八戀し共いはゞすゞろに思ほえて人に知れぬね鳴頃哉
六八有しだに憂りし物を飽ず迚何處に添るつらさなる寛
七八問とはいざや哀と思へ共つらくは如何知せざるべき
八八うさ增る我身に知でよそにのみ聞し昔に返してしがな
九八待人の堪ぬからにやさよ更て月の入にもねはなかる寛
〇九見し人をみゆやと夢を頼にはめも逢難き物にぞ有ける
一九今はとて散行花の割なさは露の奥にもおかれざり鳧
二九長夜をいかに明して女郎花朝顏なれば露けかるらむ
三九遙なる山ならなくに夏蟲の空に飛火とみえにける哉
四九山の端は池の底にも見えなゝむ入共月の隱れざるべく
五九うしと思心の隈のなき時はつらき隱れぬ物にぞ有ける
六九人待と泣つゝ明す夜なゝは徒ねにもなきぬべき哉
七九日くるればまづぬる萩は棹鹿の鳴聲にだに驚きやせぬ
八九戀しきも心づからのわざなれば置所なくもてぞ煩ふ
　久しくわづらふころ

九九たく繩の夏の日暮苦しくてなどかく長き命なるらむ
　つきさわぐ頃
〇〇天河珍しきとおほかりと夜こそ此頃さわぐべらなれ
　九月つごもり夜風吹く日
一〇打捨てゝ別るゝ秋のつらきより最ど吹そふ木枯の風

大江千里集

臣千里謹言去二月參議朝臣傳ㇾ勅曰古今和歌多少献上奉ㇾ命以後魂神不ㇾ安臥ニ重痾一延以至今儒門餘孽側聽ニ言詩一未ㇾ習ニ艶辭一不ㇾ知ㇾ所ㇾ爲今臣纔搜ニ古句一構ニ成新詩一別亦加ニ自詠十首一總百二十首悚恐宸儻謹以擧進豈求ㇾ駭ㇾ目只欲ㇾ解ㇾ願千里誠恐惶誠謹言

寛平六年四月廿五日散位從五位上大江朝臣千里上

春

一〇霧ㇾ霧山鶯啼尚少
二〇山高み降來る霧にむすればや鳴く鶯の聲まれらなる
　鶯聲誘引來ニ花下一
三〇鶯のなきつる聲に誘はれて花の本にぞ我は來にける
　偷ㇾ閑何處無不ㇾ尋ㇾ春
四〇閑かなる時を尋て孰こにか花の有りかを共に尋ねむ
　花枝攀處芳紛々
五〇花の枝折りつるからに散紛ふ匂の飽ず思はゆるかな
　不ㇾ見ニ洛陽花一
六〇神さびてふりぬる里に住人は都に匂ふ花をだに見ず
　晚歸多是看ㇾ花廻
七〇今は早歸來なまし道也し花を見しまに程ぞへにける
　綠柳條弱不ㇾ勝ㇾ鶯
八〇木づたひて綠の糸のよわければ鶯とづる力だになし
　尋ㇾ花不ㇾ問ニ春深淺一
九〇花をのみ尋こしまに春はまだ深き淺きも知ざり鳧
　夜風吹送每年春
一〇はかなくて空なる風の年をへて春吹送るとぞ怪しき
　春暖花處々開
一一暖けき春の山べの花のみぞ所もわかず咲みだれける
　落盡閑花不ㇾ見ㇾ人
一二跡たえて靜けき山に咲花の散果るまで見る人もなし

老眼花前暗

一年深く老ぬる人の悲しきは咲る花さへ劣るなりけり

花下忘レ歸因二美景一

花を見て歸らむとを忘るゝは色こき花に因て也けり

歳時春猶少

一年月に增る時なしと思へばや春しも常に少かるらむ

送レ春那得レ不二殷懃一

春光只是有二明朝一

俺でのみ過行春を爭でかは心をいれて惜まざるべき

兼てより我が惜みこし春は唯明けむ朝ぞ限なるべき

兩處春光同日盡

春をのみ爰も彼處も惜めども皆同じ時盡ぬるがうき

春翁酒易レ悲

春々に逢て老ぬる身なればや醉に淚の俺れざるらむ

哀とも我身のみ社思ほゆれ儚き春を過ぐし來ぬれば

惆悵春歸不二留得一

歎きつゝ過行春を惜めども天つ空から振捨てゝ行く

一歳唯殘二半日春一

一年に又再びもこじ物を唯ひるなかぞ春はのこれる

夏

春條長定夏陰盛

木芽はる榮えこしゝもあだなれば花の蔭とぞ成增りける

鶯多二過春語一

鶯は過にし春を惜みつゝ鳴く聲多きころにぞ有ける

嶺不レ待レ秋鳴

空嶺の身とし成ぬる物ならば秋を待でぞ鳴ぬべらなる

鶯語漸々稀

鶯は時ならねばや鳴聲の今は稀らに成りぬべらなる

餘花葉裡稀

散紛ふ花は木葉に隱されて稀に匂へる色ぞともなき

春盡啼鳥廻

限りとて春の過にし時よりぞ鳴鳥の音の痛く聞ゆる

蓮開水上紅

秋ならではちす開くる水の上は紅深き色にぞ有ける

枝空花落稀

吹風に枝も空しく成行けば落る花こそ稀に見えけれ

鳥思二殘花枝一

鳴鳥の聲深くのみ聞ゆるは殘れる花の枝をわぶるか

月照二平沙一夏夜霜

月影になべて眞砂の照ぬれば夏の夜深き霜かとぞ見る

但能心靜卽身涼

我が心靜けき時は吹風の身に變らねど涼しかりけり

潤澗路甚清涼

山高み谷をわけつゝ行水は吹來る風ぞ涼しかりける

秋

天漢迢々不レ可レ期

天の川程の遙になり行けば逢見むとの定めなきかな

秋霜鬢似レ年空長

秋霜鬢に譬て我が髮は年のはかなく老し積れば

秋來只識二此身衰一

大方の秋くるからに我身こそ悲しき物と思しみぬれ

霜草多枯蟲思忽

置霜に草の枯行く時よりぞ鳴く蟲の音も高く聞ゆる

今宵織女渡二天河一

一年に唯今宵こそ七夕の天の川原を渡るといふなれ

心情逢レ秋一似レ灰

物思ふ心の秋になりぬれば凡て人こそ見え渡りけれ

秋悲不レ到二貴人心一

大方の秋を悲しと見るともあだなる人は知すぞ有ける

樹葉霜紅レ日

常よりも秋の木の葉に置く霜の紅深く見ゆる頃かな

蕭條秋思苦

かすかなる時のみ見ゆる秋篠は物思ふとぞ苦かりける

悲二秋々多レ老

過て行秋の悲しく見えつるは老なむとの惜き也けり

紅樹嶺鳴

紅葉つゝ色紅に見ゆる日は鳴く嶺さへやなくはなりぬる

秋のよを寒み鳴つる蟲の音は我宿にこそ數多聞ゆれ

行雁の秋過ぎかたに獨しも友に後れて鳴き渡るらむ

吹風の音高くさへ聞れば置く露さへも寒くもある哉

木の葉皆唐紅に時雨るとて霜のさらにも置增るかな

秋のよを寒み鳴つゝ行雁の霜を凌ぎて行き歸るらむ

東雲に秋置露の寒ければ唯ひとりしも蟲のなくなる

鳥栖二紅葉樹一

秋すぎば散なむ物を鳴鳥のまづ紅葉の枝にしもなく

秋雁過盡無二書到一

秋のよを且は鳴つゝ過れ共待言傳は見ゆるよもなし

寒雁飛

行雁のとぶと早く見えしより秋は限と思ひなりにき

寒雁聲靜客愁至

鳴雁の聲だに絶えて聞えねば旅なる人を思まさりぬ

鳴嶺の聲高くのみ聞ゆるは秋すむ蟲の秋ぞ知るらし

冬

迎レ冬先有二好風一

いつしかと冬を迎る朝から先よき風の吹ぞうれしき

中宵似レ有二春風至一

中宵に春風の吹來るかとも思ほゆる哉

一年冬至夜偏長

さよ更て尙ねられねど春風の吹來るかとも思ほゆる哉

一年に春くるとは今ぞ知る臥起きすれば明し難きに

新愁多待二夜長一來

新しき愁へは多く寒き夜の長きよりこそ始なりけれ

心灰不レ改二爐中火一

心灰に改め爐中火

物を思ふ心は灰と碎くれど熱き時には及ばざりけり

鬢雪多二於砌下霜一

我髮の皆白雪となり行けば置ける霜とも驚かれけり

年々只見二人空老一

年々と數へこしまに儚くて人は老ぬる物にぞ有ける

十分一盞暖二於火一

十分一盞暖に滿てる酒こそ寒き夜は人の身迄暖まりけれ

老眠早覺常殘レ夜

老てぬる目は早覺て長なへよはに過ればぬなのみぞ泣

霜未レ殺二萋々草一

霜未だ置霜の寒ければ草葉をだにぞ枯さざりける

宵々にまだ置霜の寒ければ草葉をだにぞ枯さざりける

獨ゐて燃る螢に向へばやかく音もなき身とぞ成ぬる

長年老不レ惜二光陰一

長年老不レ惜二光陰一

斯計り老ぬと思へば今更に光の過ることもおぼえず

風月

風翻二白浪一花千片

沖べより吹來る風は白浪の花とのみこそ見え渡りけれ

月照二波心一一顆珠

月照は浪の心にひかされて一つかたにも見え渡る哉

照月は浪の心にひかされて一つかたにも見え渡る哉

柴扉日暮隨レ風掩

柴扉日暮にもかりの暮行けば吹風のみぞ戸鎖也ける

一侘てふる宿にもかりの暮行けば吹風のみぞ戸鎖也ける

不レ明不レ暗朧々月

照もせず曇も果ぬ春の夜の朧月夜ぞめでたかりける

鶴飛山月曙

鶴の峰飛び越えて鳴行けばみ山隱るゝ月かとぞ見る

鶴の峰飛び越えて鳴行けばみ山隱るゝ月かとぞ見る

清景難レ逢

雲晴てよき月影も常ならず有らむ限は惜みこそせめ

非レ暖非レ寒漫々風

熱らず寒くも非ずよき程に吹來風は休ずも有らなむ

殘月照レ山明

二つとも見えぬを月の山毎に照渡りつゝ明らけき哉

風索屬二閑人一

定なく吹來る風は搔分てなどかしげきに人に告らむ

月宮有レ路無二思人一

照月の都ばかりは有と云ど尋て行かむ程ぞ知られぬ

可レ憐春風老

惜みてもとめ欲きを春風の吹過難く成ぬと思へば

遊覽

山雲初晴水色新
○八雲もなく谷は山さへ晴行けば水の色こそ新た也けれ
猶愛二雲容多在一山
一八白雲の中を分つゝ夕暮のめでたきとは山にぞ在ける
借問春山何處高
二八問知りて雲の梯とひ行かむ孰れの方か山はさかしき
水落青山出二白雲一
三八行水の青き山より落來れば白雲かとぞ見え紛ひける
遙見二人家一花便レ入
四八よそにても花を哀と見程に知ぬ山にぞ我は來にける
可レ憐悲靜地
五八さしわけて深く哀と見えつるは晴て靜けき所也けり
井下水頭無二秋日一
六八陰繁き水のあたりは年をへてすぎゝぬれ共見えずぞ有ける
欲レ偷二風索一繫遊レ春
七八吹風の光をとめむと思へばぞ暫も春に遊ぶべらなる
長歲作二獨遊人一
八八綾なくも年のを長く獨してあくがれ渡る身とや成なむ
天高暮山遠
九八天つ空近く見えつゝはえつるは暮行山の麓なりけり
野曠白雲深
○九限とて野べの遙に見えつれば立白雲も深くぞ有ける
山花織レ錦無レ綠
一九山ごとに花の錦を織れゝばぞ見ゆる所の易き空なし
二九谷水の琴の音絶ず聞ゆれば時の間をだに隔てずぞ見

雜部

淚流二雙袖一面成レ文
三九泣く涙戀ふる袂にかゝりては紅深きあやとこそ見れ
別無二遠近一皆難レ見
四九別るとも云つる時は遙けきを近きを見ぬぞ戀しかりける
悠々一別已三年
五九近からぬ時に一度別るれば問ぬ三年ぞ隔たりにける

別後相思夢魂遠
六九別れにし君を思ひて尋ぬれば夢の魂はゐぐかりけり
朝結二古鄕意一
朝ごとにむすぼゝれつゝすぐしうる□□□□
別後愛惜容花改
七九別れにし君に見せずて徒に形の變る身こそつらけれ
白雲一片隨レ君去
八九白雲の別るゝ毎に立つれど君ともにこそ行隱れぬれ
後時相見是何時
九九別ての後も君見むと思へ共是を孰れの時とかは見る
送レ故辭春過恨多
○○人を送る共に春さへ過ぬれば是が恨はあまるなりけり
萬里經レ年別
一〇近からず遙けき程に年をへて獨ある人ぞ苦しかりける
不レ知何日又相逢
二〇別ての後は知ぬをいかならむ時にか又は逢むとす覽
沈吟難レ別情
三〇底ひなく物をぞ思ふ有てのみ別るゝことを思ふ我身は
述懷
自靜二其心一延二壽命一
四〇定なき心一つをなしつるも命を延るものにぞ有ける
心更老二於身一
五〇世中を思知りぬる心こそ身よりはすぎて老增りけれ
六〇心をし螢の浮木になしつれば流るゝ水に心まされり
何獨朝々暮々閑
七〇はかなくていつも我が身の獨して旦夕にしづ心なき
浮世短二於夢一
八〇寄べなく底に浮べる心こそ夢見るよりも儚かりけれ
憂喜皆心灰
九〇悲しきも嬉しき事も多かるを心一つぞなたつかりける
自遠二浮雲無名着一
一〇我身をば浮べる雲になせればぞ行方もなく儚なかりける
幻世去來夢

一幻の世とし知ぬる心にははかなき夢と思ふなりけり
浮世水上漚
二假初に暫し浮べる魂の水のあわともたとへられつゝ
黑鬢俄假變二春花一
三黑髮の白く俄になりぬれば春の花とぞ見え渡りける
恩光春景去
四我君も春の光に等くば先なる身とも知りぬべらなり
夢中歡樂又緣レ愁
五夢にても嬉きことを見る時は爰に散來る身には憂れり
詠懷
六一霜分けて都尋ぬに來る雁も春に逢ては飛び歸りけり
七春ごとに逢ても逢ぬ我身哉花の雪のみ降り紛ひつゝ
八春のみや花は咲らむ谷寒みうづもる草は光をも見ず
九白波の立歸りくる數よりも我身を歎くことはまされり
一〇蘆鶴の獨おくれて鳴聲は雲の上まできこえつがなむ
一一天雲や身を隱すらむ日の光我身照せど見る由もなき
一二年毎に春秋とのみ數へつゝ身は一時に逢ふ由もなし
一三思ふこと鳴鶯につけたれば色も變らぬ我ひとりてふ
一四都迄なみたちくとも聞かなくに暫だになど身の沈む覽
一五時鳥五月待ずぞ鳴にけるはかなく春を過ぐしぬれば
此本爲忠舟之筆分明也　亞槐藤判

元良親王御集

陽成院の一宮元良のみこいみじき色ごのみにおはしければ世にある女のよしと聞ゆるにはあふにも逢はぬにも文やり歌よみつゝやり給ふ源命婦のもとにかへり給ひて
一二くゝやくゝと待夕暮と今はとて歸る旦と孰れまされる
一三とうてゐたまへばひかへて、女

一四今はとて別るゝよりも高砂の松は增りて苦してふ也
いとをかしと覺して人々に此返しせよと宣へば
一五夕暮はたのむ心を慰めつかへる朝ぞわびしかるべき
またかくも
一六今はとて別るゝよりも夕暮の覺束なくて待社はせめ
これをなむをかしとのたまひける
早うすみ給ひける女の扇に書き給ひける
一七年毎に夏に扇と聞からに古き事こそ問はまほしけれ
一條にて人々住み給ふことを內わたりの人いひければその女宮の御許にかくなむ聞えたりける
一八皆人のまけるが如くしりぬれば同じ程社思ひ成ぬれ
宮うかれめこきに住み給ふ頃せまりつといひ騷ぐを聞き給うて藏人にいひ遣しける
一九獨のみよに炭竈にくゆる木の絶えぬ思を知人のなき
二〇厭へども憂世の中に炭竈のくゆる煙を待つ由もがな
御返し、女
二一帶木を君が栖かにこりくべて絶じ煙の空にたつ名は
みぶのみこに遣しける
二二へしやよに憂をば是に限てむ思ふ心は逢見るからに
二三親ある女に程なく絶え給ひにければ親いふと聞
き給ひて
二四蟬の羽の薄き心と云なれどうつらしとぞ先は泣るゝ
二五枇杷の大臣にいちや君とて童にてさぶらひける
男ありとは知り給はで宮の御文遣しければ、女
二六大空にしめゆふよりも儚きは難面き人を賴む也けり
又女に
二七磐瀨山よの一言に呼子鳥よばふときけば耳ぞ馴ぬる
宮
二八とふとをまつ松山の山彥はいかゞは人に音信をせむ
又、をんな
二九難波女の此方彼方によるといへば汐のひるまや戀しかる覽

宮おはして出でよとのたまへば、女

一四いさゝめに若きをやみと浮波の立果はてゝやまむ事は詫
歸り給ふとていも寢らるまじとのたまへば、女

二四ふさりから寢覺をしては起返り又もこしぞ君は誓はむ
女のもたる物をとりておはしにければ夙めて女

三四人こふる夜の衣に非ずとも是は返して我にみせなむ
斯て此の女こと人にあひて宮の怨み給ひければ

四四吉野川よしや思はじたきつせの早くいひせばかゝらましゆは
宮ことわりとて

五四秋風に吹れて靡く荻の葉のそよ〳〵さ社いふべかりけれ
又、女

六四よと共に君が心し長月にあらば頼まむ秋は果つとも
女今はことざまにやと聞えたりければ

七四松山にまつ波越ていにけれど如何思はむあだし心を
恨み給ひける、女

八四淀河のよになうらみそ白波のしらずや下に思ふ心は

九四最上川上れば下る富士のねの三島の蹄にあらば戴てむ
猶怨み給へば女さらば是やめてむと聞ゆれば宮

〇五山の井のやまむといへば等閑の淺き心は頼まれぬ哉
女

一五君が田の穂にて見ねむと思へ共後は人から稻葉と云也
宮御服におはしけるに

二五墨染の深き心やわれなくば哀と思はぬ人やなからむ
こと女に、宮

三五さしくるは頼まれず共下紐の心解たるよをのみぞ待
女とちがへやり戸のもとにて物のたまひて後

四五見し夢はこまなく成てやみにけむ違へ遣戸の本にねしかば
太秦に詣で給ひてよしある局に遣しける

五五立寄れば塵たつ計り近き間をなど唐の心ちのみする
又女にあひ給ひて流れてなどのたまひて程へて
遣しける

六五水蓳の絶にし跡を尋れば流れてと云しとによりてぞ
御返事

七五流れてと早く云しは忘れねど飛鳥川なる世社つちけれ
此の宮の御姨大炊の大納言の北の方にておはし
けるをいと忍びて通ひ給ひけるを、北の方

八五荒る海に堰るゝ蜑は立てなむけふは浪間に有ぬべき哉
此の北の方うせ給ひにければ御四十九日のわざ
に白かぬをはこにつくりてこがねを入れてみ誦
經せさせられけるにそへ給ひける

九五君を又現に見ばや逢事の互みにふりぬみつは有とも
京極のみやすん所まだ亭子院におはしける時に
けさうし給うて九月九日聞え給ひける

〇六世にふれば有てふとを菊花愛ですきぬべき心ち社すれ
夢のどあひ給ひて後常つゝみて渡らせ給ふとて
えあひ給はぬと宮に候ひけるによせりよみける

一六蘆さへ熱くぞ有ける富士の山嶺の思のもゆる時には
かもねの大君にあひ給ひてつとめて

二六唐錦たちてこゝちの歸る山歸る〳〵も物うかりしか
宮うらみ給ひければ、女

三六世中の憂もつらきも取すべて知する君や人を恨むる
ほどなくかれ給ひにければ、女

四六白雲に非ぬ我身を逢とのまへはの浦にけふはけぬべし
宮御かへり

五六待乳山待としきかば年經とも色變らじと我も頼まむ
又、女

六六君により心盡しのはかたつの儚きねをも鳴渡るかな

七六鶯となどかはなかぬ振立てゝ花心なる君をこふとて
かく怨み聞えけれど後々は返事もし給はざりけ
り又同じかも院の中の君を懸想し給ひけるに女

八六天雲をとぶ假初にとふなれば大空事をいかに見らむ
あひ給ひて後、宮

九六思ふ共こふ共君は下紐のゆふても絶く解むとをしれ
女のきこえ給ひけるも

〇七思ひせばゆふてもたゆくとけなまし孰か戀の印也ける

一七下紐の夕暮ごとに詠むらむ心のうちをみる由もがな

二七村鳥の群てのみ君有ときけ獨ふるすに何にあらむと

三七憂節の一夜も見えば我ぞまつ露より先に消返るらむ

四七宿りゐるとくら許多に聞ゆれば孰れなわきて古巣とかいふ

五七同じえにおひつる宿も無物を何にか鳥の音をば鳴けむ
又同じ閑院の三君に稻荷にまうでゝあひ給ひて
宮は知り給はぬを女は知奉りて歸りて聞えける

六七ぬば玉の闇に交りて見し人の覺束ながら忘られぬ哉
など聞えてあひにけりさて、宮

七七埋木の下に歎けと名取川こひしき瀬には顯れぬべし
女

八七我方に流れて通ふ水蓳のよる瀬許多に聞ゆればうし

九七流れても頼む心のそはなくに孰れ程にか影の添べき

〇八木隱れの下草なれば峯の上の光も終に頼まれなくに

一八盡もせぬ言のは也とみるからに頼むと云も嬉かり鳧

二八風ふけばみをこす波の立返り浮世の中を恨みつる哉

三八むば玉の夜のみ人をみる時は夢に劣らぬ心ち社すれ

四八涙川流れて岸を崩してはこひよるとも非じとぞ思ふ
方さだめなくあくがれ給ひけれどいと心ありて
をかしう思はする宮と聞き給ひて大夫の御息所
の御母の女はこの宮にあはせ奉りてあしたに、男宮

五八程もなくかへる朝の唐衣心まどひにいかゞきつらむ
かへし

六八時のまに歸りやすらむ唐衣心ふかくや色にそはぬと
母御息所の御許に御后の綻び縫ひに奉りたりけ
れば　御息所

十八移しげに人唐衣思ふには常ならぬ香ぞ添ひてめでたき
かくて住み奉り給ひけれど外ありきをし給ひけ
ればつらけなるけしきにおほしけれど見しらぬ
やうにていで給ひければ　女宮

八八音に高く鳴ぞしぬべき空蟬の我身がらなる憂世と思ば
と宣ひければあはれ〳〵とてとゞまり給ひにけり
同じ御中にまだしかりける時のこの宮に坐し始
めての又の日京極御息所の御中に奉り給ひける

九八いとゞしくぬれこそまされ唐衣逢坂の關道惑ひして
御息所のかへし

〇九誠にてぬれけり宿も唐衣こゝに來たらば共に絞らむ
さま〳〵通はし給ひける御文ども今日かへし奉
り給ふとて　御息所

一九やればをしやられば人に見えぬべし泣々も尙返す勝れり
北の方宮にむら子とてさぶらひけるを召しけれ
ばかんしうをき給ひければ男宮こまの院におは
しけるにむら子參りける

二九數ならぬ身は只に社思ほえでいかにせよとか眺らる覽
男宮の御返し

三九徒然と詠めてふれる人よりも宵の時雨は劣らざり鳧
女宮うせ給ひければ　男宮

四九岸にこそ世々をばへしか泉川今年袂をひたしつる哉
又の年の十月に伊衡の中將參りて御みきの序に

五九神無月しぐれは何ぞ古も思ひいづれば歸る世もなし
宮

六九古を思ふにあへぬから衣ぬるゝ程なく乾きこそすれ
ある女のこの宮をうらみ聞えて

七九世中を憂のみ渡る宿りにはかりもこなくに色變り鳧
御返し、宮

八九定なき君が心にあえて社まだき木の葉も秋を知らめ
又、女

九九年經ともなれしとぞ思ふ唐衣薄き心の顯はれはうし
おはしたりけるにはやかへらせ給ひねと聞えた

ればさらにたかしとのたまひければ、女
〇〇唐錦絶て見ゆらむ闇き夜は誰とかあやめ思做さまし
又
一〇何に君思ひかけけむから衣人めもみてはとはじ物故
二〇あだ人の呼ひし聲に山彦の答へ初にし身をぞ恨むる
人の國へゆくとて、女
三〇濁江のすみうき物と都をば厭ふか山に身をや投まし
こと女に物のたまふとてきちきやうにつけて
四〇頼みとは同からまし言葉を歸りに是な桔きやうの花
又こと女例の御心見えければ
五〇言の葉の我身の秋に逢時はもみぢて空に散と社きけ
宮
六〇宇治川の流れて深き心かと我も□たのみはつべく
女
七〇頼むれば下の心はあさぢ原露にぬるれば色變りつゝ
五月計に早うすたれ給にける女の聞えたりける
八〇梅雨に我手そへつゝ植初めし君が頼みは今や出らむ
女山里にすみける頃
九〇秋風の早き山べに住頃はとふ言のはも枯ぞはてぬる
またこと女に文遣したりける返りごとに
一〇頼まれぬ暫しの程も秋の夜の長き心も非じと思へば
宮
一一頼れぬとも心のから衣なれてよるとやさらば思ひし
こと女に、宮
二一天雲の遙々みゆる嶺よりも高くぞ君は頼みそめてき
山の井の君に住み給ひて久しくありて宮は參り
たまひて夜ふけてまかでければくらくていかゞ
とのたまひたりければ、女
三一苦しとも辿られざりき古を思果てゝし歸りこしかば
おくりに人につけて聞えたりける
四一歸來る釉も濡るはたまさかに阿武隈川の水にや有覽
たゞ暫しにてたえ給ひにける人に程へて御文遣
したりければ
五一音づれて程ふる山の郭公なく一聲のめづらしきかな
宮いかゞのたまひけむ、女
六一月影に我もおくれず逢ふとは吉野の山に思入りにき
又
七一涙だに斯る我身に微りせば憂もつらきも誰に云まし
からうじてとひ給ひければ、女
八一中々に飛火の杜の郭公君こひなきはよはにこそなけ
又
九一散ぬべき花の心とかつみつゝ頼そめけむ我や何なる
賀茂の祭の日かづらの宮の御車に奉り給ひける
〇一しらね共桂わたりと聞からに賀茂の祭の葵とぞせむ
又の日物宣ふ女どもへてらにまであひてみつな
しりつにし給ひていとよく見給ひて遣しける
二一世中に嬉しきものは鳥部山隱るゝ人をみつる也けり
忘れ給へりける女清水にまうであひ給ひて宮は
知らずがほにていで給ひけるに聞えける
三一假にくる宿とはみれどかましへのおほけなく社住まほしけれ
同じ所にて常に見給ふ女にしの竹のふししげき
をつゝみ給ひて遣しける
三一篠竹の節は許多にみゆれ共よゝに疎くも成にける哉
おなじ人に、宮
四一いかにして繰染にけむ糸なれば常にはよれ共逢由のなき
返し
五一近くだによるともなき白糸のあふ計には思ほえぬ哉
やんごとなき女の御もとに
六一尋ねつゝ今踏初る山道にいつ鹿の音ぞまづ鳴れける
返し
七一世中の秋山にのみ聞ゆればいつ鹿の音も耳馴にける
又おなじ人に、宮

八一難面きを強て頼めば水の上の浮たる草の心ち社すれ
返し
九一草の名におほせしもせじ山川の早くより社浮て聞ゆれ
忘れ給ふなよと女の聞えければ
〇一谷の松月の桂にねをふみて花咲かむ世や君を忘れむ
所仰殿中納言君に程なくたえ給ひにければ、女
一一人をとく芹川てふ津國の名には逢はぬ物にぞ有ける
かくて物もくはでなく〳〵戀ひ聞えて松に雪の
ふりかゝりたるにさして聞えける
二一來ぬ人を松の枝にふる白雪の消こそ返れあはぬ思に
昇の大納言の御むすめに住み給ひけるをひさし
におましして御とのごもりて後久しくおはせ
でかのひざにしかれたりし物はさながらありや
とりやたて給ひてしと聞え給ひければ、女
三一敷返すありしながらの草枕塵のみぞゐる拂ふ人なみ
と聞えたりければ、宮
四一草枕ちり拂ひにはから衣袂ゆたかにたつをまてかし
又、女
五一唐衣たつをまつまの程こそは我敷妙の塵もつもらめ
斯ておはして後宇治へ狩しになむと宣へるに女
六一御狩する栗駒山の鹿よりも獨ぬる身ぞ侘しかりける
一條の君に
七一世中をいかゞはせまし春霞よそにもみしと人は云也
御返し
八一哀とはみれども疎し春霞かゝらぬ山も非じと思へば
山の井の君の家の前をおはすとて楓の紅葉のい
とこきをいれ給へりければ、女
九一思出でゝ問には非ず秋果る色の限をみするなるらむ
又ほど經てとひ給はずとうらみて
〇一山の井にすむと我名は立しかど訪人影もみえずも有哉
すりの君のもとにおはせむとありければ、女
一一高く共何にかはせむ呉竹の一夜二夜のあだの節をば
うきまで人を尋ね給ひければ、女
二一八重垣に一重優れる九重にあだなる人は尋しもせじ
女のもとにおはしてとまり給へと宣へば、女
三一渡つみの底の心は白波の知ではいかゞよるとぞや君
こといできて後京極の御息所に
四一侘ぬれば今將同じ難波なる身を盡しても逢むとぞ思ふ
かねもとのむすめの童べのもとに今こむとのた
まひておはせざりける又の日、女
五一人知ず待つにねられぬ有明の月にさへ社欺かれけれ
あしぶちと云ふ馬に乘り給ひける頃女のもとに
六一有乍らこぬをも云じ葦ぶちの駒の上社戀しかりけれ
これにおどろきてなむまどひおはしたりける
女のもとにおはしたりけるに明けぬと聞えたり
ければかへり給ひて、宮
七一天の戸の明ぬ〳〵と云做して空鳴きしつる鳥の聲哉
返し
八一天の戸をあくとも我は知ざりき谷深りし鳥の音にあかで
時々おはする所におはして前栽の中にて立ち聞
き給へば宮の今宵夢にみえ給へるかなとて、女
九一現にも靜心なき君なれば夢にも假と見えつるがうさ
御匣殿に、宮
〇一鶯の木づたふ枝を尋ぬとて花の栖かを行てみしとや
一一遙々と思ひて月も過ぬれば今はなつくるとを待つ哉
二一告初めし思を常にかすめても覺束なさの猶まさる哉
返し
三一いつよりか君が思の馴ぬらむ今より外にいふぞ怪しき
源命婦に方ふたがりたればなどのたまひければ
女
四一逢事の方はさのみぞふたがりたれば一夜廻りの君となれゝば